

京都府遺跡調査概報

第 99 冊

1. 沖田遺跡第2次
2. 東山遺跡第2次
3. 太田遺跡第13次
4. 木津川河床遺跡第13次

2 0 0 1

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成12年度に実施した発掘調査のうち、京都府丹後土地改良事務所・京都府土木建築部・京都府農林水産部の依頼を受けて行った沖田遺跡第2次・東山遺跡第2次・太田遺跡第13次・木津川河床遺跡第13次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、大宮町教育委員会・京北町教育委員会・亀岡市教育委員会・八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 沖田遺跡第2次
 2. 東山遺跡第2次
 3. 太田遺跡第13次
 4. 木津川河床遺跡第13次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	沖田遺跡第2次	中郡大宮町森本井内口	平12.5.9～7.28	京都府丹後土地改良事務所	石尾政信
2.	東山遺跡第2次	北桑田郡京北町周山	平12.6.1～11.6	京都府土木建築部	中川和哉
3.	太田遺跡第13次	亀岡市礪田野町太田	平12.5.25～平13.1.26	京都府農林水産部	戸原和人 増田孝彦
4.	木津川河床遺跡第13次	八幡市八幡溝落・狐川	平12.10.13～12.8	京都府土木建築部	石尾政信

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 沖田遺跡第2次発掘調査概要	1
2. 東山遺跡第2次発掘調査概要	21
3. 太田遺跡第13次発掘調査概要	47
4. 木津川河床遺跡第13次発掘調査概要	87

挿図目次

1. 沖田遺跡第2次

第1図 調査地および周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地および周辺地形図	3
第3図 上層遺構平面図	5
第4図 調査地断面図	4
第5図 下層遺構平面図	6
第6図 土坑S K01実測図	7
第7図 竪穴式住居跡S H01実測図	7
第8図 竪穴式住居跡S H02実測図	8
第9図 土器実測図・拓影(1)	9
第10図 土器実測図・拓影(2)	10
第11図 土器実測図・拓影(3)	11
第12図 土器実測図・拓影(4)	12
第13図 土器実測図(5)	13
第14図 土器実測図(6)	14
第15図 土器実測図(7)	15
第16図 石器実測図	16
第17図 木製品4実測図(1)	17
第18図 木製品4実測図(2)	18
第19図 木製品4実測図(3)	19

2. 東山遺跡第2次

第20図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	21
第21図	調査区および周辺地形図	22
第22図	調査区黄褐色土上面コンタ図	23
第23図	下層遺構確認用サブトレンチ配置図	24
第24図	東山遺跡B地区西壁断面図	25
第25図	東山遺跡遺構実測図	26
第26図	S H02実測図	28
第27図	S H20実測図	29
第28図	S H21・22実測図	30
第29図	S H19実測図	32
第30図	S K16・17・23・35実測図	33
第31図	縄文土器実測図	34
第32図	東山遺跡出土土器	35
第33図	東山遺跡出土土器および石製品	36
第34図	東山遺跡出土土器および木製品	37
第35図	東山遺跡出土土器および瓦	38
第36図	S K23出土鉄器	39
第37図	東山遺跡出土石器(1)	40
第38図	東山遺跡出土石器(2)	41
第39図	東山遺跡出土石器(3)	42

3. 太田遺跡第13次

第40図	調査地および周辺遺跡分布図	47
第41図	調査地位置図	48
第42図	検出遺構平面図	50
第43図	A地区竪穴式住居跡S H127実測図	51
第44図	A地区竪穴式住居跡S H128実測図	51
第45図	A地区竪穴式住居跡S H130実測図	62
第46図	A地区竪穴式住居跡S H138実測図	52
第47図	B-1地区竪穴式住居跡S H136実測図	53
第48図	B-1地区竪穴式住居跡S H137実測図	53
第49図	A地区掘立柱建物跡S B146実測図	54
第50図	A地区掘立柱建物跡S B147実測図	55
第51図	A地区井戸S E81実測図	56

第52图	B-1地区掘立柱建物跡 S B 140実測図	57
第53图	B-1地区掘立柱建物跡 S B 141実測図	58
第54图	B-1地区掘立柱建物跡 S B 144実測図	59
第55图	A地区掘立柱建物跡 S B 148実測図	60
第56图	A地区掘立柱建物跡 S B 161実測図	61
第57图	A地区井戸 S E 62・145実測図	62
第58图	A地区井戸 S E 65実測図	63
第59图	A地区井戸 S E 60実測図	64
第60图	B-1地区掘立柱建物跡 S B 149実測図	65
第61图	B-1地区柱穴 P-357実測図	66
第62图	B-1地区柱穴 P-356実測図	66
第63图	B-1地区柱穴 P-378実測図	67
第64图	B-2地区井戸 S E 92実測図	67
第65图	B-2地区井戸 S E 106実測図	68
第66图	B-2地区井戸 S E 108実測図	68
第67图	B-2地区井戸 S E 109実測図	68
第68图	B-2地区井戸 S E 142実測図	68
第69图	B-2地区井戸 S E 143実測図	69
第70图	B-2地区柱穴 P-418実測図	69
第71图	B-2地区柱穴 P-415実測図	69
第72图	B-2地区掘立柱建物跡 S B 153実測図	70
第73图	B-2地区掘立柱建物跡 S B 156実測図	70
第74图	B-2地区掘立柱建物跡 S B 154実測図	71
第75图	B-2地区掘立柱建物跡 S B 155実測図	72
第76图	B-2地区掘立柱建物跡 S B 157実測図	73
第77图	出土遺物実測図(1)	74
第78图	出土遺物実測図(2)	75
第79图	出土遺物実測図(3)	76
第80图	出土遺物実測図(4)	77
第81图	出土遺物実測図(5)	78
第82图	出土遺物実測図(6)	79
第83图	出土遺物実測図(7)	80
第84图	出土遺物実測図(8)	81
第85图	出土遺物実測図(9)	82
第86图	出土遺物実測図(10)	83

第87図	出土遺物実測図(11)	-----	84
第88図	出土遺物実測図(12)	-----	85

4. 木津川河床遺跡第13次

第89図	調査地および周辺遺跡分布図	-----	88
第90図	トレンチ配置図	-----	89
第91図	1 トレンチ平面図	-----	90
第92図	2 トレンチ平面図	-----	90
第93図	1 トレンチ柱状断面図	-----	90
第94図	3 トレンチ平面図	-----	91
第95図	3 トレンチ平面図東壁断面図	-----	91
第96図	中世墓実測図	-----	92
第97図	出土遺物実測図	-----	93

図 版 目 次

1. 沖田遺跡第2次

図版第1	(1)調査地全景・空撮(南西から)	
	(2)調査地全景・空撮(南東から)	
	(3)調査地全景・空撮(南西から)	
図版第2	(1)上層遺構(南方から)	(2)上層遺構(西方から)

- (3) トレンチ東部断面(南東から)
- 図版第3 (1) 溝S D03(北方から) (2) 溝S D03南壁断面(北方から)
(3) 溝S D02断面(南方から)
- 図版第4 (1) 下層遺構全景(北西から) (2) 下層遺構南東部(南方から)
(3) 土坑S K01網代等出土状況(西方から)
- 図版第5 (1) 竪穴式住居跡S H01(北方から)
(2) 竪穴式住居跡S H02(西方から)
(3) 竪穴式住居跡S H02土器出土状況(西方から)
- 図版第6 (1) 溝S D01土器出土状況(北から)
(2) 竪穴式住居跡S H01土器出土状況(北方から)
(3) 溝S D04土器出土状況(南方から)
- 図版第7 土器類・石製品(1)
- 図版第8 土器類・石製品(2)
- 図版第9 木製品(1)
- 図版第10 木製品(2)
- 図版第11 木製品(3)
- 図版第12 木製品(4)

2. 東山遺跡第2次

- 図版第13 (1) 東山遺跡遠景(南から)
(2) 東山遺跡遠景(西から)
- 図版第14 (1) 調査区全景(東から) (2) A地区全景状況(北から)
- 図版第15 (1) B地区全景(北から) (2) 調査前風景(西から)
- 図版第16 (1) 重機掘削(南から) (2) B地区西壁(東から)
(3) B地区主要遺構(上が北)
- 図版第17 (1) S H02(西から) (2) S H19(西から)
(3) S H19掘削作業風景(西から)
- 図版第18 (1) S H19完掘状況(西から) (2) S H19竈断面(東から)
(3) S H20完掘状況(北東から)
- 図版第19 (1) S H20内遺物出土状況(南東から)
(2) B地区主要遺構(上が南) (3) S H21・22(西から)
- 図版第20 (1) S H21完掘状況(北から)
(2) S H21内S K21内遺物出土状況(北から)
(3) S H21内S K21内遺物出土状況(東から)
- 図版第21 (1) S H22全景(東から) (2) S K43(東から)

- (3) B地区調査風景(北東から)
- 図版第22 (1) A地区調査前風景(南から)
(2) S X 18断面(北から) (3) S K 16(南から)
- 図版第23 (1) S K 17断面(南西から) (2) S K 17完掘状況(北西から)
(3) S K 23遺物出土状況(東から)
- 図版第24 (1) S K 35遺物出土状況(西から)
(2) S K 35遺物出土状況(東から)
(3) B地区下層深掘作業(北から)
- 図版第25 東山遺跡 出土遺物(1)
- 図版第26 東山遺跡 出土遺物(2)
- 図版第27 (1) 東山遺跡 出土土器 (2) 東山遺跡 出土瓦
- 図版第28 (1) 東山遺跡 出土石器(1) (2) 東山遺跡 出土石器(2)

3. 太田遺跡第2次

- 図版第29 (1) 太田遺跡調査地遠景(西から)
(2) 太田遺跡調査地遠景(北から)
- 図版第30 (1) 太田遺跡調査地遠景(東から)
(2) 太田遺跡調査地遠景(南から)
(3) 太田遺跡調査地全景(上が北)
- 図版第31 (1) 太田遺跡A地区全景(上が北)
(2) 太田遺跡B-1地区全景(左が北)
(3) 太田遺跡B-2地区全景(上が北)
- 図版第32 (1) 太田遺跡A地区拡張区S H 12検出状況(東から)
(2) 太田遺跡S H 12遺物出土状況(1) (上が南)
(3) 太田遺跡S H 12遺物出土状況(2) (上が南)
- 図版第33 (1) 太田遺跡A地区S H 127・128・129検出状況(上が北)
(2) 太田遺跡A地区S H 130検出状況(北から)
(3) 太田遺跡A地区S H 138検出状況(東から)
- 図版第34 (1) 太田遺跡A地区S H 139検出状況(西から)
(2) 太田遺跡A地区S E 78検出状況(東から)
(3) 太田遺跡B-1地区S H 136検出状況(北から)
- 図版第35 (1) 太田遺跡B-1地区S H 137検出状況(北から)
(2) 太田遺跡A地区S B 146~148検出状況(上が北)
(3) 太田遺跡A地区S E 81井戸枠検出状況(北から)
- 図版第36 (1) 太田遺跡A地区S E 81縦板検出状況(南から)

- (2) 太田遺跡A地区SE81下段横棧検出状況(西から)
 (3) 太田遺跡A地区SE81甕検出状況(南西から)
- 図版第37 (1) 太田遺跡B-1地区SD89遺物出土状況(南から)
 (2) 太田遺跡B-1地区SB140・144(上が北)
 (3) 太田遺跡B-1地区SH136・137、SB141・149検出状況(上が北)
- 図版第38 (1) 太田遺跡A地区SB148・161、SA162、SD57、SK61検出状況(上が北)
 (2) 太田遺跡A地区SB161、P3検出状況(東から)
 (3) 太田遺跡A地区SB161、P387検出状況(北から)
- 図版第39 (1) 太田遺跡A地区SD57、SK61・63検出状況(北から)
 (2) 太田遺跡A地区SE62検出状況(南から)
 (3) 太田遺跡A地区SE62胴木検出状況、SE145検出状況(北から)
- 図版第40 (1) 太田遺跡A地区SE65検出状況(南から)
 (2) 太田遺跡A地区SE65埋土完掘状況(上が南)
 (3) 太田遺跡A地区SK63検出状況(北から)
- 図版第41 (1) 太田遺跡B-1地区SB149、P356検出状況(東から)
 (2) 太田遺跡B-1地区SB149、P357上層検出状況(東から)
 (3) 太田遺跡B-1地区SB149、P357下層検出状況(東から)
- 図版第42 (1) 太田遺跡B-1地区SB149、P378検出状況(東から)
 (2) 太田遺跡B-1地区SB149、P418検出状況(東から)
 (3) 太田遺跡B-1地区SB149、P419検出状況(右上が北)
- 図版第43 (1) 太田遺跡B-2地区SE92検出状況(北東から)
 (2) 太田遺跡B-2地区SE106検出状況(東から)
 (3) 太田遺跡B-2地区SE108検出状況(東から)
- 図版第44 (1) 太田遺跡B-2地区SE142検出状況(東から)
 (2) 太田遺跡B-2地区SX109検出状況(南から)
 (3) 太田遺跡B-2地区断層SX135検出状況(南東から)
- 図版第45 出土遺物(1)
 図版第46 出土遺物(2)
 図版第47 出土遺物(3)
 図版第48 出土遺物(4)

4. 木津川河床遺跡第13次

- 図版第49 (1) 調査前(南西から) (2) 調査地全景(南西から)
 (3) トレンチ全景(西から)
- 図版第50 (1) 2トレンチ全景(東から) (2) 2トレンチ北壁断面(南から)

- (3) 2 トレンチ下層中世墓検出状況(北から)
- 図版第51 (1) 3 トレンチ全景(北東から)
(2) 3 トレンチ中世墓1～3(北から)
(3) 3 トレンチ中世墓1 遺物出土状況(南西から)
- 図版第52 出土遺物

1. 沖田遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、府営中山間地域総合整備事業「小町の里地区」圃場整備事業に先立ち、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

調査対象地は、京都府中郡大宮町大字森本小字井内口の水田地帯で、平成10年度に京都府教育委員会によって試掘調査(第1次調査^(注1))が行われ、溝跡や柱穴などが検出されるとともに、古墳時代から中世の土器や木製品が多数出土している。今回、試掘調査で遺構・遺物が集中して確認された2地区のうち1地区を当調査研究センターが調査し、別地区については京都府教育委員会が調査した。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克・主査調査員石尾政信が担当した。調査期間は、平成12年5月9日～7月28日で、調査面積は約1,200㎡である。調査費用は京都府丹後土地改良事務所が負担した。

調査にあたっては、大宮町教育委員会・京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・地元森本地区自治会などの援助・協力があった。また、現地調査・整理作業には大宮町の方々などの協力があった^(注2)。なお、本概要はセンター実施分について報告する。

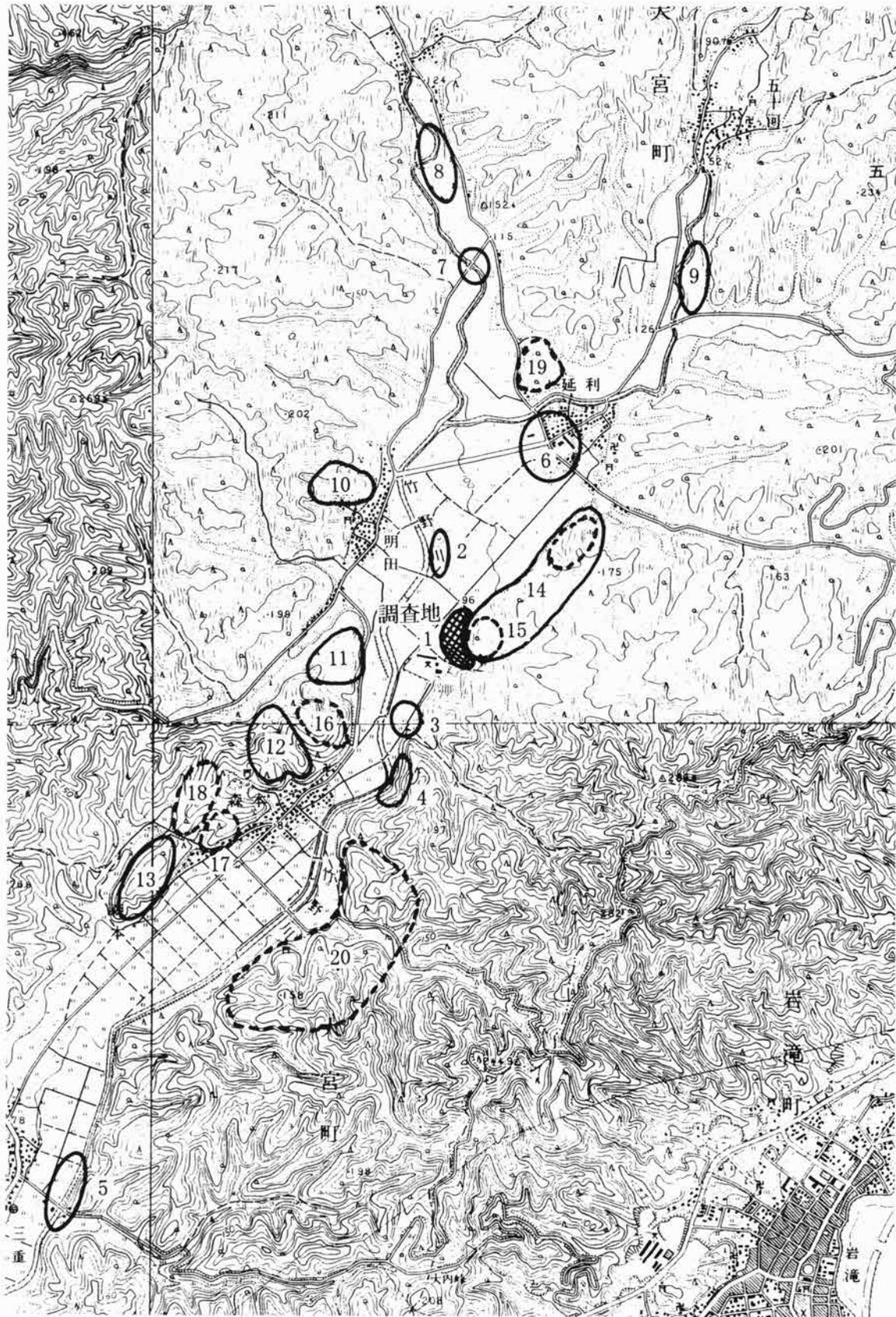
2. 位置と環境

沖田遺跡は、大宮町と弥栄町の境界の高尾山を源泉とする竹野川が、大宮町延利集落の南方で久住川と合流して形成した、やや広い平地部分の竹野川左岸の丘陵裾付近に所在する。周辺は整備された水田が広がっている。この遺跡は、弥生時代の遺物散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地であり、磨製石斧が出土したことで知られている。

沖田遺跡の周辺には、延利遺跡・曲がり遺跡・松山遺跡・マンジョウ寺遺跡などの集落遺跡が、丘陵上には笠町古墳群・宮ノ奥古墳群・丸谷古墳群・大谷口古墳群・森本大谷古墳群・星ノ内古墳群のほか、延利城跡・明田城跡・入谷城跡・森本城跡・森本大谷城跡などの中世山城がある。

3. 調査概要

調査対象地を含む周辺の竹野川流域では、昭和10年代に耕地整理が行われ、長方形などに整備された水田が広がり、整備以前の自然地形がほとんどうかがえない状況にある。調査対象地は、竹野川に流れ込む井内川の開折谷に造られた狭い水田地帯で、開折谷の中心に向かって、北東から南西方向にゆるやかに傾斜する地形である。北東部から南東部(丘陵側)では、耕作土の下に灰褐色土・暗褐色土(古墳～奈良時代の遺物包含層)が堆積し、北西部は耕地造成で遺物包含層が削



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 沖田遺跡 | 2. 曲り遺跡 | 3. 松山遺跡 | 4. マンジョウ寺遺跡 | 5. 三重遺跡 | 6. 延利城跡 |
| 7. 岩立橋遺跡 | 8. 久住遺跡 | 9. 五十河遺跡 | 10. 明田城跡 | 11. 入谷城跡 | 12. 森本城跡 |
| 13. 森本大谷城跡 | 14. 延利遺跡 | 15. 宮ノ奥古墳群 | 16. 丸谷古墳群 | 17. 大谷口古墳群 | 18. 森本大谷古墳群 |
| 19. 笠町古墳群 | 20. 星野内古墳群 | | | | |

平されており、暗灰色・濁灰褐色砂質土の上面で、溝や柱穴などを検出した。東部では暗褐色土の上面で砂礫堆積の溝(S D01)や柱穴を検出した。中央西側には後世の攪乱があり、南部では暗褐色～暗灰褐色の植物遺体を含む砂質土が東方から西方に向かって堆積している。この層には、古墳～中世の遺物を包含し、動物を墨で描いた土師器皿や須恵器・輸入陶器・木製品などが出土した。この堆積層をえぐり込んだ砂礫堆積の中世溝(S D02・03)が検出された(上層遺構)。その下には、暗灰色砂質土層(砂・砂質・シルトの互層)が堆積し、下層の暗灰色砂質土を抉り込んだ砂礫の溝(S D04ほか)や多数の柱穴・土坑(S K01)・竪穴式住居跡(S H01・02)などを検出した。以下に主な遺構について記述する。

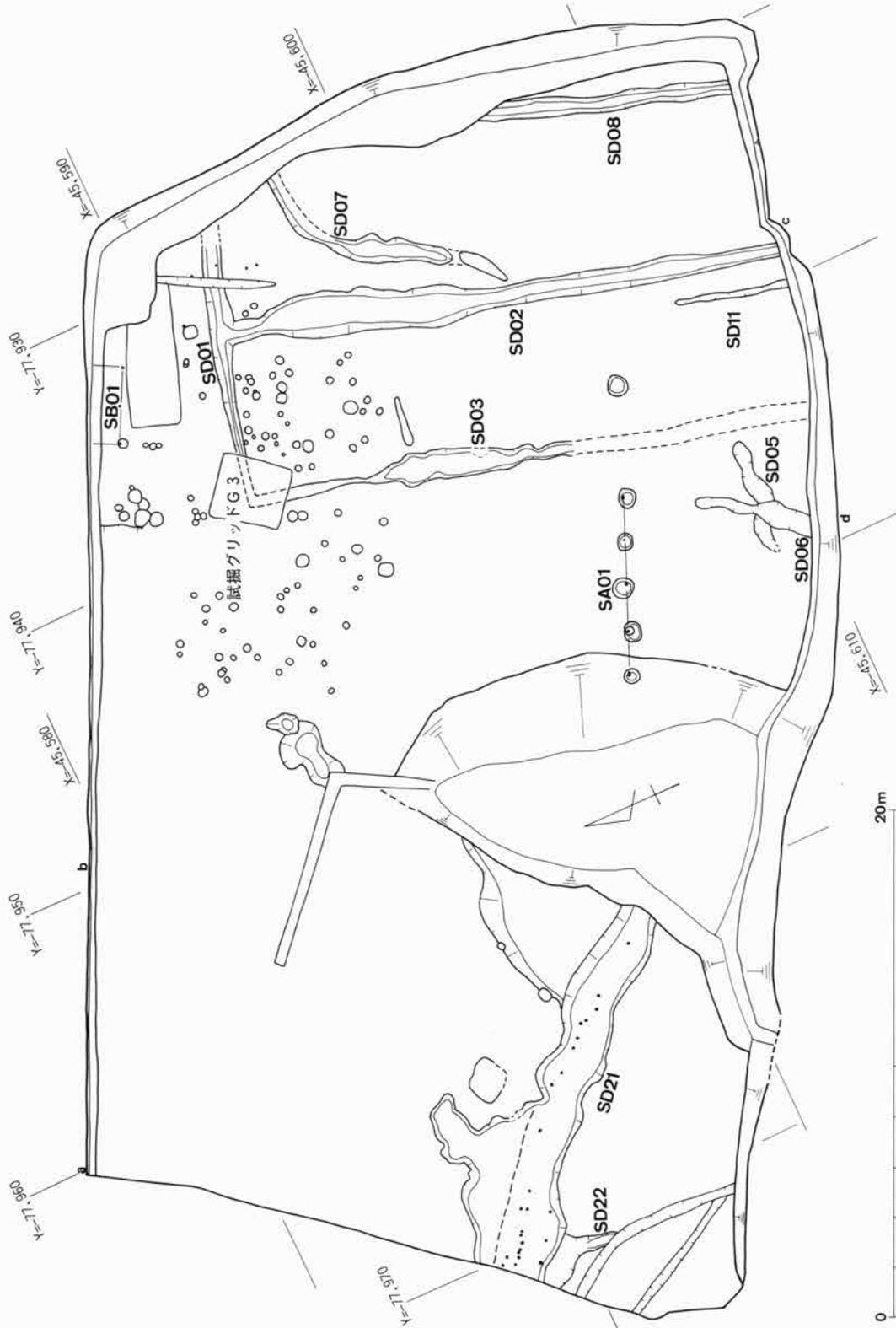


第2図 調査地および周辺地形図

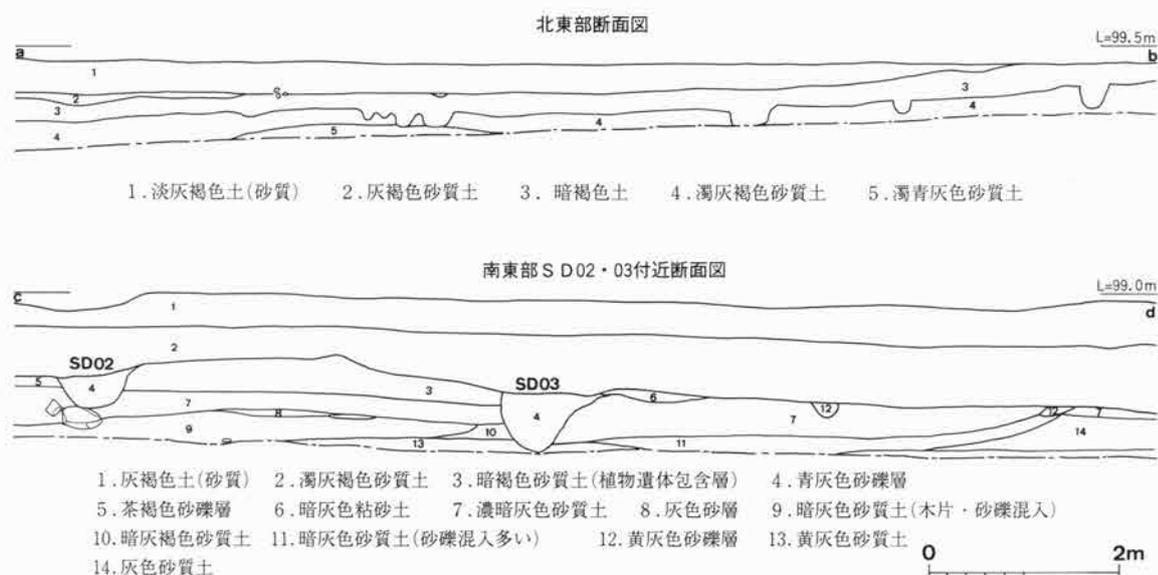
4. 検出遺構

(1) 上層遺構

溝SD01 幅0.3～1m・深さ0.2～0.3mを測る砂礫堆積の素掘り溝で、中世(13世紀)の土師器皿や木製品などが出土した。土師器皿は完形品が多い。溝底は東方から西方に傾斜している。



第3図 上層遺構平面図



第4図 調査地断面図(部分)

溝S D02 S D01の途中から直角に分岐して延びる砂礫や粘質土の互層堆積の溝で、多量の土師器皿や木製品などが出土した。深さ0.3~0.5m・最大幅約1.8mを測る。

溝S D03 府教育委員会調査の試掘グリッドG3のS D01から直角に曲がる砂礫堆積の溝で、深さ0.1~0.3m(南東断面では0.6m)・最大幅約1.4mを測る。多量の土師器皿や木製品などが出土した。堆積状況から、本来の溝を砂礫がえぐり込んで流入したものであろう。

溝S D07 S D02の東側で検出した蛇行した砂礫堆積の溝で、最大幅1.2m・深さ約0.2mを測る。土師器皿や木製品が出土した。

溝S D08 南東部で検出した砂礫堆積の溝で、幅約0.6m・深さ約0.2mを測る。木製品や土師器皿などが出土した。

溝S D09 S D08の西側で確認した砂礫堆積の溝である。

S D01とS D02・03は直交し、S D02とS D03・08が平行するので、これらは中世の区画溝の可能性が高い。

溝S D05・06 S D03から分岐するように延びて、一部が溝状になる。本来の溝ではなく、軟質の部分をえぐって砂礫が堆積したものであろう。土師器皿や木片が出土した。

溝S D11 S D02の東側で検出した幅約0.3mの砂堆積の溝である。

溝S D21 北西部で検出した最大幅1.5m・深さ約0.3mの溝で片側(山側)に多くの杭が打ち込まれていた。溝内や溝周辺の堆積層から、中世土器に混じって古墳時代や縄文時代の遺物が出土した。また、中央部の攪乱近くの溝内から石皿が出土した。

柵列S A01 中央付近で検出した径0.6~1mの円形・楕円形の柱掘形が5か所並ぶもので、柱間隔は約1.8mを測る。一部の掘形には方形の柱が残存していたので、上層遺構と判断した。

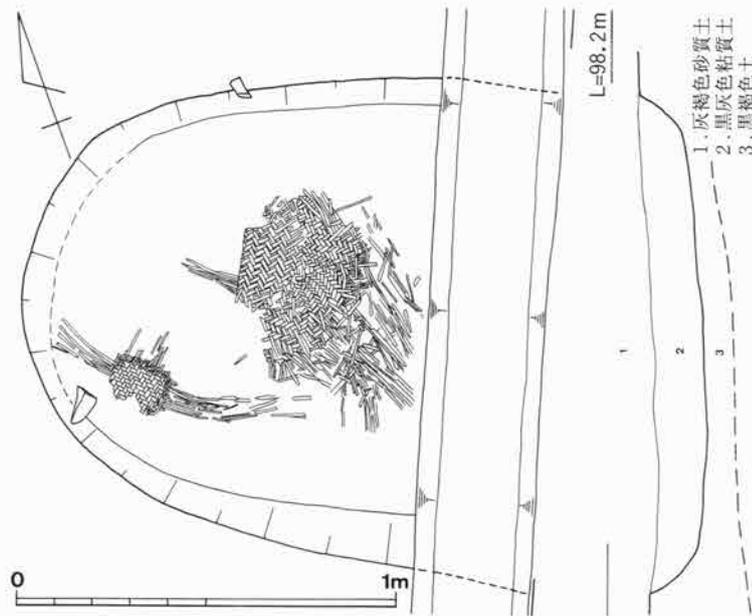
掘立柱建物跡S B02 北東部で検出した方形の柱が残存するもの2か所と、円形掘形に方形柱が残存するものが、1.5m間隔で並ぶので建物跡と判断した。重機掘削の際に、壁面で方形柱が

(2)下層遺構

溝SD10 SD02にほぼ直交する東西方向の溝で、幅0.5～0.7m・深さ約0.2mを測る。6世紀後半～7世紀初頭の土器が出土した。

溝SD12 SD10と交わる南北方向の溝で、幅約0.5m・深さ約0.2mを測る。6世紀後半～7世紀初頭の須恵器が出土した。

溝SD13 SD02の東で検出した素掘り溝で、幅約0.3m・深さ約0.1mを測る。時期の分かる土器類は出土していない。

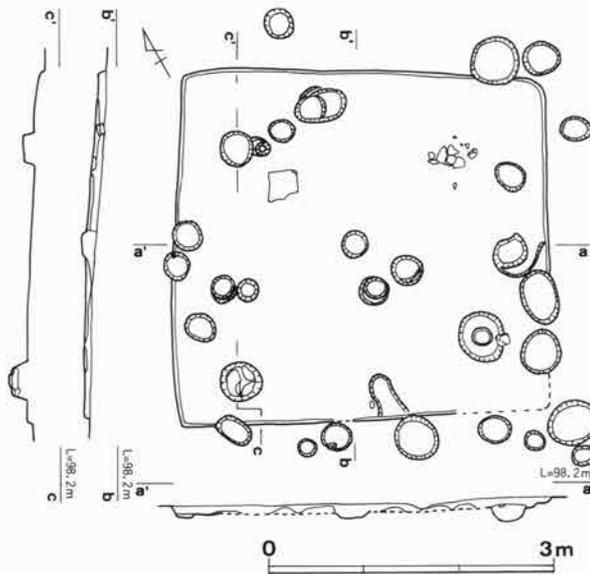


第6図 土坑SK01実測図

溝SD20 幅0.3～0.6m、最大の深さ0.3mを測る素掘り溝で、長さ約20mに渡って検出した。北西部分はやや蛇行し浅くなり消滅している。6世紀後半～7世紀初頭の土器が出土した。

溝SD19 SD21に切られたやや蛇行する、幅0.3～0.8m・深さ約0.3mを測る素掘り溝で、長さ約13mに渡って検出した。古墳時代後期の土器に混じって縄文土器が出土した。

溝SD04 蛇行ぎみに延びる幅約0.8m・深さ約0.2mを測る砂礫堆積の溝で、長さ12mに渡って検出した。弥生土器などが流入していた。

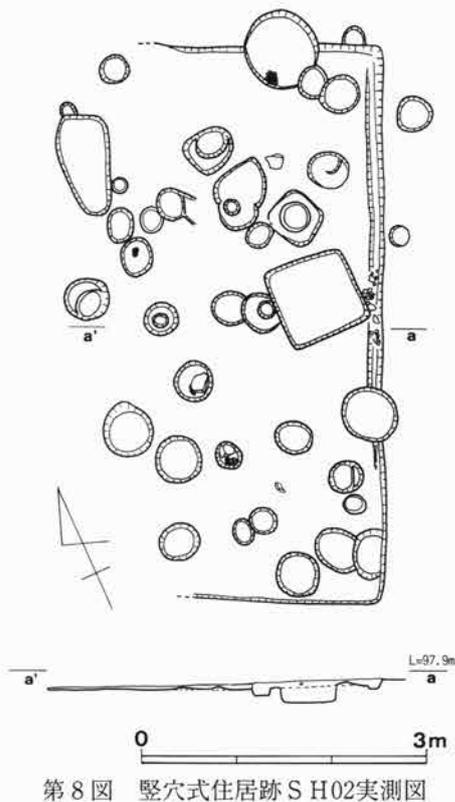


第7図 竪穴式住居跡SH01実測図

土坑SK01 中世遺物堆積層と溝SD08の下で検出した長軸1.3m×短軸約1.2m以上の楕円形土坑で、深さ約15cmを測る。埋土(黒灰色粘質土)から網代と編み籠の残欠が出土した。

竪穴式住居跡SH01 規模は4.0m×3.7m、検出面からの深さ約8cmを測る、方形を呈する住居跡で周壁溝はない。支柱穴は明確でない。古墳時代後期の土師器高杯が床面で出土した。

竪穴式住居跡SH02 規模は5.8m×3.0m以上、検出面からの深さ約6cmを測る、方形を呈する住居跡で、幅約15cm・深さ約5cmの周壁溝が一部にめぐる。支柱穴は明確でない。周壁溝と床面付近に古墳時代後期の土器が出土した。



第8図 竪穴式住居跡 S H02実測図

掘立柱建物跡 S B03 S H02と重複して径0.3～0.4 mの柱穴が南北4間×東西3間に並ぶもので、建物として復原した。東西南北とも約3.2mを測る。

これら以外に、多くの柱穴が検出できたが、明確な建物跡に復原できるものはみあたらない。また、柱穴からは時期を示す遺物も少なく、各時期のものが混在していると考えられる。

5. 出土遺物

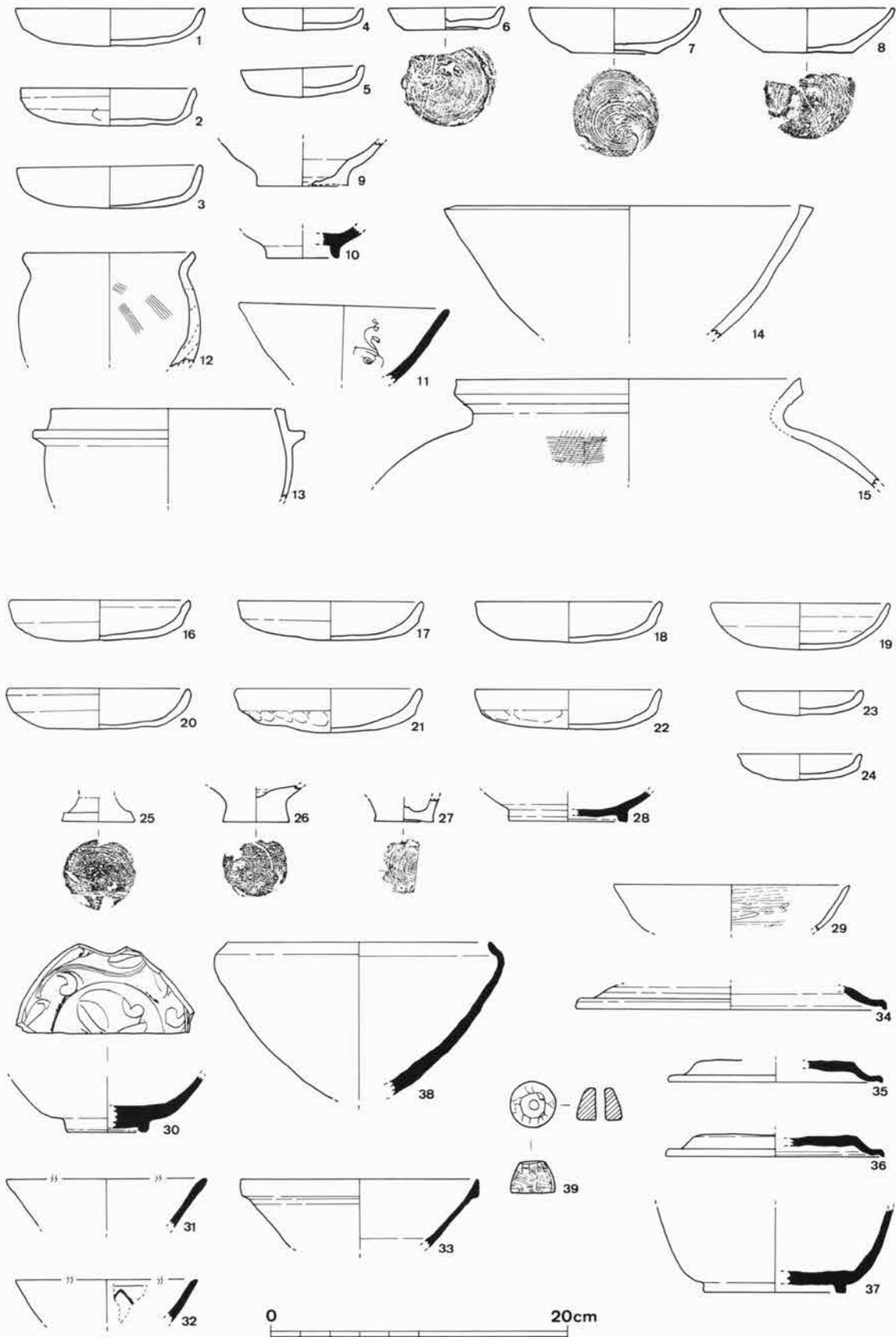
今回の調査では、整理箱に80箱以上の土器・陶磁器・木製品・石器などが出土した。以下に主な遺物について記述する。

(1) 土器・陶磁器・石器(第9～14図)

溝 S D01出土 土師器皿は口径12cm前後・器高2.5cm前後のもの(1～3)と、口径8cm前後・器高1.5cm前後のもの(4・5)の2種類がある。内面と口縁部をナデ、底部をナデるもの・指おさえ痕跡が残るもの・未調整のものが混在する。6の土師器皿は底部糸切りで口径7.8cm・器高1.5cmを測る。土師器椀(7・8)は底部糸切りである。7は口径11.6cm・器高3cmを測る。9も土師器椀の底部と推定される。10・11は青磁である。12は土師器甕で口径11.4cmを測る。13は土師器羽釜で口径15.8cmを測る。14は瓦質土器の鉢である。15は東播系の甕で口径23.2cmを測る。

溝 S D02出土 土師器皿は S D01と同様に口径12cm前後のもの(16～22)と、口径8cm前後のもの(23・24)がある。19は器高3.1cmを測る。25・26は柱状高台皿で底部糸切りである。27は須恵器壺の底部である。28は緑釉陶器で、高台径8cmを測る。29は内面のみ黒色処理した黒色土器A類の椀である。30～32は青磁椀である。30は内面に劃華蓮花文を施した淡緑色の龍泉窯系の青磁で、高台径5.2cmを測る。33は濁白色の釉薬が施された、口縁端部を玉縁にした白磁椀で、口径16.2cmを測る。34～36は端部を屈曲させた須恵器蓋である。34は口径21cm、35は口径14.5cmを測る。37は高台径9.6cmを測る須恵器杯Bである。38は須恵器鉄鉢形の鉢である。34～38は8世紀後半、27は9世紀のものである。39は最大径3.1cm・高さ2.2cmを測る石製紡錘車である。上・下面にていねいなミガキを施し、側面は粗いミガキによっている。上方には面取り痕跡が残る。

溝 S D03出土 土師器皿は S D01と同様に口径8cm前後のもの(40～45)と、口径12cm前後のもの(46～50)がある。51～53は糸切り底の柱状高台皿である。51は口径7.5cm・器高3.7cmを測る。54は糸切り底の須恵器椀で、口径11cm・器高3.2cmを測る。55は緑釉陶器である。56は褐釉陶器の体部片である。57は青白磁椀で底径5.8cmを測る。58は青磁椀で底径5.6cmを測る。59は土師質の羽釜、59は瓦質の羽釜である。61は瓦質の鍋で、口径27.6cmを測る。62・63は瓦質の鉢である。



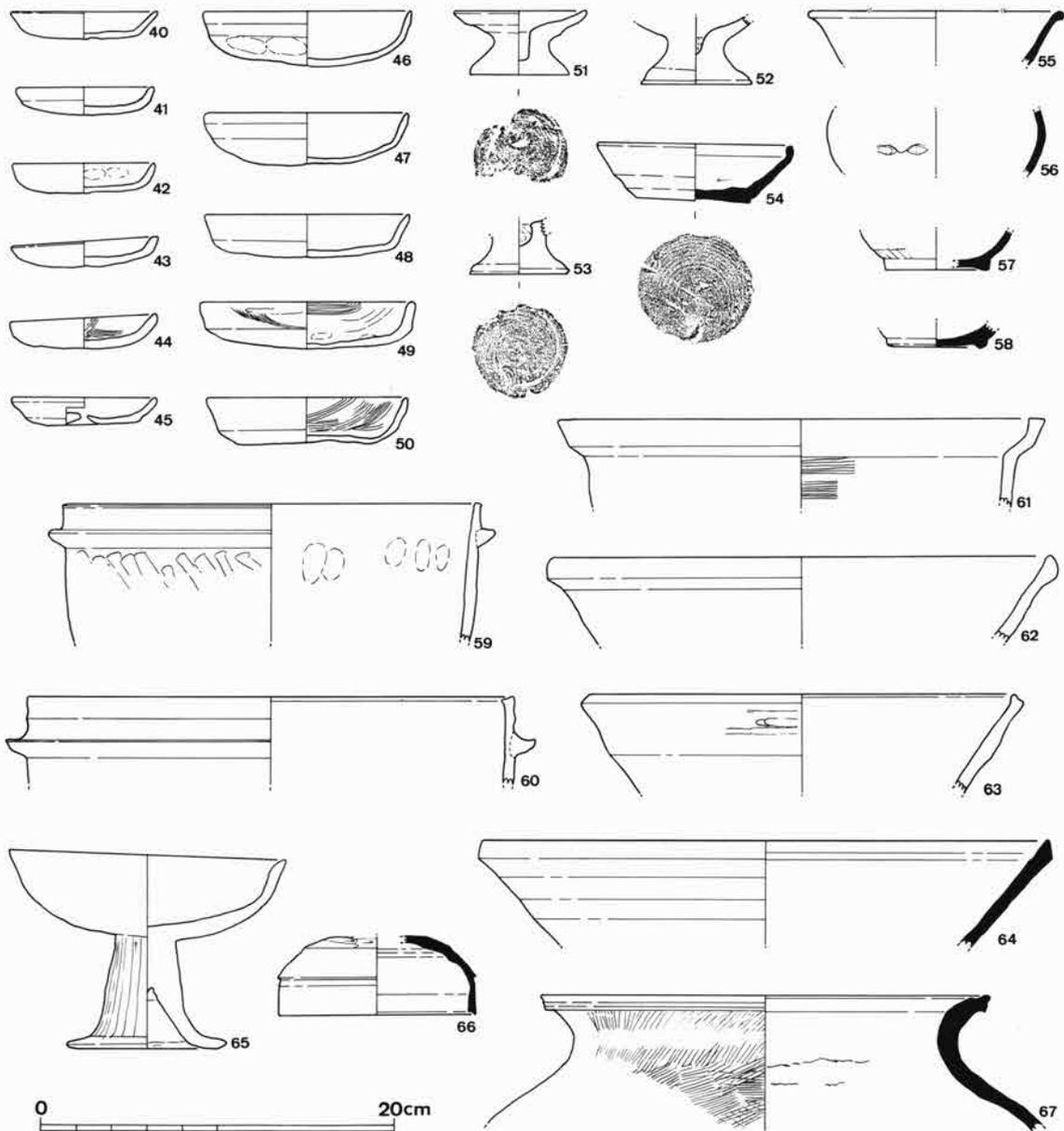
第9図 土器実測図・拓影(1)

64は東播系の鉢で、口径32.2cmを測る。65は古墳時代の土師器高杯、66も古墳時代の須恵器杯蓋、67も古墳時代の須恵器甕である。いずれも6世紀前半のもので混入したものである。

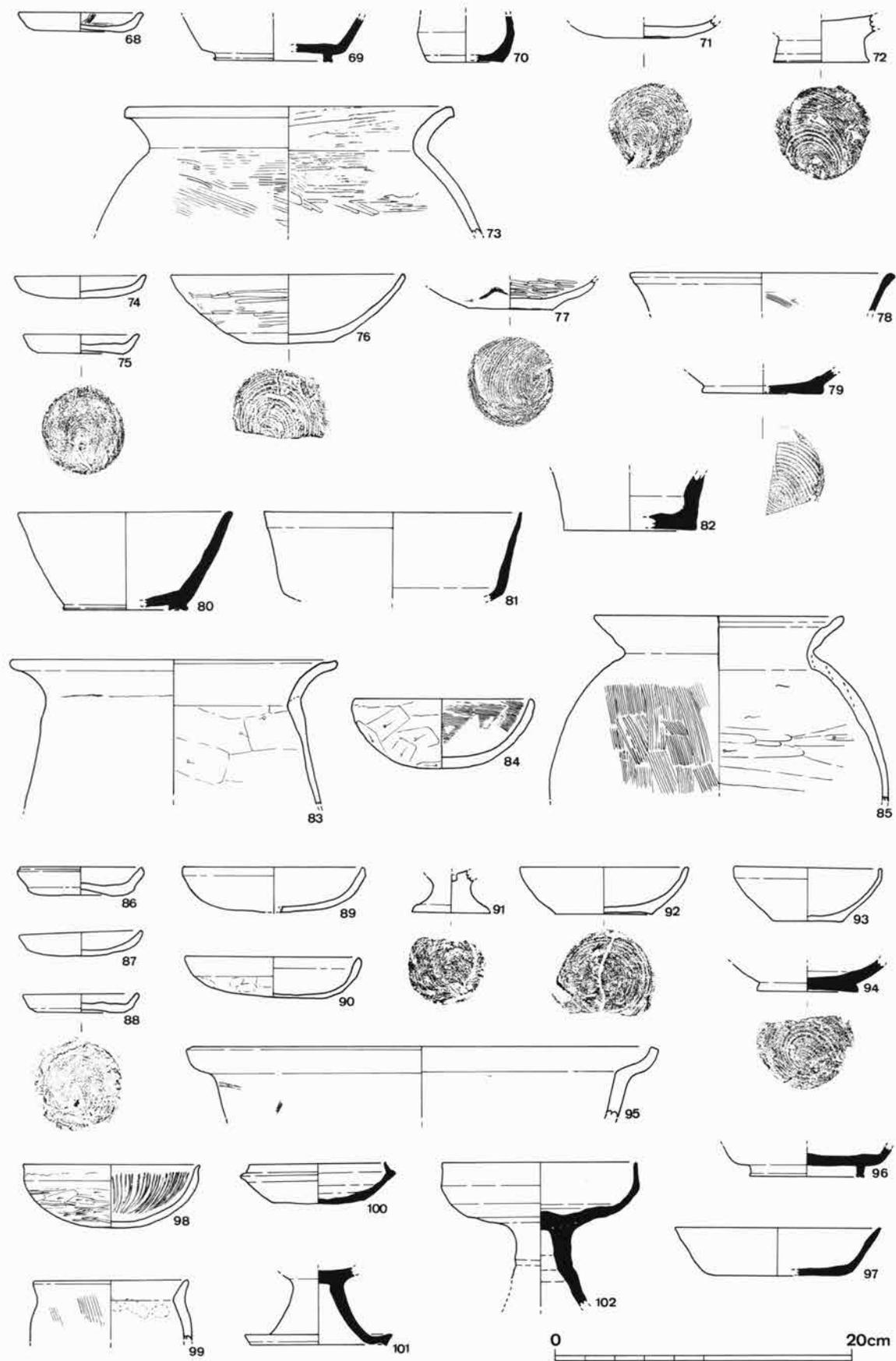
溝S D05出土 68は土師器皿で内面にハケ目が残る。口径8.4cm・器高1.4cmを測る。69は須恵器杯Bで高台径8cmを測る。8世紀後半のものである。70は底部糸切りの須恵器壺である。

溝S D06出土 71は底部糸切りで、内面を黒色処理した黒色土器A類である。72は底部糸切り柱状高台皿である。73は土師器甕である。

溝S D07出土 74は口径9cm・器高1.6cmを測る土師器皿である。75は底部糸切りで口径7.8cm・器高1.3cmを測る土師器皿である。76は口径17.8cm・器高4.7cmを測る黒色土器A類の椀である。77も底部糸切りの黒色土器A類の底部で、底径5.7cmを測る。口縁部下半に墨書があるが上半が欠損するので判読できない。78は青磁椀である。79は底部糸切りの須恵器底部である。



第10図 土器実測図・拓影(2)



第11図 土器実測図・拓影(3)
S D05~08・10・12

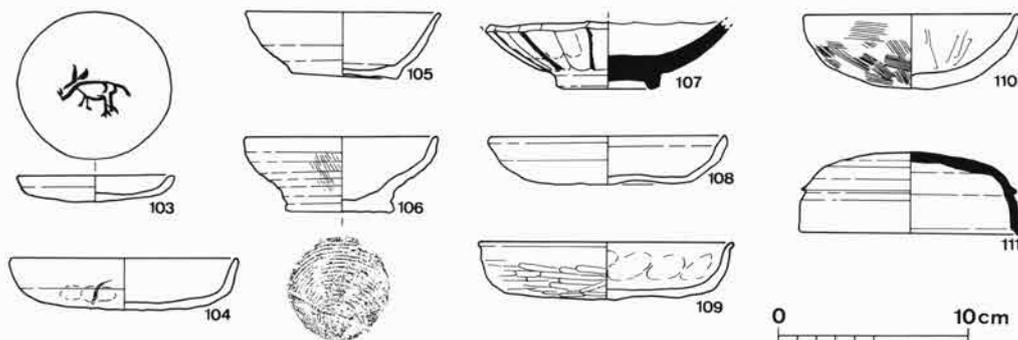
80は口径14.3cm・器高6.6cmを測る須恵器杯Bである。81は口径17.4cmを測る須恵器杯である。82は底部糸切りの須恵器壺底部である。83は口径22.1cmを測る土師器甕である。84は口径12cm・器高4.8cmを測るほぼ完形品の土師器杯である。口縁端部を横ナデ・それ以外をヘラケズリ、内面にハケ目が残る。85は口縁部を「く」の字状に屈曲させ、端部をわずかに肥厚させた土師器甕である。体部外面はハケ調整、内面をヘラケズリする。中世(13世紀)から古墳時代後期にかけての土器がある。

溝S D08出土 86~88は土師器皿である。86は口径8.2cm・器高1.9cmを測る。88は底部糸切りである。89・90も土師器皿である。91は底部糸切りの柱状高台皿である。92・93は底部糸切りの土師器椀である。93は口径11.7cm・器高3.1cmを測る。94は底部糸切りの須恵器椀である。95は口径32cmを測る土師器鍋である。96は高台径7.8cmを測る須恵器杯Bの底部である。97は口径14cm・器高3.3cmを測る須恵器杯Aである。

溝S D10出土 98は口縁端部内外面を横ナデ・外面はヘラケズリ後荒いミガキを行う土師器杯である。内面には横ナデ後放射状暗文を施す。口径11.9cm・器高4.3cmを測る。99は口縁部がわずかに屈曲した土師器甕である。100は口径9.3cm・器高2.8cmを測る須恵器杯身である。101は高杯脚部である。須恵器杯・高杯の形状から6世紀後半~7世紀初頭(T K209・T K217型式併行期)のものであろう。

溝S D12出土 102は須恵器高杯で、杯部の口径13.1cmを測る。焼成・胎土が良好で、色調は外面が光沢のある暗青灰色を呈する。6世紀後半~7世紀初頭(T K209・T K217型式併行期)のものであろう。

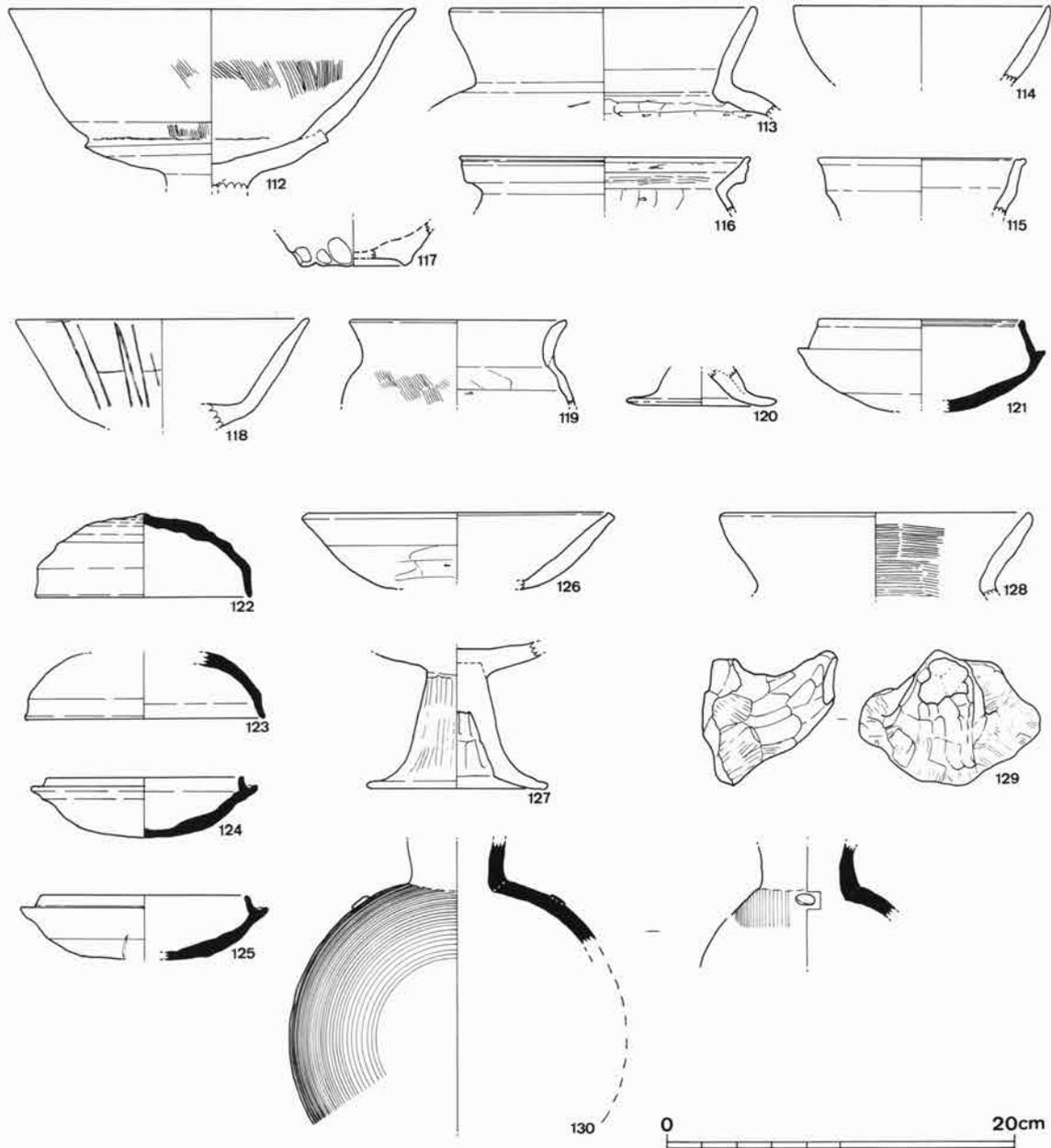
包含層出土 103は完形品の土師器皿で口径3.1cm・器高1.4cmを測る。口縁部内外面を横ナデ・内面にナデを施す。底部に指押さえ痕跡が残る。焼成・胎土が良好で、色調は淡灰褐色を呈する。内面に墨で動物が描かれている。104・108も土師器皿である。105・106は底部糸切りの土師器椀である。106は口径10cm・器高4.2cmを測る。107は高台が完残する鎬蓮弁文の青磁椀で、意図的に上半部を打ち欠いたか、欠けたものを再加工したかと思われる。淡灰青色の釉薬がかかる。109はほぼ完形品の土師器皿で、口径13.3cm・器高3.1cmを測る。内面に指押さえ痕が残るが、口縁端部と内面を横ナデし、底部と口縁部下半はヘラケズリする。胎土・焼成とも良好で、色調は橙褐色を呈する。畿内からの搬入品と思われる。110はほぼ完形品の土師器杯で、口径



第12図 土器実測図・拓影(4) 包含層

11.2cm・器高4cmを測る。口縁部外面上半はナデ後にハケを施し、下半はケズリ後ハケで仕上げる。111は完形品の口縁部内面に段がつく須恵器杯蓋である。口径11.4cm・器高4.5cmを測る。103~108は暗褐色~暗灰褐色砂質土から出土した。109~111は山側の暗褐色土などの古墳~奈良時代包含層から出土した。これら以外に、縄文土器や畿内第I様式(貼り付け凸帯の壺体部片)弥生土器などが包含層から出土している。また、滑石製石鍋も出土している。

S H01出土 112は住居跡の床面から出土した土師器大形高杯の口縁部である。口縁下半に粘土の継ぎ目による稜をもち、口縁部内外面は軽いハケ後ナデによって仕上げる。口径23.2cmを測る。113は「く」の字状に外反する土師器甕の口縁部である。口径17.5cmを測る。114・115も土師器甕の口縁部である。116は口縁外面に擬凹線が施された甕である。117は底部である。116・117の弥生土器は、混入したのであろう。大形高杯はS H02出土の須恵器より古い6世紀前半の

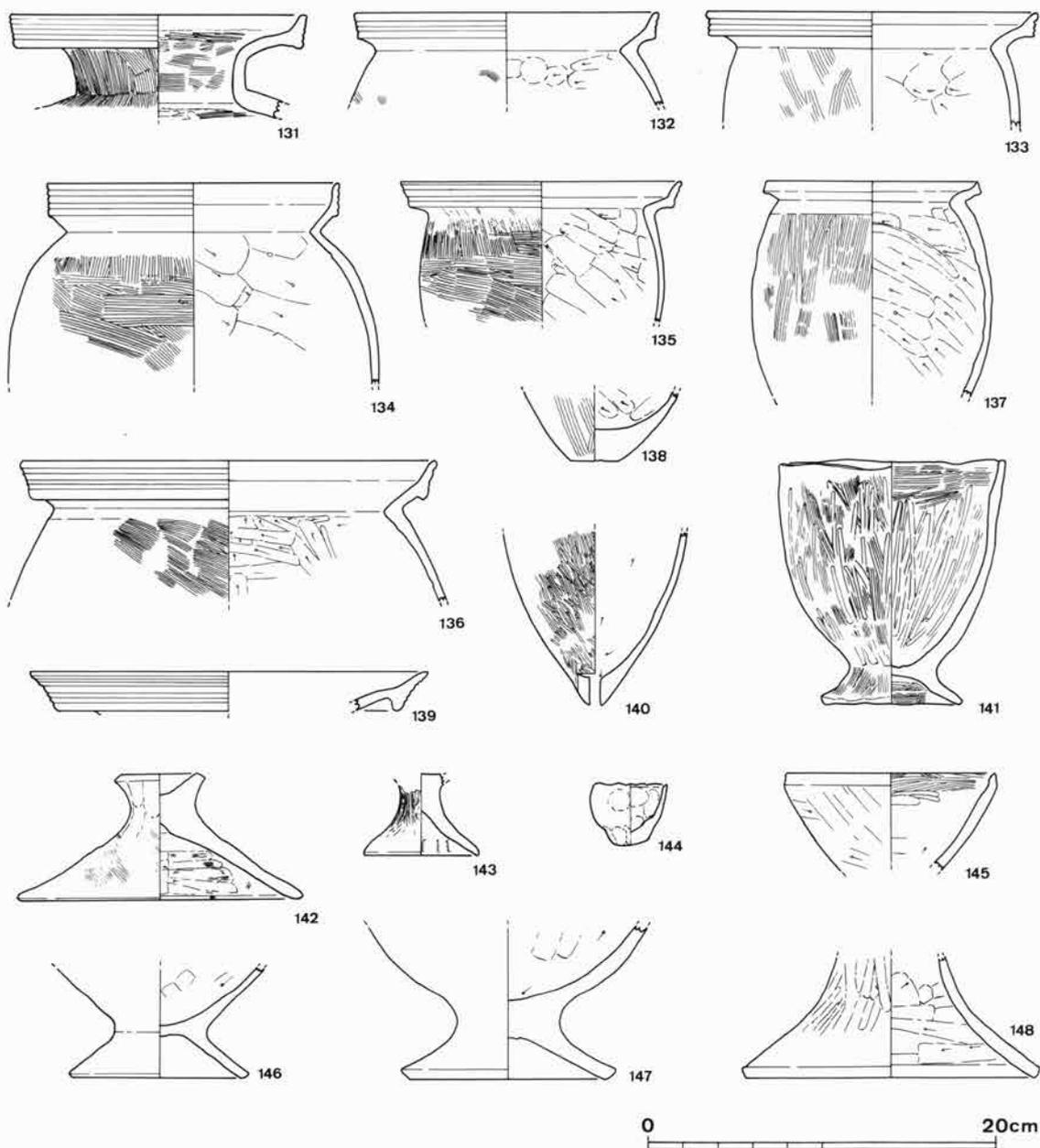


第13図 土器実測図(5) S H01・02、S D20

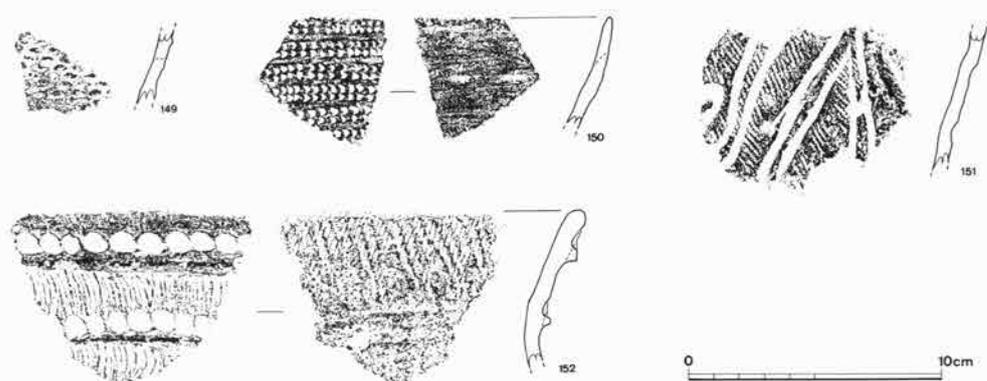
ものであろう。

S H02出土 118は周壁溝から出土した土師器高杯の口縁部である。口縁部内面は軽いハケ後ナデ・外面はナデ後荒いミガキを施す。口径16.9cmを測る。119は土師器甕の口縁部である。120は土師器高杯脚部である。121は床面から出土した須恵器杯身で、口径11.7cmを測る。須恵器杯身は6世紀前半(MT15型式併行期)のものであろう。

S D20出土 122・123は須恵器杯蓋である。122は口径12.6cm・器高4.7cmを測る。124・125は須恵器杯身である。124は口径11.4cm・器高3.4cmを測る。126は土師器高杯口縁部、127は高杯脚、128は甕口縁部である。129は土師器把手である。130は肩部に把手の痕跡を留める円形粘土を貼り付けた、須恵器提瓶である。須恵器類は6世紀後半～7世紀初頭(TK209・TK217型式併行期)のものであろう。



第16図 土器実測図(6) S D04



第15図 土器実測図 縄文土器

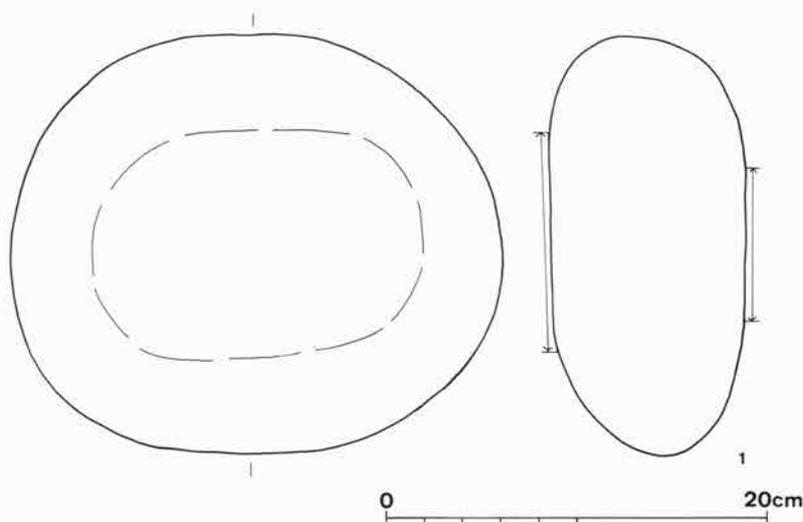
S D04出土 131は強く外反した口縁部の端部を上下に拡張して、端面に5条の擬凹線を施した壺である。頸部外面を細かいハケで調整し、内面はハケ後ナデ消す。口径16.8cmを測る。胎土はやや粗く、焼成は良好で外面が明淡褐色を呈する。132～136は短く立ち上がり、複合口縁をなす口縁外面に擬凹線を施す甕である。体部外面はナデ消すものがあるが、ハケで調整し、内面はヘラケズリで調整する。胎土はやや粗く、焼成は良好で淡褐色～褐色を呈するものが多い。136は口径23.7cmを測る。137は口縁端部をヨコナデする甕である。体部はハケで調整し、内面はヘラケズリで調整する。138は甕底部と思われる。139は外傾する口縁端部を下方に拡張し、擬凹線を施した器台である。140は有孔鉢である。141はほぼ完形品の台付鉢である。口縁部内面はヘラ状工具でナデ上げ、上端は横ハケを施す。口縁部外面は細かいハケ調整の後、荒いミガキを施す。口径12.8cm・器高14.1cmを測る。細粒を含むが、胎土は密であり、焼成が良好で外面が明淡褐色～淡灰色を呈する。142は底径16.4cmを測る大形の蓋である。143も蓋と思われる。144は指押さえ痕跡が残るミニチュア土器である。口径4.2cm・器高3.6cmを測る。145は鉢の口縁部と思われる。146・147は台付鉢の脚部である。148は器台の脚部である。ミニチュア土器以外は畿内第V様式後半～終末のものである。

(2) 縄文土器(第15図)

149は溝S D19から出土した楕円の押型文の体部片である。胎土はやや粗く、焼成は良好である。150は外面に2列で1単位の「D」字形爪型文を施し、内面を貝殻背で横方向に整形した口縁部片である。胎土はやや粗く、焼成は良好である。151は溝S D21から出土した外面にR Lの縄文と平行沈線を施した波状口縁鉢の胴部片である。胎土はやや粗く、焼成は良好である。152は外面に二条の凸帯を貼り付け、凸帯の上方に円形刺突を施し、内面にR Lの縄文を施した外反する口縁部である。149は早期、150は前期、151は中期の羽島下層式土器、152は中期の船元I式土器である。これら以外に多くの土器片がある。

(3) 石器(第16図)

1は溝S D21から出土した長径25.7cm・短径20cm・厚さ10.3cmを測る円礫である。2面が平滑になっているので、石皿として使用されたのであろう。このほかに、磨製石斧片と思われるものがある。



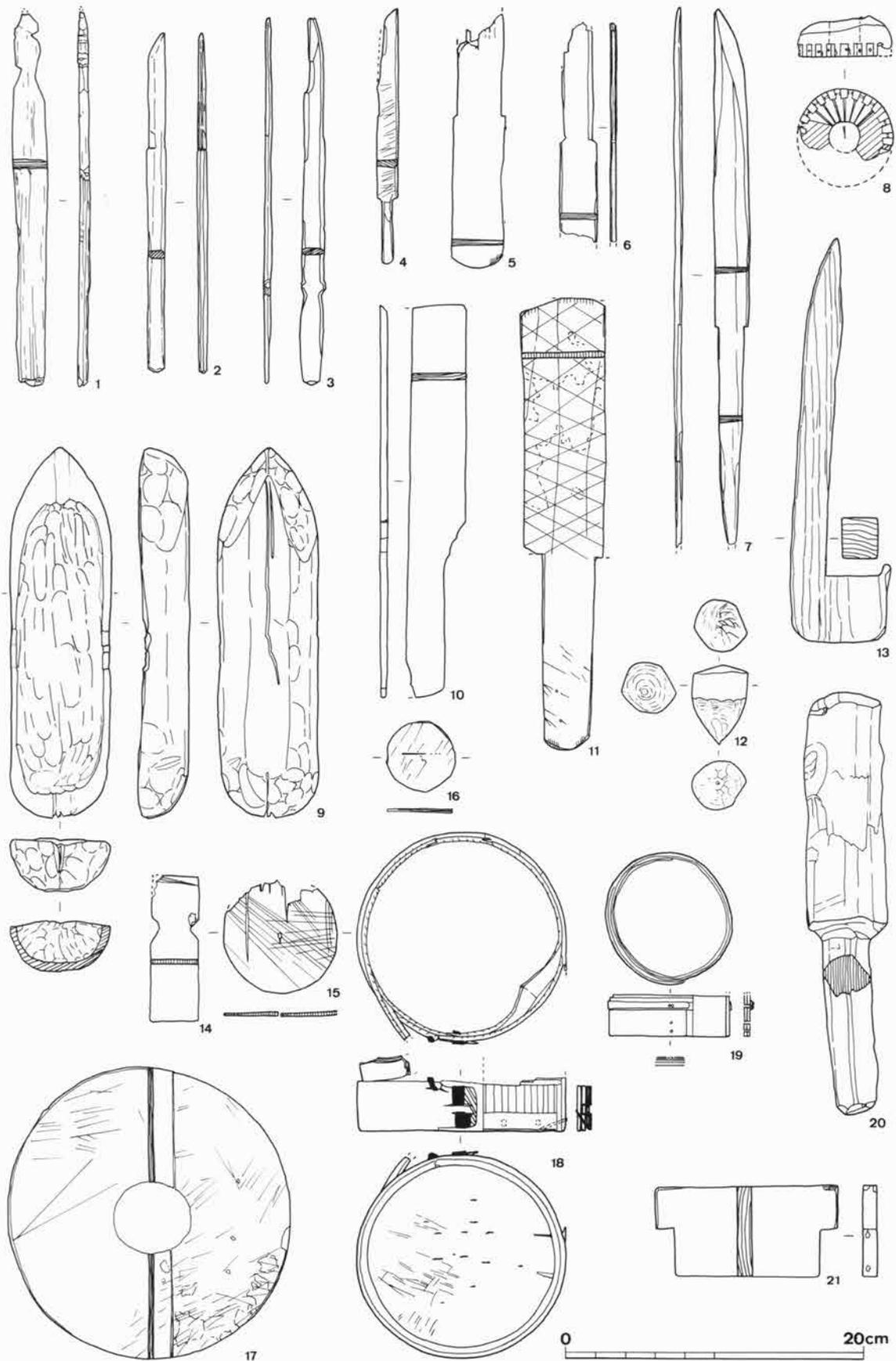
第16図 石器実測図

(4)木製品(第17~19図)

木製品は、S D 01~08や包含層から大量に出土した。S D 01からは34が、S D 02からは1~10・13・16・17・19~21・26~31・33・38・39・42・49~56が、S D 03からは25・45・47・48が、S D 06からは12が、S D 08からは15・40が、これら以外が包含層から出

土している。主なものを以下に記す。

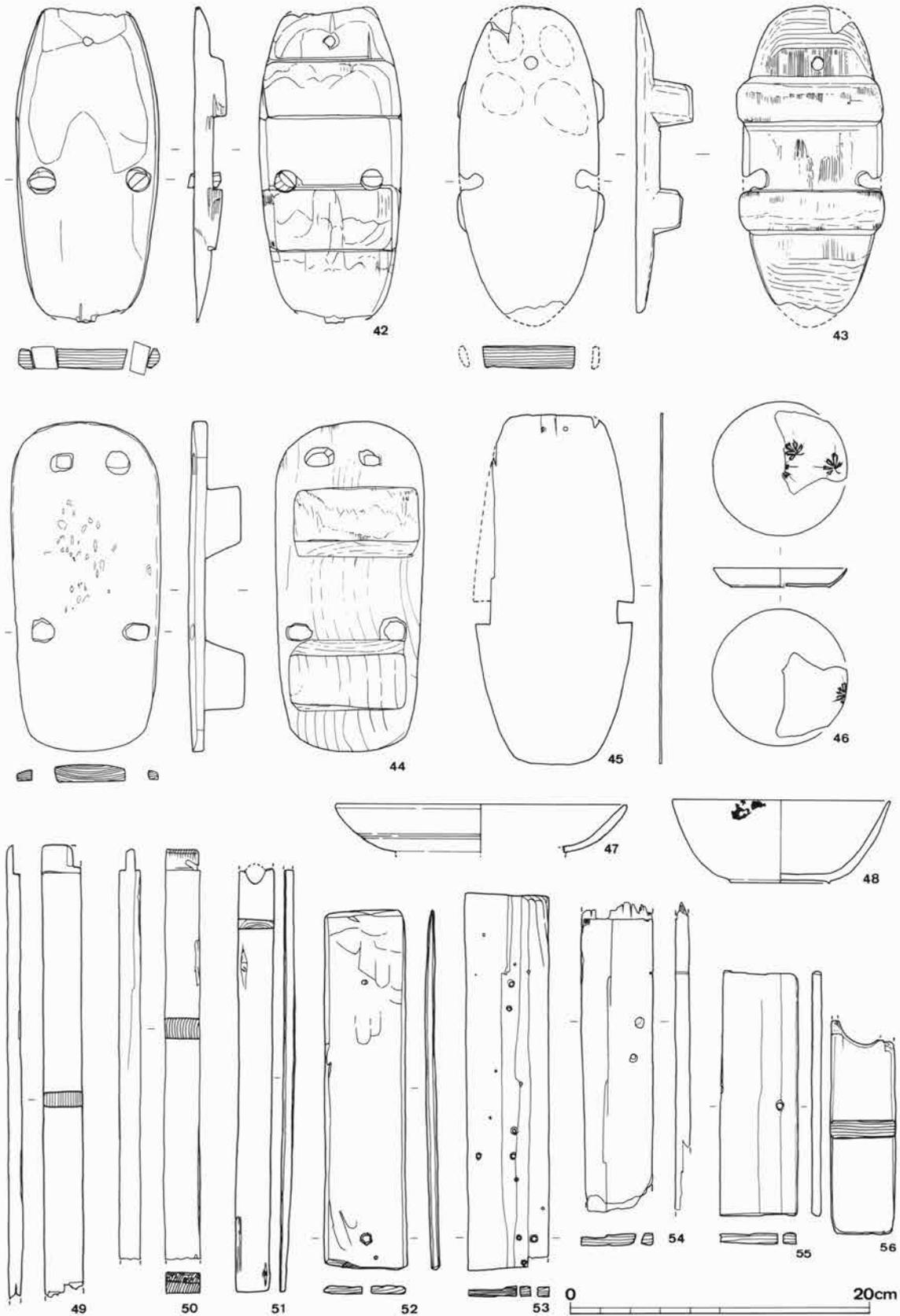
1は細い側に鋭利な刃物で目と口を、広い側に烏帽子を被る男性を表現した、横向きの人形である。長さ25cm・幅2.3cm・厚さ0.7cmを測る。2は刀子、3・4・7は小刀を表現した形代である。7は長さ36.1cm・幅2.3cmを測る。5・6も刃物を表現したものであろう。9は一木を削り貫いた舟形である。右舷・左舷および船尾に櫂をはめる削り込みがある。長さ24.9cm・幅6.7cm・厚さ3.3cmを測る。8は軟質の材質を用いた唐傘部品(ろくろ)である。直径6.2cmを測る。10は柄の境目に3段の削り込みがある羽子板である。一部を欠損するが長さ26.7cmを測る。11は羽子板状に加工したもので、折敷の転用品であろう。12は芯を削り出した独楽である。長さ5.3cm・径約3.6cmを測る。13は表面をていねいに加工した用途不明品である。14は荷札状木簡に酷似しているが墨痕はみられない。長さ9.8cm・幅3.2cmを測る。15は中央に小円孔を穿った円盤である。径7.1cmを測る。16も小型の円盤である。17は中央を円形に削り貫いた円盤である。径19.9~18.9cmを測る。15~17には表面に刃物キズがみられるので折敷の転用であろう。18は上半を欠損するが底板が残る曲物である。径14cmを測る。19も径8.5cmを測る曲物である。20は砧である。長さ28.4cm・最大径5.4cmを測る。21は短側面に、組み合わせによって段を設け、そこに留め孔がみられる箱材である。長さ6.3センチ・幅12.3cm・厚さ0.95cmを測る。22・24は杓子である。22は長さ19.05cm・幅7.6cm・厚さ0.5cmを測る。23は先端をフォーク状に切り欠いたものである。粗い作りで、長さ23.5cmを測る。聞きとりによれば、かつて、大宮町の山村で使用されていた、藁をしごく用途のものに似ているようだ。25はていねいに仕上げた漆塗りの杓文字である。残存長12.4cm・残存幅6.7cmを測る。26~30は先端をわずかに尖らせた箸である。26は長さ24cm、30は長さ21cmを測る。箸は大量に出土している。31は欠損部があるため用途は不明である。32は農具等の柄と思われる。34は櫂のようにもみえるが、大鍋に使用された大形の杓子と推定している。長さ73.8cm・最大幅7.3cmを測る。33も杓子の柄と思われる。35・36は曲物の底板である。37は曲物の蓋板と思われる。38は折敷を転用して八角形に加工したものである。39~41は折敷底板である。39には手斧痕跡が明瞭に残り、刃物キズが付く。長さ26.7cmを測る。40には留め



第17図 木製品実測図(1)



第18図 木製品実測図(2)



第19図 木製品実測図(3)

皮が残る。42～43は下駄である。42は歯が磨り減るまで使用され、後側鼻緒孔には栓がはめ込まれている。44は前側鼻緒が2か所あり、あまり使用された形跡がない。44は長さ22.1cm・幅9.8cm・厚さ3.7cmを測る。45は草履の芯である。長さ23.4cm・幅10.5cm・厚さ0.2cmを測る。46は漆塗り皿である。黒漆に赤漆で華文を描く。口径9cm・器高1.3cmを測る。47も漆塗り皿である。48は漆塗り椀である。49・50は柄を持つ部材である。50は円孔を持つ部材である。52はていねいに削られ、円孔を穿った板材である。長さ24.2cm・幅5.5cm・厚さ0.65cmを測る。53～55も円孔を穿った板材である。56は円孔を穿った板材で、幅4.4cm・厚さ1.2cmを測る。

6. ま と め

今回の調査では、縄文時代から中世にいたる大量の遺物が出土し、当地が縄文時代以降に居住地として利用されていたことが判明した。また、古墳時代後期から中世の柱穴群を検出しているが、明確な建物を復原することができなかった。中世には規格性の高い溝が掘られており、大量の遺物が出土しているため、この周辺に建物群が存在していたと推定される。溝から出土する土器のうち土師器皿が8割以上を占め、包含層にも大量の土師器皿が出土することから、これらを消費する宴・儀式などが行われたのであろう。多量の箸が出土するのもそのためである。それらから、地域の有力者の住居が推定される。この谷筋に絶えることなく水が確保できたことが、居住地に選定された要因と推定される。ただ、京都府教育委員会の調査地点では、自然流路と柱穴数か所が検出され、遺物もわずかであった。しかし、井内川の南方でも耕作土を除去した場所で土器類が見えており、遺跡は谷筋の両側に広がっていたと推定できる。

溝S D02・03や包含層から出土した木製品にはさまざまなものがある。側面(細い面)に鋭利な刃物で口と目を、正面(広い面)に烏帽子を被った男性を表現した人形、刀子や刀、船の形代など祭祀に関連するもの、草履の芯、下駄、唐傘の部品、中央を円形に削りぬいた円盤、漆塗りの皿・椀・杓文字、杓子、フォーク形製品、箸、曲物、折敷、独楽、羽子板状木製品、木筒状木製品などがある。これらは中世(13世紀)のものと考えられ、当時の生活がうかがえる貴重な資料といえる。そして、土師器の皿の内面に墨で描かれた動物は特に注目されるものである。描かれた絵が「馬」とすれば、木製品の形代と同時に祭祀に使用された可能性が高く、溝の周辺で水に関連する祭祀が行われたのであろう。

(石尾政信)

注1 奈良康正「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成10年度発掘調査概要 1. 沖田遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1999 京都府教育委員会) 1999

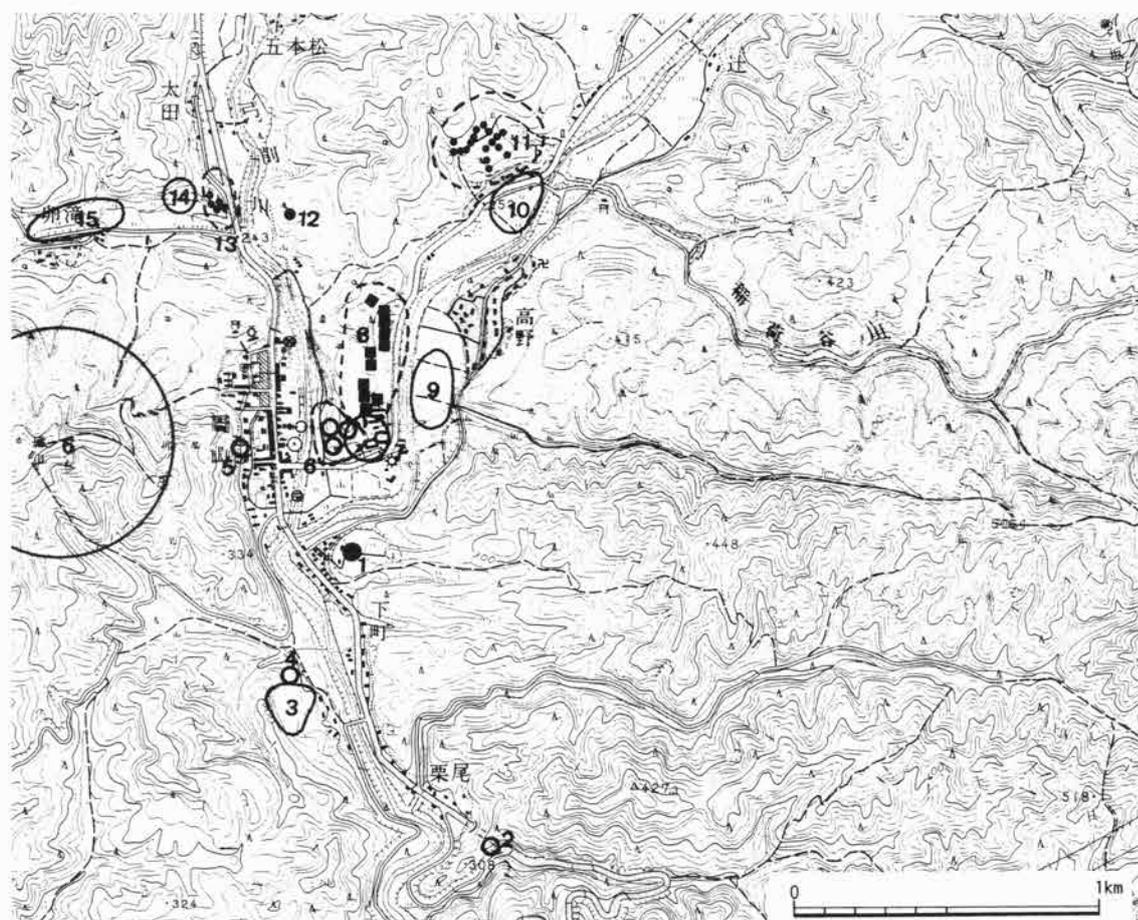
注2 作業に従事していただいた方々は、以下の通りである(順不同・敬称略)。

田上利治・田上三郎・田上貞朗・田崎喜一・井上光恵・上田ユリ子・中川明美・矢野 博・大江むつゑ・由利みき江・柿本文子・広野五美・松村正明・丸田久夫・楠田太助・上田みつる・上田さかえ・小笠原順子・山口奈美・藤村文美・森垣友子・谷口勝江・山本弥生・丸谷はま子・及川あや子
現地調査では、橋本勝行氏(大宮町教育委員会)・長谷川達氏(京都府立丹後郷土資料館)からご教示いただいた。また、縄文土器については当調査研究センターの中川和哉・柴 暁彦の協力があつた。

2. 東山遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

東山遺跡は、京都府北桑田郡京北町大字周山に所在する縄文時代から中世にわたる複合遺跡である。今回の発掘調査は、国道162号周山バイパス建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが実施した。東山遺跡は遺物散布地として周知されていたが、その遺跡の性格・規模などは不明であった。道路建設に先立ち、平成11年7月22日から同年9月17日の間、約5,000㎡の開発対象地に対して500㎡の試掘調査を行った^(注1)。その結果、古墳時代の竪穴式住居跡や土坑などの遺構、石器・須恵器・土師器・瓦器などの遺物が出土すると同時に、調査対象地区の旧地形もあきらかとなった。この試掘調査を受けて本格的な調査の必要性が認識されるにいたり、関係諸機関との調整のうえ、本格的な発掘調査の運びとなった。調査区は試掘時の遺構



第20図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

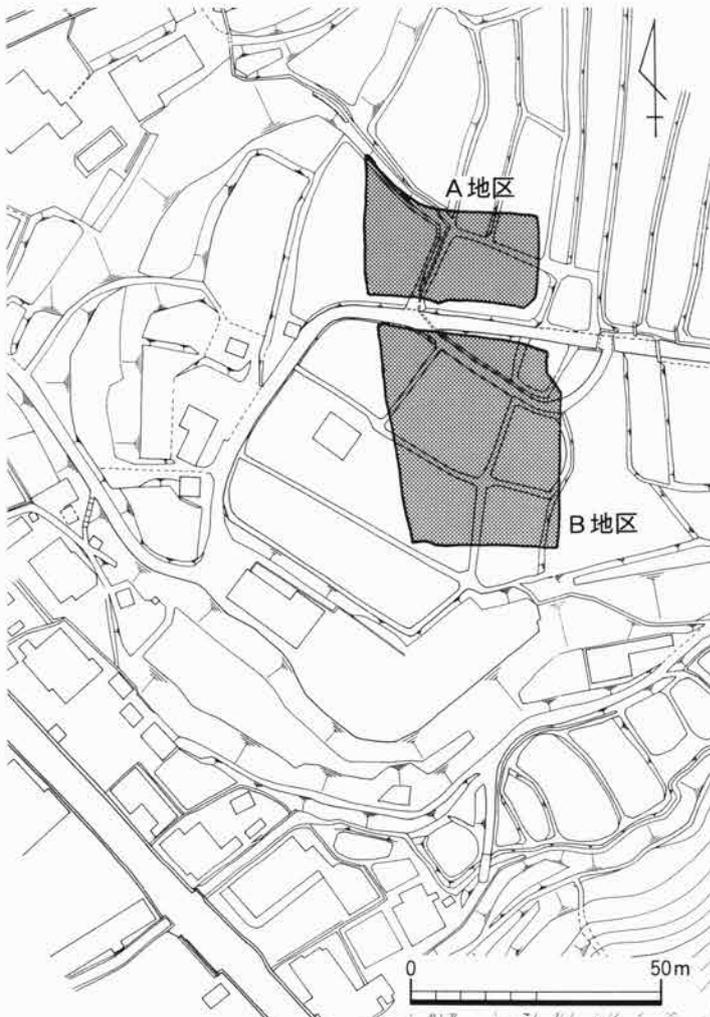
- | | | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|
| 1. 東山遺跡 | 2. 小栗尾経塚 | 3. 周山窯跡群 | 4. 周山経塚 | 5. 慈眼寺経塚 | 6. 高梨経塚群 |
| 7. 周山廃寺跡 | 8. 周山古墳群 | 9. 祇園谷遺跡 | 10. 殿橋遺跡 | 11. 折谷古墳群 | 12. 古墳 |
| 13. 大年古墳群 | 14. 窯跡 | 15. 卯滝谷遺跡 | | | |

分布状態を考慮して、本来の遺構面が残存している可能性の高い部分に2,000㎡を設定した。現地発掘調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正、調査第2課調査第2係調査員中川和哉が担当し、平成12年6月1日から11月16日まで実施した。本調査概報は中川が取りまとめ、文章末尾に執筆者を明記した。なお遺物の撮影は、当調査研究センター調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影した。

現地調査・整理事業にあたっては、作業に携わった地元の方々、ならびに調査補助員・整理員の方々、京北町教育委員会をはじめとする諸機関の方々に多大な援助と協力をいただいた。記してお礼申し上げたい。なお、発掘調査にかかわる費用は、全額京都府土木建築部が負担した。

1. 位置と環境

東山遺跡のある京北町は、京都府の中央部の丹波高地に位置し、北は美山町、東および南は京都市、西は日吉町・八木町に接する。町内の多くは山林で、現在の居住区は周山を除くと、主に桂川やその支流によって開析された小盆地にあり、大きくは山国地区を中心とする開けた部分と、弓削地区を中心とする部分に分かれる。東山遺跡は桂川とその支流である弓削川の合流地点である



第21図 調査区および周辺地形図

周山地区にある。周山地区は、現在の国道162号線が貫く。この道は若狭街道と呼ばれ、京都から日本海側へぬける幹道として現在も利用されている。遺跡は標高約257mの丘陵上に位置している。この丘陵は、形成時期の特定はできないが、段丘と考えられる。

京北町のある北桑田郡の由来は、明治12(1879)年に桑田郡が南北2郡に分けられたことによる。桑田の名は、『日本書紀』垂仁天皇87年条に「丹波桑田村」とあり、郡名は『日本書紀』継体天皇即位前紀に「丹波国桑田郡」と記載されている。京北町は昭和30年に周山と細野・宇津・黒田・山国・弓削の1町5村が合併して設置された。遺跡のある周山は、中世以前には縄野村の一部であったが、天正7(1579)年頃に明智光秀によって周の武王の故事により、周山

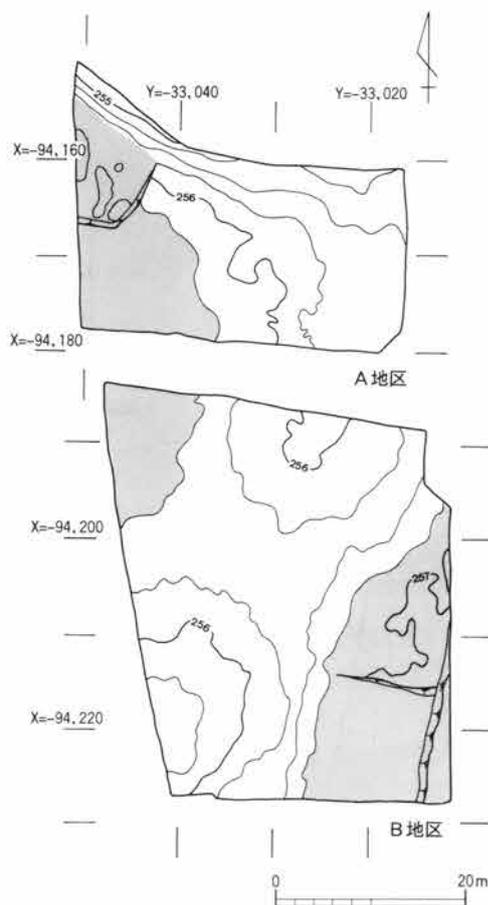
城と名付けた城を築いたことにちなむとされる。^(注3)

京北町の歴史は周山瓦窯で発見された後期旧石器時代とされるチャート製の石器を用いた時代から始まる。縄文時代の遺跡は石鏃などが散発的に発見されているらしいが、はっきりとしない。弥生時代には弓削川右岸にある上中遺跡^(注5)で、弥生時代前期・後期の土器・石器が出土している。また、左岸の丘陵上から下弓削銅鐸(扁平紐式四区袈裟襷文銅鐸)^(注6)が出土したとされている。山国地区の塔遺跡^(注7)からは弥生時代中期前葉の土器が出土している。

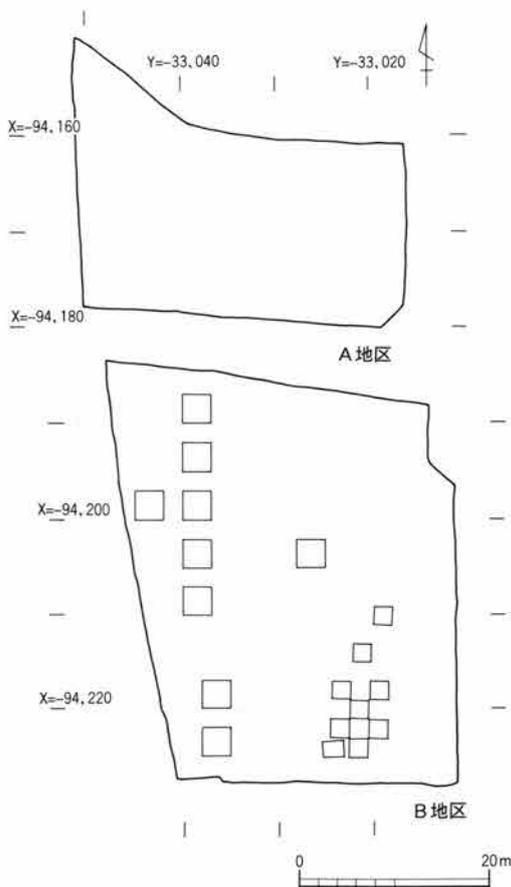
古墳時代に入ると、町内では約180基の古墳が確認できる。多くは古墳時代後期と考えられる群集墳であるが、現在まで前期古墳は知られていない。中期の古墳には山国地区にある愛宕山古墳^(注8)、東山遺跡対岸の丘陵上の周山古墳群^(注9)がある。愛宕山古墳は昭和57年に京北町教育委員会によって発掘調査が実施され、1辺20m前後の方墳で、埋葬主体部は割竹形木棺を直葬したものであることが分かった。副葬品には鏡3面・玉類・鉄器があった。周山古墳群の内

1号墳は昭和49年に墳丘の調査が行われ、埴輪・葺石を伴う1辺約16mの方墳であることがわかった。後期の群集墳のうちで、発掘調査が実施されたものは山国地区ではのほりお古墳^(注10)、弓削地区では鳥谷古墳群^(注11)がある。のほりお古墳は京北町教育委員会によって、平成4年に調査された円墳で、埋葬主体部は南南東に開口する無袖の横穴式石室であった。築造時期は、出土土器から6世紀末から7世紀初頭と考えられている。鳥谷古墳は平成9年、当調査研究センターによって3・4号墳が調査された。3号墳は墳裾のみの調査で外護列石が検出されている。4号墳は直径約13mの円墳で、埋葬主体部は南東に開口する無袖の横穴式石室であった。築造時期は出土器から7世紀前半と考えられている。須恵器には三足壺が含まれている。

白鳳期および奈良時代の遺跡としては、周山廃寺跡^(注12)・周山瓦窯跡^(注13)がある。周山廃寺は桂川を挟み東山遺跡の北に近接した現在の周山中学校がある台地上に展開する。石田茂作によって調査され、堂跡4・塔跡1・門跡1が検出された白鳳期創建の仏教寺院であることがわかった。瓦の型式は川原寺式のものとなされ、出土遺物から奈良時代に改修を受け、平安時代まで存続したとされる。昭和55・56年度にわたって周山廃寺所用瓦を供給したとされる窯跡が調査された。昭和56年度の調査では、煙出しを焼成部の側方に設けたものを含む4基の瓦陶兼業の登り窯が検出された。同時期の遺構は、東山遺跡近くの周山廃寺の川向かいに位置する祇園谷遺跡^(注14)で検出されている。



第22図 調査区黄褐色土上面コンタ図
スクリーントーン部分は削平を受けている部分



第23図 下層遺構確認用サブトレッチ配置図

3棟の掘立柱建物跡が検出され、寺院とその造営に伴う遺跡と、集落が調査されている例は珍しい。文献資料によると、律令期には延暦3(784)年の長岡京遷都、延暦13年の平安京遷都の際には、山国郷・弓削郷は材木の産地として重用された。木材の運搬には桂川の筏流しが用いられていたと想定される。

中世のものとして東山遺跡周辺の丘陵では、高梨経塚群・慈眼寺経塚群・周山経塚等の遺構が認められる。また、中世の周山地区は中世吉富庄に含まれる。戦国期には、明智光秀によって遺跡北西の黒尾山東峰上に周山城が築城されたが、光秀の死によって完成をみななかったと伝えられる。山上には石垣が現存している。その後、慶長7(1602)年には幕府領になり、寛文4(1664)年以降は丹波篠山藩の領地となった。以後、今日まで、交通の要衝と林業の中心地として栄えてきた。

2. 調査概要

平成11年に試掘調査を5か所おこない、遺構密度と削平部分を考慮して今回の調査区を設定した。現有の町道は農作業や周辺住民の墓地への参道となっているため調査から除外し、調査区を町道をはさんで2分し、北側をA地区、南をB地区とした。

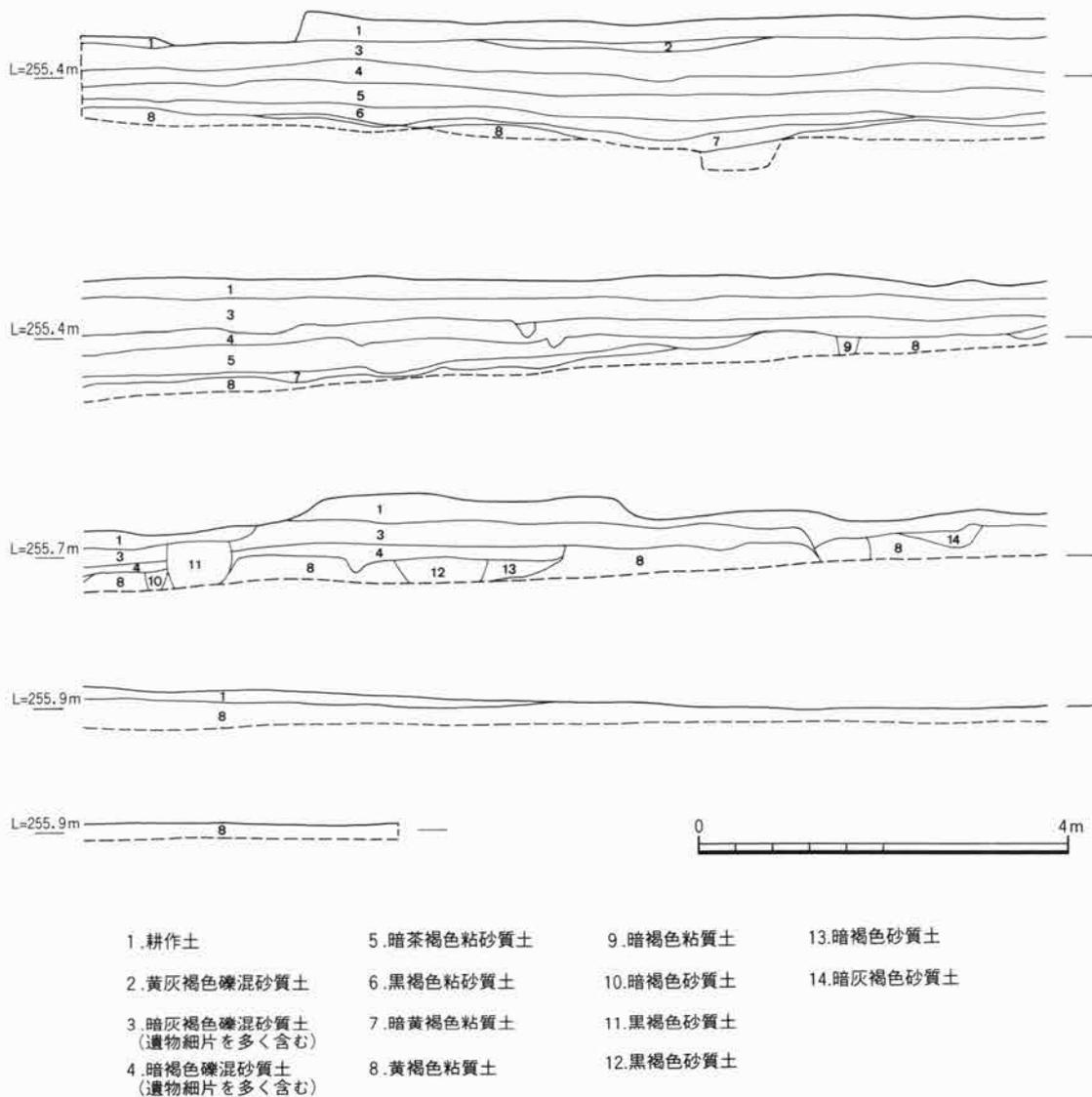
東山遺跡の地形は、第21図で見られるように、北と南が鋭く落ちる丘陵の先端部にかけての平坦面であるが、試掘調査によって近世以降の開墾によって現在の平坦面が形成されたことがわかった。A地区での断面観察と暗渠排水の関係から2回以上の耕作地造成がおこなわれていることがわかる。以前の土地所有者への聞き取り調査によると、戦前から現在の耕作面であり、開墾をした記憶はないとのことである。

遺構の検出面となった黄褐色粘質土の上面の等高線図(第22図)によると、調査区内で丘陵の鞍部が検出されており、標高の高い部分は開墾のため削平されている。鞍部はB地区中央部を頂部として南北に谷状に伸びる。

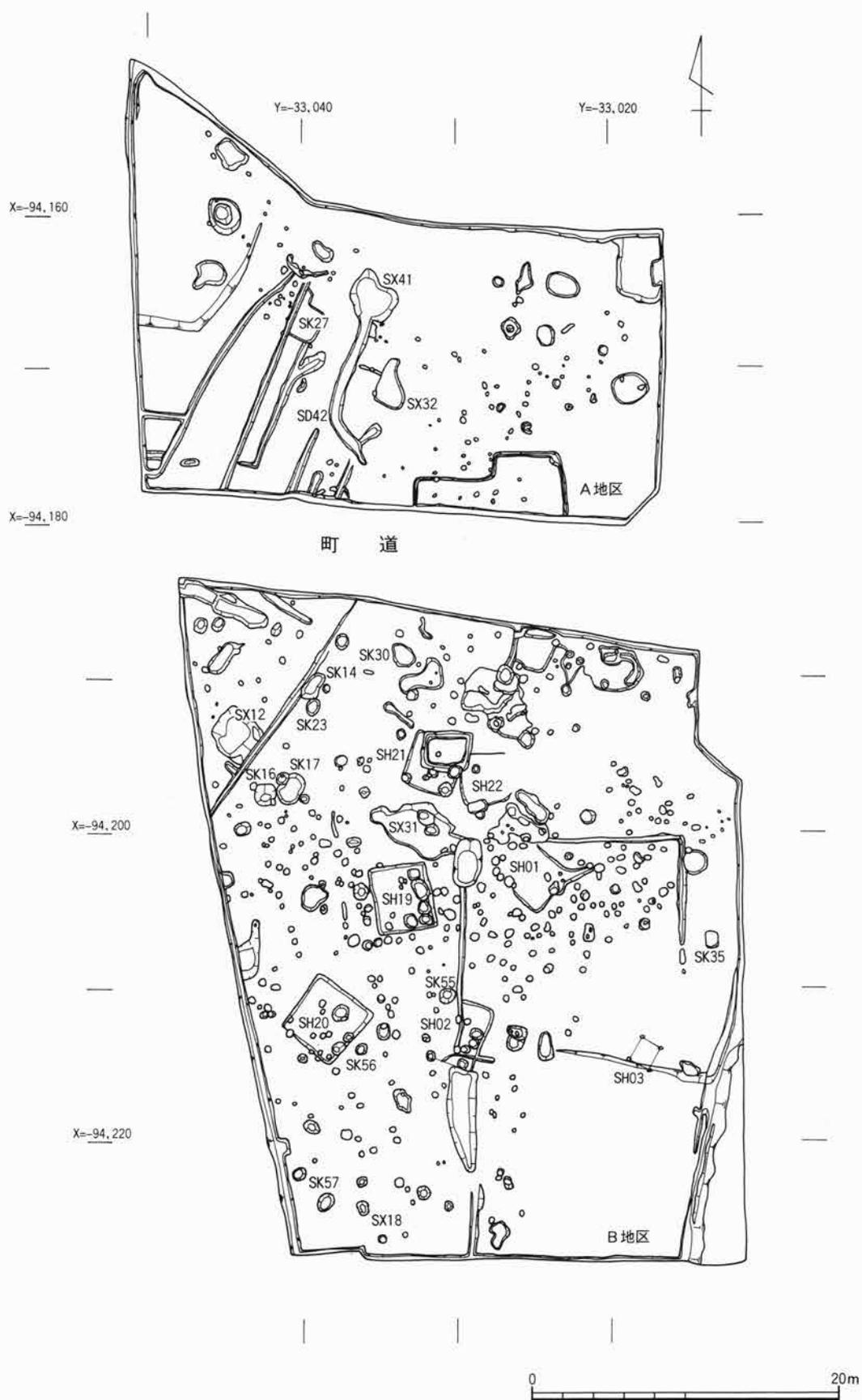
昨年度の試掘調査では、チャート製の石器が多数出土しており、中には旧石器時代と考えることも可能な形態を示すものも含まれていた。昨年度にも下層確認用のテスト調査区を設けたが、今年度もまた土層の条件の良い部分を選んで、3m×3mの調査区を設け(第23図)下層遺構の確認に努めたが、文化層などの兆候はまったくなかった。

3. 基本層序(第24図)

調査区内の土層は丹波地域で一般的に見られるような特徴を持っていた。第5図はB地区西壁の断面図で、調査区内の土層を代表している。遺構を検出するため、掘削は黄褐色土上面までおよんだ。鞍部の残存する地層が分厚い部分では、上層から1層：現在の耕作土層、2層：黄灰褐色礫混砂質土、3層：暗灰褐色礫混砂質土、4層：暗褐色礫混砂質土、5層：暗茶褐色粘砂質土、6層：黒褐色粘砂質土、7層：暗黄褐色粘質土、8層：黄褐色粘質土に分層できる。2・3層には遺物碎片が多く含まれている。とくに2層は移動された人工的な土層であることが観察から分かる。土器の年代から中世以降のものと考えられる。いわゆる黒ボク層と呼ばれるものは、4～6層であるが、4層を除く人もいるであろう。5・6層は遺物の含む割合が上層よりも少なくなるが、本来含まれていない粒径の、こぶし大以上の河原礫が出土する。また、SX18のように、



第24図 東山遺跡B地区西壁断面図



第25図 東山遺跡遺構実測図

この層から焼土面が検出されている。このことは黒ボク層中に肉眼では検出困難な遺構の存在を示しているものと考えられる。昨年度の、火山灰分析の土層と対比すると、5層中にアカホヤ火山灰が含まれていると考えられる。アカホヤ火山灰は、縄文時代に降灰したことから少なくとも5層上面に本来の遺構検出面があるものと想定できる。7層は炭化物に富む6層と黄褐色粘質土との漸移層で、上下の境界面ははっきりとしない。8層の黄褐色粘質土の上部から始良Tn火山灰が検出されているので、8層は後期旧石器時代以前の堆積物であることがわかる。8層より下層は漸移的ではあるが白色シルト層に移行し、掘り進むとクサレ礫層に変わる。段丘礫層の可能性が指摘できる。

4. 検出遺構(第25図)

(1)古墳時代

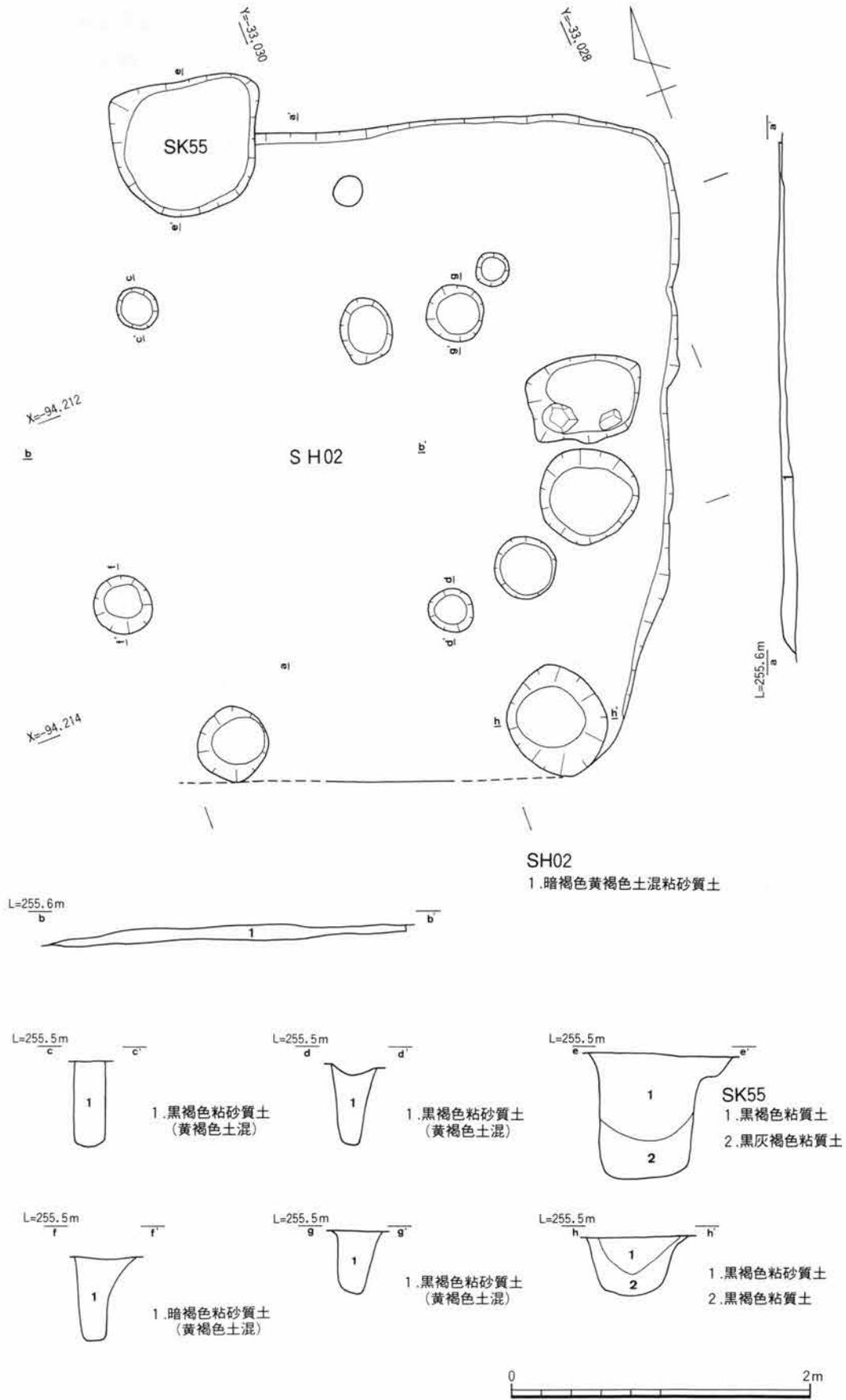
古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡7基が昨年度の試掘調査とあわせて検出されている。SH01とSH03は試掘調査時に遺構の全容が判明しているため今回は遺構の説明を省く。SH03は試掘時の概報ではSB03としていたが、柱穴の規模から竪穴式住居跡の残欠とした。

竪穴式住居跡SH02(第26図) 方形の竪穴式住居跡で、西辺の立ち上がりと周壁溝は検出できなかった。西辺の立ち上がりは、黒ボク層中にあったものと想定できる。屋根を支えたと考えられる支柱穴は4か所で検出できた。住居跡東部分の支柱穴と周壁の距離を参考に規模を復原すると、東西約4.7m・南北約4.5mになる。検出面からの深さは残りの良い部分で約10cmを測る。竈跡は検出できなかった。周辺部に土坑があり、特に右辺の土坑には人頭大の河原礫が含まれるものもあった。出土遺物から古墳時代中期のものと考えられる。

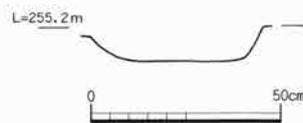
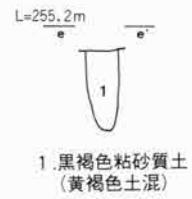
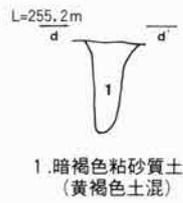
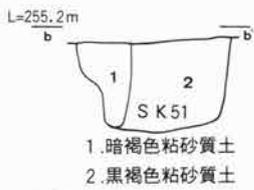
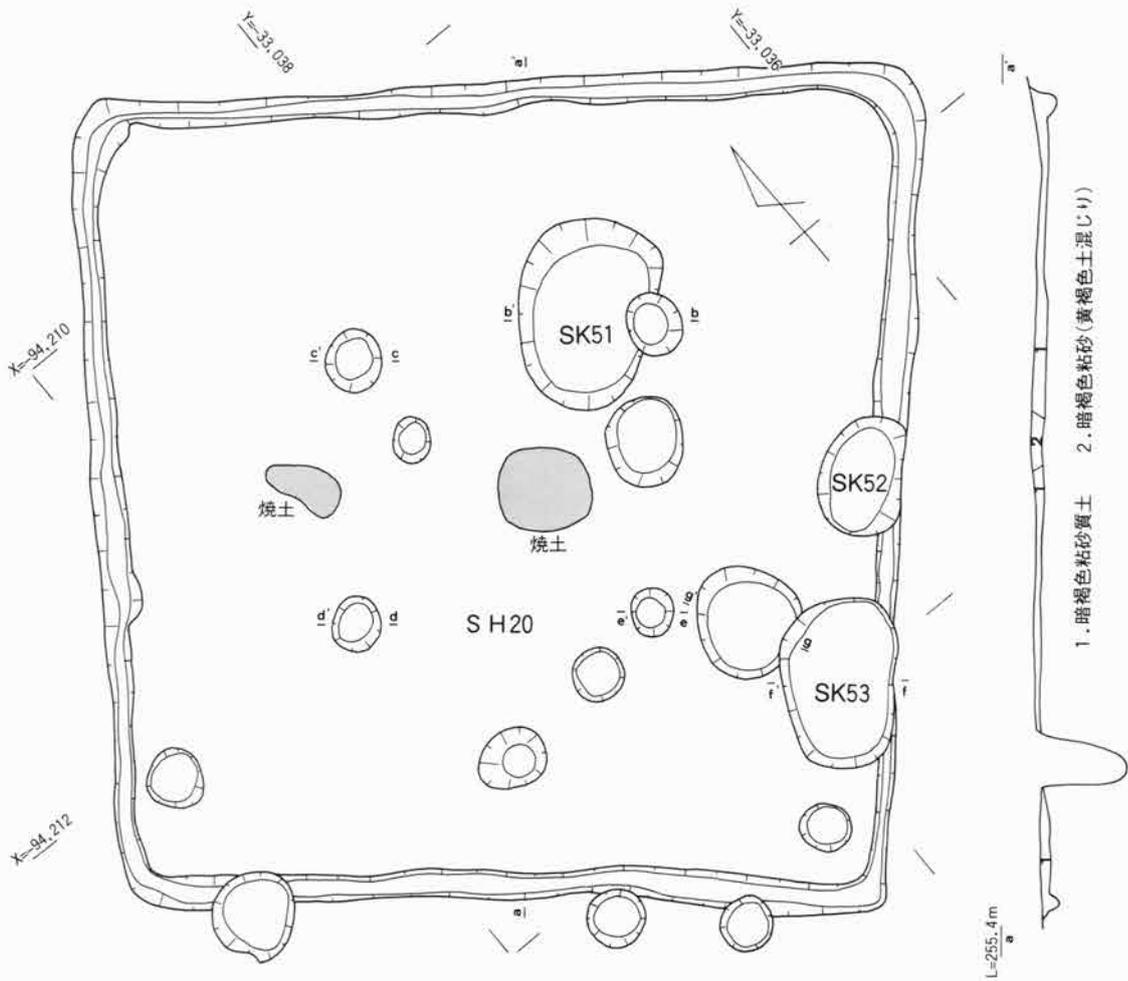
竪穴式住居跡SH20(第27図) 方形の竪穴式住居跡で周囲に約20cmの周壁溝を持つ。一辺は約4.3~4.5mを測る。竈跡は検出できなかったが、床面で焼土面を2か所検出することができた。屋根を支えたと考えられる支柱穴は4か所で検出できた。南西辺中央部の土坑SK52から口縁部を下にした状態で布留式甕1個体が出土している。

竪穴式住居跡SH21(第28図) 方形の竪穴式住居跡で、周壁溝は認められなかった。一辺は約3.1~3.3mを測る。竈跡は検出できなかった。屋根を支えたと考えられる支柱穴は2か所で検出できた。住居の北側の多くが昨年度の試掘調査の2トレンチによって削平されていた。昨年度の2トレンチは小型であったため、住居跡の中を掘削しており、遺構との認識ができなかった。昨年度に断面で検出した土坑SK44は、今回の調査によって竪穴式住居跡に伴うものであることがわかった。土坑SK45からは、昨年度に土師器高杯が出土しており、今年度は須恵器杯身が検出できた。竪穴の南西隅からも土坑が検出できた。出土遺物から古墳時代中期と考えられる。2トレンチでは滑石製の孔円盤が1点出土しており、これもまたこの住居跡から出土した可能性が高い。

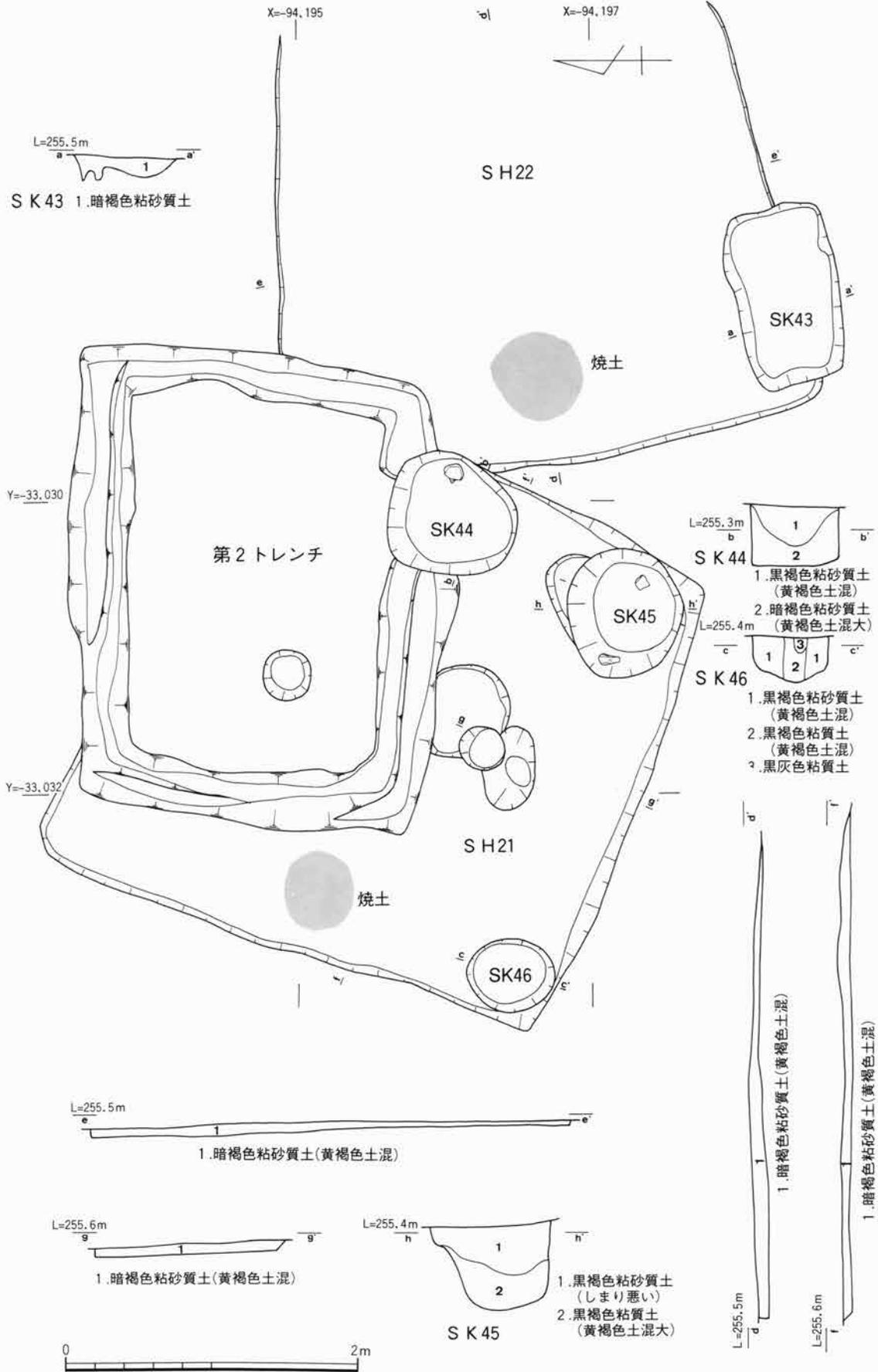
竪穴式住居跡SH22(第28図) 方形の竪穴式住居跡で周囲に周壁溝は認められない。規模の分かる西辺は3.6mを測る。竈跡・支柱穴は検出できなかった。出土遺物がなかったため時期は確定できないが、SH21に先行することが切り合い関係から分かる。



第26図 SH02実測図



第27図 SH20実測図



第28図 S H21・22実測図

焼土S X 18 黒ボク層中で検出した焼土面で地面が広範囲に硬化していた。遺物として土師器片等を含む。明らかに面をなす検出状況から、黒ボク層中に遺構面があるものと考えられる。

(2) 飛鳥時代

竪穴式住居跡S H19(第29図) 方形の竪穴式住居跡で周囲に周壁溝は認められない。本調査区で検出した中では残存状況が最もよく、東西約3.7m・南北約4.2m、検出面からの深さ約20cmを測る。北辺中央部に竈跡と考えられる焼土があり、竈の壁の骨材として用いられたと考えられる礫が2点検出できた。竈の構造は破損が激しく不明であるが、内部は床面より掘り窪められていた。床面は中央部がやや高く、硬化していた。遺物は少ないが飛鳥時代のものと考えられる。

(3) 奈良・平安時代

土坑のほか明確な遺構は検出できなかったが、B地区を中心に方形掘形を持つ柱穴を含む多くの掘形が検出できた。竪穴式住居跡との関係から、多くのものが古墳時代以後のものと考えられる。遺構精査時に当該期の須恵器・土師器が出土していることから、奈良・平安時代に属するものも多く存在しているものと考えられるが、建物としてまとまるものはなく、遺物も小片であるため、個々の柱穴の時期は不確定である。

土坑S K 16(第30図) 平面形が隅丸方形を呈する皿状の土坑で、南北約1.5m・東西約1.4m、検出面からの深さ約0.2mを測る。埋土上面からは、拳大の礫が多く検出できた。

土坑S K 17(第30図) 平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、長辺約2m・短辺約1.3m、検出面からの深さ約0.2mを測る。埋土上面では、拳大の礫が数点検出された。遺構の平面形と規模から土壙墓の可能性が指摘できる。出土遺物から奈良・平安時代と考えられるが、遺物はすべて破片である。

(4) 中世

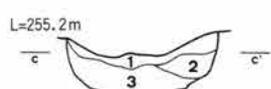
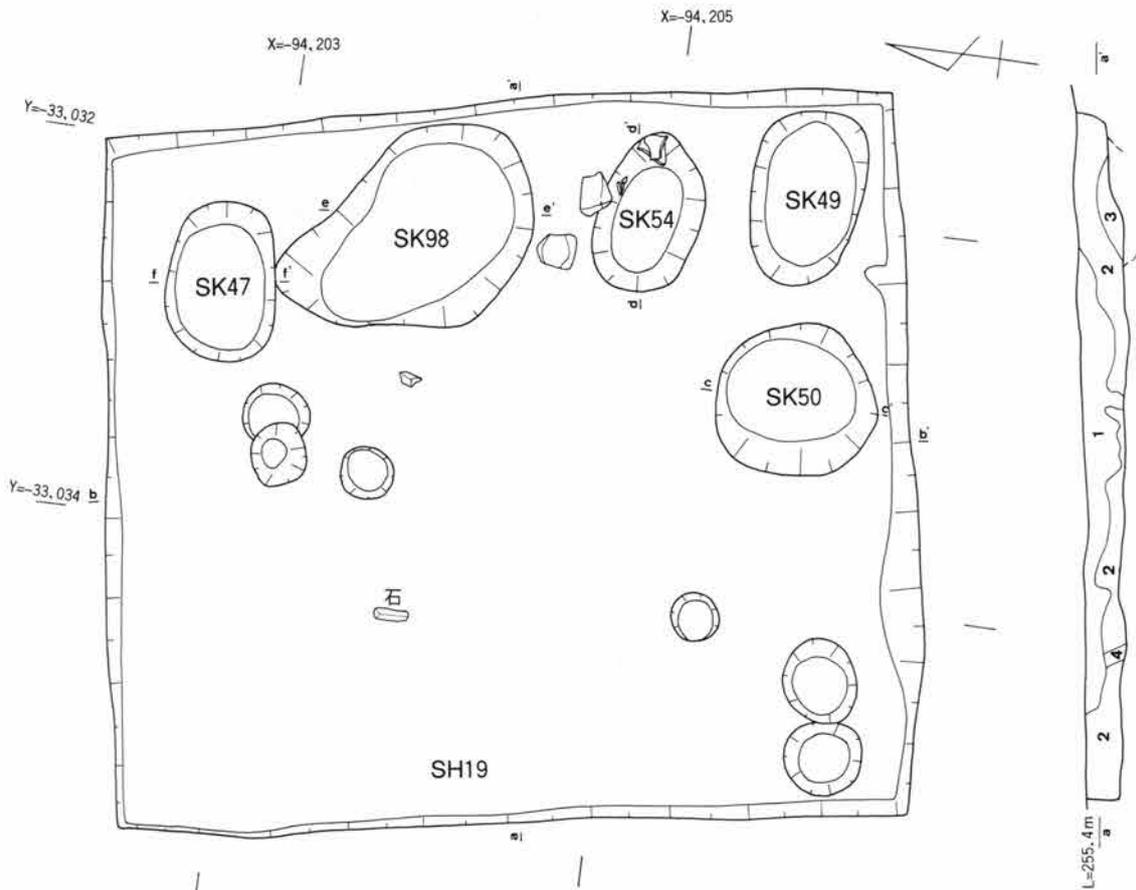
土坑S K 23(第30図) 平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、長辺約0.9m・短辺約0.8m、検出面からの深さ約0.2mを測る。土坑内からは瓦器碗・鉄刀が出土した。埋土中からは漆と考えられる皮膜が多数出土した。芯材となっていた有機質が朽ちたものと考えられる。規模から火葬墓の可能性も指摘できるが、骨片は検出できなかった。東山遺跡周辺に点在する経塚の可能性も指摘できる。

土坑S K 27(第31図) A地区で検出した方形を呈すると考えられる土坑で、北辺が段をなして張り出す。遺構の西側は暗渠排水で壊されていた。長辺約3.2m、短辺の現存長約1.8m、検出面からの深さ約0.1mを測る。出土遺物から鎌倉時代のものと考えられる。

土坑S K 35(第30図) 平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、長辺約1.1m・短辺約0.9m、検出面からの深さ約0.1mを測る。北西隅に底部を下にした状態で、瓦器碗・土師皿が出土した。

(5) 近・現代

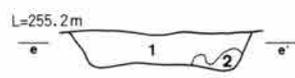
A地区西部、B地区北西部に見られる北東方向を向く溝群は、暗渠排水である。A地区北西部の段差は、開墾され田畑として利用されていたと想定されるが、後に埋められて平坦面になり、上段とつながり1つの耕作面をなしていた。



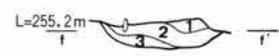
- SK50**
1. 黒褐色粘質土(しまり悪い)
 2. 暗褐色粘質土(黄褐色土混)
 3. 暗茶褐色粘質土(黄褐色土混)



- SK54**
1. 暗灰褐色粘砂質土(焼土混)
 2. 暗黄褐色粘砂質土
 3. 暗橙褐色粘砂質土
 4. 暗黄茶色粘砂質土



- SK48**
1. 暗褐色粘質土(黄褐色土混)
 2. 黄褐色粘質土(暗褐色土混)



- SK47**
1. 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
 2. 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混・焼土混)
 3. 暗黄褐色粘砂質土

1. 黒褐色粘砂質土(しまりない)
- 1'. やや黒味がきつい
2. 暗褐色粘砂質土(黄褐色ブロック状に含む)
3. 暗褐色粘砂質土(2に比べ黄褐色は少ない)
4. 黒褐色粘質土(黄褐色土混)
5. 黒褐色粘質土(黄褐色土混)
6. 黒褐色粘質土(黄褐色土多く含む)
7. 暗褐色粘砂質土



第29図 SH19実測図

(6) 時期不明遺構

構

検出した遺構の中には、SK55・56・57のように直径が60～80cm程度で、深さが1mを越す底部の平らな土坑がある。埋土はしまりの悪い黒色土で他の遺構と埋土を異にしている。経験的に言うと、古墳時代より古い埋土と似る。縄文時代のものである可能性も指摘できるが遺物が全くなく、帰属時期は不明である。

SK43 平面形が長方形を呈する土坑であるが、時期は不明である。出土遺物は全くないが、土壙墓の可能性が形状から指摘できる。

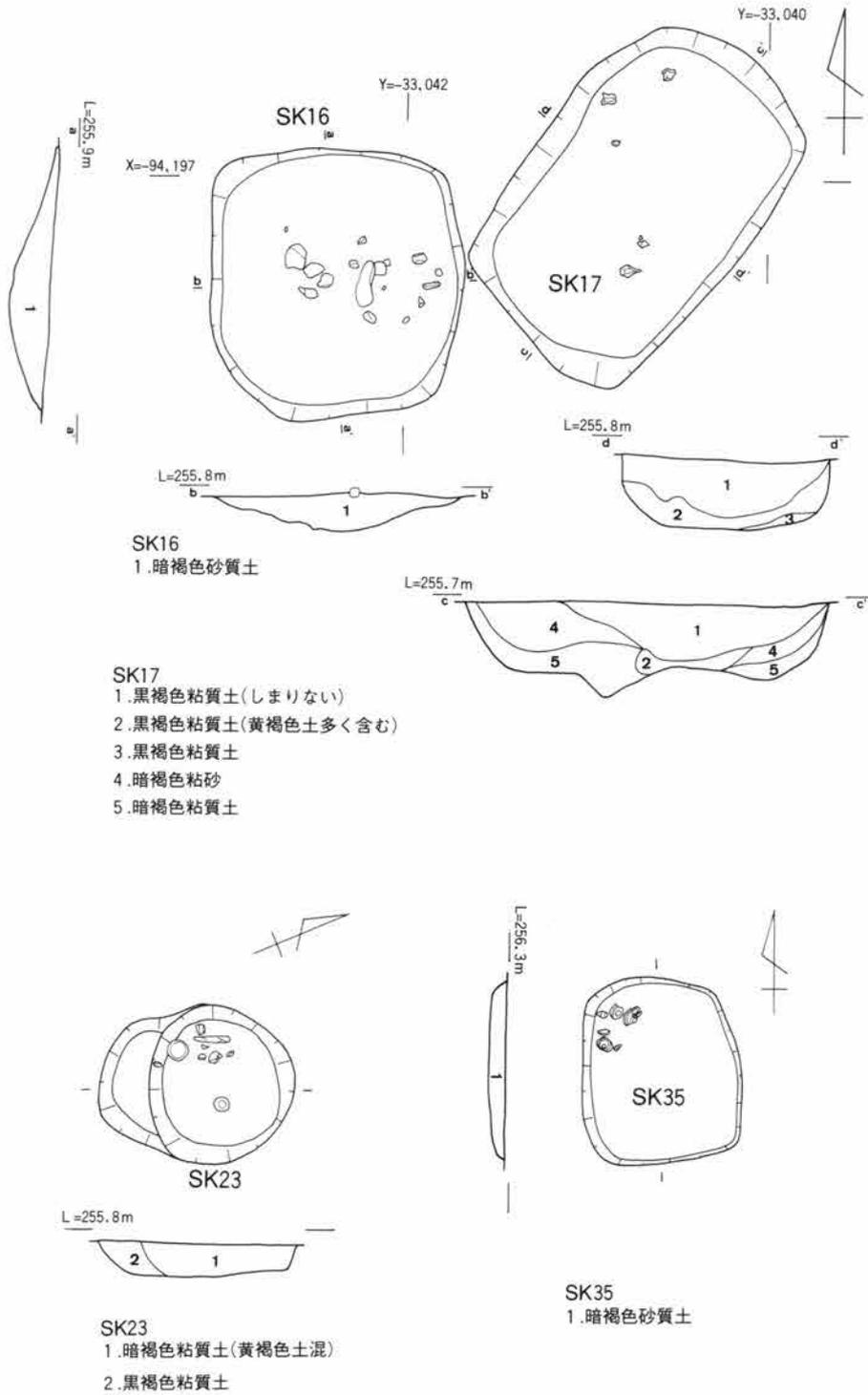
(7) 自然現象の

痕跡

風倒木痕 SX

12・31・41は黒色土が遺構検出面である黄褐色土を輪状に囲むように検出されたが、黒色土を掘り進むと黄褐色土の下に潜り込んでいく現象が見られ、層位が逆転している。このような土坑状の遺構は、^(注15) 亀岡市鹿谷遺跡など丹波の遺跡で見られる。

(中川和哉)

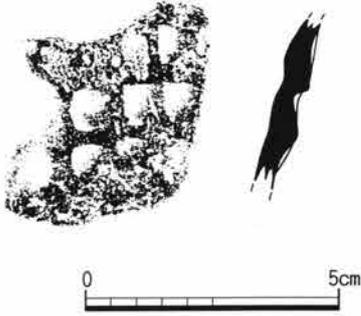


第30図 SK16・17・23・35実測図

5. 出土遺物

(1) 土器

① 縄文時代(第31図)



第31図 縄文土器実測図

土器1点だけがB地区包含層から出土している。外面は、暗灰色で押し引き文が施される。内面は暗褐色で指オサエの痕跡が残る。型式は確定できないが施文方法と器壁の厚さから、早期末から前期初頭の土器と考えられる。

(松田早映子)

② 古墳時代

竪穴式住居跡 S H01 1は試掘時に床面で検出した土坑内から出土した須恵器の臚である。5は焼土上面で出土した土師器の布留式甕である。調整は、外面をハケ後ナデ、内面をケズリによっており、頸部内面には指押サエが認められる。肩部外面にはヘラ描きの沈線が横方向に見られる。

竪穴式住居跡 S H02 床面で検出した土坑や埋土から、土師器甕の体部が出土した。内面の調整などから布留式甕の可能性が指摘できる。

竪穴式住居跡 S H20 2は床面出土の布留式土器の甕口縁部である。3は支柱穴1(b)出土の土師器高杯の脚部である。7は住居床面南西辺中央の土坑から出土した布留式甕で胴部まで完存する。調整は、体部外面はハケ、内面はケズリである。

竪穴式住居跡 S H21 6・13は昨年度の2トレンチ下層で検出した遺物で、住居内埋土出土と考えられる。6は土師器高杯の杯部で、そこには製作工程に伴うとされる小穴が器壁半ばまで見られる。13は土師質の甌の把手部である。牛角状を呈し、上面にはヘラによると考えられる刻みが把手の主軸方向に認められる。12は今回の調査で住居址埋土中から出土した土師質の甌の把手部である。13と同一個体と考えられる。9・11は住居東辺中央部に位置する土坑 S K44から出土した遺物で、9は昨年度出土した土師器高杯の杯部である。11は須恵器の杯蓋で形状から陶邑編年のTK208平行期と考えられる。4・8は住居跡南東隅の土坑 S K45から出土した遺物である。4は土坑の埋土の上半部から出土した土師器高杯の杯部である。8は下半部から出土した土師器高杯の脚部で、杯部以外は完形で出土した。10は須恵器甕の口縁部で、住居跡精査時の埋土部分から出土した。

焼土跡 S X18 26の土師器甕が出土している。他に別個体の土師器碎片がある。

③ 飛鳥時代(第32図)

竪穴式住居跡 S H19 14~20の遺物が出土している。17・20は竈内から出土した土師器である。14は住居床面土坑 S K49から出土した須恵器鍋の把手部分である。19は住居内土坑 S K47から出土した土師器甕である。他のものは埋土中の出土遺物で、15は土師器の高杯の杯部片であるが、他のものに比べて古いため混入と考えられる。16・18は須恵器の杯身である。

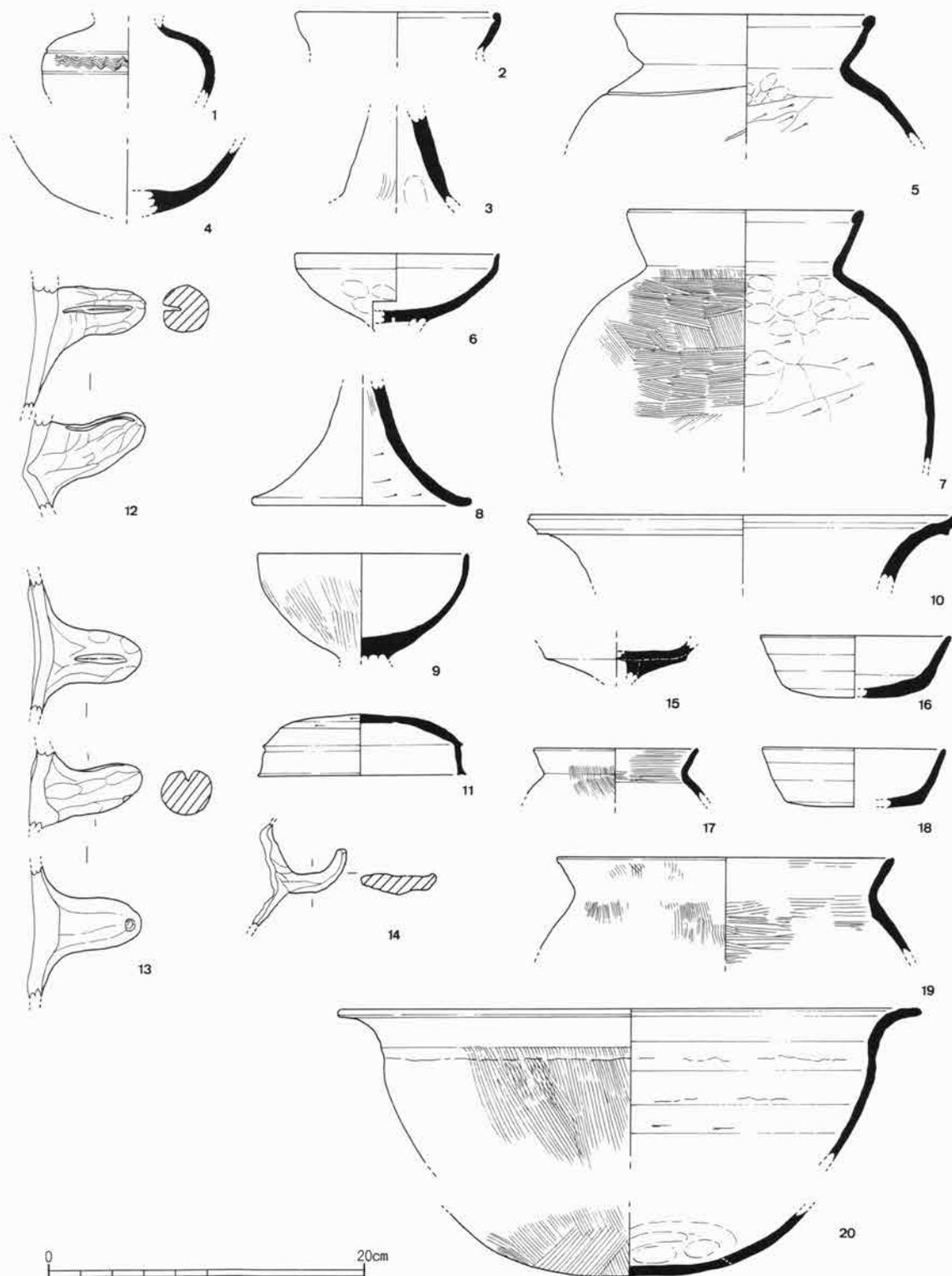
④ 奈良時代(第33図)

土坑 S K16 須恵器片が出土しているが、図化はできなかった。

土坑S K 17 21~23は須恵器杯Bである。25は須恵器の細頸壺である。

⑤中世(第33図)

土坑S K 23 32・33は瓦器碗である。内外面のミガキは器表面の状態が悪くはっきりとしなかった。この2個体以外にも別個体の瓦器碗が存在するが、図化できなかった。13世紀前半の年代



第32図 東山遺跡出土土器

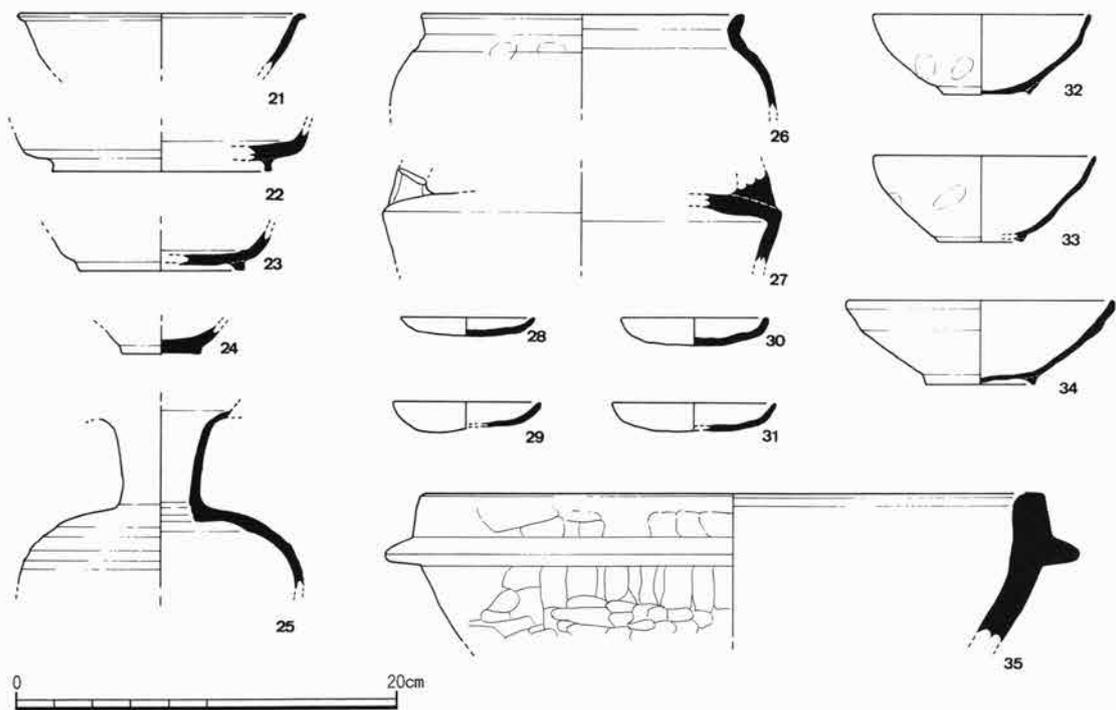
が与えられる。

土坑S K 27 24は糸切り底を持つ土師質の碗の底部である。27は須恵器の平瓶の肩部である。他に青磁碗片がある。須恵器は他の遺物に比べて古く、混入と考えられる。

土坑S K 35 28～31は手づくねの土師皿で、13世紀後半のものと考えられる。34は瓦器碗である。

⑥包含層(第34・35図)

36・37は土師質の土鍾である。38は昨年度の1トレンチ、今年度のB地区から出土した土師器の鉢である。40・41はいずれも須恵器の杯身である。7世紀の遺物は包含層においても少ない。40の受け部を持つ飛鳥時代の須恵器の杯身はこの1個体しか発見されていない。39・42は土師器の高杯である。43は須恵器の杯蓋で、稜線は鮮明で5世紀の須恵器の特徴を持つが、SH21のものに比べると口径が小さい。45は土師皿で、内面には暗文を持つ。46・47は須恵器の杯蓋で、47は輪状のつまみを持つ。48・49は須恵器の皿である。50～55は須恵器杯Bである。高台部の特徴から奈良時代のものと考えられる。44は黒色土器A類の碗の高台で、内面にはヘラミガキが顕著に認められる。56～60は手づくねの土師器の皿である。13世紀に製作されたものと考えられる。58は昨年3トレンチから出土し、本年度A地区南部にあたる。58以外のものはすべてB地区北部から出土している。61～70は瓦器碗である。土師皿と同じ時期に属しており、古い形態の瓦器碗は出土していない。71・73は鍋の口縁部である。72・74は須恵質の捏ね鉢である。76・77は須恵器の壺で、76はA地区の北部にあたる4トレンチで出土している。78は天目茶碗の底部である。79は青磁碗底部である。13世紀の遺物は現有の町道をはさみ、A地区南部とB地区北部に集中する傾向が見られた。80・81は土師質の鉢である。7世紀の遺物と考えられる。82は羽釜である。83は瓦質の鍋である。84は丸瓦で内面は布目、外面はナデで仕上げられる。85～88は平瓦で、い

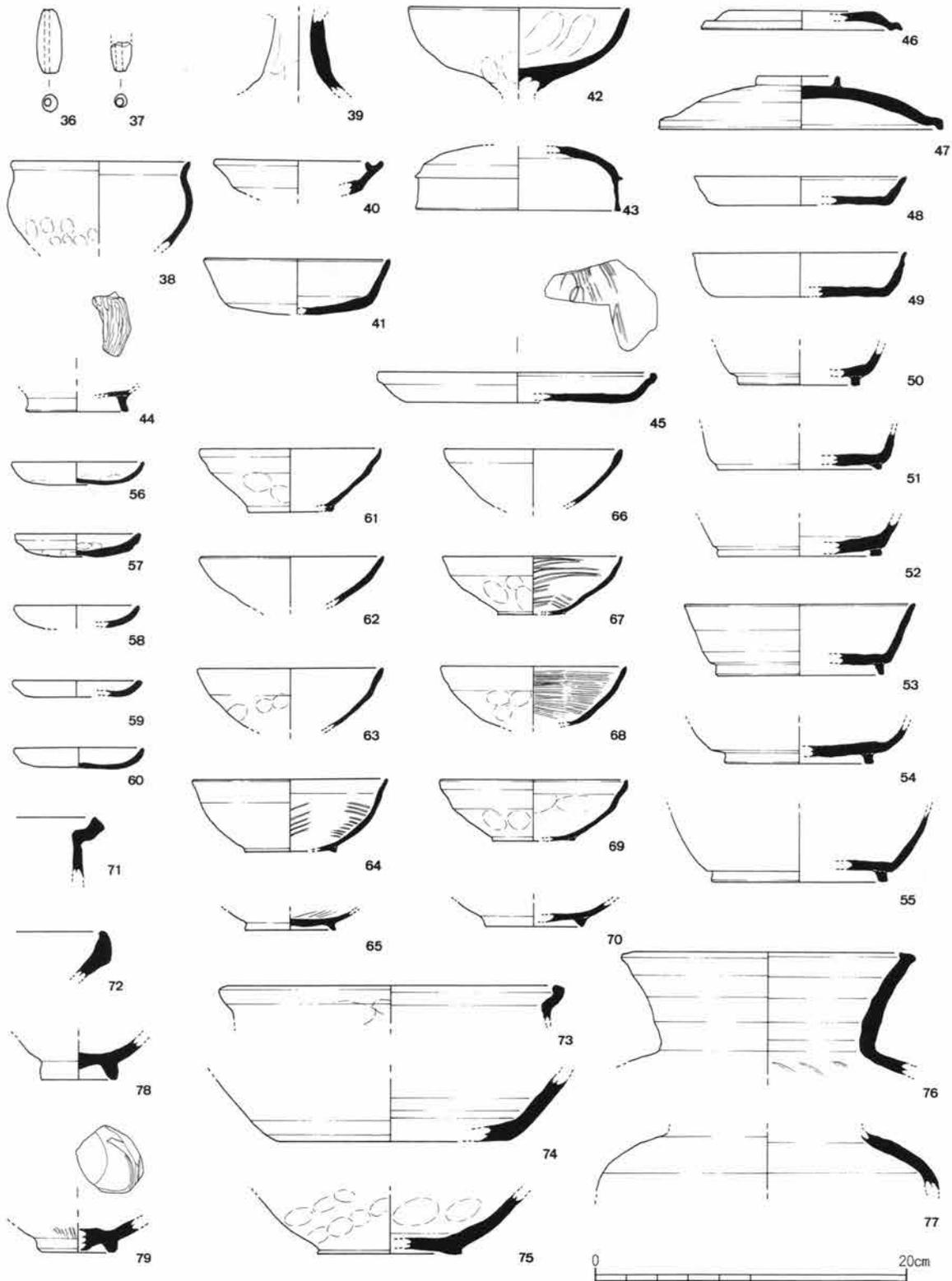


第33図 東山遺跡出土土器および石製品

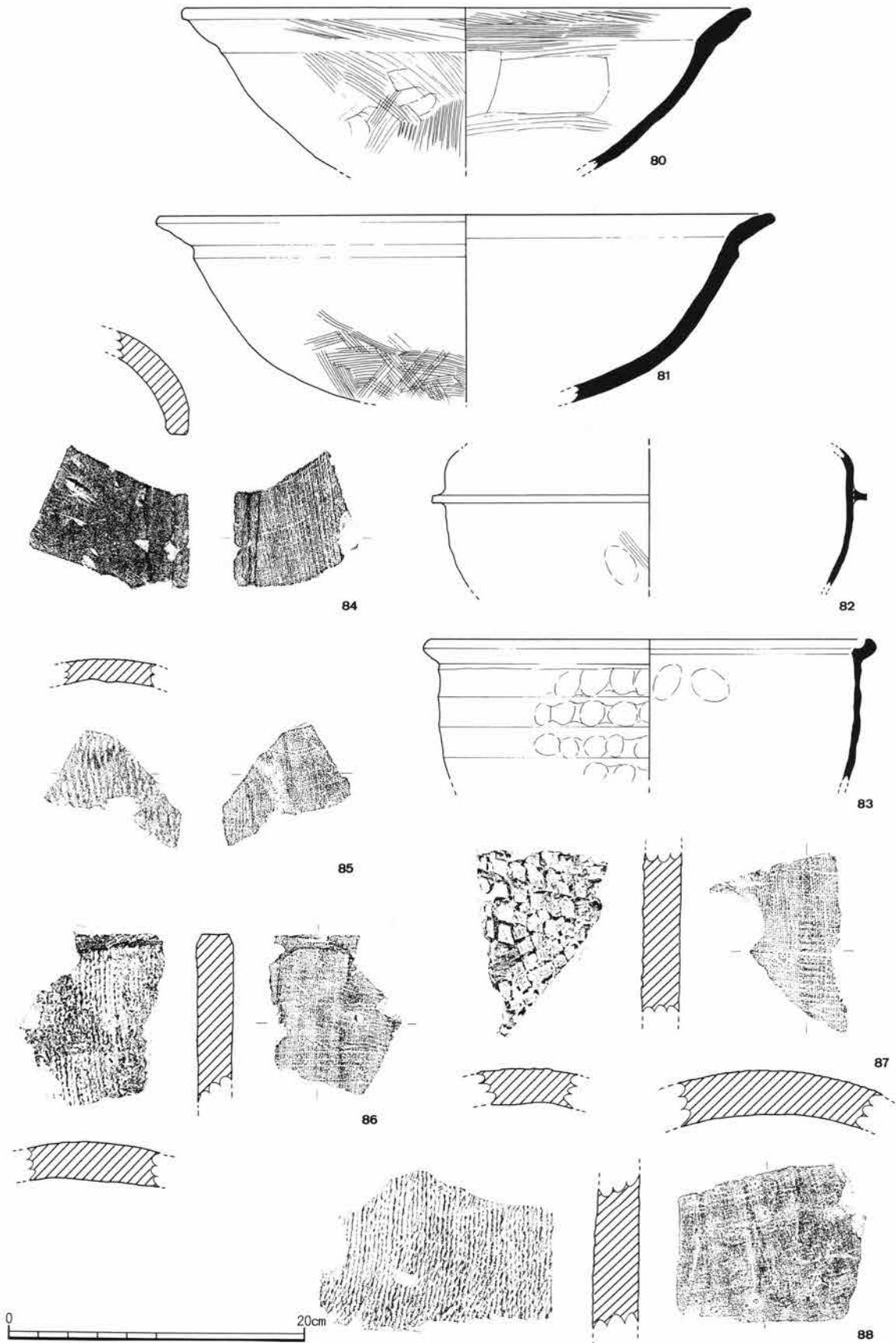
ずれも凹面は布目を持つが、凸面は87が格子目タタキであるほかは、縄タタキである。

(2) 金属器(第36図)

土坑S K 23 瓦器椀や漆皮膜とともに検出された鉄刀である。柄部分は発見できなかった。刀の長軸方向に沿った木目を見せる木質が表裏に認められる。



第34図 東山遺跡出土土器および土製品



第35図 東山遺跡出土土器および瓦

(3) 石製品

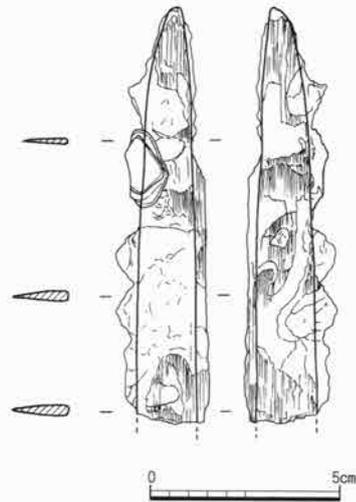
① 中世(第33図)

土坑SK23 35は滑石製石鍋である。外面には金属で付けられたとみられる加工痕が多く残るが、内面は平滑に仕上げられる。

(中川和哉)

② 包含層(第37~39図)

東山遺跡の第2次調査では、黒ボク~漸移層から合計41点の石器が出土している。出土層位の特定はできず、B地区を中心に調査区のほぼ全域で散漫な分布状況を見せた。定型的な器種は石鏃2点、石匙1点に限られるため、所属時期をある程度限定できる資料はきわめて少ない。残余の石器類は楔形石器・削器・2次調整ある剥片・剥片・石核などからなる。石材は安山岩を用いた1例(第38図20)を除き、すべてチャートを利用している。チャート礫は遺跡の北側を流れる桂川の河床面や、近傍の露頭で採集できる。出土したチャート製石器の自然面には、水磨したものが多く、桂川で採集された可能性が高い。



第36図 SK23出土鉄器

第37図1・2は凹基式石鏃。1は基部のえぐりが浅く、脚部の張りだしが非対称な形を見せる。2は基部のえぐりが深く、先端部は鈍く尖る。右面に素材面を広くとどめている。

同図3は横形石匙。押圧剥離で器体を整形しているが、両面に素材面を残す。おもに左面(ポジティブ面)に急斜度の2次調整を施し、やや鋸歯状の直刃を作りだしている。つまみ部は器軸からわずかなずれを見せ、端部に自然面をとどめる。

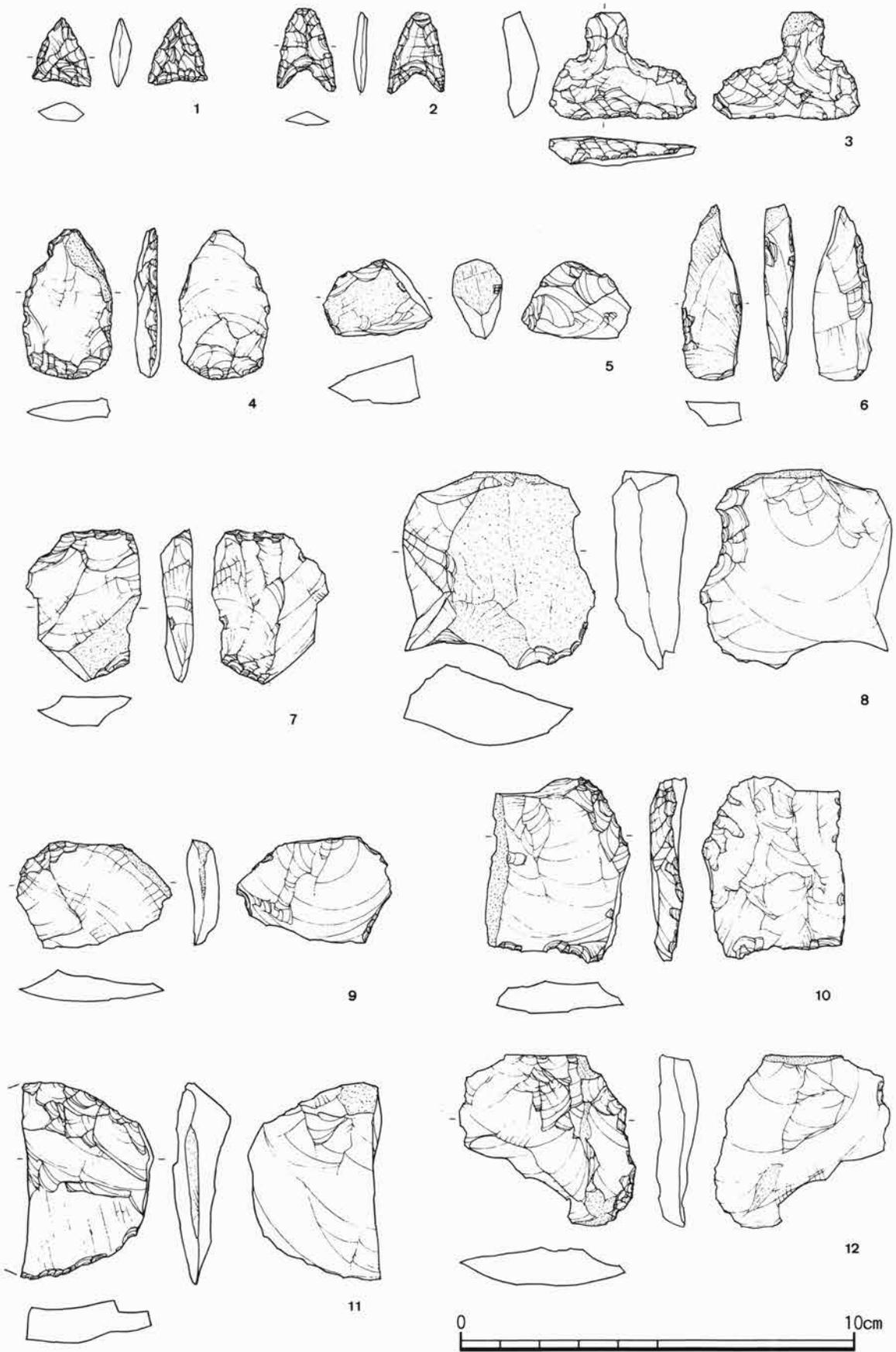
同図4は削器。幅広剥片を縦位に用い、背面右側縁に急斜度の2次調整を施し、厚手の凸刃を作りだしている。同面左側縁には剥離痕が並び、鋸歯状を呈している。腹面のポジティブ・バルブを打面側からの平坦剥離で除去し、背面側にも2次調整を施して打面をとり除いている。器面はやや摩滅している。

同図5・6は2次調整ある剥片。5は背面・側面に節理面をとどめ、腹面上端に2次調整を施している。2次調整の打点付近は潰れている。6は折れた剥片の1側縁に2次調整を施したもので、折れ面にも剥離痕が見られる。

同図7は楔形石器。素材剥片を縦位に用い、打面・末端部の両端に潰れ痕をとどめる。腹面には両極打撃の剥離痕が見られ、同面右半に素材剥片のポジティブ面を残す。背面側両端の剥離痕は小さく、素材面を広くとどめている。

同図8は削器。背面に平坦な自然面を残す剥片を用い、腹面左側縁に急斜度の2次調整で凹刃を作りだしている。背面末端部にも剥離痕が見られる。

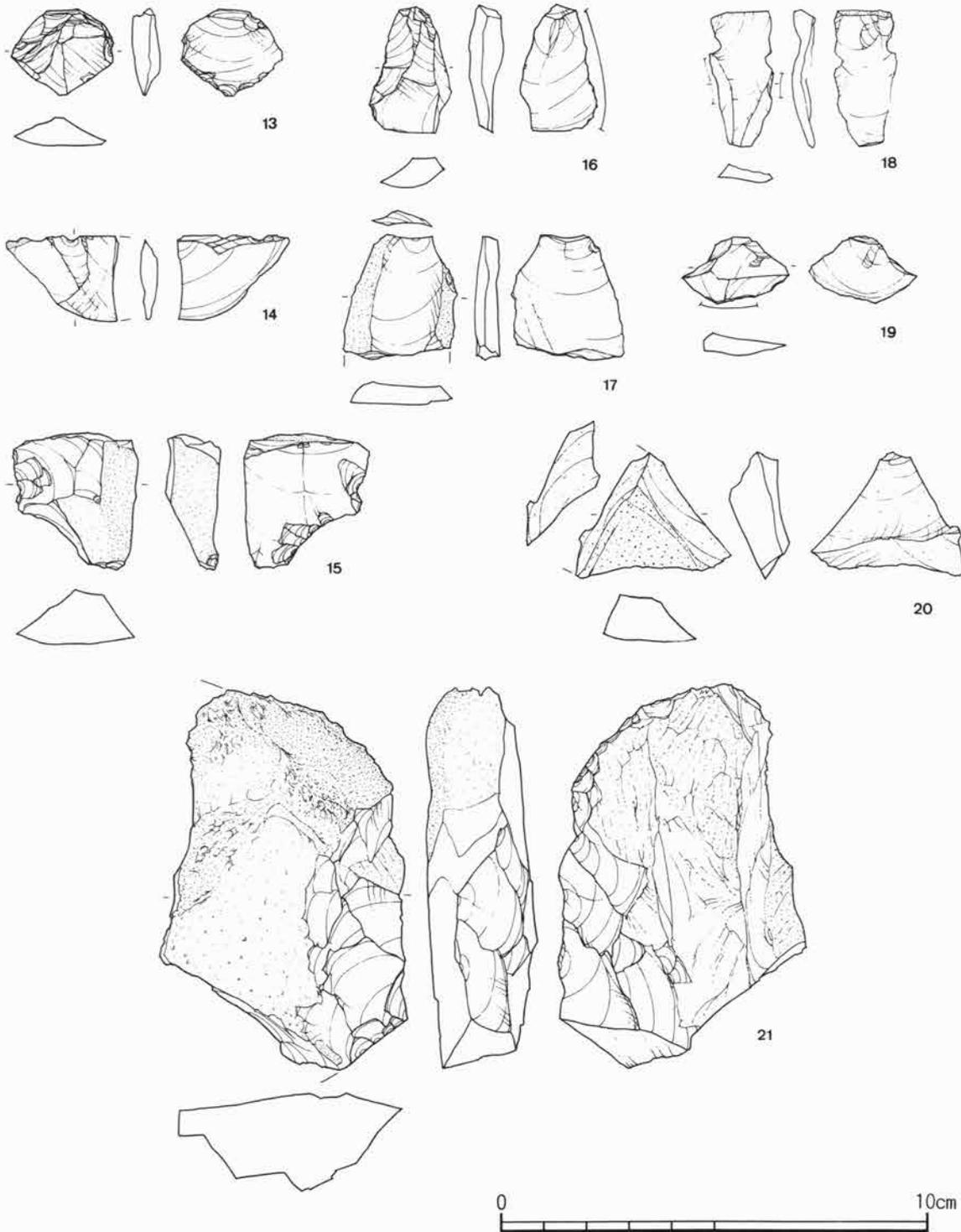
同図9~12は2次調整ある剥片。9は貝殻状の横長剥片を用い、腹面末端部に部分的な2次調整を施している。背面打面縁の剥離痕が2次調整かは明らかでない。10は幅広剥片の1側縁に加工を施したもので、背面右側縁の一部を急斜度の2次調整で鋸歯縁にしている。末端部にも2次調



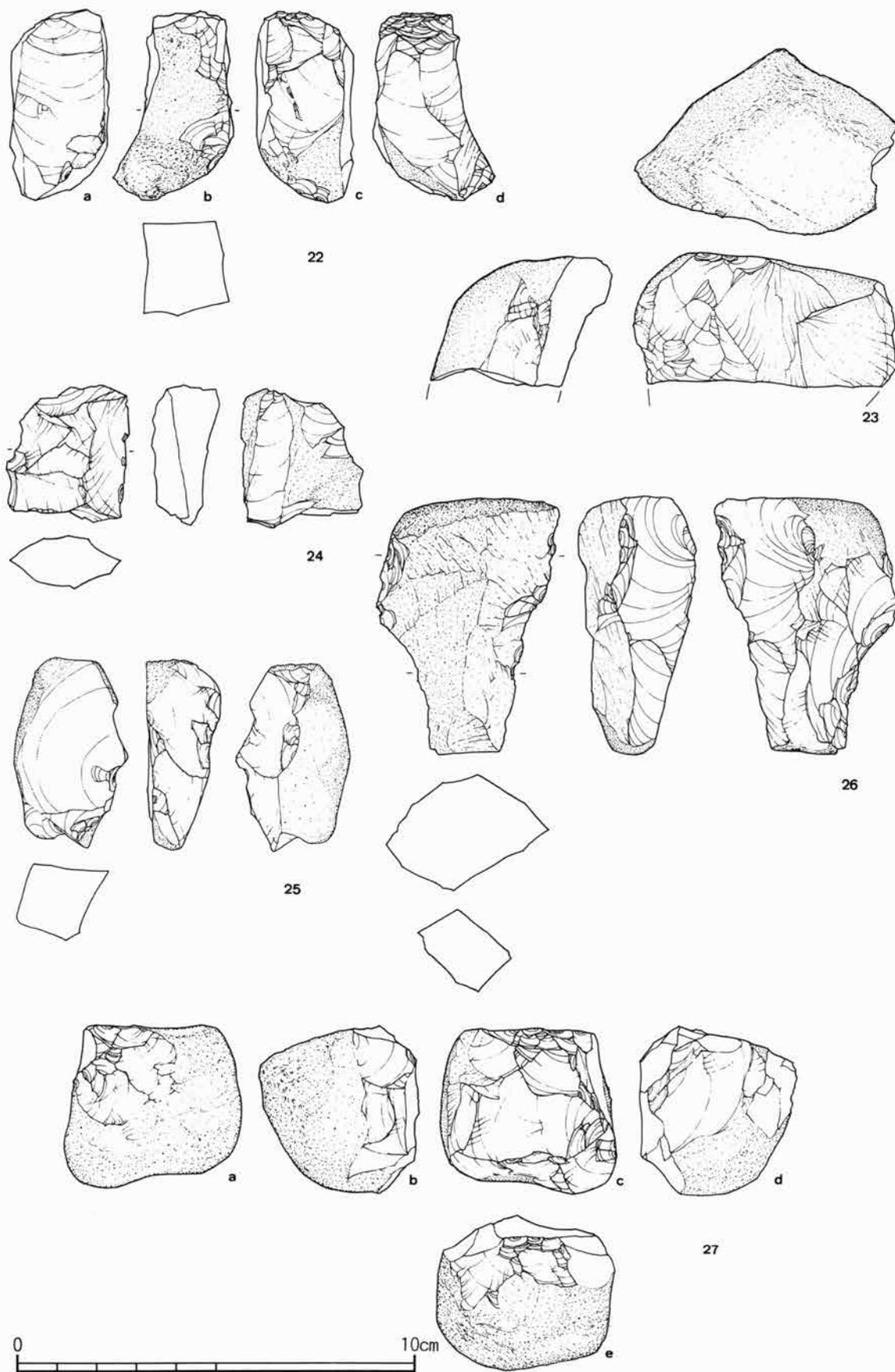
第37図 東山遺跡出土石器(1)

整が見られ、腹面右側縁には微細剥離痕が並んでいる。11は背面に分割面をとり込んだ剥片の末端部に、2次調整を施したもの。折れ面と2次調整の前後関係は定かではない。12は幅広剥片の背面右側縁に2次調整を施し、鋸歯縁に仕上げている。

第38図13～15は2次調整ある剥片。13は貝殻状剥片の腹面末端部と打面側の一部に浅い2次調



第38図 東山遺跡出土石器(2)



第39図 東山遺跡出土石器(3)

整を施している。素材の打面は折損する。14は打点付近から縦割れした剥片を用い、おもに腹面側に2次調整を施したもの。15は打面側を折損した剥片の片側縁～末端部に剥離痕が見られる。

同図16～18は縦長剥片。16は単剥離面打面をもち、腹面右側縁に微細剥離痕が並ぶ。17は打面・末端側を折損しており、背面両側縁に自然面を残す。18は自然面打面をもち、両面ともリングの起伏が著しい。

同図19・20は剥片。19は背面末端部に微細剥離痕が見られる。20は安山岩製で、片側縁を折損している。腹面側の末端に石核の構成面を、背面に自然面をとり込んでいる。風化が著しく進んでいる。

同図21は石核。左面には水磨した自然面を広く残し、右面には階段状の節理面が見られる。左面の自然面を一部除去したのち、作業面を右面→左面と交替させ剥片を剥離しているが、最後の剥離は碎片を剥がした程度である。片側縁～下端を折損している。

第39図22～27は石核。22はc・d面中央部に古い剥離面をとどめ、縦長～幅広剥片を剥離したものとみられる。石核の上下両端には敲打痕が顕著で、とくに上端のそれは本来の打面を完全に損なっている。a面は敲打時の分割面で、d面の古い剥離面を切っている。23は平坦な自然面を打面としており、作業面には節理面が露出している。また、作業面を打面として側面からも剥片を剥離しているが、自然面を一部除去した程度にとどまる。石核の下端を折損している。24は左面に作業面を定め、直交する剥離方向で小形剥片を剥離したもの。25は左面(ポジティブ面)を打面とし、右面片側縁に作業面を設けている。26は分割礫を素材とし、右面から剥片を剥離している。同面左半には分割面が残り、左面は自然面・節理面で占められている。27は作業面の転位が認められる。作業面はd面→c面→e面と移動しているが、d・e面での剥離は自然面を除去した程度にすぎず、おもな作業面はc面とみられる。a面の剥離痕はd面の形成以後のものである。

(森川 実)

6. ま と め

今回の発掘調査で分かった点をまとめておきたい。

①石器について

試掘調査時において旧石器時代の石器の可能性を指摘したが、今回の調査では否定的な結論となった。試掘時の判断では、石器が縄文時代や後期旧石器時代後半に近畿地方で多用されるサヌカイトが1点も出土しなかったことや、先刃形搔器に類似したものなどがあることから、後期旧石器時代前葉つまり、始良T n (A T)火山灰降灰以前の石器群の可能性を示唆していた。また、石器の剥離技術や、その特徴はA T以前の台形石器を含む石器群に類似していた。しかしながら、昨年度の火山灰分析の結果、A Tが黄褐色粘土層上半部から検出されていることを受け、今年度新たに9か所の試掘のための小グリッドを設定して、下層の調査を行ったが、1点の石器も出土しなかった。また、今年度には新たに縄文時代の石匙・石鏃が出土し、そのいずれもがチャート製であることが分かり、チャートの産出地である周山地区では、縄文時代には畿内中枢部とは異なって、主にチャートが石材として用いられていたことが明らかになった。石材の用い方は、近

接地にチャートの露頭があるものの、石器には水磨を受けた河原礫が用いられていることが指摘できる。

石器の出土層は、縄文時代に形成されたと考えられる黒ボク層中のものが多かった。剥片や部分加工のある剥片のみが旧石器時代に属する可能性は低い。1点ではあるが縄文土器が出土しており、その年代は縄文時代早期末から前期初頭と考えられる。石匙の形態や石鏃の作りなど土器の年代観と齟齬しない。また、縄文時代の集落は、遺物量から考えてやや離れたところにあるものと考えられる。

②古墳時代の集落について

古墳時代と考えられる竪穴式住居跡は6基で、SH03は柱穴から若干の土師器片が出土しただけで、その帰属時期・構造ははっきりしない。構造のわかる5基は、SH01が住居跡の一隅に煙道状の掘り込みがあり、その付け根部に焼土が見られたのに対し、柱穴が検出できなかった。SH02は柱穴が4か所検出できた。SH20は周壁溝を持ち、4か所の柱穴と2か所の焼土が認められた。SH21は2か所の柱穴を持ち、床面西側中央に焼土が認められた。SH21は柱穴が検出できなかったが、焼土面が1か所発見されている。このように、竪穴式住居跡の特徴はそれぞれ異なる。明確な造り付けの竈跡は確認できなかった。柱穴を見ると、検出した竪穴式住居跡のうち、規模の大きなSH02やSH20では4か所の支柱穴が検出できたのに対し、規模の小さなものは柱穴がないか、2か所のみであった。SH22を除く竪穴式住居跡に関して共通するのは、床面の土坑が側壁に沿って検出できることである。遺物は、床面での出土は、破片を除くとほとんどなく、住居廃棄時に持ち去られたものと考えられるが、土坑内からは、比較的残存率の良い遺物が出土した。

出土土器から年代を見ていくと、SH01・02・20から、いずれも口縁端部が内面に肥厚する布留式土器の特徴を持つ甕が出土している。その特徴から考えると、布留式甕の中では最も新しい時期に位置付けられる。SH21からは布留式土器は出土しなかったが、代わりに、須恵器が出土している。須恵器の年代は陶邑編年のTK208型式平行あるいは若干古いと考えられる。布留式土器と須恵器出現期の前後関係は重要な問題であるが、亀岡盆地の鹿谷遺跡^(注16)では陶邑編年のTK47・23型式平行の土器とともに、東山遺跡で出土したような布留式甕の特徴を持つ土師器が住居内から出土している。この事例から考えると、SH21が切り合い関係のあるSH22を除き、同時に存在していても年代の齟齬はない。

SH03の存在を考えると、B地区東方の尾根の高くなっていく部分に竪穴式住居が続いていたことも想像に難くない。また、削平されていない部分でも、尾根の北側では竪穴式住居跡は検出されていないことから、B地区に見られるように、尾根の南側の傾斜が比較的ゆるやかな斜面に集落が広がっていたものと考えられる。

③飛鳥時代の集落について

7世紀前半の遺構はSH19のみで、他には発見できなかった。出土遺物の中でも明確に帰属時期が分かる須恵器・土師器は数個体しか出土していない。集落の性格は不明である。

④奈良時代の集落について

奈良時代の遺物は、古墳時代のものと同様に、出土遺物総量に対して高い割合を占めているが、明確な遺構と考えられるものは土坑を除いて少ない。方形を呈する柱掘形も建物としてまとまらない。今回の調査地に近い祇園谷遺跡では、3棟の奈良時代の掘立柱建物跡が検出されている。祇園谷遺跡は、東山遺跡の立地する丘陵の一段下の段丘面に位置しており、標高は246mと上流部に位置しているにもかかわらず、11mもの比高差が認められる。祇園谷遺跡の立地する面に周山廃寺と同時期の集落は営まれていたものと考えられる。

今回の調査では、試掘時から指摘していた布目瓦が存在する意味を明らかにすることはできなかった。

⑤中世以降の推移について

中世の遺構は、すべて13世紀代のもので、丘陵の北側斜面、A地区南部、B地区北部にまとまる。このことは、坑を中心とする遺構が北側の谷に広がる現在の周山の集落を意識していることを示している。また、前述した祇園谷遺跡では、中世の遺物も発見されており、北側の谷部に土坑を造った人々の居住域が広がっていたものと考えられる。

包含層からではあるが昨年の試掘調査では、鉛製の火縄銃の玉が出土している。戦国期の周山城とのかかわりも想起されるが、遺構などは確認できなかった。

(中川和哉)

注1 中川和哉「東山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

注2 発掘調査・整理参加者(順不同・敬称略): 森川 実・長井謙治・西川麻野・沼田安寿美・船築紀子・山田真靖・茨城和良・平野修平・坂野 拓・中村里美・深野貴美子・藤井矢壽子・陸田初代・森川敦子・別所英治・筒井春美・大田秀子・大前キミ代・米田貴紀・米田浅雄・鶴子智慧蔵・田中勇・磯部美枝子・磯部波枝・磯部日出子・川面八枝野・栗山繁子・名倉尚美・橋爪ミツル・羽口喜代子・保田寛一・牧 忠司・西村康夫

注3 『京都府の地名』日本歴史地名大系第26巻 平凡社 1981

注4 平良泰久ほか周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1979 京都府教育委員会) 1979

注5 人魯 亨『上中城跡発掘調査概報』京北町教育委員会 1994

増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

増田孝彦「上中遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

増田孝彦「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

岡崎研一「上中遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

- 岡崎研一「上中遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 野島 永「上中遺跡第6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 奥村清一郎・石井清一・竹下士郎「上中太田遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第70冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注6 梅原末治「下弓削発見ノ銅鐸」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第7冊 京都府) 1926
- 注7 福島孝行「塔遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1994 京都府教育委員会) 1994
- 小池 寛「塔遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注8 奥村清一郎『愛宕山古墳発掘調査概報』 京北町教育委員会 1983
- 注9 京北町誌編纂委員会編『京北町誌』 1975
- 注10 人魯 亨・吉岡孝博『のほりお古墳発掘調査概報』 京北町教育委員会 1992
- 注11 竹下士郎「鳥谷古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注12 安井良三「周山廃寺の遺址と遺物」(『文化史学』1) 1950
- 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』45-2 日本考古学会) 1959
- 注13 岡内三眞・宇野隆夫・五十川伸矢・山口 博他『周山瓦窯跡発掘調査報告書』 京北町教育委員会 1982
- 注14 小池 寛「祇園谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡発掘調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注15 河野一隆・野島 永「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注16 注15と同じ。

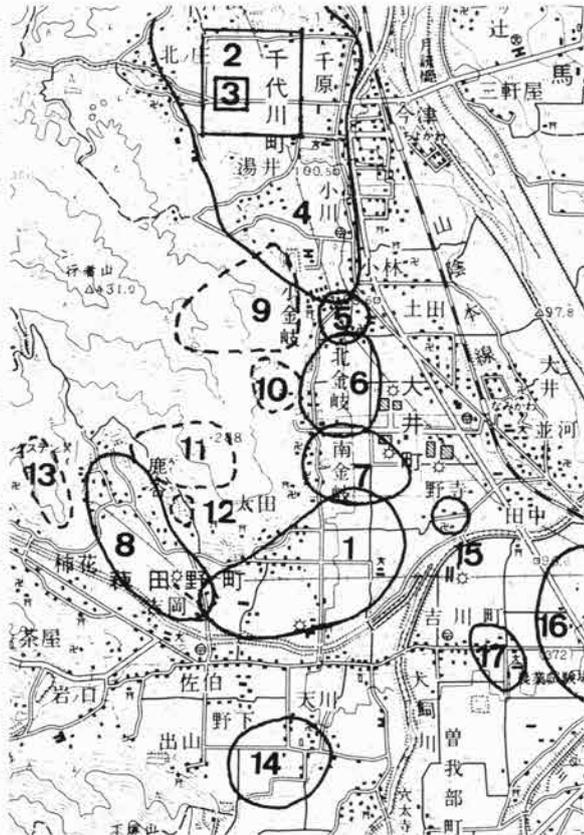
3. 太田遺跡第13次発掘調査概要

1. はじめに

太田遺跡は、大堰川右岸の行者山麓部に東西1,400m・南北600mにわたって広がる弥生時代前期から中世にかけての大規模な複合遺跡である。遺跡西端では山内川が東流し、その北側には調査地である台地状の微高地が形成されている。

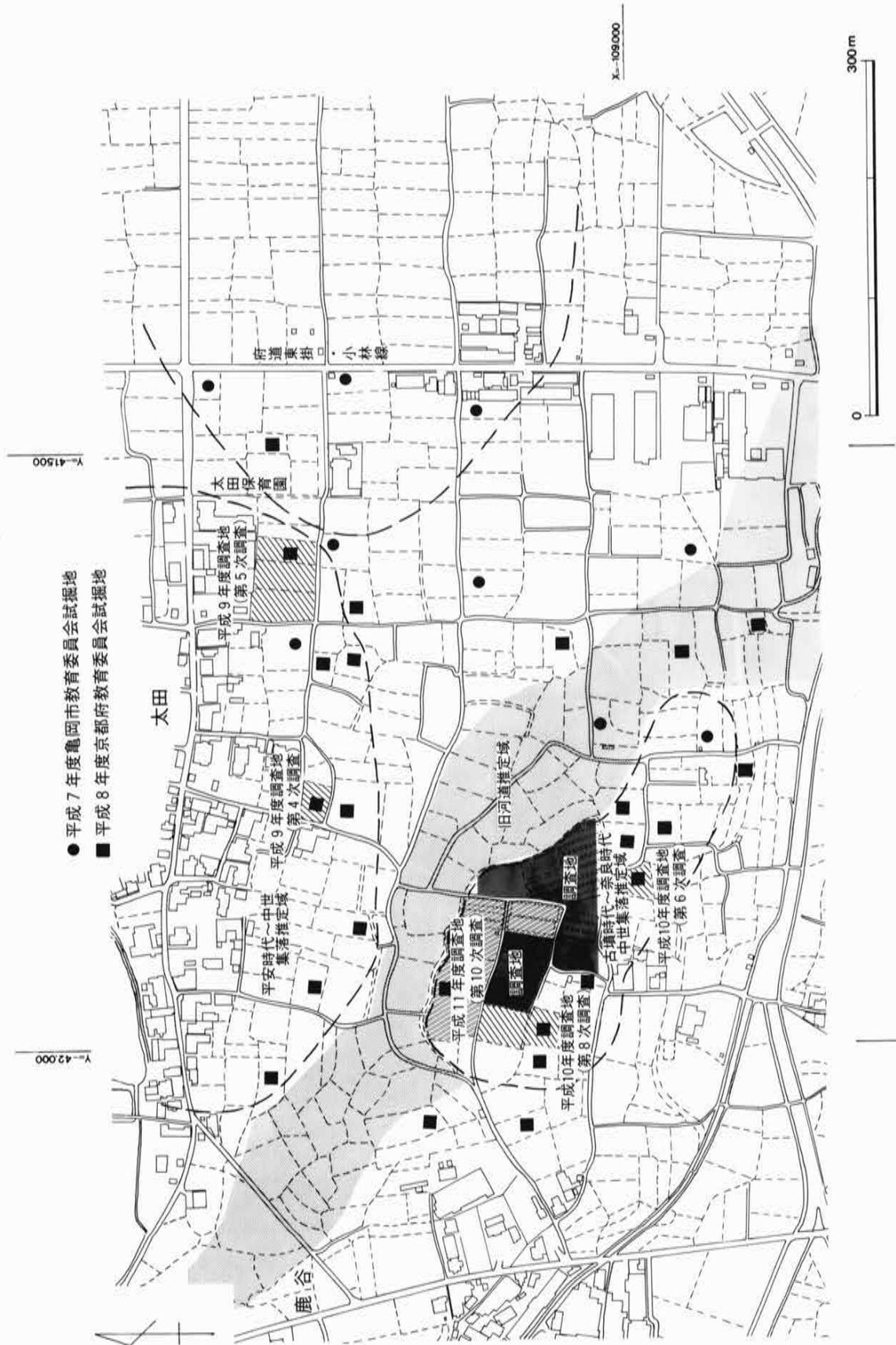
調査地周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡や古墳群が存在している。北方には千代川遺跡・北金岐遺跡・北金岐古墳群・小金岐古墳群、西方には古墳時代後期の竪穴式住居跡が多数検出された鹿谷遺跡・鹿谷古墳群・稗田野西山古墳、東方では弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての大規模な墓域や集落、弥生時代中期後半の玉作り工房などが検出された余部遺跡などがある。

太田遺跡は、過去12次にわたる発掘調査が実施されている。京都縦貫自動車道建設に伴い、昭和57年度に当調査研究センターが実施した第1次調査では、弥生時代前期～中期の直径160m以上の環濠集落が検出されている。第2～4次調査は平成7・8年度に亀岡市教育委員会・京都府教育委員会により、太田遺跡西側を中心に試掘調査が行われ、旧河道推定域をはさむ形で集落域が推定されるようになった(第41図)。第5次調査以降は、京都府教育委員会・当調査研究センターが分担して調査を行っている。第5次調査では、弥生時代後期の集落跡が存在することを確認するとともに、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出し、中世の礎石を伴わない大形掘立柱建物跡や井戸・道路状遺構が検出された。また、時期を特定することはできなかったが、鍛冶滓が出土し、生産活動を知る上で重要なものとなった。平成10年度第6次調査では、台地南端部分の調査を行い、集落の縁辺部の中世の土地利用状況が明らかになった。第8次調査は、旧河道推定域南側の微高地での調査とな



第40図 調査地および周辺遺跡分布図(1/50,000)

- 1. 太田遺跡
- 2. 丹波国府推定地
- 3. 桑寺廃寺
- 4. 千代川遺跡
- 5. 馬場ヶ崎遺跡
- 6. 北金岐遺跡
- 7. 南金岐遺跡
- 8. 鹿谷遺跡
- 9. 小金岐古墳群
- 10. 北金岐古墳群
- 11. 鹿谷古墳群
- 12. 鹿谷池田古墳群
- 13. 稗田野西山古墳群
- 14. 天川遺跡
- 15. 野寺廃寺
- 16. 余部遺跡
- 17. 穴川遺跡



第41図 調査地位置図(1/25,000)

り、古墳時代後期の竪穴式住居跡、8世紀中頃を中心とすると考えられる掘立柱建物跡が検出されている。平成11年度の第10次調査では台地北端の調査となり、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代後期・奈良・平安・鎌倉時代の多くの掘立柱建物跡が検出され、5世紀前半と考えられる古墳2基(円墳・方墳)が検出され、過去12回の調査では多くの成果が上がっている。

今回の調査地は、亀岡市稗田野町字太田小字森11ほかで、微高地上に位置し第8次調査地の東側、第10次調査地の南側で台地中心部分となる(第41図)。調査は府営圃場整備事業に伴い、京都府農林水産部の依頼を受け、京都府南丹土地改良事務所の協力のもとに実施した。

現地調査は、調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正、同主任調査員戸原和人・増田孝彦、同調査第4係主任調査員小池 寛が担当し、平成12年5月25日～平成13年1月26日まで実施した。現地説明会は、平成13年1月24日に行った。調査面積は当初4,200m²の予定であったが、検出した遺構の規模などを確認するための拡張を行い、最終的に約4,500m²となった。調査時の空中写真撮影および図化作業は株式会社イビソクに、出土した井戸枿材の樹種鑑定と保存処理は吉田生物研究所に委託した。

概報執筆は担当者が行い文責を明記した。また、調査期間中に経済産業省産業技術総合研究所地質調査所大阪地域地質センター寒川 旭氏に、検出した地震痕跡についてご指導をいただき、指導内容の概略を執筆していただいた。写真は遺構を担当者、遺物を調査第1課主任調査員田中彰が撮影した。調査期間中は、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会からご協力を得た。また、地元住民の方々には作業員・調査補助員・整理員として協力をいただいた。記して感謝する。

(増田孝彦)

2. 調査概要

京都府教育委員会による試掘調査(第11・12次)をもとに、3か所に調査区を設定した。まず、第8・10次調査区の間をA地区とし、その南をB-1地区、東をB-2地区とした。

各調査区は、里道によって区切られており、それぞれの区画単位に水平面を造り出すための削平を受けているため正確ではないが、おおむね北西から南東への傾きを持った旧地形を復原することができる。遺構を検出した調査地の標高は、A地区の北西部で106.5m、B-2地区の南東端で104.5mである。この間の距離約160mで比高差2.0mを測る。

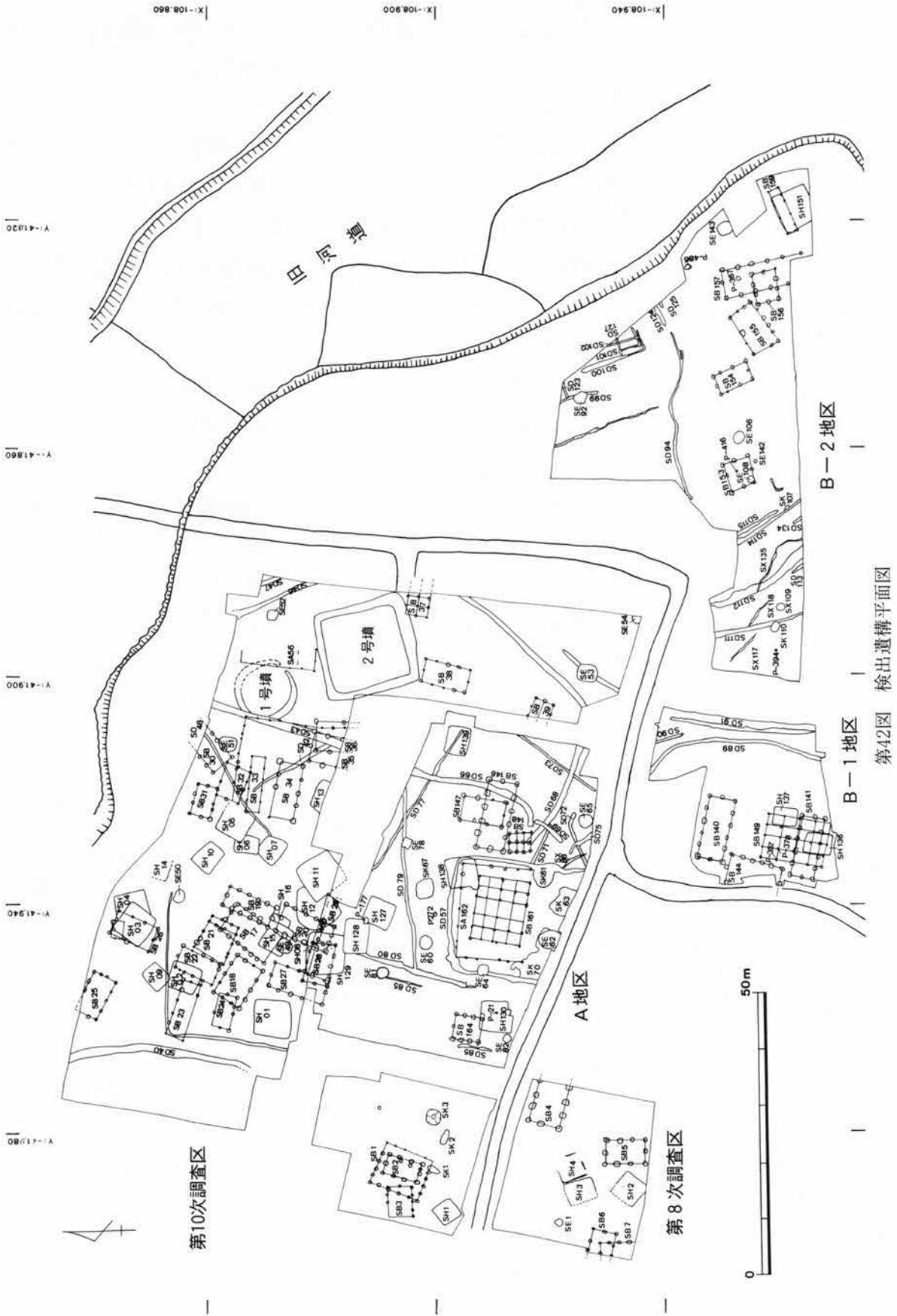
調査地の基本層位は、耕作土・床土・暗褐色粘質土・黒色腐植質土・遺構のベースとなる黄褐色の砂質土もしくはシルト層となる。これらの層は、削平を受けた地点では失われていた。

3. 検出遺構

今年度の調査で検出した遺構には、弥生時代から鎌倉・室町時代までの各時代の住居跡や井戸、給排水のために人工的に掘られた溝跡などがある。

(1) 弥生時代

A地区の北で行った拡張区から、第10次調査で検出した竪穴式住居跡SH12の南辺を確認した。



第42図 検出遺構平面図

①A地区(第42図・図版第32)

竪穴式住居跡SH12 第10次調査との間に拡張をおこない南端を検出した。住居の規模は、復原径約7.0mを測り、掘形は多角形状を呈している。検出した深さは約0.3mを測る。検出した住居の東辺の中央では、住居の床面から完形の甕や壺の底部などが出土した。

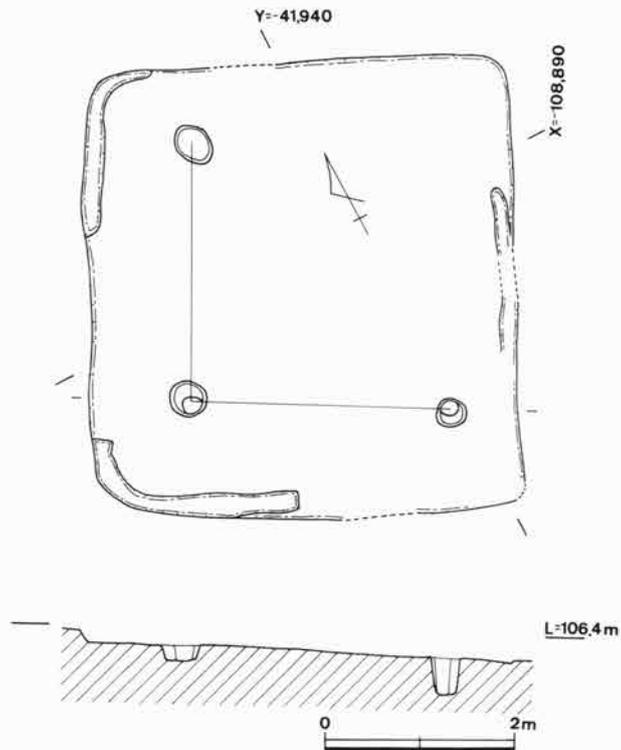
(2)古墳時代

古墳時代の前期では、9基の竪穴式住居跡を検出した。また、中期から後期にかけては、掘立柱建物と考えられる柱穴を検出している。この柱穴からは、柱を抜きとった後に埋納したと考えられる完形の須恵器杯などの遺物を出土している。

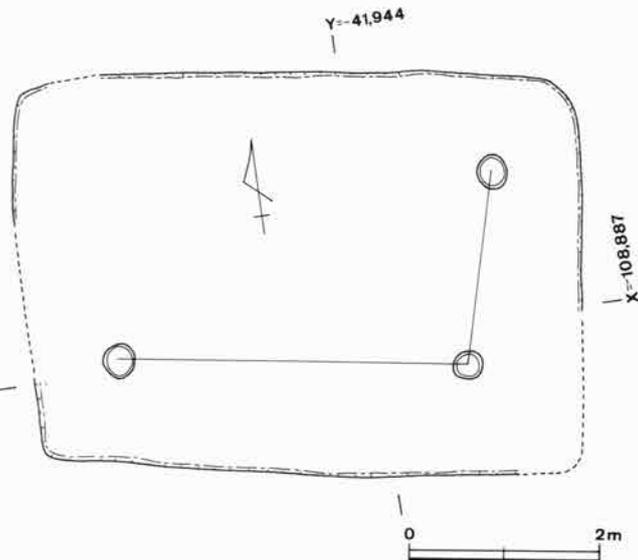
①A地区(第43～48図・図版第33・34)

竪穴式住居跡SH127 A地区の北西寄りで見出した住居跡である。SH128・SH129と切り合い関係にあり、検出した住居の規模は南北約4.5m・東西約4.6mを測り、N25°Eの傾きを持つ。住居内では、幅約20cm・深さ約5cmの周壁溝を北西と南西の隅、東辺の中央部分で部分的に見出した。支柱穴は北西・南西・南東の3か所で検出した。柱間は西辺の南北で約2.7m・南辺の東西で約2.8mを測る。柱穴は直径約0.3～0.4mで、深さ約0.2～0.3mを測る。住居跡内からは、埋土内に混入した縄文土器・土師器片などが出土している。SH128との切り合いでSH127がより新しい。SH129からSH127は、住居跡の掘られた順番から西から東に建て替えられており、次第に小さくなっていったことが分かる。

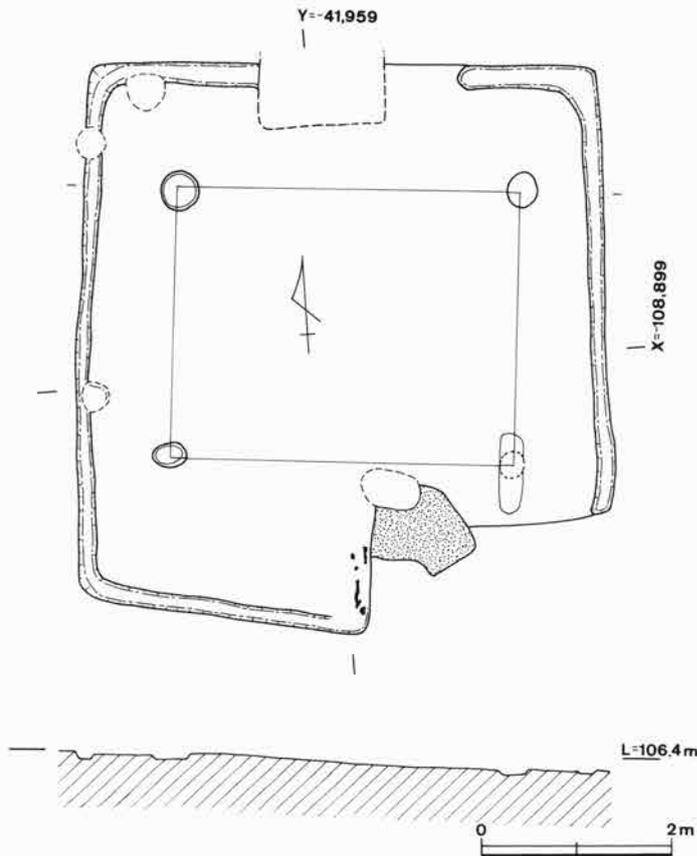
竪穴式住居跡SH128 SH12の西北で見出した。住居跡の南東部がSH12の北東角によって削られている。検出した住居の規模は、南北約4.1m・東西約5.6mを測り、N10°Eの傾きを持つ。支柱



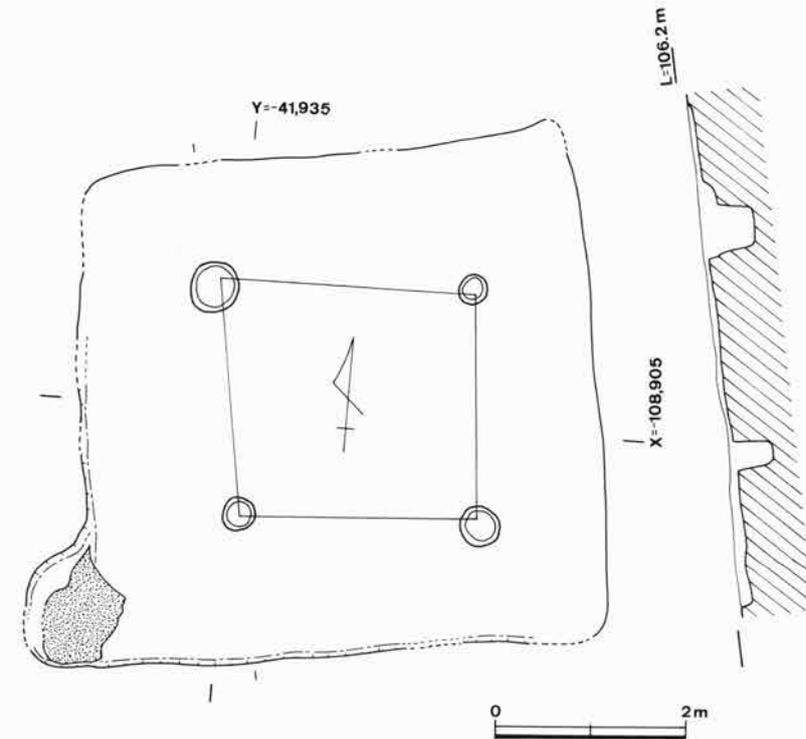
第43図 A地区竪穴式住居跡SH127実測図



第44図 A地区竪穴式住居跡SH128実測図



第45図 A地区竪穴式住居跡SH130実測図



第46図 A地区竪穴式住居跡SH138実測図

穴は南西・南東・北東の3か所で検出した。柱間は東辺の南北で約2.1m、南辺の東西で約3.8mを測る。柱穴は直径約0.3mで、深さ2~3cmを測る。この住居跡では、時期の決め手となる出土遺物はない。

竪穴式住居跡SH129(SH08)

A地区の北辺で住居跡の一部を検出したため、調査区の拡張を行いその検出につとめた。調査の結果、この住居跡は平成11年度に検出したSH08と同じ住居であることが明らかとなった。住居の規模は、南北約5.7m・東西約7.4mを測り、N2°Eの傾きを持つ。

竪穴式住居跡SH130 A地区の南西よりで検出した。住居跡の規模は、南北約5.9m・東西約5.3mを測り、N7°Eの傾きを持つ。支柱穴

は4か所で検出した。柱間は南北で約2.8m・東西で約3.6mを測る。柱穴は直径約0.3~0.4mで、深さ約5cmを測る。住居跡内では、幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝がめぐる。この住居の特徴は、南東の隅が東西約2.5m、南北約1.0mの部分で住居の内側にくぼんでおり、この場所には焼土や炭が散乱しており、竈があったと考えられることである。このような形の住居は、綾部市の青野遺跡で数多く発見され、「青野型住居」

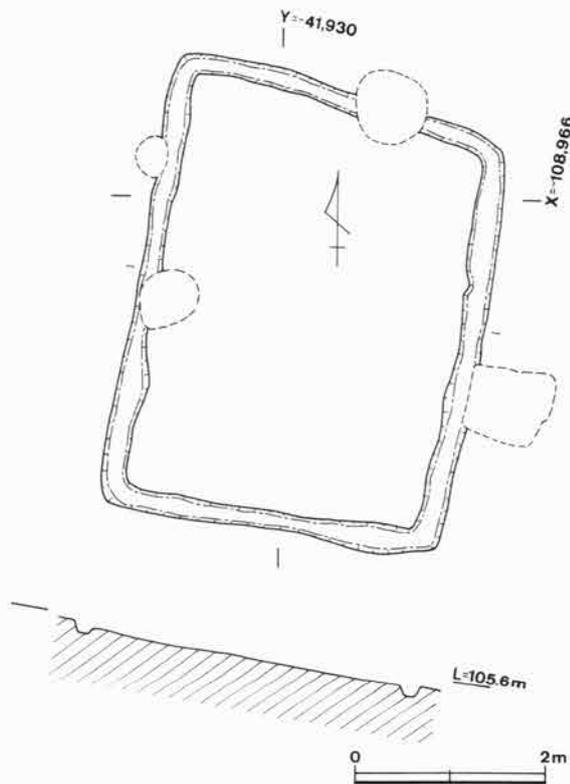
とよばれている。

竪穴式住居跡 S H138 A地区の中央部で検出した。住居跡の規模は、一辺約5.3mを測り、N 8°Wの傾きを持つ。支柱穴は4か所で検出した。柱間は南北で約2.4~2.5m・東西で約2.5~2.7mを測る。柱穴は直径約0.3~0.5mで、深さ約0.4~0.5mを測る。この住居跡は、南西の隅が南北約2.5m・東西約0.8m住居の外側に張り出しており、住居跡内側には、竈と考えられる焼土や炭が散乱していた。

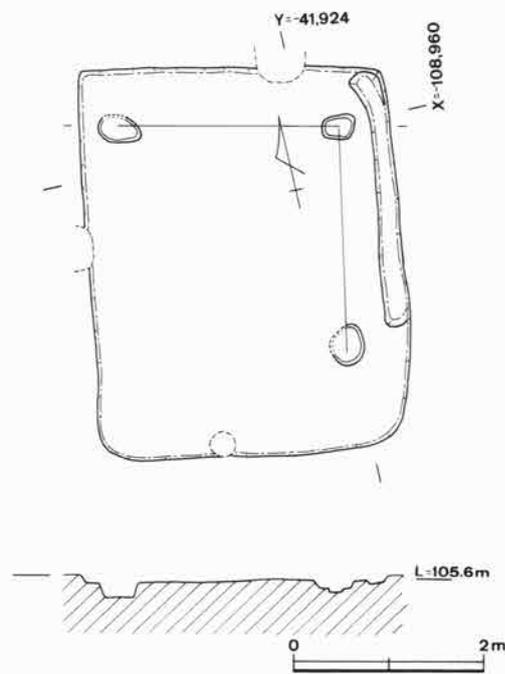
竪穴式住居跡 S H139 A地区の北東部で検出した。住居跡の規模は、南北約4.0m・東西約4.6mを測り、N11°Eの傾きを持つ。住居内では、幅約20cmの周壁溝を検出した。この住居跡では、西辺の中央部と北辺の中央部の2か所で焼土や炭を検出した。

掘立柱建物跡 S B20 第10次調査で検出した南北棟の南限を拡張区の調査で確認した。建物の規模は、桁行9.8m・梁間4.7mを測り、N21°Eの傾きを持つ。南北5間×東西3間の、南北棟である。柱掘形は一辺約0.8~1.0m・深さ約0.3mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約1.8m・梁間約1.6mを測る。出土遺物としては、P-460内より須恵器の杯身が1点出土しており、その他の柱穴内より須恵器甕・土師器杯・甕・鉄滓などがある。

掘立柱建物跡 S B28 同じく第10次調査で検出した東西棟の南辺を検出した。建物の規模は、桁行7.7m・梁間4.0mを測り、N17°Eの傾きを持つ、東西4間・南北2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.4~0.5m・深さ約0.2mを測り、柱は大きなもので約20cmを測る。柱間は、桁行約2.0m・梁間約1.8mを測る。



第47図 B-1地区竪穴式住居跡 S H136実測図



第48図 B-1地区竪穴式住居跡 S H137実測図

井戸 S E 78 A地区の中央北寄りで検出した井戸である。この井戸の規模は、一辺約1.5mの方形に掘られており、検出した深さは約1.2mを測る。井の枠は木製の材が使用されていたと考えられるが、残っていなかった。埋土の中からは、須恵器杯や土師器甕などが出土した。

②B-1地区(第42図・図版第34・35)

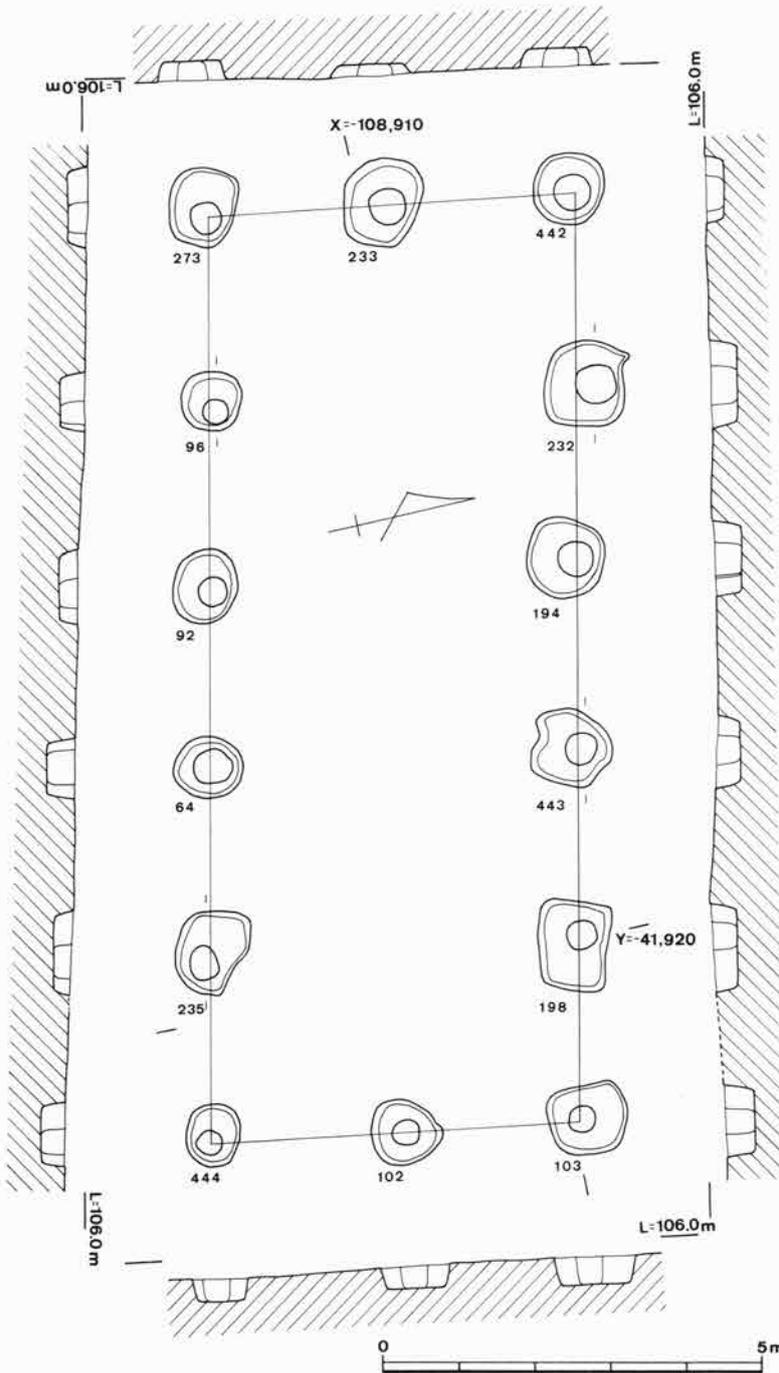
竪穴式住居跡 S H 136 B-1地区の南西部で検出した。住居跡の規模は、南北約4.8m・東西約3.7mを測り、N10°Eの傾きを持つ。住居跡内では、幅約30cmの周壁溝がめぐるが、支柱穴は検出していない。住居内からは、土師器高杯・甕などが出土した。

竪穴式住居跡 S H 137 S H 136の北東で検出した。住居の規模は南北約4.1m・東西約3.4mを測り、N10°Eの傾きを持つ。住居跡内では、北東部にわずかに幅約20cmの周壁溝がのこる。支柱穴は北西・北東・南東の3か所で検出した。柱間は北辺の東西、東辺の南北とも約2.3mを測る。柱穴は直径約0.3~0.4mで、深さ約0.2~0.3mを測る。

②B-2地区(第42図)

竪穴式住居跡 S H 151 B-2地区の南東部拡張区で検出した。住居跡の規模は、南北約6.3m・東西約6.7mを測り、N27°Wの傾きを持つ。住居内では、幅約50cmの周壁溝がめぐる。この住居跡の東には、同様の幅の壁溝が2条遺存しており、建て替えが行われたと考えられる。

P-367 調査地の東よりで検出した柱穴である。建物としてまとまるものでは



第49図 A地区掘立柱建物跡 S B 146実測図

ないが、須恵器杯身を出土した。

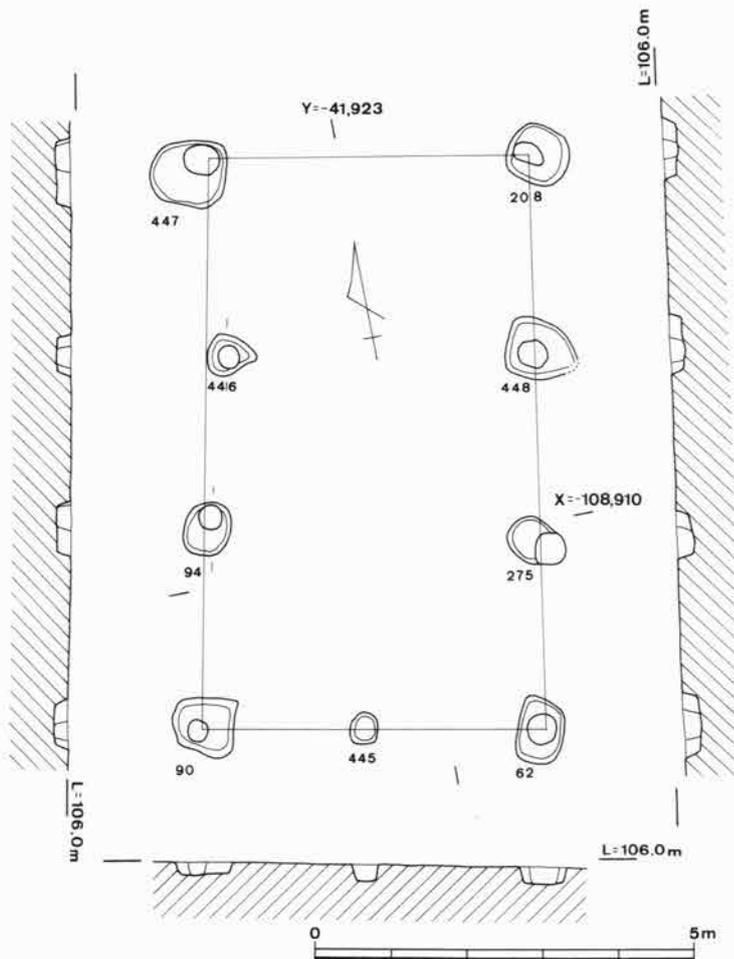
(3)奈良・平安時代

この時代の遺構は、時代の決め手となる出土遺物が少ないため、細かい時代の区分は困難であるが、大型の掘立柱建物や木製の井戸枠を使用した井戸などがこの時代のもと考えられる。

①A地区(第49～51図・図版第35・36)

掘立柱建物跡 S B 146 A地区の中央部東よりで検出した。建物跡の規模は、桁行12.2m・梁間4.8mを測り、N10°Eの傾きを持つ、東西5間×南北2間の東西棟である。柱掘形は一辺約0.8～1.2m・深さ約0.3mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱穴の埋土は、黒色の腐植質土に黄褐色の粘質土が混入する。柱間は、桁行・梁間とも約2.4mを測り、今年度の調査中もっとも広い柱間を持つ大型建物である。柱穴内からは、P-103から須恵器杯B・杯A・壺、製塩土器、P-194から須恵器杯A・土師器片、P-232から須恵器杯B・杯A・杯蓋・土師器甕片・内面に布目圧痕をもつ製塩土器、P-233から土師器甕片・製塩土器、P-235から須恵器杯蓋、P-273から製塩土器、P-443から須恵器杯蓋など、各柱穴からも土器が出土しており、中でも製塩土器の出土が目立つ。

掘立柱建物跡 S B 147 S B 146と重複しているが新旧関係は明らかでない。建物の規模は、桁行7.5m・梁間2.25mを測り、N10°Eの傾きを持つ、南北3間・東西2間の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6～1.0m、深さ約0.25mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約2.5m・梁間約1.1mを測る。柱穴内からは、P-62から須恵器杯蓋・土師器甕、P-90から土師器杯・甕、P-94から土師器杯・皿、P-202から須恵器鉢・土師器杯・甕、P-203から須恵器壺・土師器杯・甕、P-275から土師器甕、P-445から土師器甕、P-446から須恵器片・土師器甕、P-447から土師器甕、P-448から須恵器杯A



第50図 A地区掘立柱建物跡 S B 147実測図

などが出土している。

掘立柱建物跡 S B 27 A地区の拡張区で第10次調査により検出した南北棟の南限を確認した。建物跡の規模は、桁行8.9m・梁間4.9mを測り、N20°Eの傾きを持つ、南北4間×東西2間の、南北棟である。柱掘形は一辺約0.6~0.8m・深さ約0.3mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行・梁間とも約2.2mを測る。建物の帰属時期は、第10次調査の結果に従った。

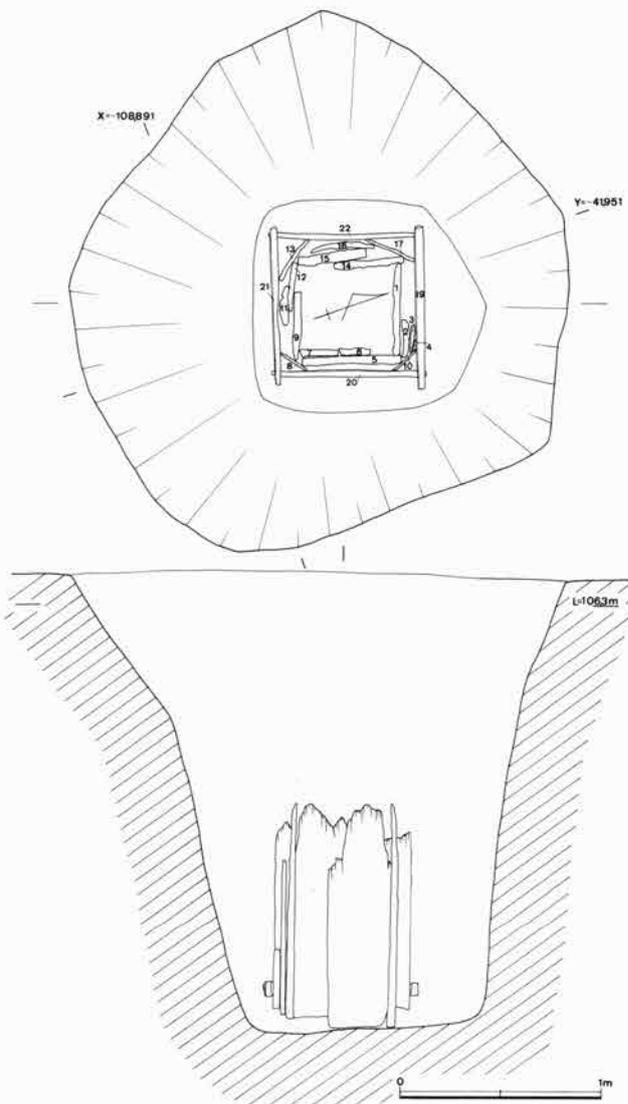
井戸 S E 81 A地区の北西で検出した掘形の直径約2.5m・深さ約2.2mの横棧形式縦板組の井戸である。井戸枠は一辺約50cmの方形で、厚さが3cm以上、幅が40cmほどの板を縦板として使用しており、底と中段には横方向に柵組みした栈木が残っていた。井戸の底からは、土師器の甕と須恵器の杯が出土した。また、埋土の最上層では、埋め戻し後に地震の影響を受けたと考えられる陥没が認められ、掘形の北西側で「C」字状に上層の包含層が混入していた。この埋土中からは、15世紀の備前焼のすり鉢が出土した。

②B-1地区(第42・52~54図・図版第37)

溝跡 S D 89 B-1地区の東半で検出した弧状を呈する溝である。検出した溝の規模は、幅約0.8m・深さ約0.5mを測り、調査地の北端から南端までで28m確認した。A地区の溝 S D 72に接続するものかもしれない。溝内からは、土師器鉢・須恵器鉢などが出土した。

掘立柱建物跡 S B 140 B-1地区の北西で検出した。建物の規模は桁行10.8m・梁間4.8mを測り、N11°Eの傾きを持つ東西5間・南北2間の東西棟である。柱の掘形は一辺約0.6~1.0m・深さ約0.2mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約2.5m・梁間約1.1mを測る。出土遺物ではP-361から土師器杯・甕・須恵器杯片が出土している。P-363から土師器椀・須恵器壺・甕片が出土している。

掘立柱建物跡 S B 141 S B 140の南約12mで検出した。建物の規模は、桁行10.9m・梁間4.1mを測り、N10°30'Eの傾きを持つ、東西5間×南北2間の東



第51図 A地区井戸 S E 81実測図

西棟である。柱掘形は一辺約0.6~1.0m・深さ約0.3mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約2.2m・梁間約2.1mを測る。この建物跡は、掘立柱建物跡S B146や掘立柱建物跡S B140とほぼ柱筋をそろえて南北に並ぶ。出土遺物では、P-355から土師器・須恵器片が、P-356から土師器椀・須恵器壺片が少量の瓦器片とともに出土している。瓦器片は混入と考えられる。

掘立柱建物跡S B144 S B140とS B141の間で検出した、調査地の西に広がる建物である。建物跡の規模は、桁行9.1m・梁間4.9mを測り、N11°30'Eの傾きを持つ、南北5間×東西2間以上の南北棟である。柱掘形は一辺約0.6~0.9m・深さ約0.15mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約

1.8m・梁間約2.5mを測る。この建物跡は西辺が調査地の外に広がるため拡張によってその規模を確認した。出土遺物では、P-358から土師器甕片が、P-359から土師器甕・須恵器杯・甕片が、P-360から土師器片が出土している。

③B-2地区(第42図)

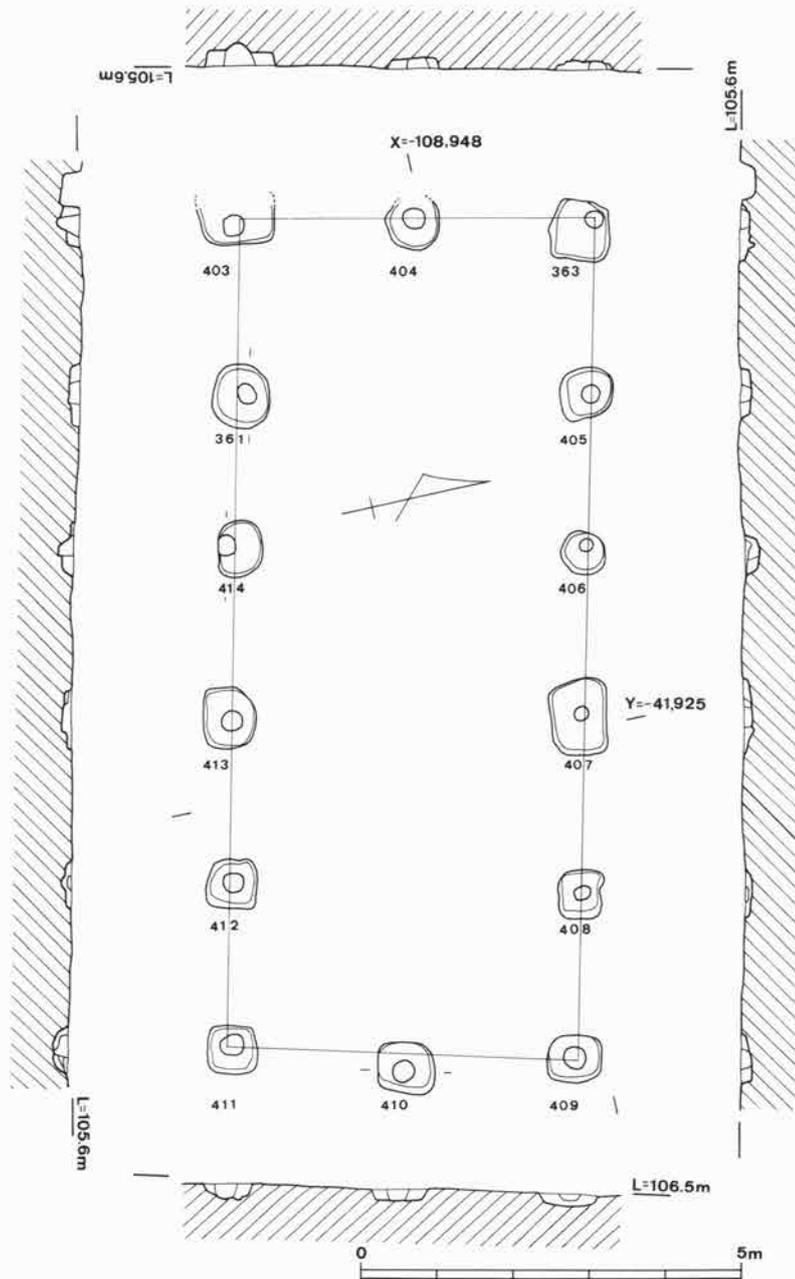
建物跡としてまとまるものはないが、調査地の中央よりで緑釉陶器を出土したP-415、須恵器鉢を出土したP-416などを検出している。

(4)鎌倉・室町時代

この時代の遺構としては、掘立柱建物の柱を立てたと考えられる、数多くの柱穴や石組みの井戸、溝・土坑などがある。

①A地区(第42・55・57・58図・図版第38~40)

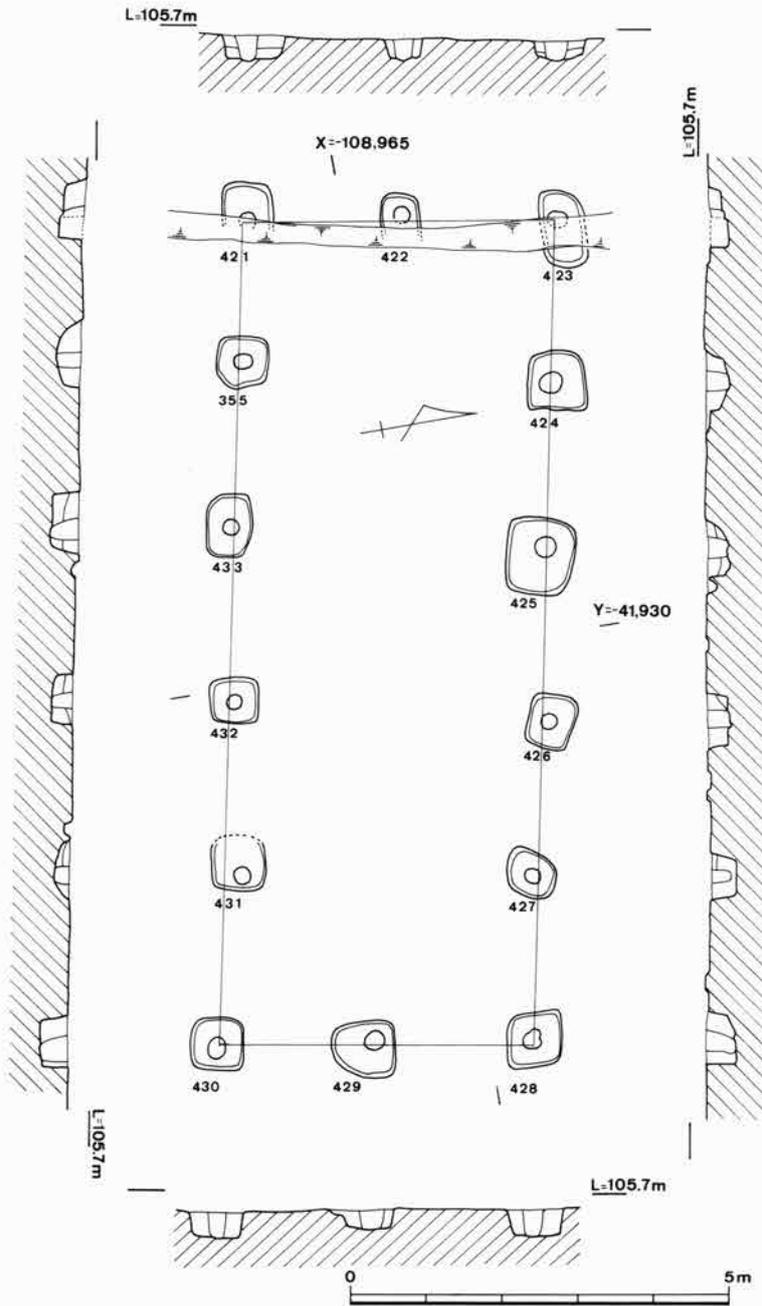
掘立柱建物S B148 A地区の中央東よりで検出した。



第52図 B-1地区掘立柱建物跡S B140実測図

建物跡の規模は、桁行3.6m・梁間3.4mを測り、 $N 1^{\circ} W$ の傾きを持つ、南北3間×東西2間の南北に棟筋をもつ総柱の建物である。柱の掘形は一辺約0.4~0.7m・深さ約0.15mを測る。柱間は、梁間1.2m・桁行1.7mを測る。

掘立柱建物 S B 161 A地区の中央南寄りで検出した。後述する柵列 S A 162・溝跡 S D 57・土坑 S K 61・井戸 S E 62などとともに、屋敷を構成する遺構である。建物跡の規模は、桁行11.0m・梁間9.0mを測り、 $N 8^{\circ} 30' E$ の傾きを持つ。南北4間×東西5間の東西棟である。柱間は、桁行で中央の1間が約3.0mを測り、左右の2間が約1.8~2.1mを測る。この構造は、中央の1間が特殊な空間になっていたか、もしくは東西の2棟に分かれることも考えられるが、周囲を取り囲む溝や柵列、宅地内に井戸が営まれている状況から、ここでは1棟の建物跡としておきたい。



第53図 B-1地区掘立柱建物跡 S B 141実測図

梁間は北の3間が約2.0~2.4mを測り、南の1間は2.5mと他の柱間より広く、広縁もしくは土庇となっていたと考えられる。柱の掘形は一辺約0.3~0.4m・深さ約0.1mを測る。柱掘形の中には割石を、大きいものでは1石、小さいものでは2段に据えていた。出土遺物では、P-3・P-6・P-10・P-39・P-150・P-155から瓦器碗・土師器皿・甕、P-285から土師器皿・須恵器片が出土している。周辺には、いくつもの柱穴が掘られており、何度も建て替えが行われていたと考えられる。

溝跡 S D 57 掘立柱建物跡 S B 161を取り囲むように掘られた溝である。東西の一辺約20m・東側では南北20m以上を区画するように「コ」の字状に掘られている。この溝は幅約0.5m・深さ約0.4mを測る。区画内には S B 161や

同時期の遺物を出土する柱穴、SE62などを検出している。また、土坑SK61はこの溝と接続している。溝内より龍泉窯産の青磁椀や丹波産の瓦器椀、瓦質の羽釜などが出土している。

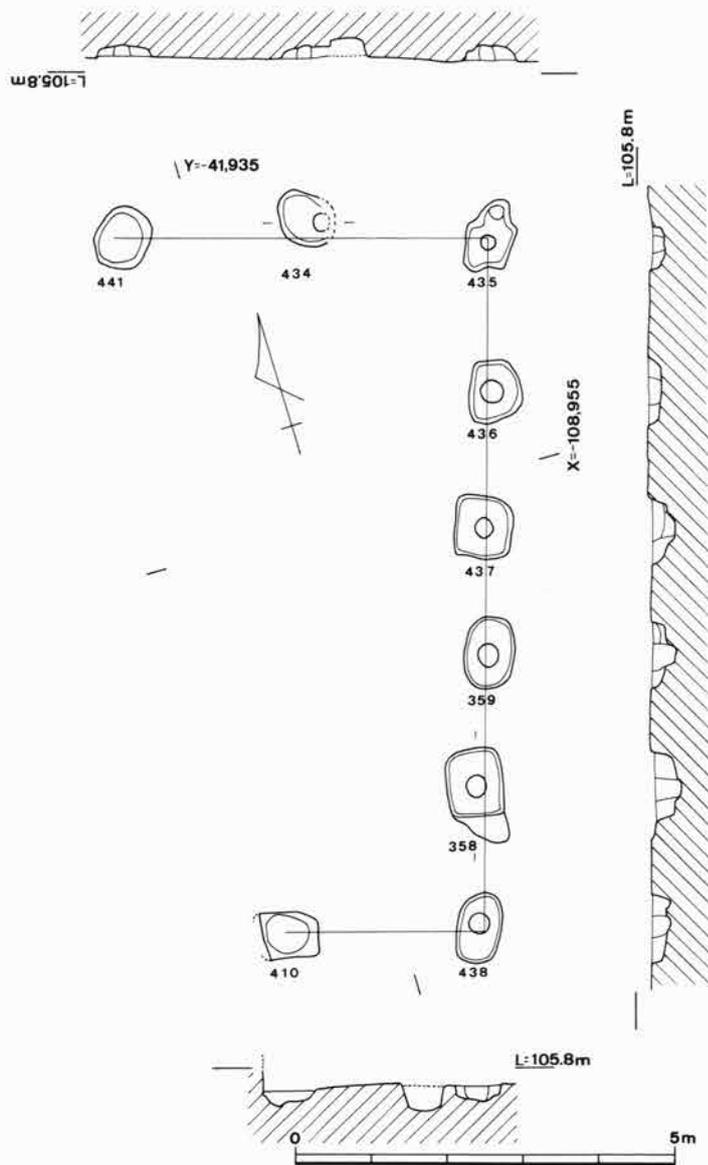
土坑SK61 SD57の東辺で接続して検出した。土坑の規模は、直径約4.0m・深さ約0.4mを測り、土坑内には須恵器甕や土師器小皿などとともに割石が投げ込まれていた。土坑底は、SD57より10cm以上深いため、宅地内の園地のようなものであったかもしれない。

柵列SA162 SD57の内側で検出した。SB161を東・北・西の3辺で囲む塀もしくは柵列である。検出した一辺約0.3~0.4mの掘形内にはSB161と同様の方法で割石が据えられていた。

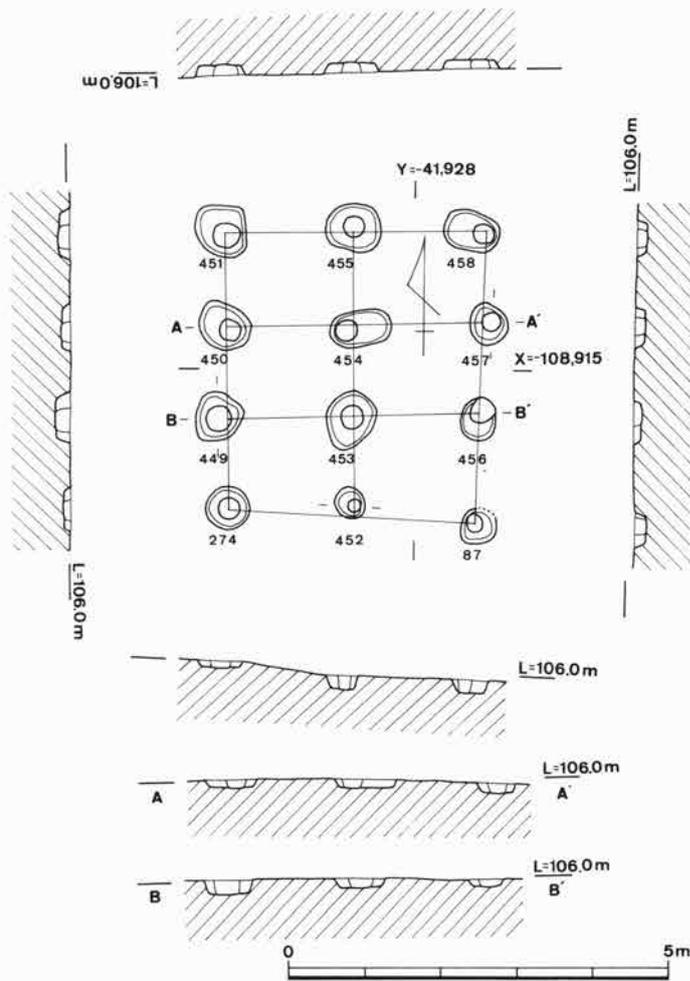
井戸SE60 A地区の中央西寄りで見出した石組みの井戸である。この井戸の規模は、掘形の直径約2.4m・深さ約1.4mを測る。石組みは、東西約1.1m・南北約0.7mの楕円形で、深さ約0.9mに9段分遺存していた。石材は大きいもので30cm角の割石が使用されていた。埋土内より中国産白磁椀や丹波産の瓦器椀、土師器の小皿などが出土している。また、掘形内より同様の遺物とともに滑石製の石鍋・鉢などが出土している。

井戸SE62 掘立柱建物跡SB161の西辺の南約2mで見出した石組みの井戸である。この井戸の規模は、掘形の直径約3.2m・深さ約1.5mを測る。石組みは、上面で約1.4m、下段で約1.1mを測り、深さ約0.9mに9段分遺存していた。石材は大きいもので40×60cm角の割石が使用されており、本調査中で最も大きい石が用いられた井戸である。井戸底には、石材が沈まないための工夫として、丸太材を使用した胴木が四角に柄組みされていた。埋土内より龍泉窯産の青磁椀や丹波産の瓦器椀、瓦質の鍋・羽釜などが、掘形内より同様の遺物とともに石製の硯が出土している。

井戸SE145 SE62に先行する井戸で、遺存する掘形の直径約1.2m・深さ約0.8mを測る。SE62が掘られる時点で破壊されてお



第54図 B-1地区掘立柱建物跡SB144実測図



第55図 A地区掘立柱建物跡S B 148実測図

り、石組みの一段を残すのみであるがS E 62と同規模の石が使用されていることからS E 145の石がS E 62に再利用されたものと考えられる。また、この井戸の底はS E 62より約0.6m浅く、あるいは地下水脈の変動によって造り替えられたものかも知れない。

井戸S E 64 掘立柱建物跡S B 161の西辺の南約4mで検出した一辺約2mの方形に掘られた井戸である。井戸枠は残っていなかった。埋土の中からは、瓦器碗や土師器の皿などが出土した。この井戸は、溝S D 57によって切られている。

井戸S E 65 石組みの井戸である。この井戸の規模は、掘形の直径が南北で約2.2m、東西で約2.45mを測り、深さ約1.3mを測る。石組は、東西で約1.2m、南北で約0.8mを測り、深さ約0.9mに6段分遺存

していた。石材には大きい物で20×30cm角の割石が使用されていた。この井戸は、南から北に向かったの圧力により変形しており、井戸の西には北東から南東方向の断層が走っている。また周辺には、液状化による噴砂が認められる。掘形内より龍泉窯産の青磁碗や丹波産の瓦器碗、東播系の鉢などが出土している。

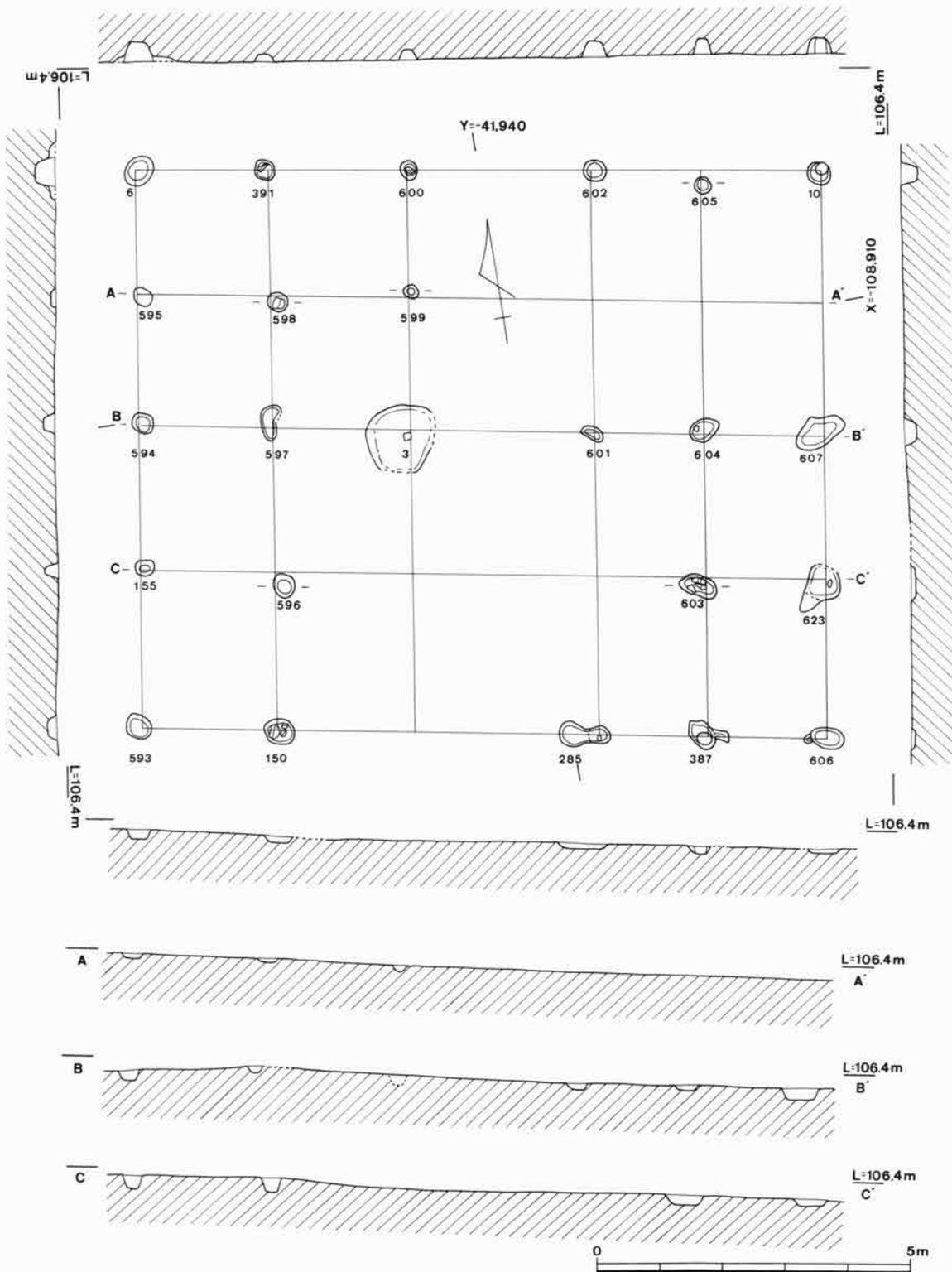
土坑S K 63 S B 161の南で検出した東西約4m・南北2m以上・深さ約0.3mを測る。土坑内からは瓦器碗や土師器の小皿などとともに割石が出土した。

土坑S K 67 調査地中央の北寄りで検出した東西約4m・南北約2m・深さ約0.1mを測る窪地である。埋土中から瓦器碗・土師器皿・同小皿などを出土した。

土坑S K 70 S D 57を掘り込んだ、東西約10m・南北5m以上・深さ約0.5mを測る調査地の南に向かってゆるやかに下がる大きなくぼみである。土坑内からは瓦器碗や土師器の小皿や古瀬戸の香炉などが割石とともに出土した。

②B-1地区(第60~63図・図版第41・42)

掘立柱建物S B 149 B-1地区の中央西よりで検出した。建物跡の規模は、桁行11m・梁間8.0mを測り、N10°30'Eの傾きを持つ、東西4間・南北4間の南北棟である。柱間は、桁行で

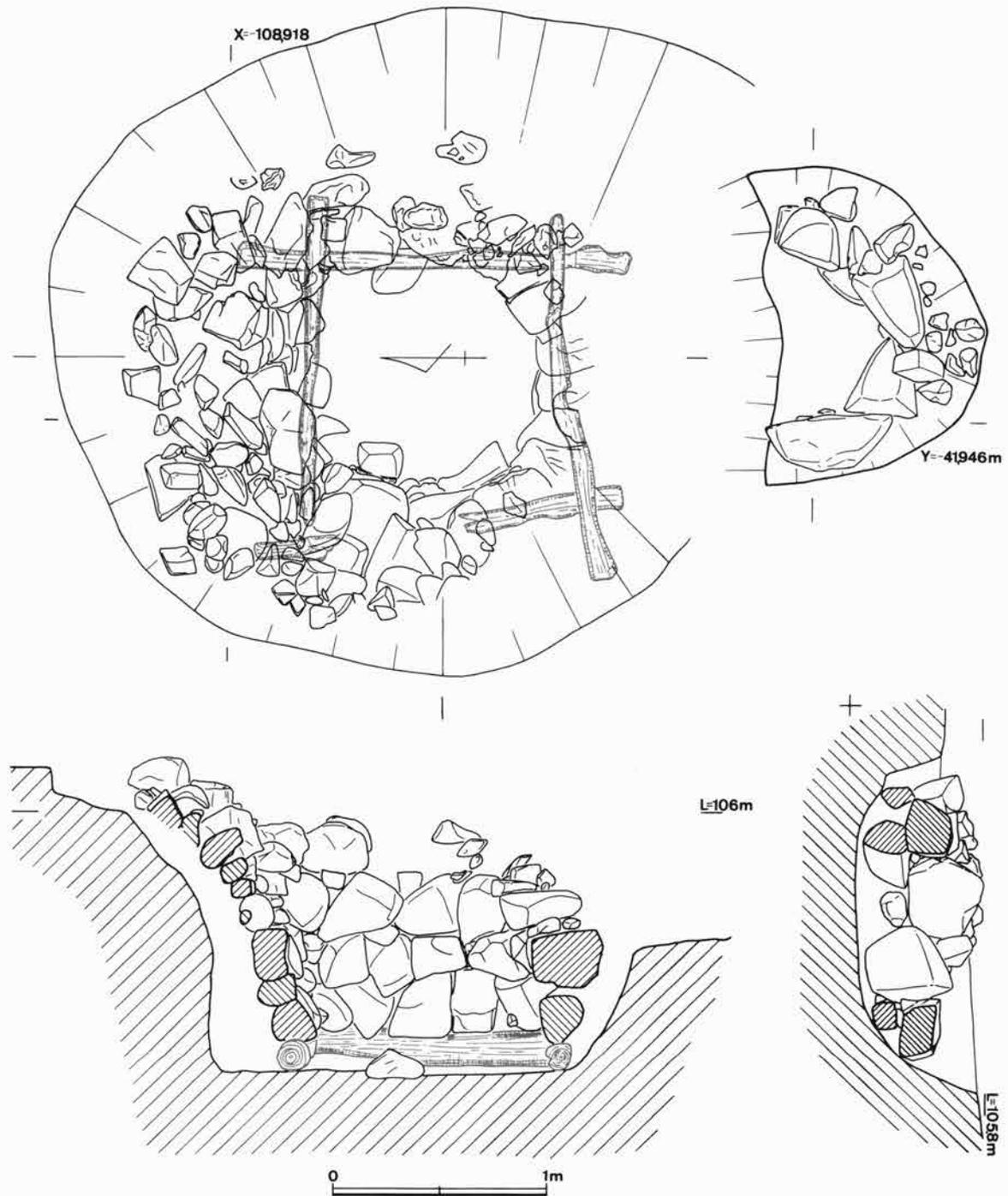


第56図 A地区掘立柱建物跡S B161実測図

約2.7~2.8m、梁間は約2.0mを測り、桁行の柱間が梁間より0.7~0.8m広いことから南北棟と考えられる。柱の掘形は最大で0.5m程度の円形で、深さ0.3mを測る。柱穴内からは、P-356から瓦器椀・須恵器甕、P-357から瓦器椀3点・土師器椀1点、土師器小皿2点・須恵器甕片2点・中国製陶磁器の褐釉壺1点、P-378から軒平瓦と土師器杯・皿、P-494から土師器甕な

どが出土した。

溝S D91 B-1地区の東端で検出した南北溝である。検出した溝の規模は、幅約1.0m・深さ約0.1mを測り、南北約25mにわたって検出した。この溝の西1~2mには、現在の地境を流れる溝が並行しており、周辺の地割りが現在まで踏襲されていることをうかがわせる。溝内からは、瓦器椀・須恵器甕片・土錘などが出土した。



第57図 A地区井戸S E62・145実測図

③B-2地区(第64~76図・図版第43・44)

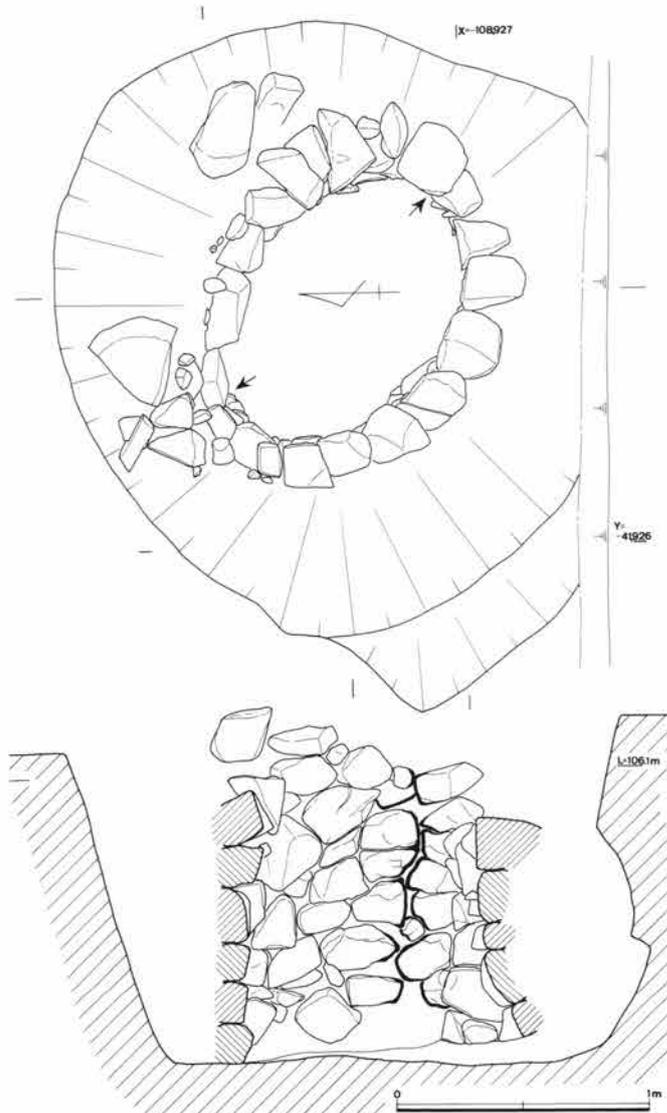
掘立柱建物跡S B 153 B-2地区の中央部で検出した。建物跡の規模は、桁行・梁間とも4.8mを測り、N18°30'Wの傾きを持つ南北2間、東西2間の建物跡である。柱の掘形は一辺約0.4~0.6m・深さ約0.2mを測り、柱間は桁行・梁間とも約2.8mを測る。柱穴内からは、瓦器片・土師器などが出土した。この建物跡は、井戸S E 108によって南西の柱穴が切られており、S E 108より先行する。

掘立柱建物跡S B 154 B-2地区の中央部東寄りで検出した。建物跡の規模は、桁行6.1m・梁間3.5mを測り、N25°Wの傾きを持つ、東西2間・南北3間の南北棟である。柱の掘形は直径約0.6mの円形で、深さ0.4mを測る。柱間は、桁行約1.8m・梁間約1.7mを測る。この建物跡の内部、北東寄りには一辺約0.8mの掘り込みがあり、その中には40cm大の石が据えられていた。

掘立柱建物跡S B 155 S B 154の南東約4.5mで検出した。建物跡の規模は、桁行8.1m・梁間4.9mを測り、N35°Wの傾きを持つ、東西5間・南北3間の東西棟である。柱掘形は直径約0.6mの円形で、深さ約0.2mを測り、柱間は、桁行・梁間共約1.6mを測る。この建物の内部、南西寄りには東西1.0m・南北0.8mの掘り込みがあり、その中には30cm大の石が据えられていた。この建物跡の周辺では鉄滓が出土しており、あるいは鍛冶小屋などの機能を持った建物かもしれない。

掘立柱建物跡S B 156 S B 155のさらに南東で検出した。建物跡の規模は、桁行5.30m・梁間4.1mを測り、N7°30'Wの傾きを持つ、東西3間・南北2間の東西棟である。柱掘形は最大で0.6m程度の方形で、深さ0.25mを測る。柱間は、桁行約1.8m・梁間約2.1mを測る。

掘立柱建物跡S B 157 S B 155と重複関係にある建物跡であるが、新旧関係は明らかでない。建物跡の規模は、桁行14.1m・梁間5.0mを測り、N12°Wの傾きを持つ南北5間以上、東西2間の南北棟である。柱



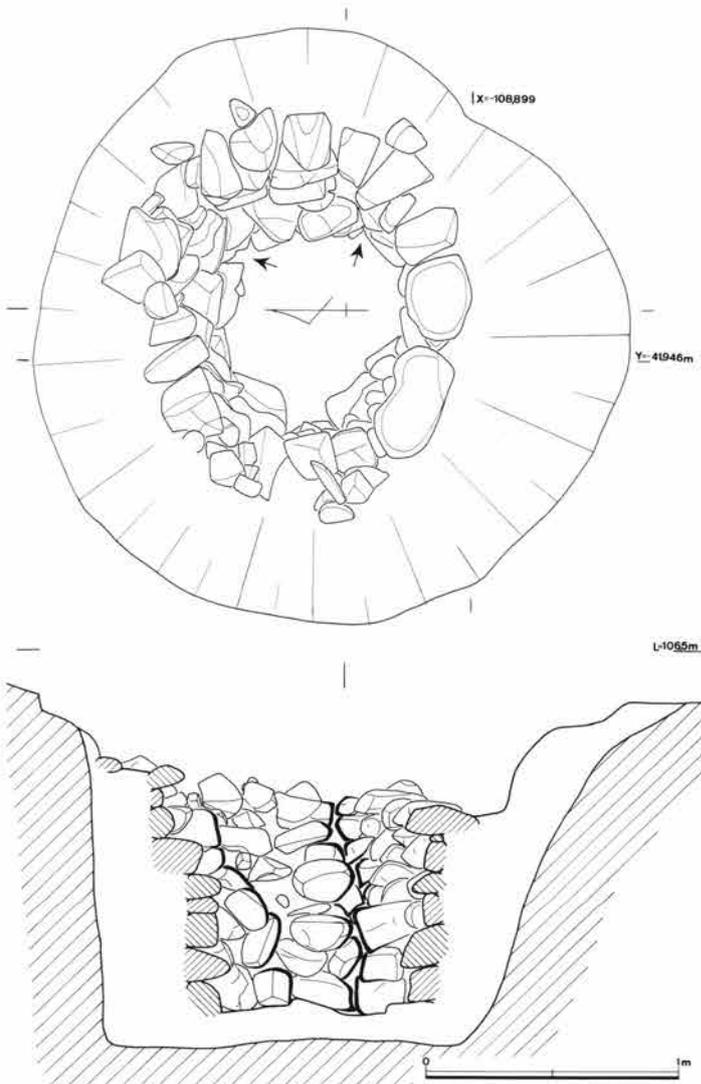
第58図 A地区井戸S E 65実測図

掘形は一辺約0.7mを測り、柱は大きなもので約30cmを測る。柱間は、桁行約2.8m・梁間約2.5mを測る。

掘立柱建物跡 S B 158 B-2地区の南東隅で柱列を検出し、確認するために拡張を行った。建物跡の規模は、2間以上×3間以上でN34°Wの傾きを持つ南北棟である。柱間は梁間で2.5m、桁行で2.1mを測る。柱掘形は最大で0.4m程度の円形で、深さ0.2mを測る。

掘立柱建物跡 S B 159 拡張によって検出した。建物跡の規模は、1間×3間以上でN19°30′Wの傾きを持つ東西棟である。柱間は、梁間で1.8m・桁行で2.6mを測る。柱掘形は最大で0.2m程度の円形で、深さ0.2mを測る。

井戸 S E 92 調査地の北辺で検出した石組みの井戸である。井戸の規模は、掘形の直径が南北約2.3m・東西約1.8m・深さ約1.3mを測る。石組は、東西約0.9m・南北約0.7m・深さ約0.9mに7段分遺存していた。石材には大きいもので30cm×30cm角の割石が使用されていた。この井戸は、S E 65と同様に地震の圧力により変形し、楕円形になっている。基底には敷石と曲物が埋設してあった。この曲物も地震により南から北へ変形していた。掘形内より瓦器碗などが出土している。



第59図 A地区井戸 S E 60実測図

ている。

井戸 S E 106 調査地の中央部で検出した。井戸の規模は、掘形の直径約2.1m・深さ約1.26mの円形に掘られた井戸である。井戸枠は残っていないが、井戸の底には、直径約0.6mの掘り込みがあり、曲物が埋設してあった。

井戸 S E 108 S E 106の西で検出した。井戸の規模は、掘形の直径約1.2m・深さ約1.0mを測る。井戸の底には直径約0.65mの掘り込みがあり、円形に縦板を立てて井戸枠とし、底には曲物が埋設してあった。この井戸は、S B 153の柱穴を切っており、S B 153より後に掘られている。

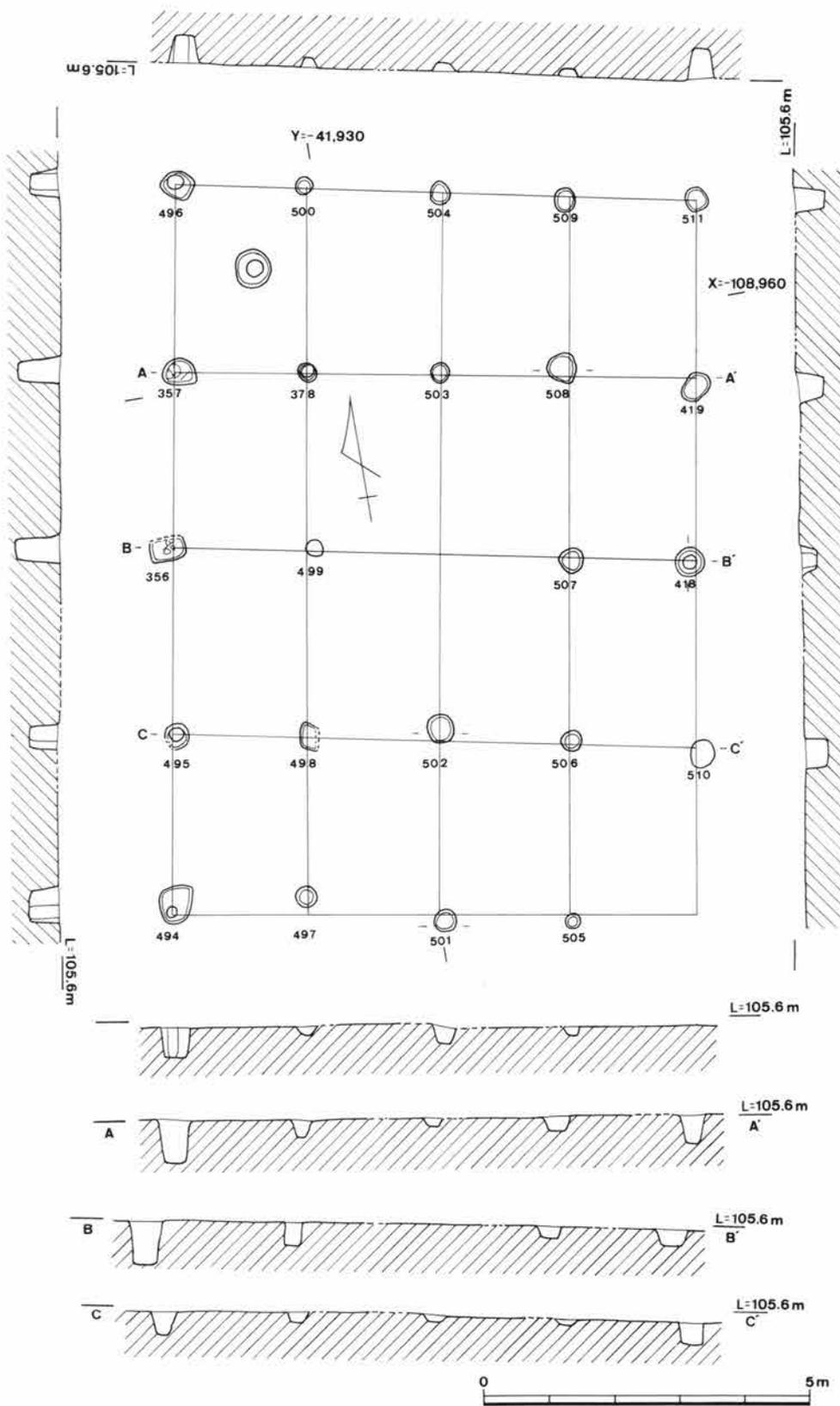
井戸 S E 142 S E 106と S E 108の中間で検出した小形の井戸である。井戸の規模は、掘形の直径約1.2m・深さ約0.75mの円形井戸である。井戸の底には、小形の曲物が2段埋設してあった。埋土内より瓦

器碗が2個体出土している。

井戸 S E 143 B-2 地区の東端の拡張により検出した。井戸の規模は、掘形の直径約2.3m・深さ約1.5

mを測る。横棧型式縦板組の井戸である。井戸の枠は一辺約50cmの方形で、厚さが1cm以上で、幅が10cmほどの板を縦板として使用しており、井戸の底には横方向に柄組みした棧木が残っていた。井戸の埋土からは、多量の瓦器碗が出土した。

土坑 S X 109 調査地の西寄り
で検出した。土坑の規模は、掘形の直径約0.7m・深さ約0.5mの円形土坑で



第60図 B-1 地区掘立柱建物跡 S B 149実測図

ある。坑内には割石の立石と根石が置かれ、瓦器椀と土師器皿が埋置されていた。

この他、B-2地区内では、中世の土器を出土する多くの溝を検出している。調査地北辺のSE92の東では「L」字に曲がる区画溝群があり、その他の場所でも同一方向もしくはこれに直交する溝が掘られている。これらの溝がA地区やB-1地区と方向を異にしているのは、地形の影響を受けたものと考えられる。

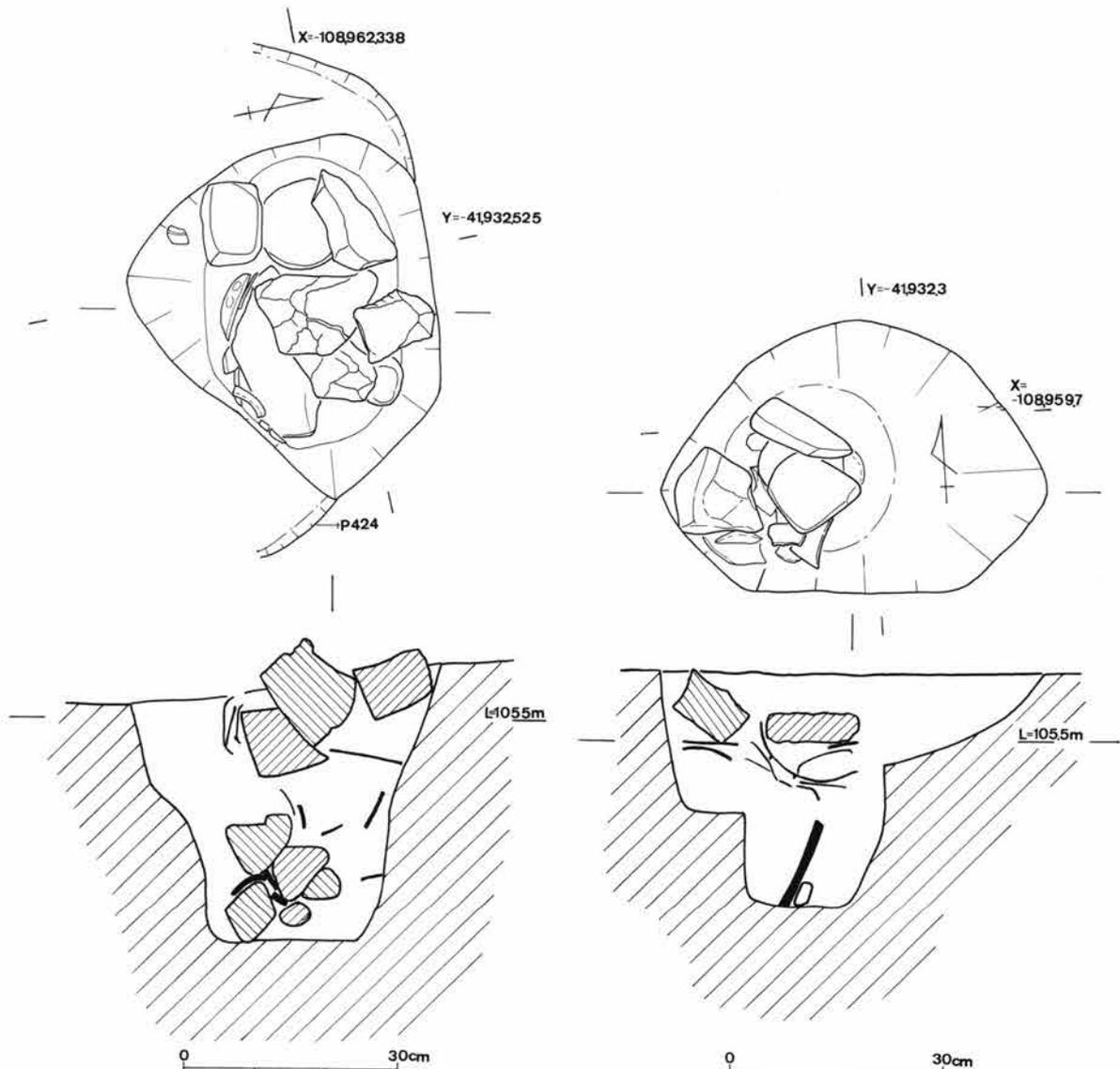
地震跡 S X 88・117・118・135 A地区の南東部からB-2地区の西半部にかけて検出した地震による断層である。北西方向から南東の方向に走る亀裂で、北東方向への沈下が認められる。

(戸原和人)

(5)太田遺跡で認められた地震の痕跡(図版第44-(3))

発掘区のA地区・B-2地区において、地割れ・砂脈などの地震跡が検出された。

地割れは、北西から南東方向に雁行するものと、南北にのびるものが認められた。鎌倉～室町時代の遺物を含む黒灰色の腐植質粘土層、および下位の地層を切断しており、東西方向の引張力



第61図 B-1地区柱穴P-357実測図

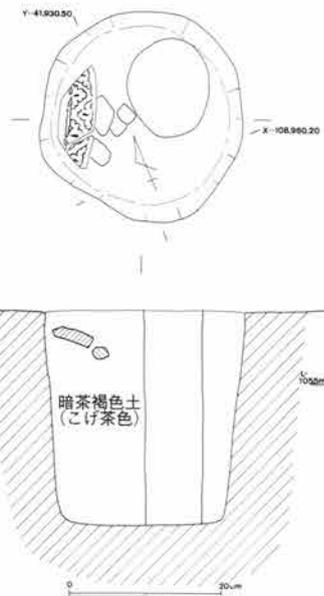
第62図 B-1地区柱穴P-356実測図

を受けて生じたと考えられる。また、幅数cm以内の砂脈がさまざまな方向にのびていた。

一方、2基の石組み井戸(S E 65・92)が変形を受けて、半円形の平面形態を示していたが、東に向かって地盤が流動したことに伴う変形と思える。

これから、激しい地震動によって液状化現象が発生し、噴砂が流出するとともに、液状化した砂層を覆う表層地盤が東に向かって少し流動したことが推測できる。

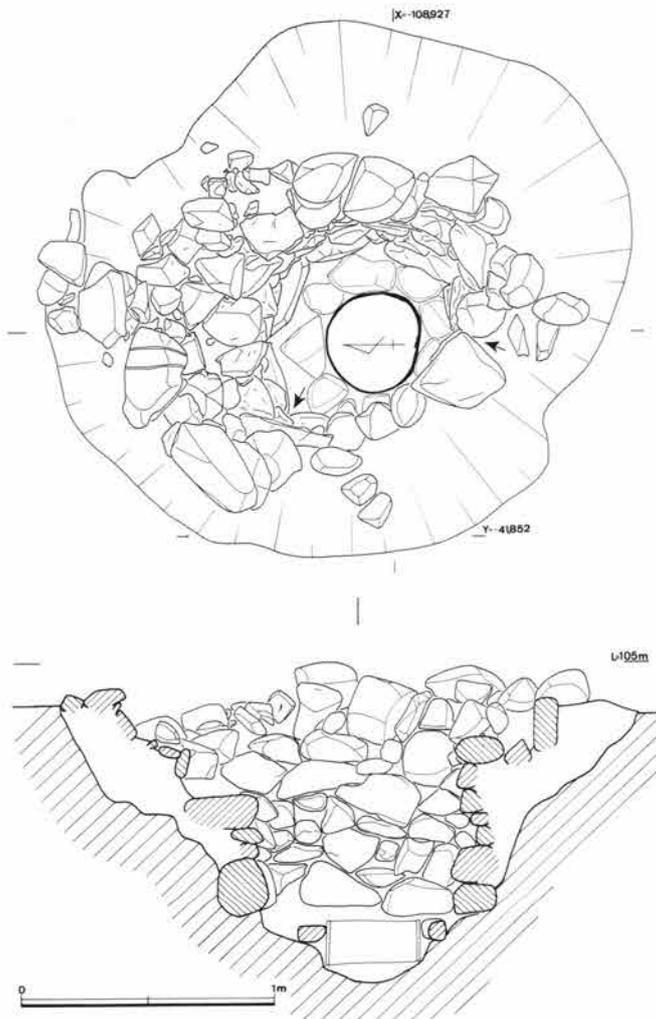
地震の痕跡は、鎌倉～室町時代の遺物を含む地層を切っており、室町時代以降に生じた地震の産物と思われる。そして、1596(文禄5・慶長元)年の伏見地震が、有力な候補に上げられる。



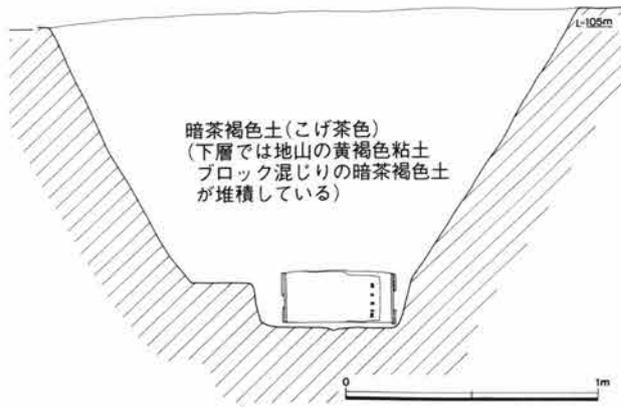
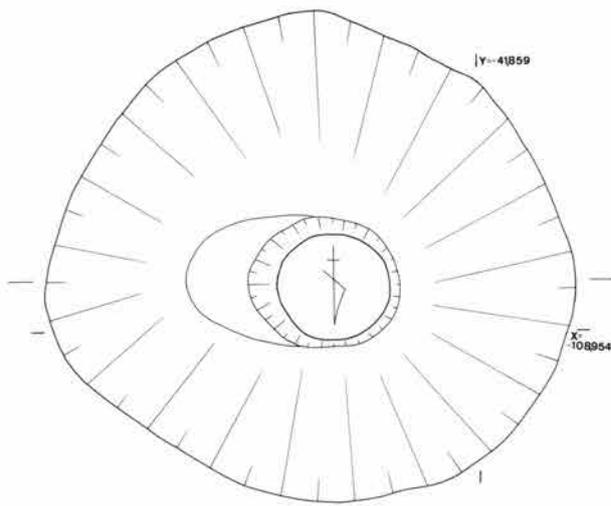
(寒川 旭) 第63図 B-1地区
柱穴P-378実測図

4. 出土遺物(第77～88図・図版第45～48)

今回の調査で出土した遺物には、縄文時代から近世までの各時代の遺物がある。縄文時代の遺物では、B-2地区のS D 94から出土した有舌尖頭器と、A地区のS H 127の埋土中より出土した縄文土器片がある。弥生時代の遺物では、A地区の竪穴式住居跡S H 12から出土した甕があり、石器ではB-2地区のS D 93と包含層中から、平基式と凸基式の打製石鎌がそれぞれ各1点ずつ出土している。さらに同地区の包含層中からは、太型蛤刃石斧1点が出土している。古墳時代の遺物では、A地区の竪穴式住居跡S H 130から出土した壺口縁や、B-2地区で検出したP-367から出土した須恵器杯身、同地区の包含層中より出土した須恵器甕などがある。飛鳥時代の遺物は包含層中よりわずかな須恵器片などが出土したにすぎない。奈良・平安時代の遺

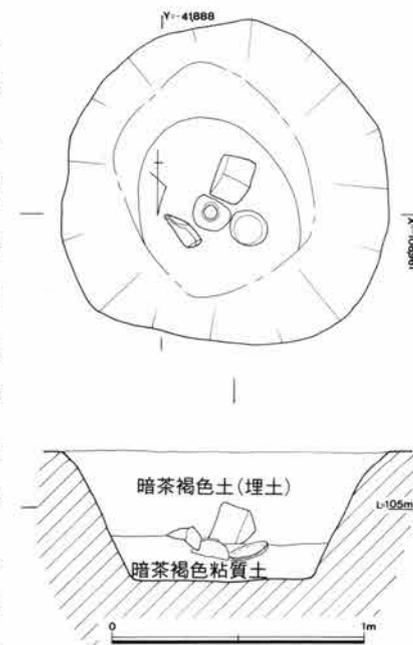


第64図 B-2地区井戸S E 92実測図

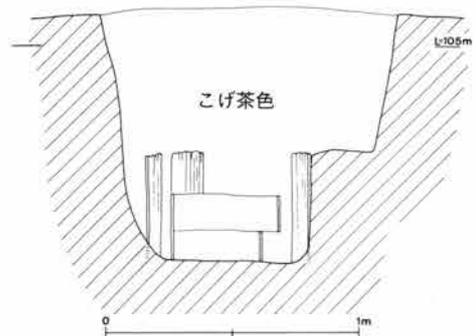
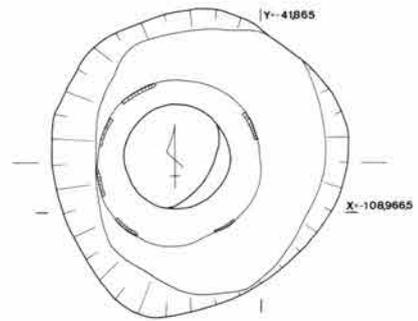


第65図 B-2地区井戸S E106実測図

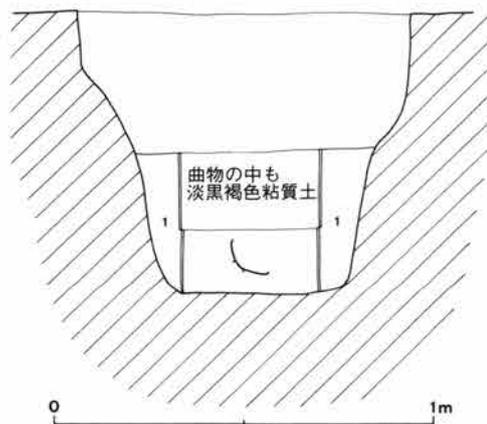
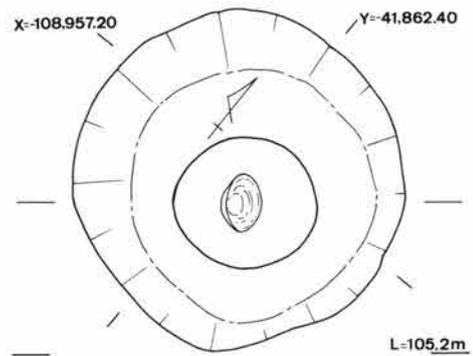
物では、B-1地区のSD89から出土した須恵器鉢・土師器碗、A地区の井戸S E81から出土した須恵器杯B・土師器杯・土師器甕・須恵器甕などや、無釉陶器・緑釉陶器などがある。またこの時代の木製品として、井戸S E81から出土した井戸枠材や同井戸中より曲物底板など



第67図 B-2地区井戸S E109実測図

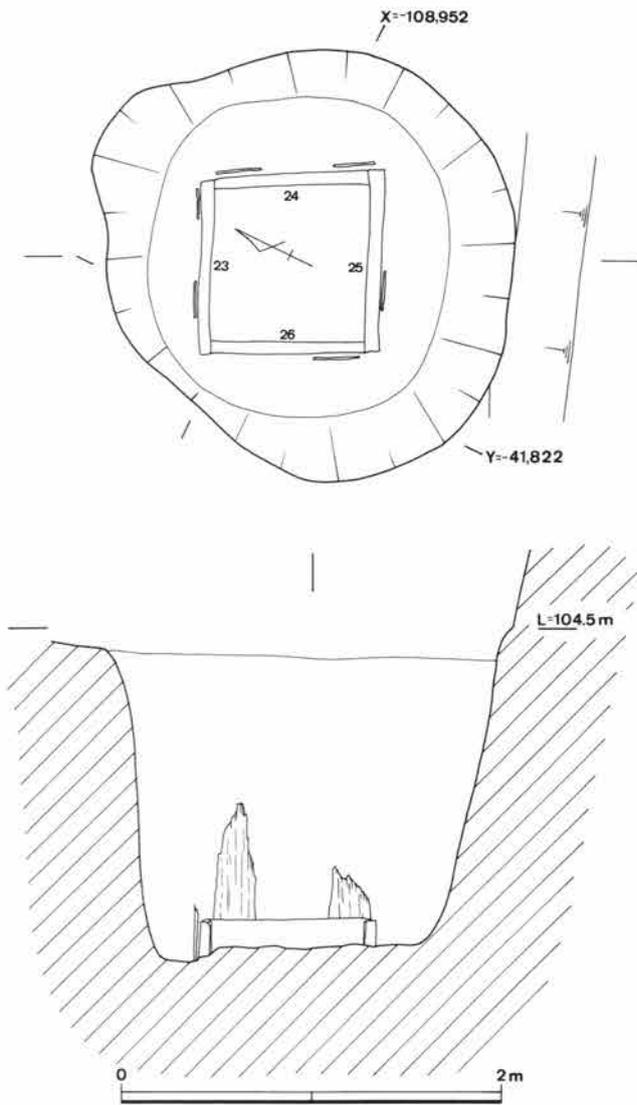


第66図 B-2地区井戸S E108実測図



第68図 B-2井戸S E142実測図

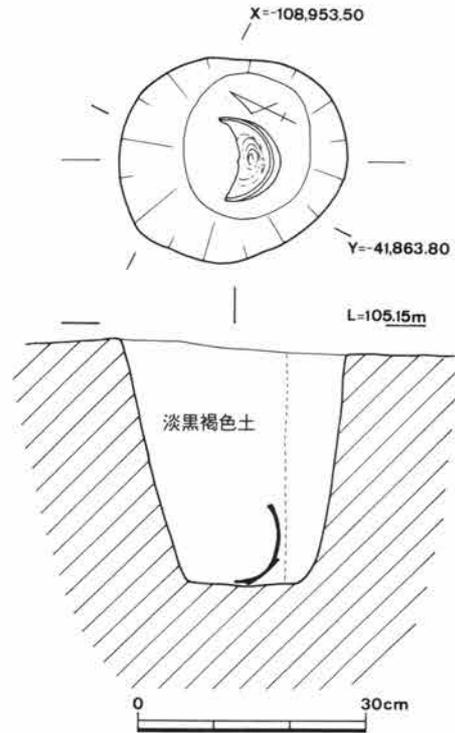
1.濁淡黒褐色砂質土



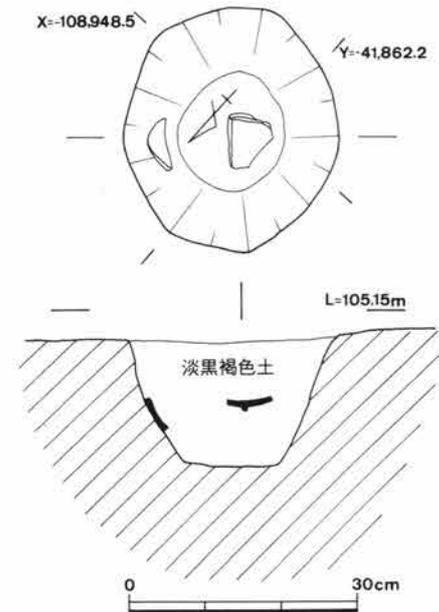
第69図 B-2地区井戸SE143実測図

とともに、栗や瓢箪の果皮なども出土している。鎌倉・室町時代になると、各地区で検出した井戸や柱穴・溝・土坑から、数多くの瓦器碗や瓦質製品とともに、貿易陶磁器が出土しており、B-1地区で検出した掘立柱建物跡SB149の柱穴からは、土師器皿や須恵器杯などともに軒平瓦がはじめて出土している。

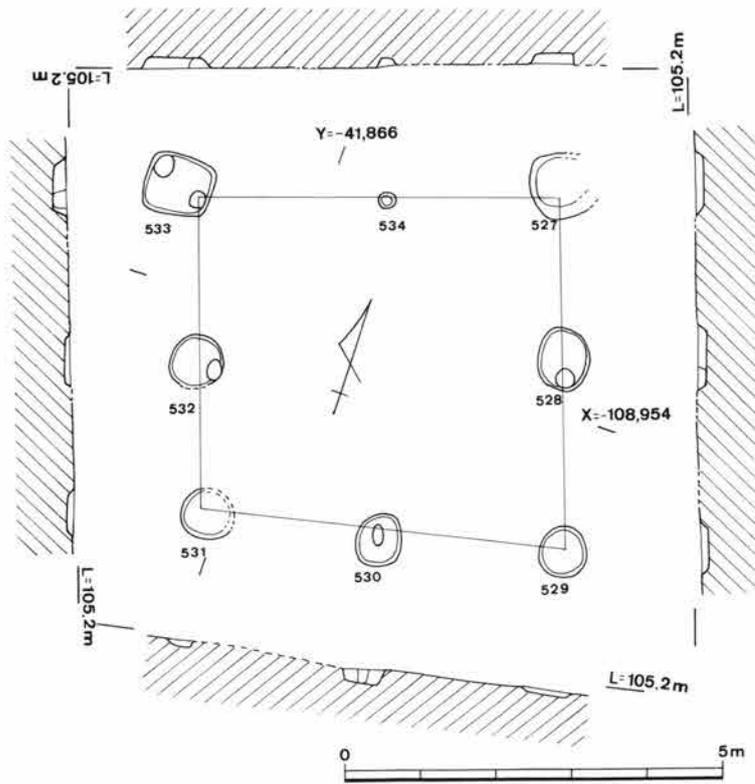
竪穴式住居跡SH12(第77図・図版第45) 住居内より完形の甕を含む壺・鉢など10点が出土している。1は、口径5.4cm・器高27.2cmを測り、頸部から斜め上方に開き、端部はつまみ上げている。内外面ともハケ調整を施す。2は、近江系の甕で口径14.9cmを測る。外面の頸部以下にハケ調整、内面にヘラミガキを施している。4の壺は、口径7.8cm・頸部高5cmを測り、タマネギ状の体部に直行する頸部をもつ。頸部は内外面ともハケ調整で、体部外面ハケ調整である。7の鉢は、「く」字に開く口縁の端部をつまみ上げる。内外面ともハケ調整で、口縁部内面は横方向



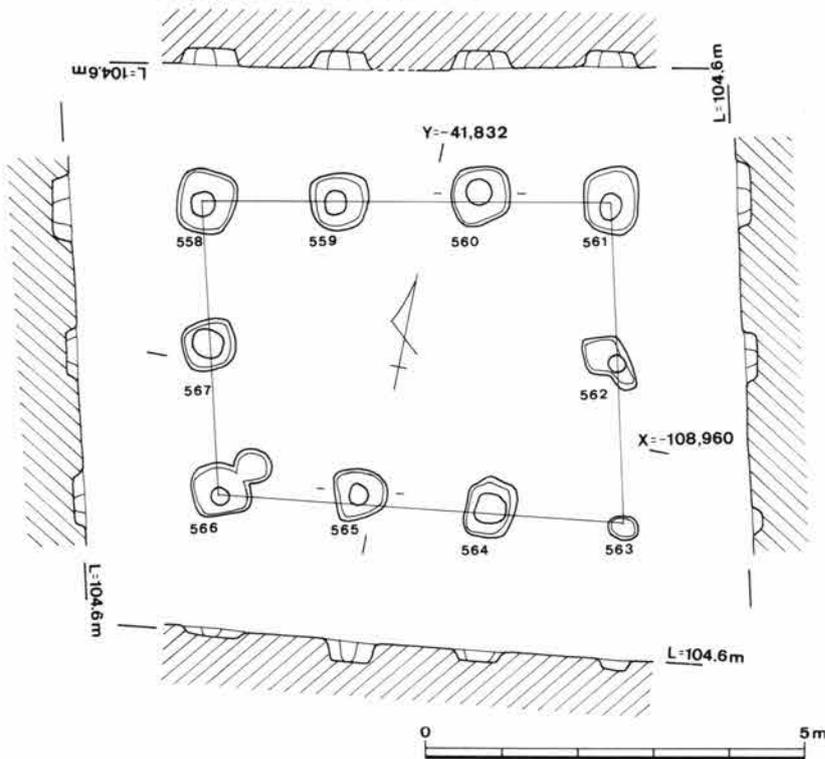
第70図 B-2地区柱穴P-416実測図



第71図 B-2地区柱穴P-415実測図



第72図 B-2地区掘立柱建物跡SB153実測図



第73図 B-2地区掘立柱建物跡SB156実測図

あるが、古墳時代の井戸と考えられる。

井戸SE81(第78図・図版第46) 21の土師器杯と24の須恵器杯B、28の甕が井戸底から出土した。そのほかの遺物は埋土中からの出土である。特に、29の備前すり鉢は地震による陥没中の埋

のナデを施す。13は、堅穴式住居跡SH127から出土した縄文土器である。14の有舌尖頭器は、SD94から出土した。チャート製で、長さ9.5cm・幅5.8cm・厚さ0.6cmを測る。15の平基式石鏃は、B-2地区包含層出土である。サヌカイト製で、長さ6.3cm・幅4.4cm・厚さ0.35cmを測る。16の凹基式石鏃は、SD93出土である。サヌカイト製で、長さ4.3cm・残存幅2.9cm・厚さ0.4cmを測る。17の太型蛤刃石斧は、B-2地区包含層出土である。刃部先端のみの残存で、刃部幅5.5cm・厚さ3.3cm・残存長4.3cmを測る。

井戸SE78(第78図) 18は土師器の脚である。脚径9.2cm・高さ2.3cmを測る。調整は内面ハケ、外面ミガキを施す。19は須恵器杯蓋で、口径10cm・残存高2.2cmを測る。20は土師器の甕口縁である。口径20.6cmを測る。出土遺物がわずかで

土からの出土で15世紀頃のものである
うか。井戸は、9世紀初頭のものと考え
えられる。

掘立柱建物跡S B 146(第78図) 柱
穴内より須恵器杯蓋30・31と杯身32～
34が出土している。

掘立柱建物跡S B 161(第78図) 柱
穴内より口径/器高が、14.5cm/5.0cm
の瓦器椀35と同じく6.0cm/1.5cmの土
師器小皿36、7.1cm/1.7cmの小皿37・
7.8cm/1.2cmの小皿38、同じく
10.4cm/1.9cmの皿が出土している。

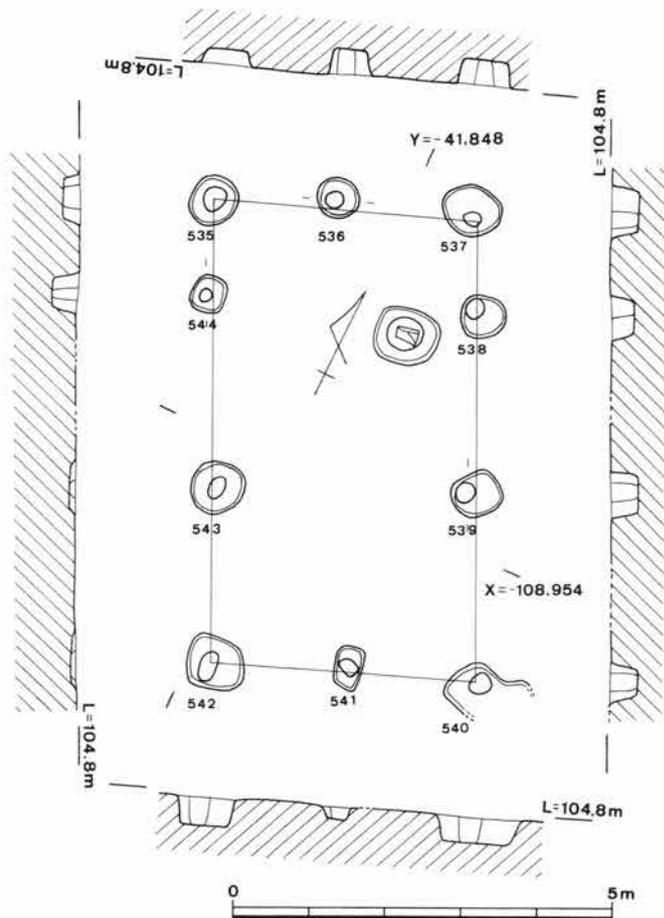
井戸S E 64(第78図・図版第46・47)
口径/器高が、8.4cm/1.45～1.6cmの土
師器小皿42・43、同じく14.4cm/2.5cm
の皿44と14.3～15.7cm/4.7～5.5cmの
瓦器椀45～47とともに、口径33.8cmの
甕49が出土している。

井戸S E 60(第79図・図版第45～48)

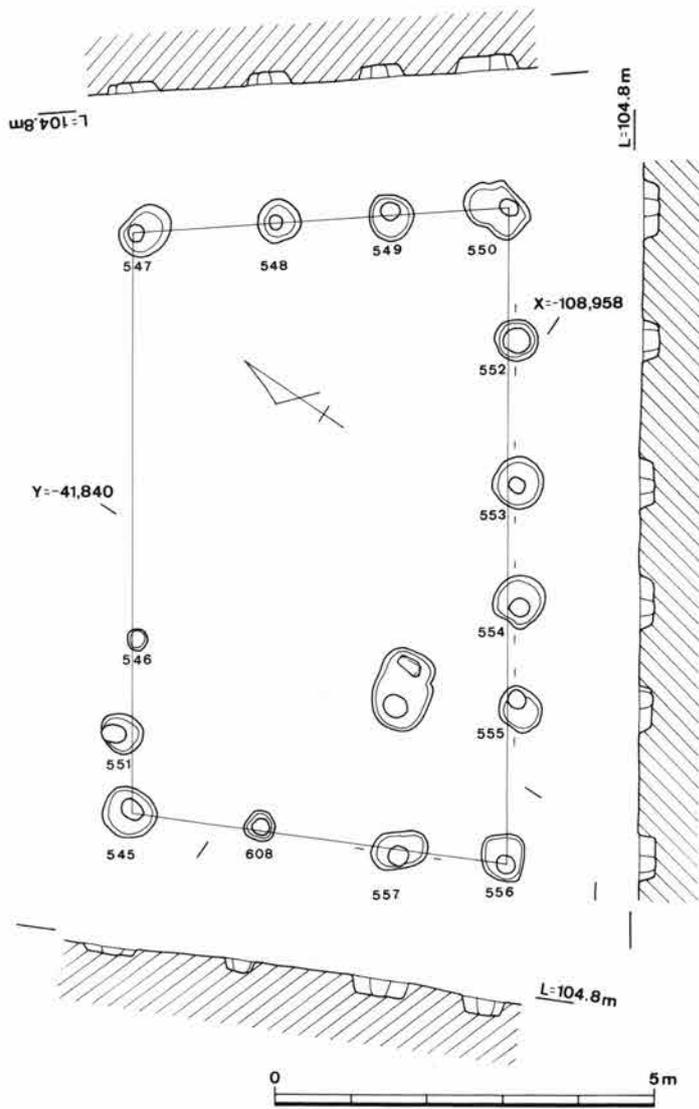
埋土内の遺物としては、口径/器高が、8.4～9.5cm/1.2～1.4cmの土師器小皿50・51、同じく13.0～14.5cm/2.5cmの皿52・53と小振りで13.3～13.7cm/4.4～5.0cmを測る54～57、大振りで14.2～15.0cm/5.3～5.7cmを測る58～61の瓦器椀が出土している。白磁椀62は口径16cmを測る。このほか、鍋64、羽釜65～67などがある。掘形内の遺物としては、口径/器高が、8.0～8.4cm/1.4cmの土師器小皿68・69、同じく11.2～13.5cm/2.0cmの皿70・71、14.7cm/5.0～5.5cmを測る72～74の瓦器椀が出土している。このほか、東播系の鉢75・76、滑石製の石鍋77などがある。

井戸S E 62(第80図・図版第45・47・48) 埋土内の遺物としては、口径/器高が、7.2～8.2cm/0.95～1.75cmの土師器小皿86～89、同じく13.2cm/3.0cmの皿90と小振りで10.1～13.2cm/3.9～4.7cmを測る78～80・82・83・84、大振りで14.6cm/5.0～5.3cmを測る81・84・85の瓦器椀が出土している。このほか、台付皿91、土師器鍋92、瓦質鍋93、羽釜94～97、口径39cmの甕98、龍泉窯青磁椀の底部99・100などがある。掘形内の遺物としては、口径/器高が、7.7～8.5cm/1.3～1.6cmの土師器小皿104～106と、12.0～12.6cm/4.3～4.7cmを測る瓦器椀が出土している。このほか瓦質の擦鉢109・羽釜110龍泉窯青磁の底部111・石製の硯112などが出土している。

井戸S E 65(第81図・図版第48) 埋土内の遺物としては、口径/器高が、7.2～9.0cm/1.0～1.6cmの土師器小皿117～121、同じく11.3cm/1.8cmの皿122と12.4～13.4cm/4.0～4.5cmの瓦器椀113～116とともに口径37.5cmの甕123が出土している。掘形内の遺物としては、口径32cmの東播



第74図 B-2地区掘立柱建物跡S B 154実測図



第75図 B-2地区掘立柱建物跡S B 155実測図

古瀬戸の袴腰形香炉178等が出土している。

溝跡S D 89(第83図) 179は口径13.2cm、180は口径/器高が、2.8cm/5.5cmを測る。外面下半は指押さえ、上半はケズリ、内面にはヘラミガキを施す。181は須恵器鉢で口径23cmを測る。

掘立柱建物S B 149(第78図・図版第45・48) いくつかの柱穴内に、柱抜き取り後、石とともに土器を埋納している。P-356からは184・192が、P-357からは、182・183・185~189・190・191が、P-378からは100が出土した。土師器小皿167・168は、口径/器高が8.8~9.0cm/1.6~2.0cmを測り、瓦器椀には小振りの12.0~13.2cm/5.0cmの182・183と大振りの15.0~16.0cm/4.8~5.4cmの184・185がある。186は口径/器高が13cm/6.4cmを測る土師器椀である。このほか、口径27.4cmの鉢189と、口径28.8cmの192、30.5cmを測る190の甕がある。191は中国製の褐釉四耳壺である。100の宝相華文軒平瓦は、半截の宝相華文3個を上下に交互に配置する意匠で、文様は線画風に簡略化している。成形技法は、平瓦端部を折り曲げて瓦当裏面を叩く「折曲技法」により、平瓦凸面は縦方向の縄タタキ目を施し、頸部から頸部にかけては横方向の縄タタ

系鉢124、青磁口ハゲの皿125、輪花文青磁126などが出土している。

溝跡S D 57(第82図・図版第47)

口径/器高が、7.8~8.8cm/1.4~1.6cmの土師器小皿149~152、同じく11.6cm/2.0cmの皿153と12.4~14.4cm/3.6~4.4cmの瓦器椀143~148とともに、11.0~11.8cm/7.2cm前後の台付皿154~161、口径26.8cmの鉢165、口径30cmの擦鉢166が出土している。

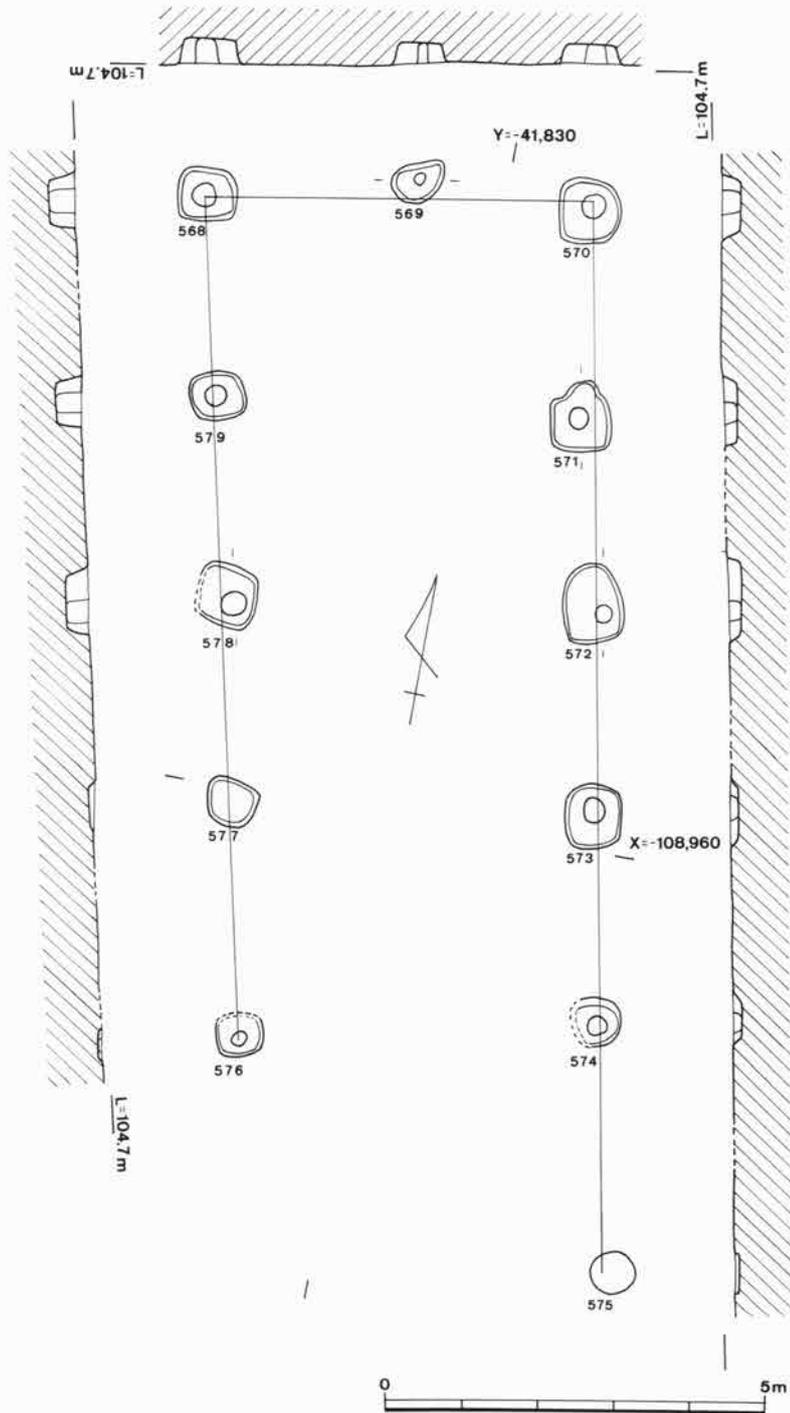
土坑S K 61 口径/器高が、9.0cm/1.2cmの土師器小皿169と、口径25cmを測る甕170、口径27cmを測る瓦質の鉢171などが出土している。

土坑S K 63 口径/器高が、7.6cm/1.4cmの土師器小皿172と口径17cmを測る羽釜174、底部が糸切りの須恵器小壺などが出土している。

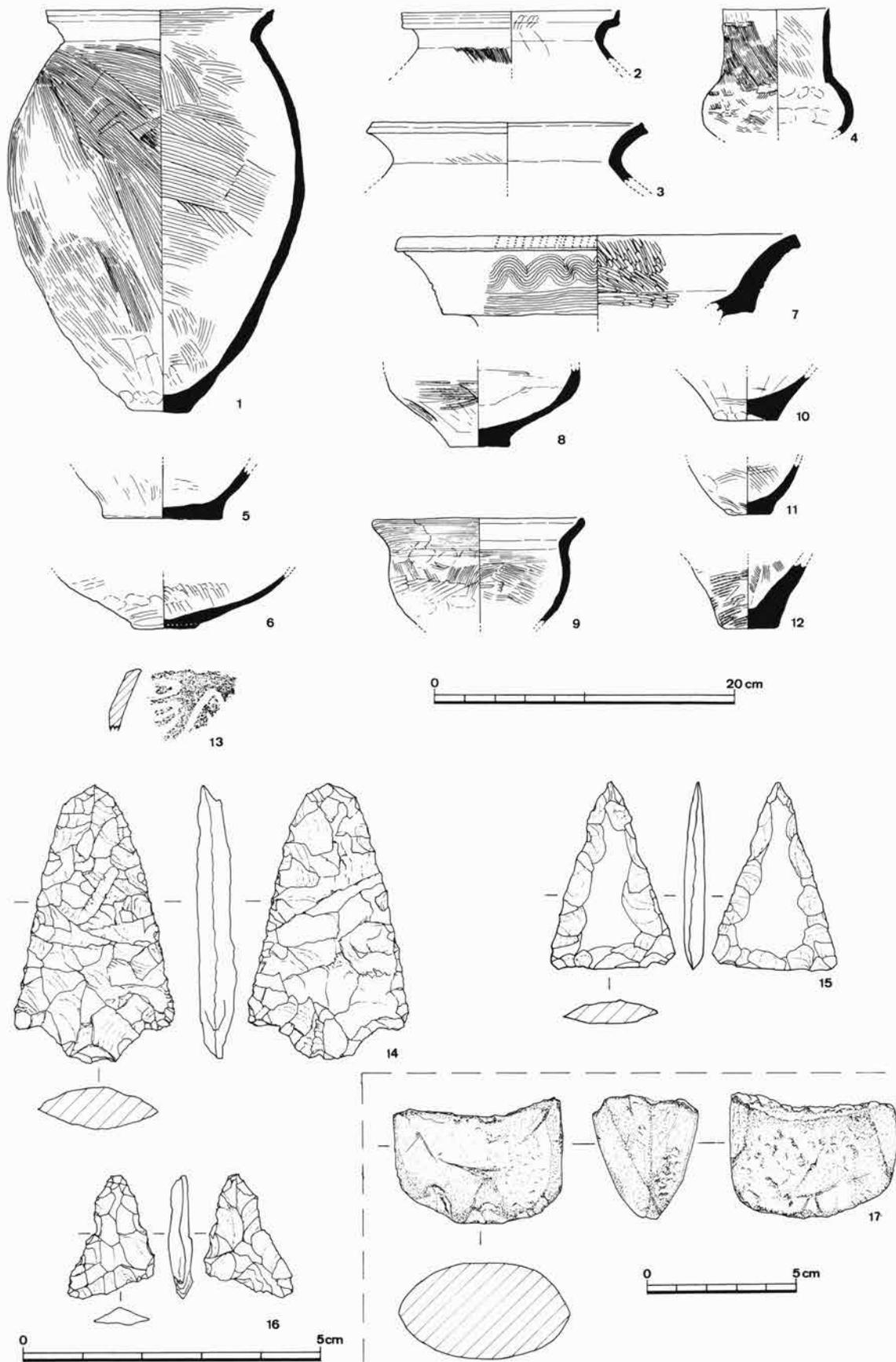
土坑S K 70(図版第48) 口径/器高が、7.6cm/1.4cmの土師器小皿177と13.0cm/3.6cmの瓦器椀175とともに口径15cmを測る白磁の口縁176、

キ目を施し、そのまま残している。これらの技法は、丹波産瓦の特徴とされるもので、園部窯跡群採集の瓦に認められる。また、同文様の瓦は、亀岡市篠町に所在する11世紀後半～12世紀前半とされている三軒家窯跡と、同市観音芝麿寺からも出土例があるが、これらの范型の文様は肉彫りされている。京都市内では、平安京三条西殿跡・仁和寺・鳥羽離宮南殿跡に出土例があり、折曲技法による12世紀後半の製品も出土している。溝跡 S D 91からは、口径12.4cmで器高4.0cmを測る瓦器椀193と口径32cmの甕、土錘などが出土している。

井戸 S E 92(第84図・図版第47) 土師器小皿202～204は、口径/器高が、7.4～8.8cm/1.2～1.4cmを測る。瓦器椀には口径/器高が、11.0cm/4.0cmの198、12.0cm/3.6～4.6cmの199・200、13.0cm/4.2～4.6cmの196・197がある。このほか、口径30.4cmの甕がある。井戸 S E 106では、須恵器杯A・B、土師器皿が出土している。206は、口径/器高が11.0cm/4.0cmを測る。207は、口径/器高が14.6cm/4.6cmを測る。210には、墨痕状の痕跡が認められる。井戸 S E 143では、瓦器椀の口径/器高が、14.6cm/5.0cmの219、15.0cm/5.0～5.4cmの218・220～222・224、15.4cm/4.8～5.2cmの223・225がある。外面にミガキを施すもの218～221・224・225が多く認められ、S E 64同様古相を示す。また、井戸 S E 142では、瓦器椀の口径/器高が、12.3cm/4.0cmの288、12.6cm/4.2cmの287が出土し



第76図 B-2地区掘立柱建物跡 S B 157実測図



第77図 出土遺物実測図(1)

1 ~ 6 : S H12

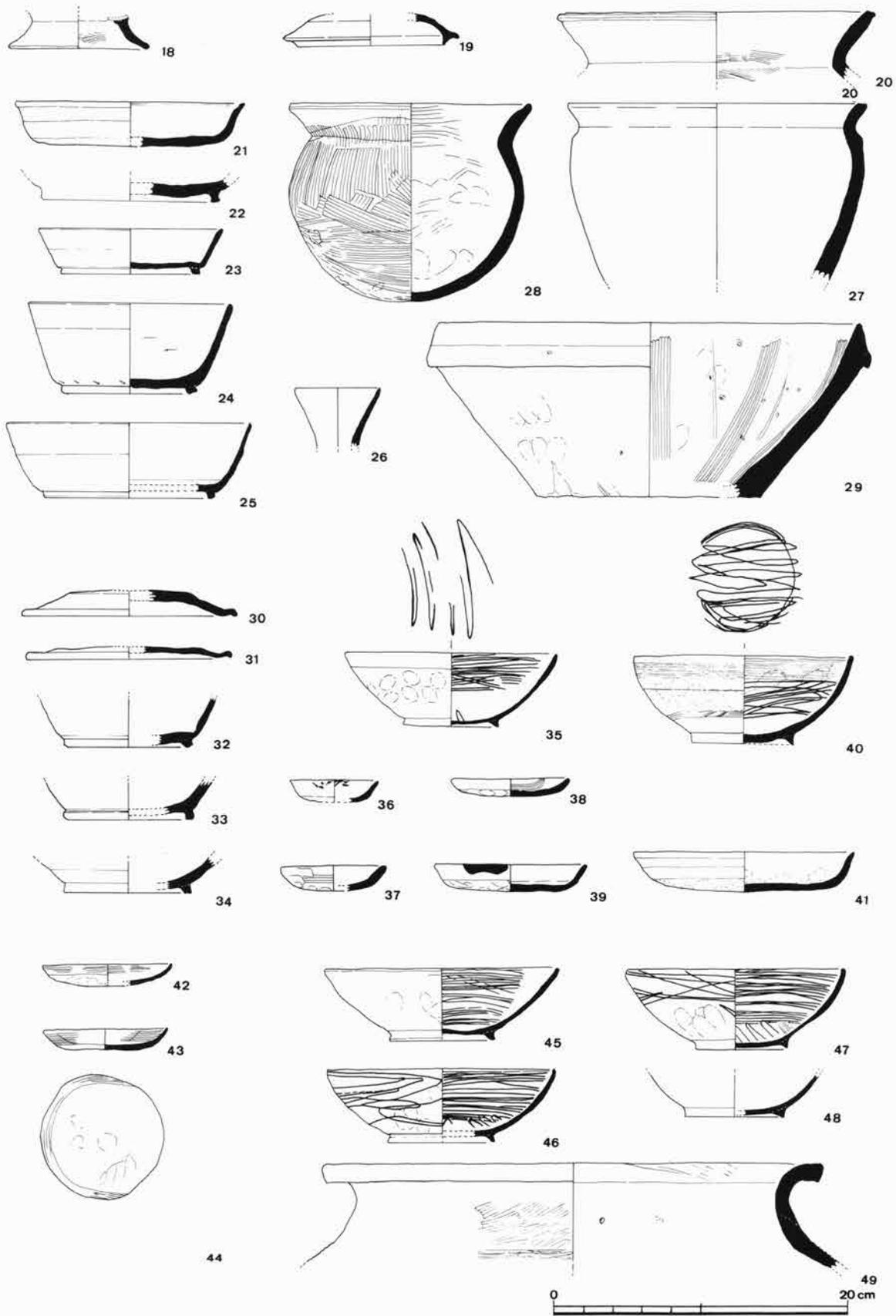
7 ~ 12 : S H130

13 : S H127

14 : S D94(B-2)

16 : S D93

15 · 17 : B-2 包含層



第78図 出土遺物実測図(2)

18~20 : S E 78

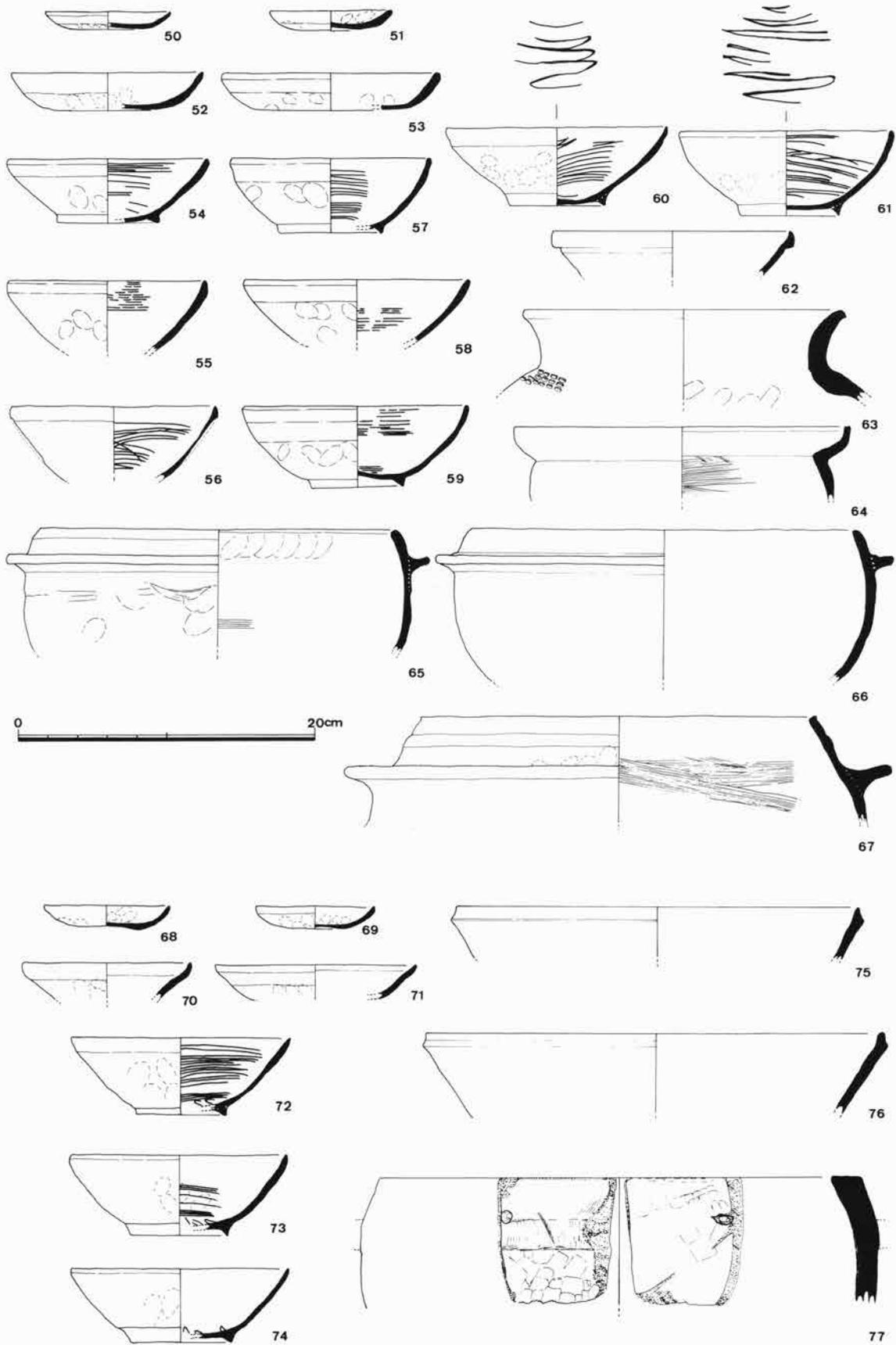
21~29 : S E 81

30~34 : S B 146

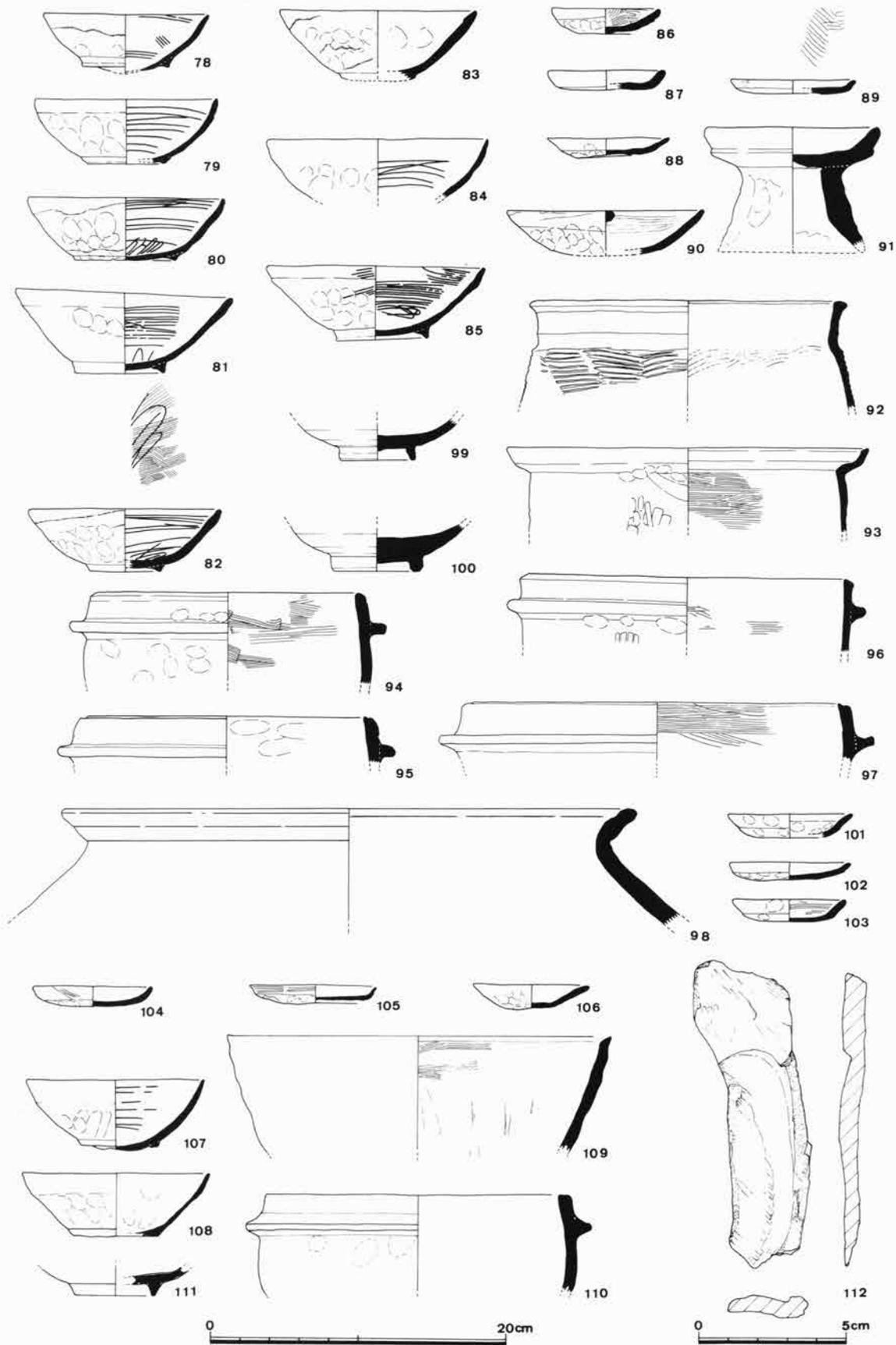
35~39 : S B 161

40・41 : S X 109(B-2)

42~49 : S E 64



第79図 出土遺物実測図(3)
 50~67: S E60埋土 68~77: S E60掘形



第80図 出土遺物実測図(4)

78~98 : S E62埋土

104~112 : S E62掘形

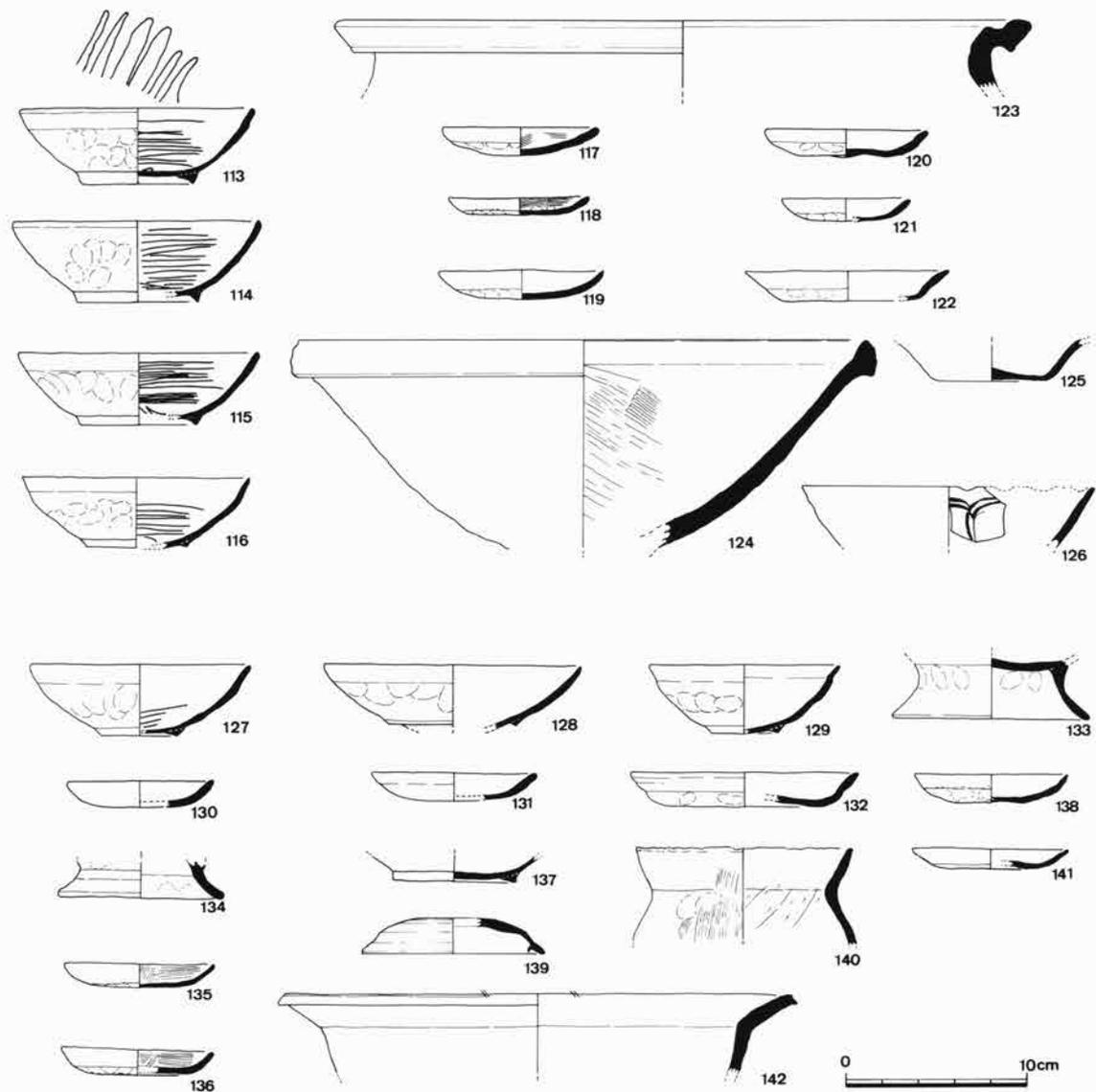
101~103 : S B61

ている。

溝跡 S D99(第85図・図版第48) 口径/器高が、12.4cm/4.0cmを測る瓦器碗227とともに、口径14.0cmを測る白磁228、鎬連弁の青磁碗230などが出土した。

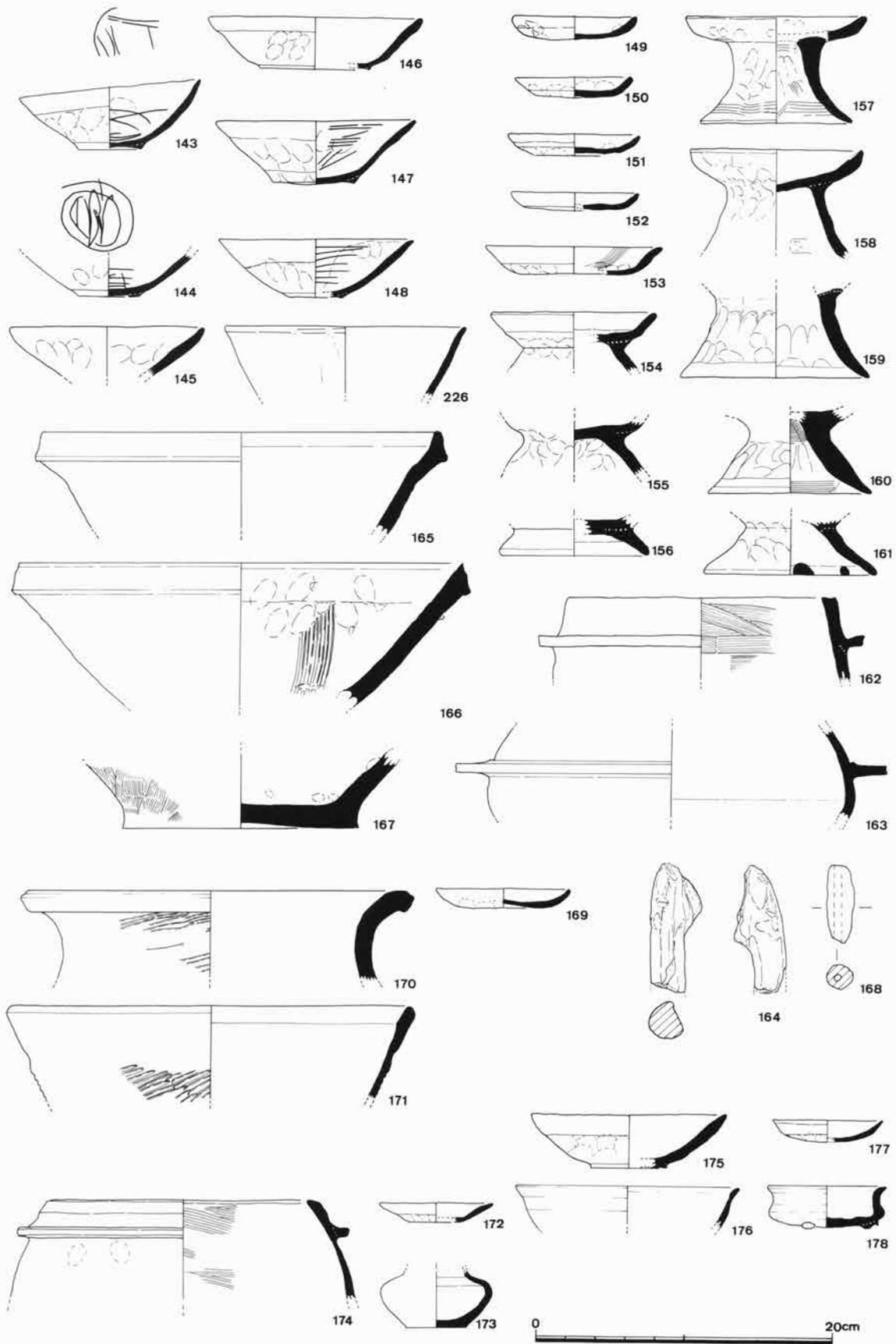
土坑 S X109(第78図) 口径/器高が、15.1cm/2.7cmの土師器皿41と15.0cm/6.0cmの瓦器碗が出土している。内外面ともていねいなヘラミガキを施しており、古相を示す。

この他の溝やピットから出土した遺物で、特徴的なものとしては、古墳時代の須恵器がP-382(242)・P-367(243)・P-460(244)からそれぞれ出土しており、奈良・平安時代の遺物では、地震の断層 S X117から黒色土器246、P-416からは、篠産の須恵器鉢247、P-460からは、中国産の白磁碗255が、P-394からは、櫛描きの白磁碗256が出土している。これらの他にも、包含層中から、近江系無釉陶器271、青磁皿283・284、瀬戸・美濃産の皿、滑石製の石鍋286など数



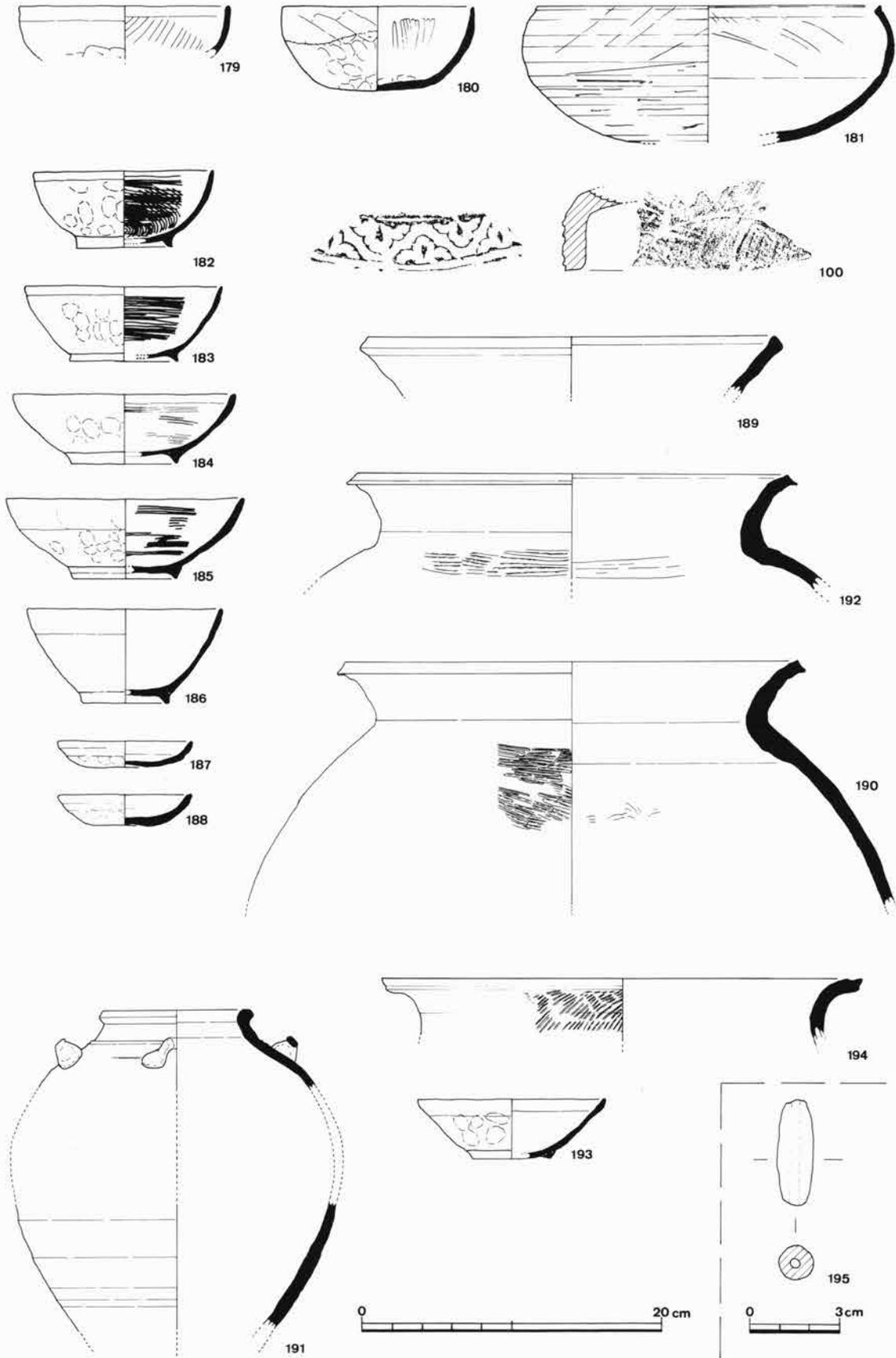
第81図 出土遺物実測図(5)

113~123 : S E 65埋土 124~126 : S E 65掘形 127~133 : S K 67 134~136 : S D 66 137 : S D 68
 138 : S K 71 139 : S D 72 140 : S D 75 141 : S D 76 142 : S D 80



第82図 出土遺物実測図(6)

143~168 : S D57 169~171 : S K61 172~174 : S K63 175~178 : S K70

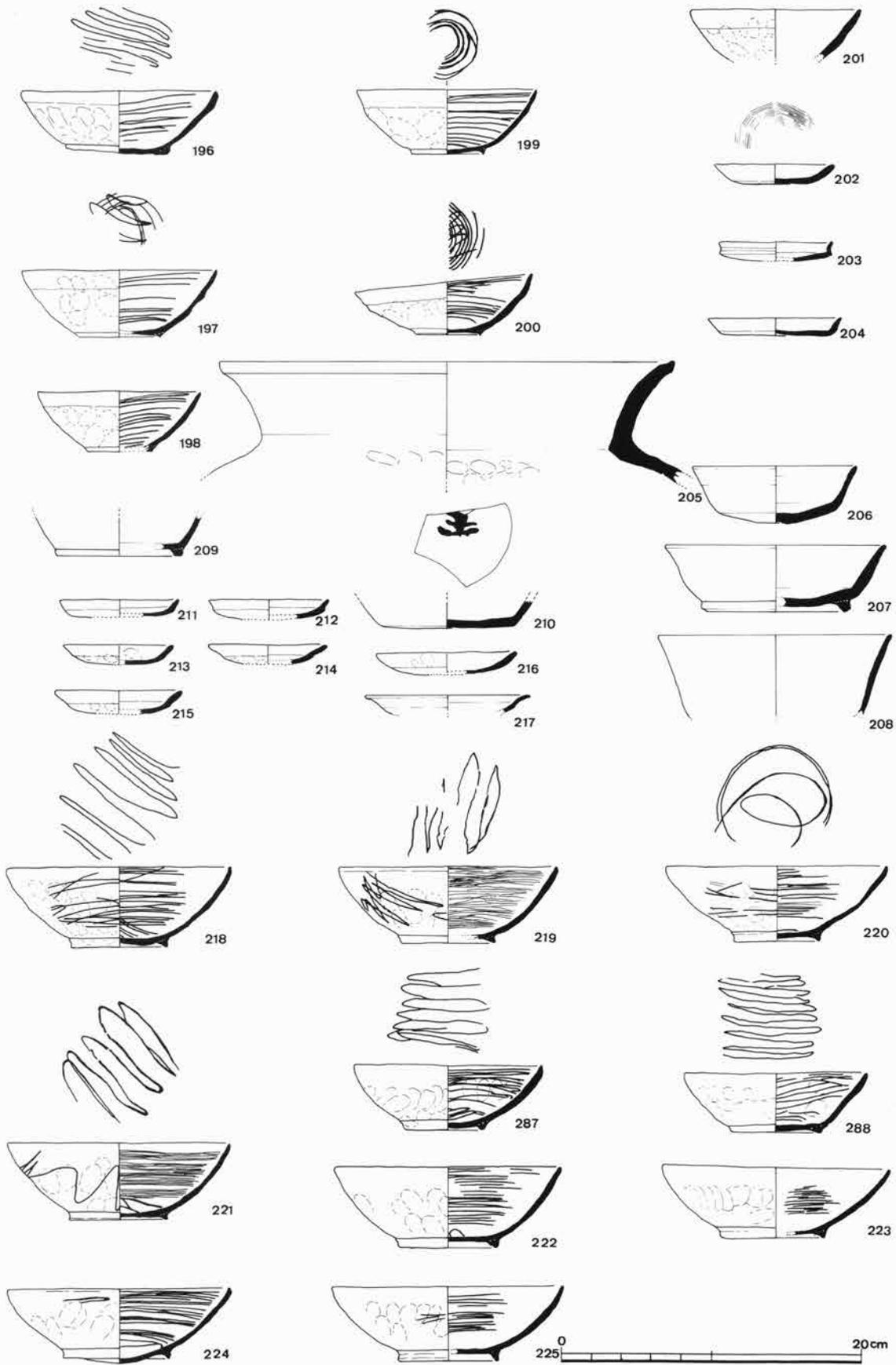


第83図 出土遺物実測図(7)

179~181 : S D89

182~191 : S B149

194・195 : S D91

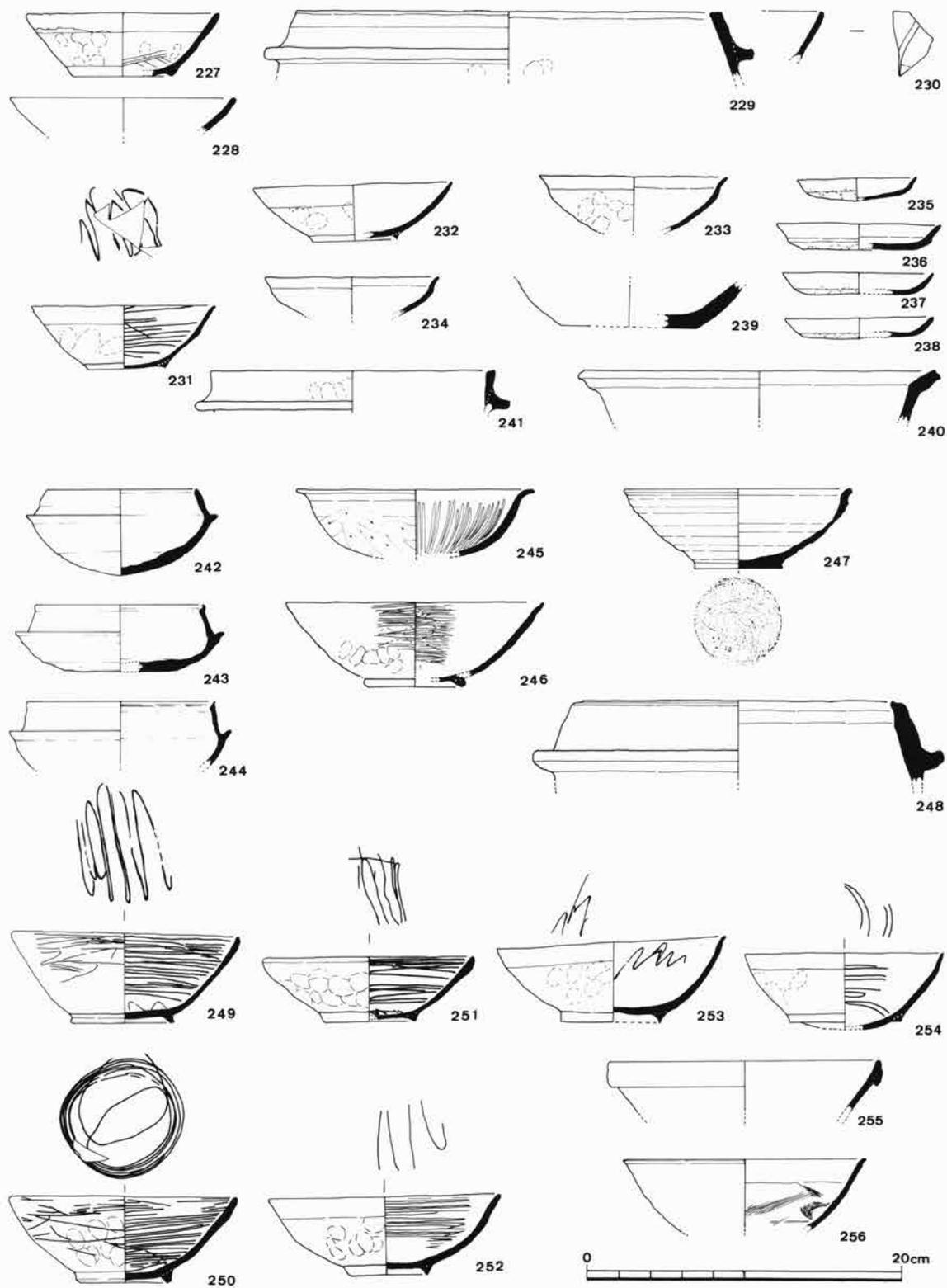


第84図 出土遺物実測図(8)

196~205 : S E 92

218~225 : S E 143

287・288 : S E 142



第85図 出土遺物実測図(9)

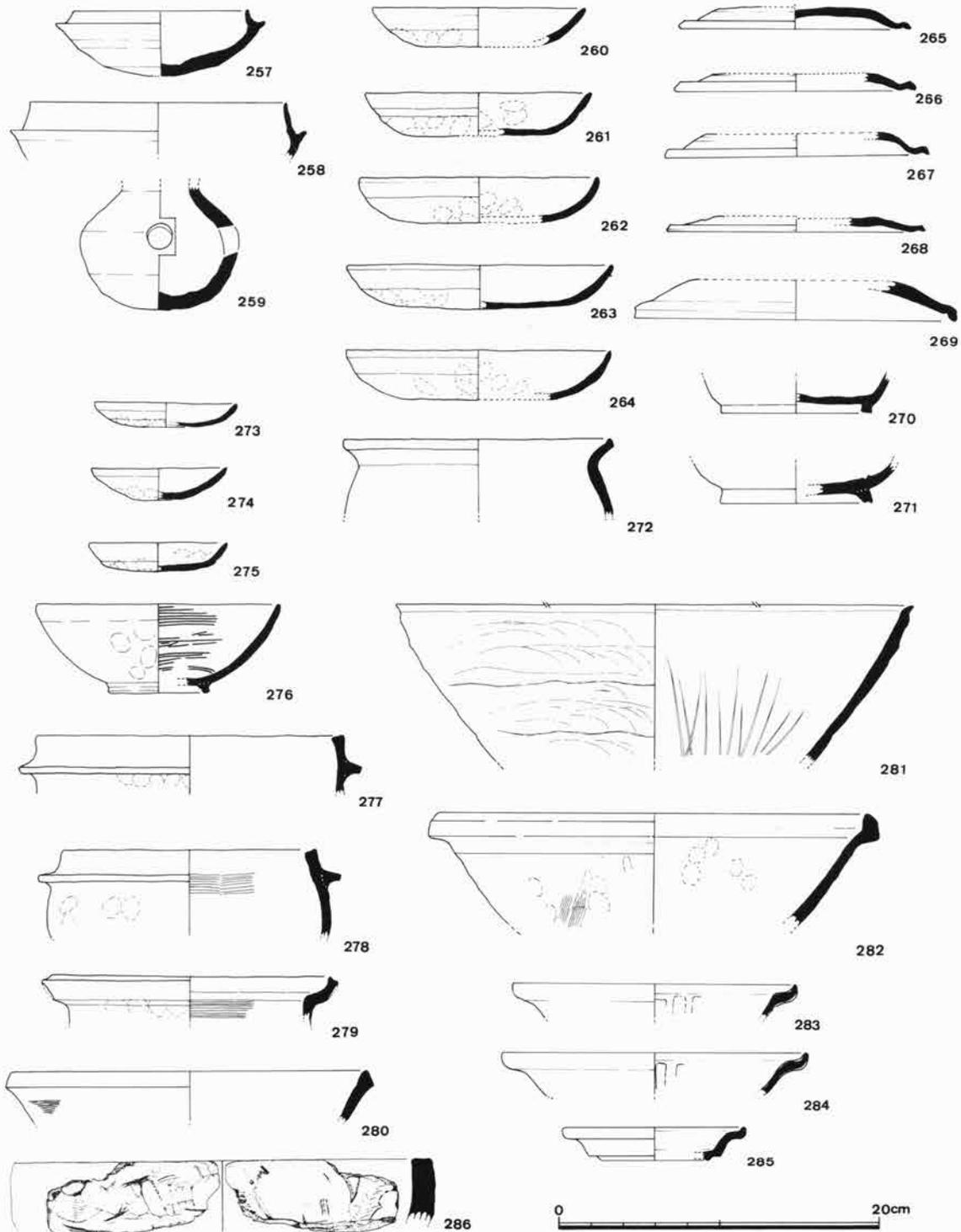
227~230 : S D 99

231~241 : S D 100

246~256 : 各地区ピット出土

多くある(図版第45・48)。

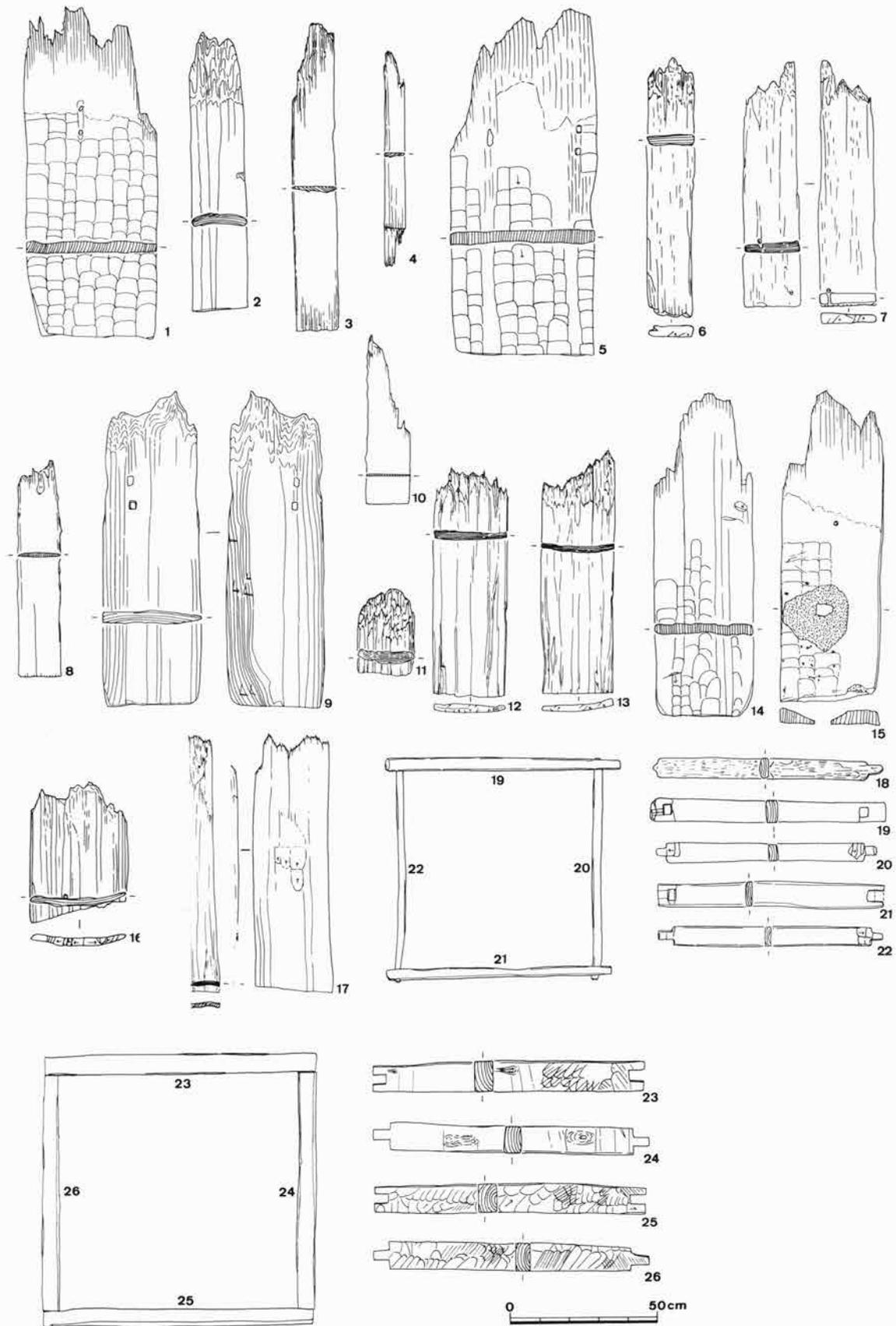
以上、各地区の遺構から出土した遺物を概観すると、おおむね以下の時期区分となる。すなわち、弥生時代後期のSH12、7世紀から8世紀にかけての遺物を出土したSE78、SD89、9世紀から10世紀の遺物を出土したSD89、SE81・106、SB146、12世紀中頃から末の遺物を出土したSX109、SE64・143、13世紀後半までの遺物を出土したSE60、SB149・161、SE65、



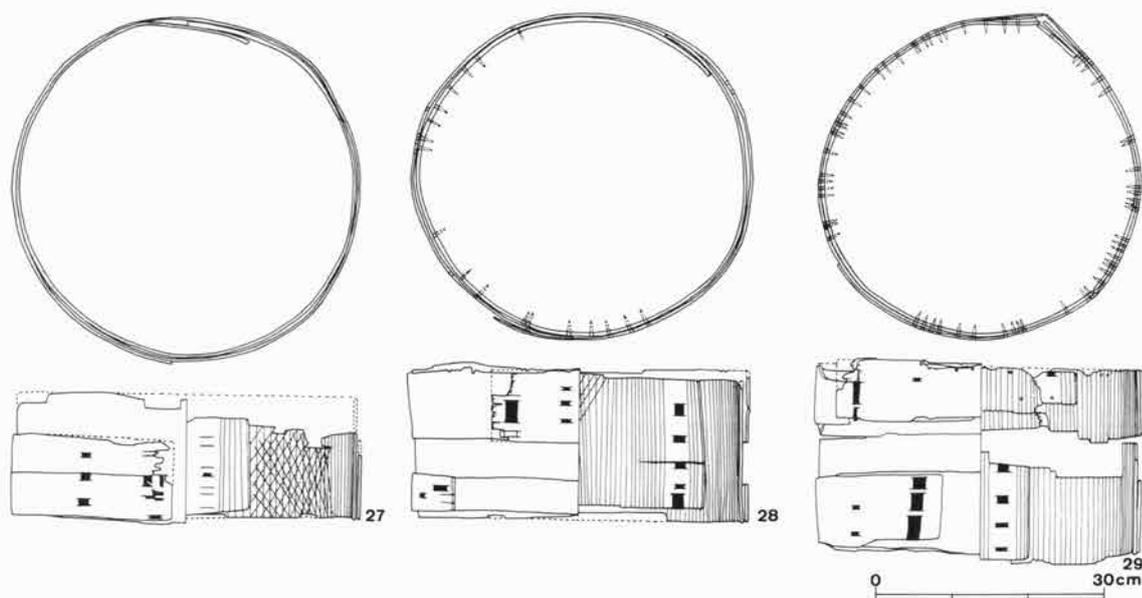
第86図 出土遺物実測図(10)

257~280・285: B地区包含層出土

281~284・286: A地区包含層出土



第87図 出土遺物実測図(11)
1~22 : S E 81 23~26 : S E 143



第88図 出土遺物実測図(12)

27: S E 92 28: S E 106 29: S E 108

13世紀後半から14世紀にかけての遺物絵を出土したS E 62・92、S K 70、S E 142、S D 100、S K 67、S D 99・57・91などとなり、量的にも地元丹波産瓦器碗の出土が圧倒している。

5. ま と め

今年度の調査も、圃場整備に関わる調査であった。平成7・8年度の亀岡市教育委員会・京都府教育委員会による試掘調査に始まり、平成9～12年度にかけての本調査では、数多くの成果があった。

調査地の北半に当たる太田地区の南側微高地では、平安時代から中世にかけての集落域が推定される状況が明らかとなってきた。その南の鹿谷地区の谷筋から流れていたとみられる旧河道をはさんで、佐伯の集落に接する河岸段丘状の微高地では、古墳～平安時代・中世の集落や墓域(古墳群)の様子が明らかとなってきた。これらの調査成果を今回の調査を中心にまとめると、以下のようなになる。

縄文時代草創期の有舌尖頭器や後期の土器片は、周辺での狩猟活動をうかがわせるものであり、弥生時代後期には住居域の様相を呈している。

古墳時代では、分布密度が低いものの、竪穴式住居跡や柱穴を検出しており、集落の縁辺部の状況と小型の古墳を新たに把握できた。

奈良・平安時代になると、掘立柱建物跡S B 146・140・141にみられるように、同じ規模の建物がN10～11°Eの傾きではほぼ一致する一群が見いだせる。これらの一群は、北の河岸段丘と南の河道の地形に規制されているようにもみえ、東西・南北約150mの中で整然と配置された可能性がある。このことは、一般の集落や個人住宅とは違った公的性格の強い建物群である可能性を

示していると考えられる。この地域では、「佐伯荘」の荘園領域が想定されていることを考えれば荘園経営の施設や荘官の居館なども想定することができる。

鎌倉・室町時代には、宅地が溝や堀によって区画され、掘立柱建物跡の柱掘形が前時代と比べ小型化する一方で、一棟の建物の床面積が増大する。また、基礎構造では、柱穴の中に石を据えるものがみとめられるようになり、SB149・161では床張りの構造をとっていると考えられる。間仕切りなどは不明であるが、現代の礎石建物に近いものと考えられる。また井戸では、律令期の木組の井戸から石組みを主体にする構造に変化することがあげられる。B-2地区で検出したSE143は、12世紀後半から13世紀にかけての遺物を出土しており、石組み井戸から出土する13世紀代の瓦器碗に先行している。この時期が井戸の構造が変化する時期と考えられる。これらの建物や井戸からの出土遺物では、貿易陶磁器や石製の硯などが注目され、この地域の集落を検討する上で示唆的である。

(戸原和人)

調査参加者(順不同・敬称略)

鎌田安彦・西村治郎・杉原 実・山口卓也・井内美智子・柿谷悦子・関口睦美・高田眞由美・兵藤真千・松元順代・石田忠一・石田初美・石田百合子・大石ふゆ子・大西芳美・桂 正・黒田直弘・斉藤初美・竹岡和子・竹岡春雄・竹岡弘子・竹岡美恵子・出畑忠一・出畑タツ子・西田恭三・西田貞代・原田勝美・原野実子・原野秀司・原野恭治・東前愛子・前田幸枝・美馬幸夫・美馬如子・村嶋みよ子・山本宏文

参考文献

- 亀岡市『新修 亀岡市史』資料編第一巻 2000 p304.三軒家窯跡群の軒平瓦(2)13
 なお、亀岡市篠町王子下東山・欠ノ向に所在する三軒家窯跡群はかつて所在地の地名により「篠王子瓦窯」と報告されている。
- 前田義明「中期の瓦」(『平安京提要』古代学研究所)1994 p651
 平安博物館編『平安京古瓦図録』 1977
 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の貿易陶磁」(『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史博物館) 1978
 伊野近富「中世土器の編年(上)」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
 森下 衛「園部窯跡群採集の古瓦」(『京都府埋蔵文化財情報』第12号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
 増田孝彦「太田遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
 岡崎研一「太田遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
 増田孝彦「太田遺跡第10次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第94冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
 寒川 旭「特集 環境考古学—自然科学からのアプローチ 地震考古学」(『日本の科学者』vol.33 No.9) 1998

4. 木津川河床遺跡第13次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、主要地方道京都・守口線改良工事緊急橋梁整備事業に伴う試掘調査で、遺構・遺物の埋蔵状況を把握し、本調査の要否ならびに規模等を決定するための資料を得ることを主たる目的として実施した。

調査対象地は、木津川・宇治川・桂川の三河川が合流する地点の北東、宇治川と桂川に挟まれた水田地帯の八幡市八幡小字溝落・狐川に所在する。当地は木津川河床遺跡の範囲に含まれる。今回の調査が木津川河床遺跡第13次調査となる。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克と主査調査員石尾政信が担当した。調査期間は平成12年10月13日～12月8日、調査面積は約350㎡である。現地調査にあたって、京都府教育庁指導部文化財保護課・八幡市教育委員会・京都府田辺土木事務所・地元自治会などの援助・協力があつた。また、調査補助員・整理員の協力を得た。^(注1)

調査に係る経費は京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

木津川河床遺跡は、三河川が合流する八幡市から京都市域にまたがり、遺物の散布が広範囲に確認されているが、河川の氾濫の影響による土砂の堆積が厚く、遺跡の状況は必ずしも明らかではない。木津川は、河川改修工事により流路変更が行われるまで、木津川大橋付近から北東方向に流れ桂川に合流しており、調査地周辺は木津川より南に位置していた。これまでの発掘調査では、宇治川と木津川に挟まれた洛南浄化センター内とその周辺で、弥生時代後期、古墳時代前期・同後期および中世の集落遺跡の存在が確認されている。^(注2)

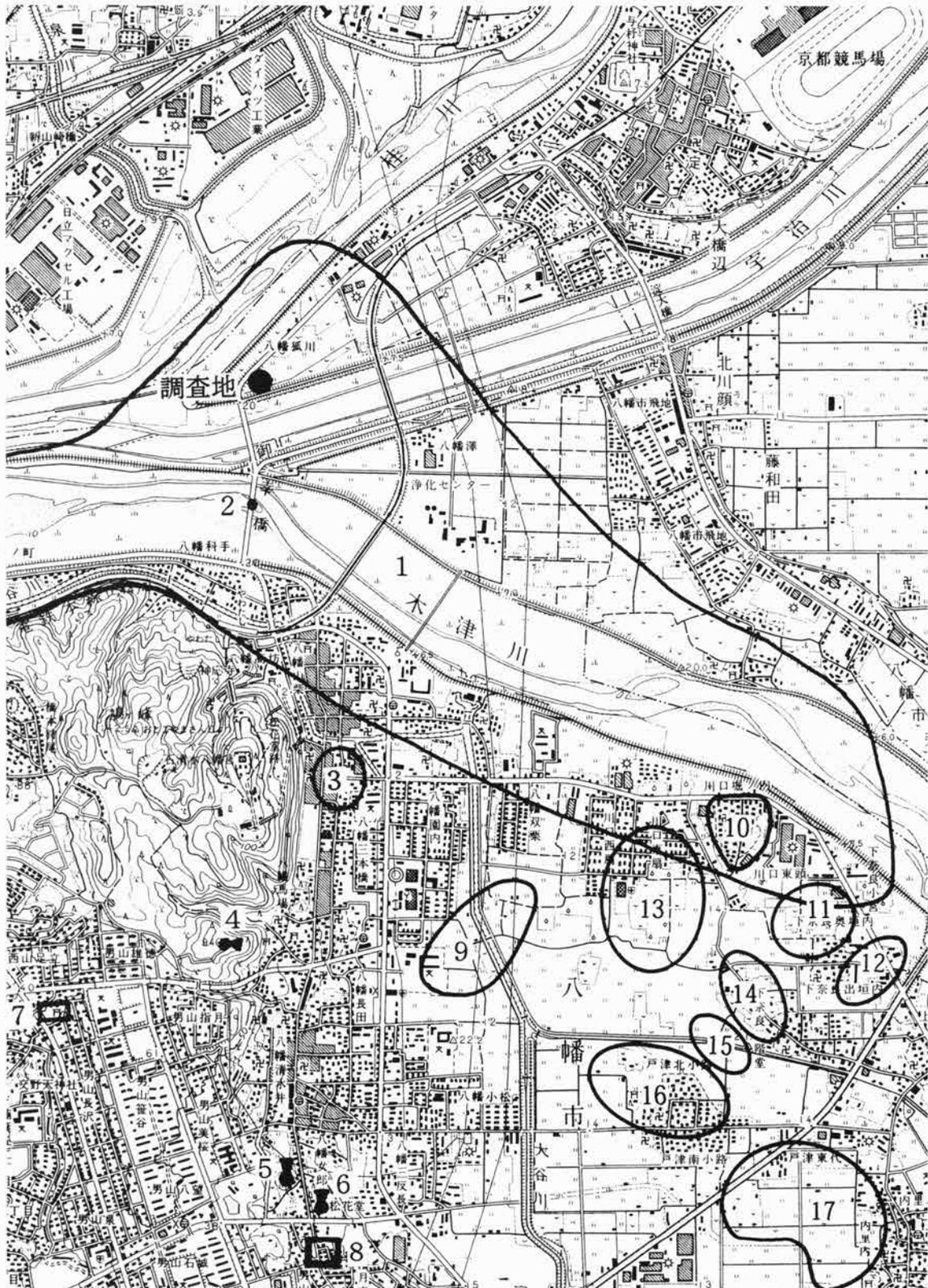
木津川に架かる御幸橋付近は、湧水時期には井戸跡や柱群など、木津川河床遺跡の遺構が見えており、付近に中世の集落が所在した痕跡がうかがえる。近年、八幡市教育委員会によって、木津川河川敷で精力的な分布調査と遺物の採集が行われ、木津川流域での遺跡の状況把握が進展しつつある。^(注3)

しかし、宇治川以北では調査例がほとんどなく、わずかな遺物散布により遺跡範囲が示させているだけで、遺構の埋没状況は不明な点が多かった。

3. 調査概要

(1) 調査の経過

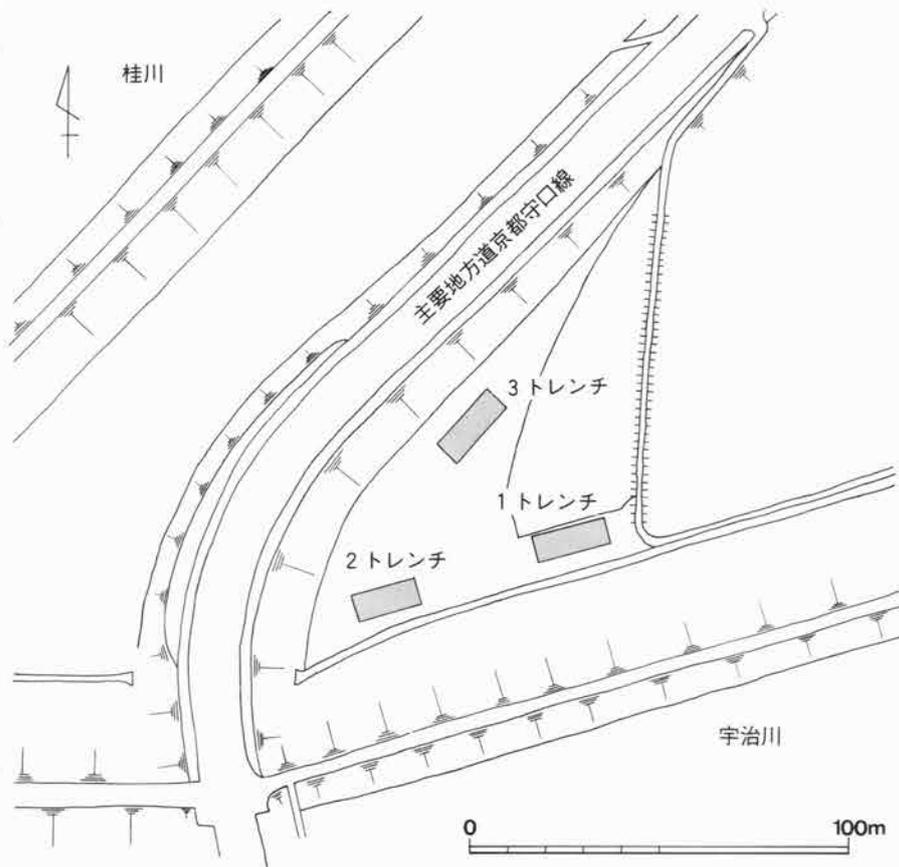
今回の調査では、当初5か所の試掘トレンチを掘削する予定であったが、沖積層が厚く堆積し、



第89図 調査地および周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | | |
|---------------|----------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1. 木津川河床遺跡 | 2. 御幸橋古墳 | 3. 男山城跡 | 4. 石不動古墳 | 5. 西車塚古墳 | 6. 東車塚古墳 |
| 7. 西山廃寺(足立寺)跡 | 8. 志水廃寺 | 9. 鳥遺跡 | 10. 河口環濠集落 | 11. 下奈良遺跡 | 12. 出垣内遺跡 |
| 13. 河口扇遺跡 | 14. 今里遺跡 | 15. 奥戸津遺跡 | 16. 戸津遺跡 | 17. 内里五町遺跡 | |

掘削途中で壁面に亀裂が見られたので、崩落防止のため、段掘りにして掘削した。各トレンチの調査面積を拡大したため、その結果、掘削深が3 mに達することが判明し、試掘トレンチを3か所とした。トレンチは南東を1トレンチ、南西を2トレンチ、北を3トレンチとした。1トレンチでは地表下約2 mまで重機で掘削したところ、掘削壁面の崩落がみられたので、一部分のみ深く掘削したが、

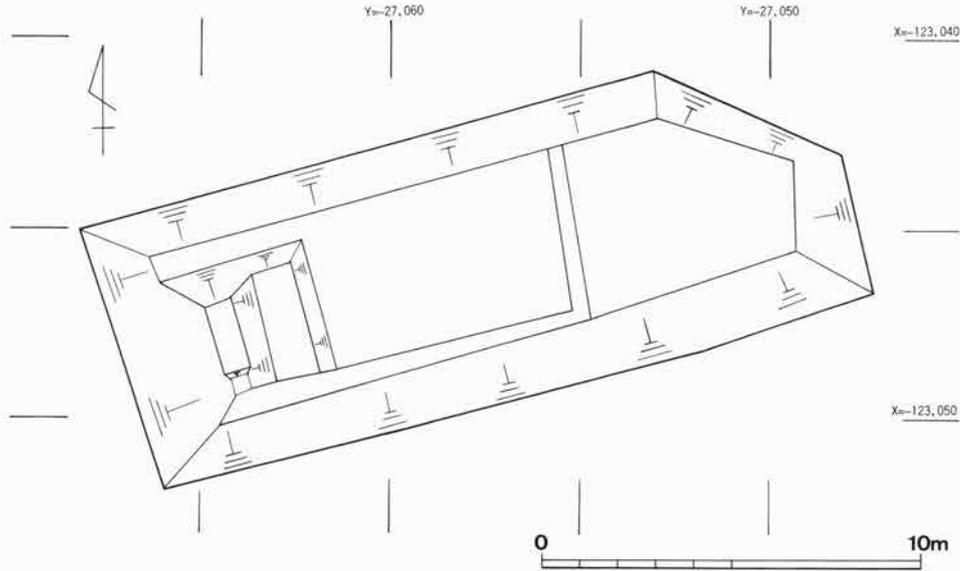


第90図 トレンチ配置図

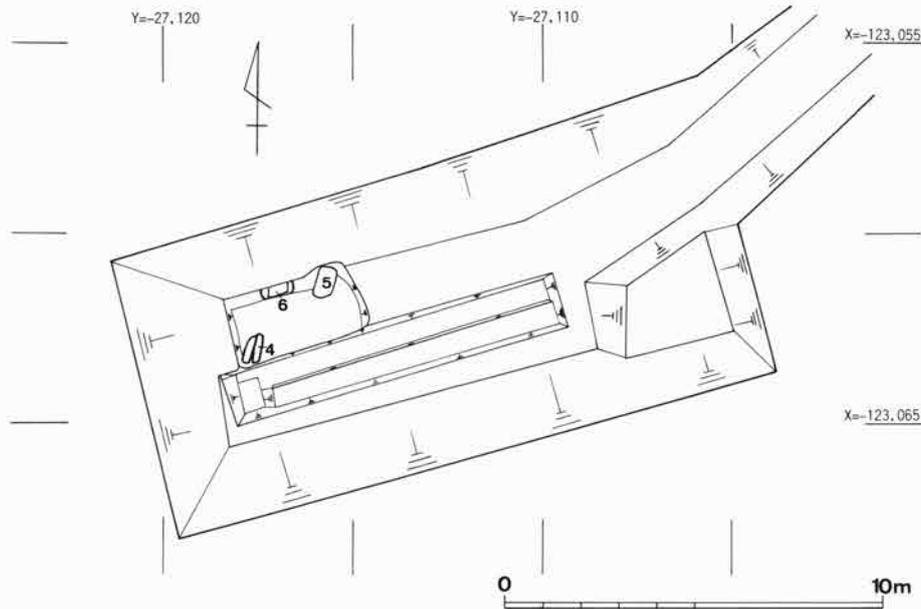
範囲が狭いため、顕著な遺構・遺物とも検出していない。2トレンチは地表下約3 mまで重機で掘削し、一部分を掘り下げたところ、板状の木質が敷かれたような状況で検出された。1か所の木質の上面に錆びて原型が明確でない鉄製品が出土した。3トレンチでは地表下3.0~3.1 mまで重機で掘削したところで、沖積層(暗青灰色粘砂土)から土師器皿・瓦器碗・滑石製石鍋を転用した温石・獣骨・獣歯などが出土した。精査を行ったが明確な遺構は検出できなかった。そこで、細い断ち割りトレンチを設けて掘り下げたところ、瓦器碗・土師器皿が並んで検出された。この周辺を掘り広げると、現在の地表から約3.3 m下で、長さ約2 m・幅約1 mを測る土壌を確認し、遺物の出土状況から中世墓と判断した。ここでは、沖積層が厚く堆積し、崩落の危険性があるので、調査範囲を広げることができなかったが、部分的な拡張により、3基の墓が重複して造られていたことが判明した。

(2) 中世墓(第96図)

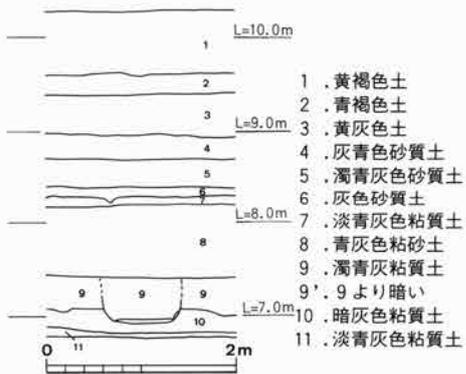
3トレンチで検出した。断ち割りトレンチ断面に北西隅の一部分が検出できたので、長さ約2 m・幅約1 m、検出面からの深さ約0.25 mを測る東西方向の墓(中世墓1)である。墓の北東付近に、瓦器碗を中心として周辺に6点の土師器皿と東海系の山皿1点が上向きに並べられ、その南に隣接して白磁碗片と鉄製品が出土した。西側では浮いた状態で棒状の木片が出土した。中世墓1の南東部で、落ち込みから土師器皿が出土したので、墓(中世墓2)と判断した。深さ約0.2 mを測る。中世墓2の南東部を切って落ち込みが検出され、一部に木質が残存していたため、東西



第91図 1 トレンチ平面図



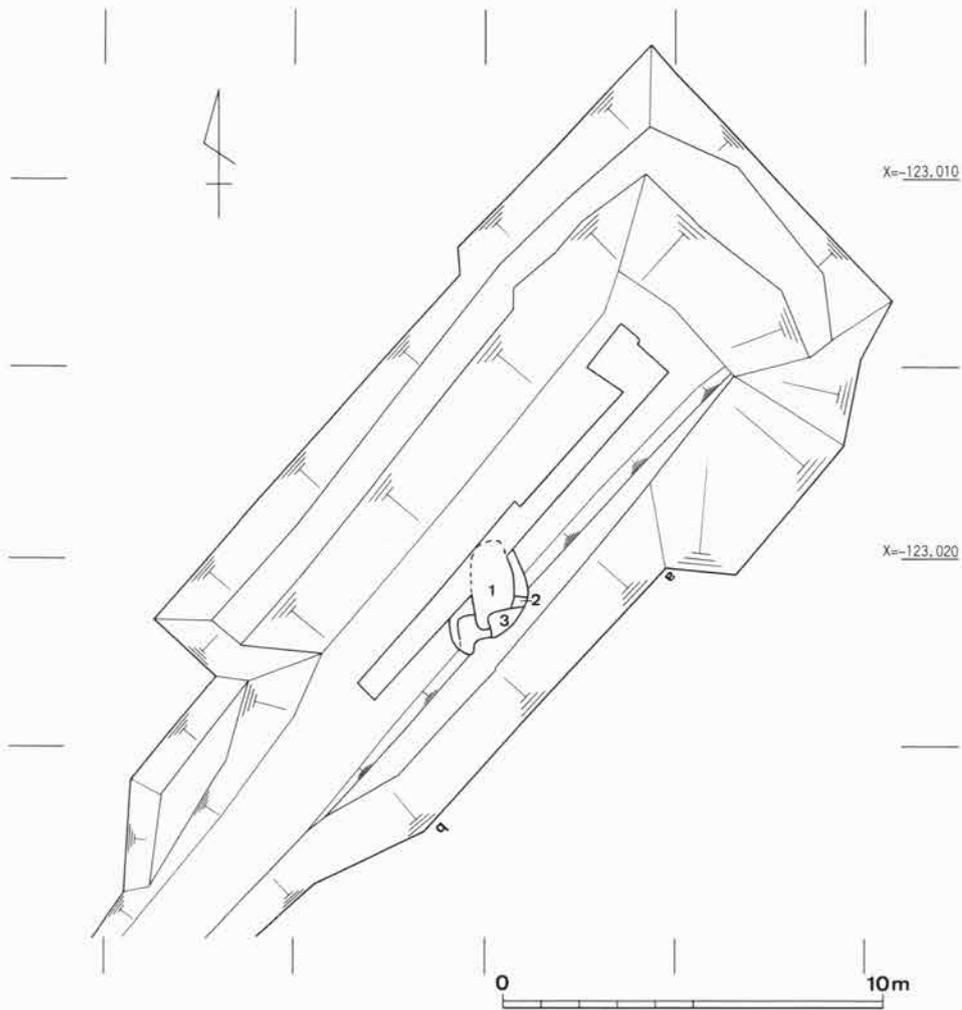
第92図 2 トレンチ平面図



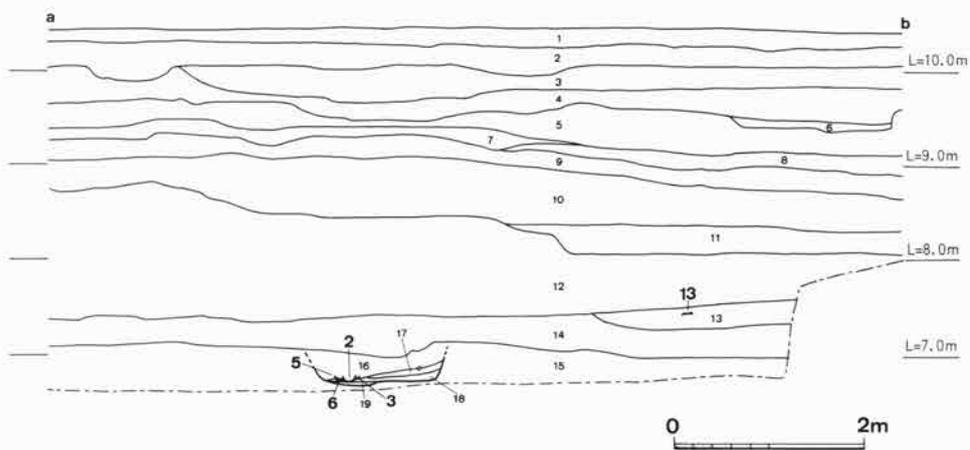
第93図 2 トレンチ柱状断面図

方向の墓(中世墓3)の北西隅と判断した。深さ約0.2mを測る。

2トレンチでは、板状の木質が敷かれた箇所が3地点でみられた。中世墓4～6とした。その内中世墓6のみ、かろうじて掘形が検出できた。断面観察から、幅約0.9m・検出面からの深さ約0.25mを測る。他の2か所は、長さ0.8m前後・幅0.5m前後の範囲に板状の木質が残存するものである。木質は沖積層と同化して取り上げできなかった。



第94図 3トレンチ平面図



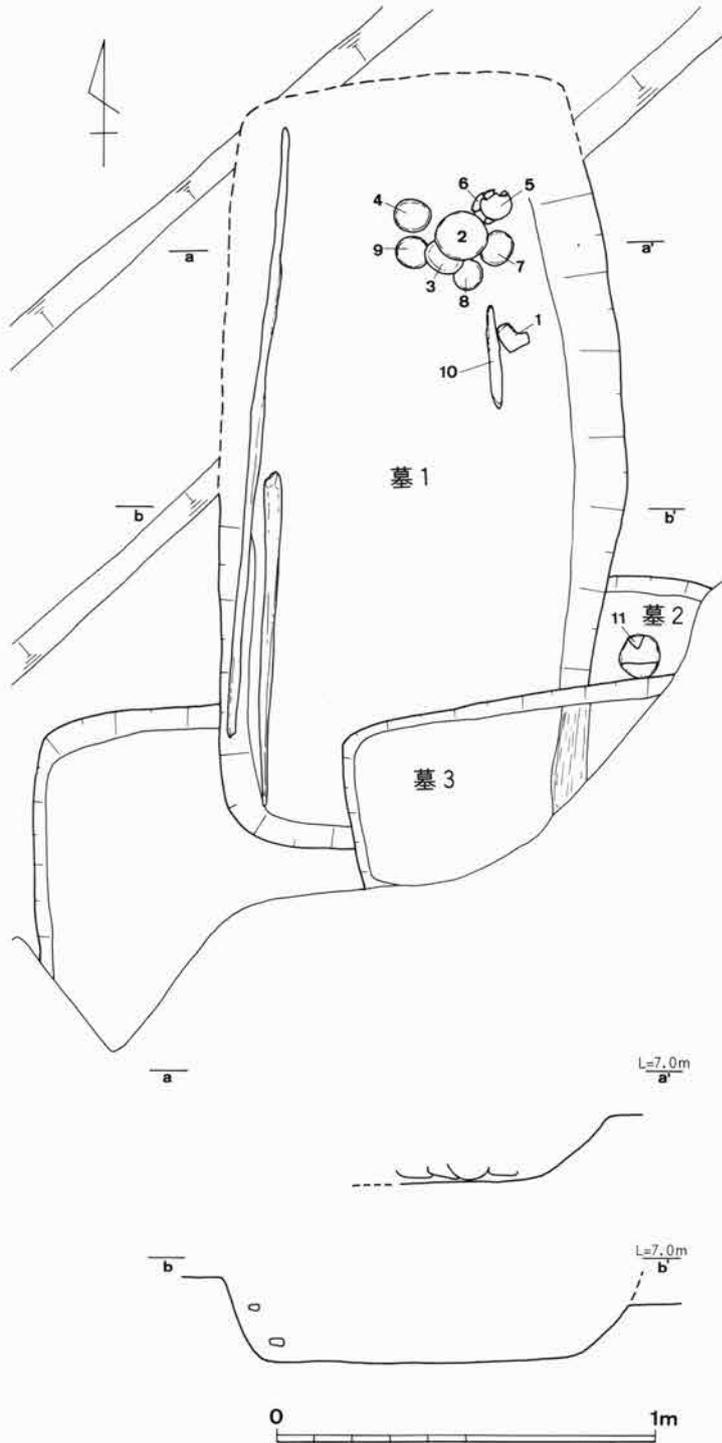
- | | | | | |
|------------|-------------|------------|---------------------|------------|
| 1. 灰色土 | 2. 暗黄灰色土 | 3. 黄灰砂質土 | 4. 暗黄灰色砂質土 | 5. 淡灰褐色砂質土 |
| 6. 灰色粘質土 | 7. 淡灰色砂質土 | 8. 灰色砂質土 | 9. 灰青色砂質土 | 10. 青灰色砂質土 |
| 11. 暗灰色砂質土 | 12. 濁青灰色砂質土 | 13. 暗灰色粘砂土 | 14. 暗青灰色粘砂土 | 15. 青灰色粘砂土 |
| 16. 青灰色粘質土 | 17. 暗青灰色粘質土 | 18. 暗灰色粘質土 | 19. 暗灰色粘質土(青灰粘質土混合) | |

第95図 3トレンチ東壁断面図

3. 出土遺物(第97図)

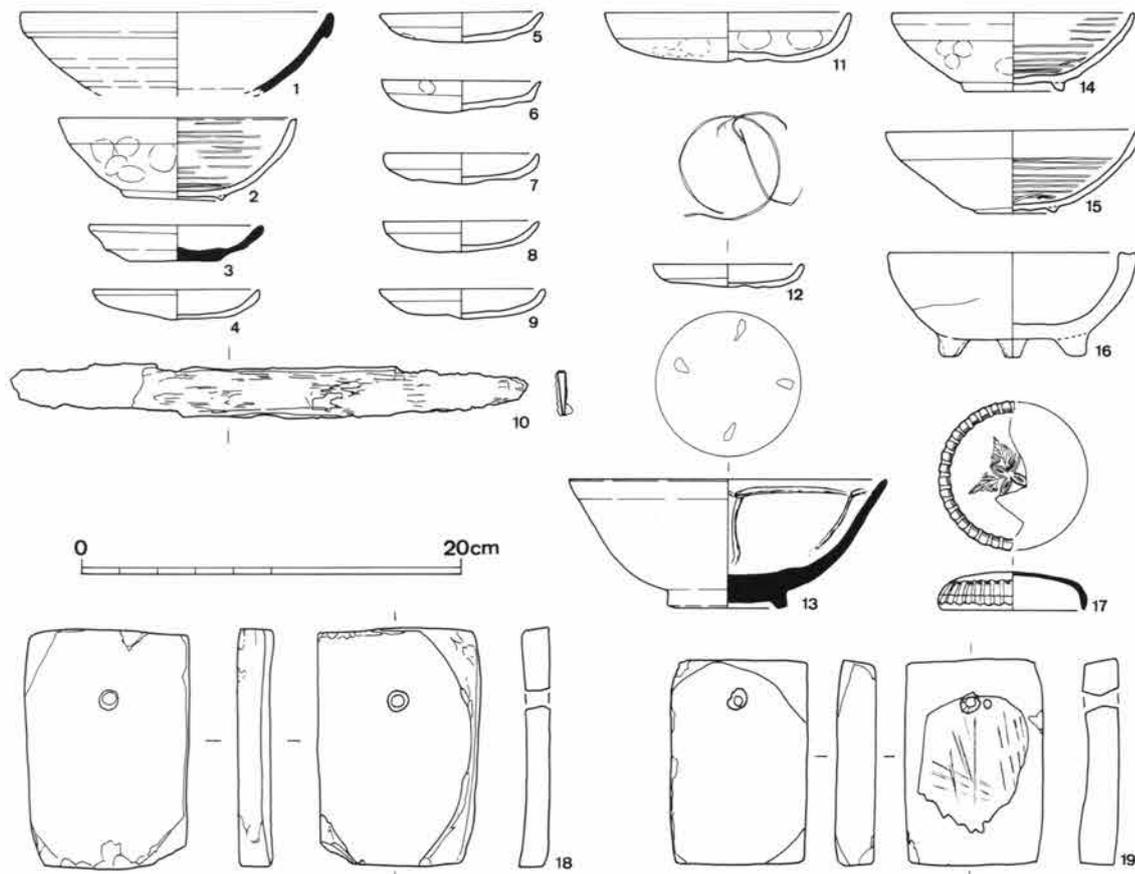
この調査で、土師器皿・瓦器椀・青磁・白磁・鉄製品・滑石製温石・獣骨など整理箱に合計2箱の遺物が出土した。以下に主なものについて記述する。

1は口縁端部が小ぶりの玉縁状となる白磁椀で、淡灰白色の釉薬が施されている。口径16.4cmを測る。2は瓦器椀で、内面に粗いらせん状暗文を施し、外面下半に指押サエ痕跡をとどめるがミガキはみられない。底部に断面三角形の低い高台が付く。口径12.5cm・器高4.0cmを測る。3



は口縁端部の一部分に淡緑灰色の釉薬がかかる美濃焼皿である。口径9.3cm・器高1.8cmを測る。4は口縁外面と内面をヨコナデし、底部が未調整の土師器皿である。粘土の継ぎ目が一部に残る。口径8.8cm・器高1.6cmを測る。5は口縁部をヨコナデしたときのわずかな段がみられる土師器皿である。口径8.5cm・器高1.6cmを測る。6は口縁部をヨコナデしたときのわずかな段がみられる土師器皿である。粘土の継ぎ目が一部にみられる。口径8.4cm・器高1.7cmを測る。7～9も口縁部外面と内面をヨコナデする土師器皿である。7は口径8.2cm・器高1.6cm、8は口径8.4cm・器高1.4cm、9は口径8.7cm・器高1.6cmを測る。3～9の土師器皿は、いずれも胎土・焼成とも良好で、淡灰褐色を呈する。10は一部に木質が付着する鉄製短刀である。錆が前面にまわっているが図面右に約6.5センチの茎が判別できる。長さ27.2cm・幅2.2cm・厚さ4cmを測る。1～10は中世墓1から出土した。瓦器椀の口縁部外面にミガキがみられないこと、土師器皿が口縁部一段ナデであることから、13世紀中葉のものであろう。

第96図 中世墓実測図(土器番号は実測番号と一致)



第97図 出土遺物実測図

11は口縁部外面と内面をヨコナデし、内面の一部に指押サエ痕跡が残り、底部は未調整で指押サエ痕跡が残る土師器皿である。胎土・焼成とも良好で、淡灰褐色を呈する。中世墓2から出土した。

12は口縁部外面と内面をヨコナデし、内面に強くヨコナデした際に付いた凹線状の窪みと、粘土板の継ぎ目痕跡をとどめる。底部が未調整の土師器皿である。胎土・焼成とも良好で、淡灰褐色を呈する。口径7.9cm・器高1.2cmを測る。3トレンチの沖積層の暗青灰色粘砂土から出土した。

13は内面底部に重ね焼痕跡の目跡が4か所付く、龍泉窯系の青磁碗である。内面に劃花花弁文を施し、ケズリ出し高台内面以外に濁黄青色の釉薬が掛かる。口径16.8cm・器高6.8cmを測る。沖積層の暗灰色粘砂土から、底部を上にした状態で出土した。

14は内面に粗いらせん旋状暗文を施し、口縁部下半に指押サエ痕跡が残る瓦器碗である。底部に逆台形の短い高台を貼り付ける。口径12.8cm・器高4.2cmを測る。15も内面に粗いらせん状暗文を施し、口縁部外面にミガキを施さない瓦器碗である。底部に三角形の短い高台を貼り付ける。口径13.3cm・器高4.2cmを測る。16は円形状を呈し、底部に推定4か所の脚が付く瓦質の鉢である。厚い器壁で口縁上端がわずかに窪み、厚さ0.9cmを測る。口径13.0cm・器高5.5cmを測る。17は天井部に華文を施した、青白磁の合子蓋である。口径7.6cm・器高2.0cmを測る。

14～17は堆積層の暗青灰色粘砂土から出土した。

18は滑石製石鍋の底部をていねいに削り、方形に再加工した温石である。両面から穿孔した吊り下げ用の孔を設ける。全面が黒色に燻されている。長さ12.4cm・幅8.5cm・厚さ1.8cmを測る。19も同様の温石である。石鍋内面の加工痕跡が明瞭に残る。長さ10.6cm・幅7.2cm・厚さ2.0cmを測る。暗灰青色粘砂土から出土した。

3. ま と め

調査対象地は、当初予想していたよりも沖積層が厚く安全のため下層は狭い範囲しか調査できなかったが、現在の地表から3m以上で中世墓が発見できた。宇治川以北では、ほとんど調査が実施されておらず、中世にはこの地域が木津川河床遺跡の集落に伴う墓地であることが明らかになったことは大きな成果である。

木津川河床遺跡の分布調査で確認された井戸跡の海拔が6.0m～9.0mで、7m前後のものが多
い。また、木津川左岸で中世遺物包含層が6.8～7.0mで確認されている。これらから、八幡市教育委員会では、中世当時の木津川の水位が海拔7.5m付近にあったと推定されている。今回検出した中世墓が海拔7m前後で検出しているので、今後、周辺での調査が期待される。

(石尾政信)

注1 高橋あかね・藤木匂子・丸谷はま子・及川あや子

注2 長谷川達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

長谷川 達・黒坪一樹「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986 ほか

注3 赤松一秀「木津川河床遺跡分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第23集 八幡市教育委員会) 1997

赤松一秀「木津川河床遺跡第2次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第26集 八幡市教育委員会)1 998

八十島豊成「木津川河床遺跡第3次分布調査概要」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 八幡市教育委員会) 2000



版

図版第1 沖田遺跡第2次



(1)調査地全景・空撮(南西から)



(2)調査地全景・空撮(南東から)



(3)調査地全景・空撮(南西から)

図版第2 沖田遺跡第2次



(1)上層遺構(南方から)



(2)上層遺構(西方から)



(3)トレンチ東部断面(南東から)

(1)溝S D03(北方から)



(2)溝S D03南壁断面(北方から)



(3)溝S D02断面(南方から)





(1)下層遺構全景(北西から)



(2)下層遺構南東部(南方から)



(3)土坑S K網代等出土状況
(西方から)



(1) 竪穴式住居跡SH01(北方から)



(2) 竪穴式住居跡SH02(北方から)



(3) 竪穴式住居跡SH01土器出土
状況(西方から)



(1)溝 S D01土器出土状況(北から)



(2)竪穴式住居跡 S H01土器出土状況(北方から)



(3)溝 S D04土器出土状況(南方から)



40



41



42



1



2



3



54



52



51



16



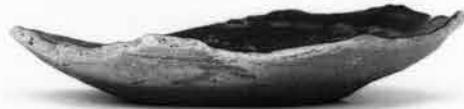
39



103



77



105



106



107



30



109



110



111



127



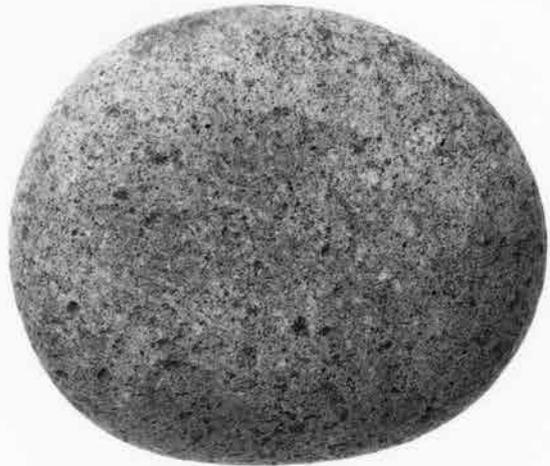
112



131



141



1



149



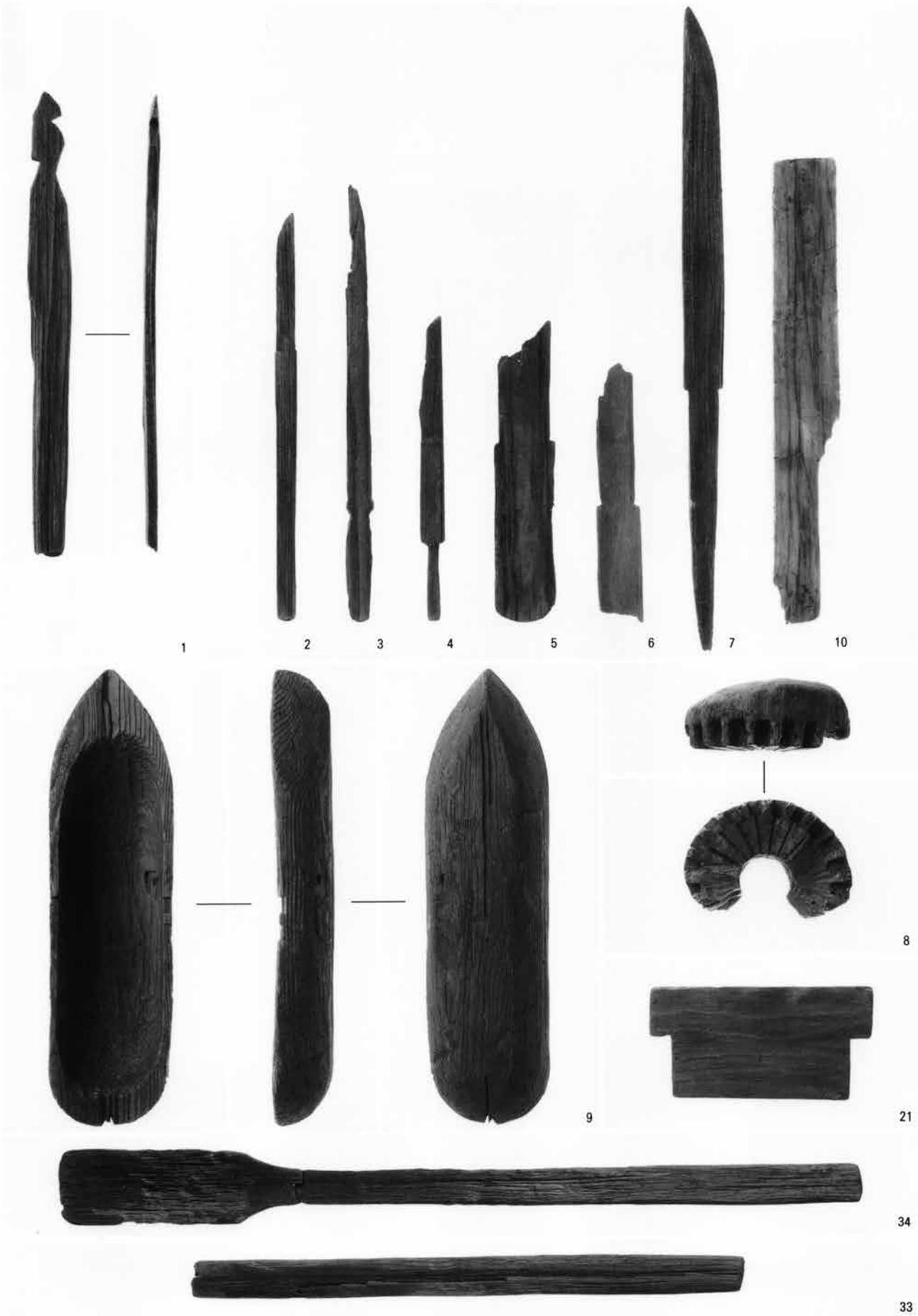
150

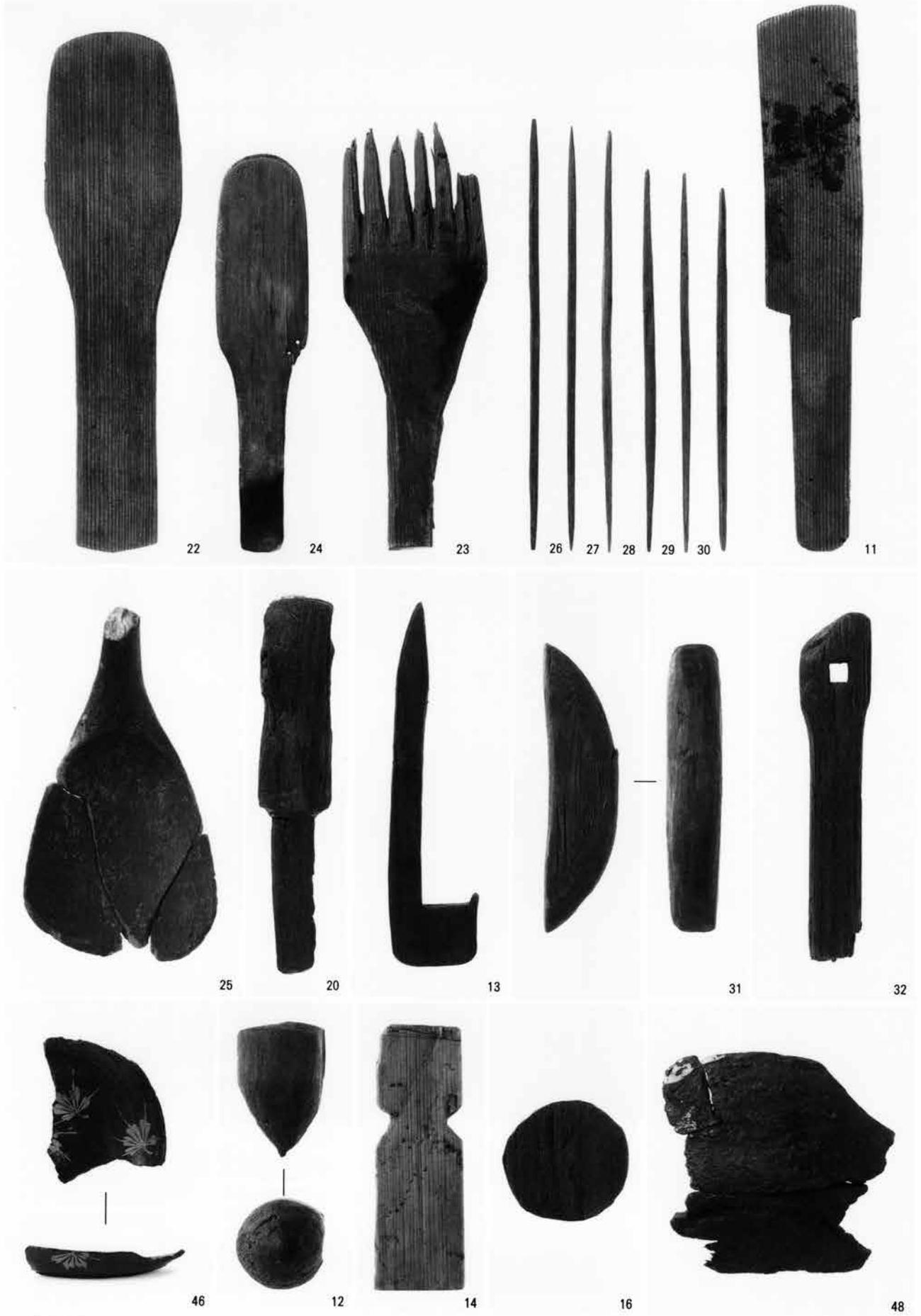


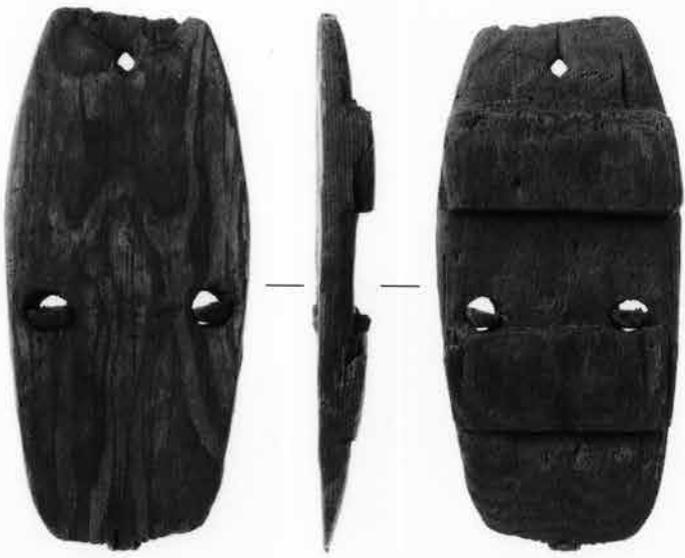
152



151







42



45



44



18



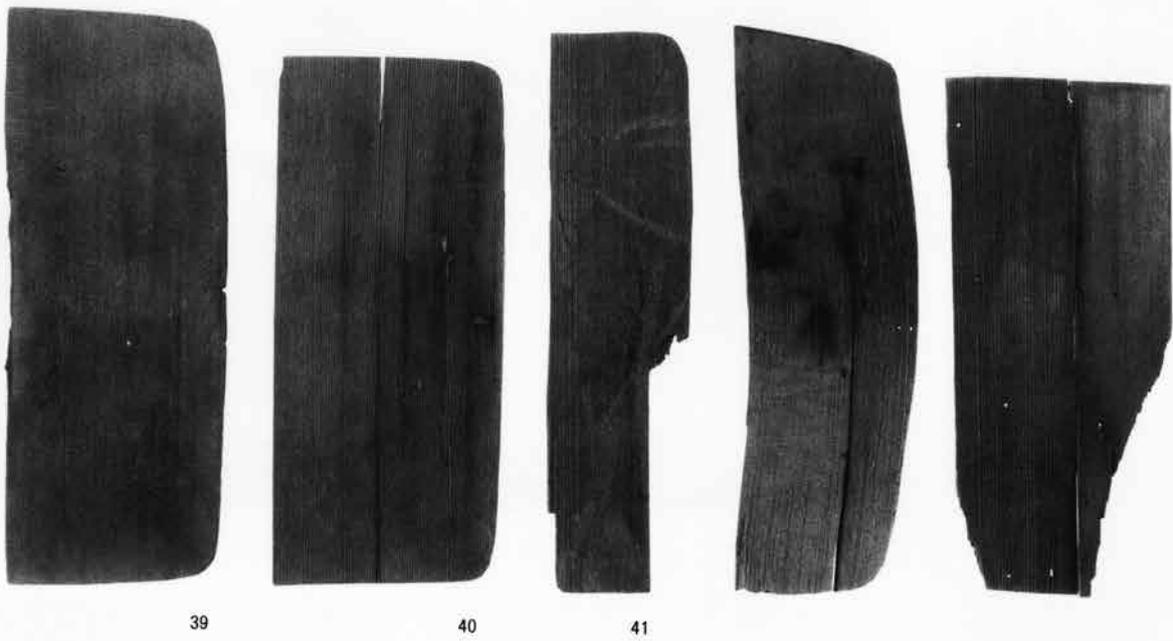
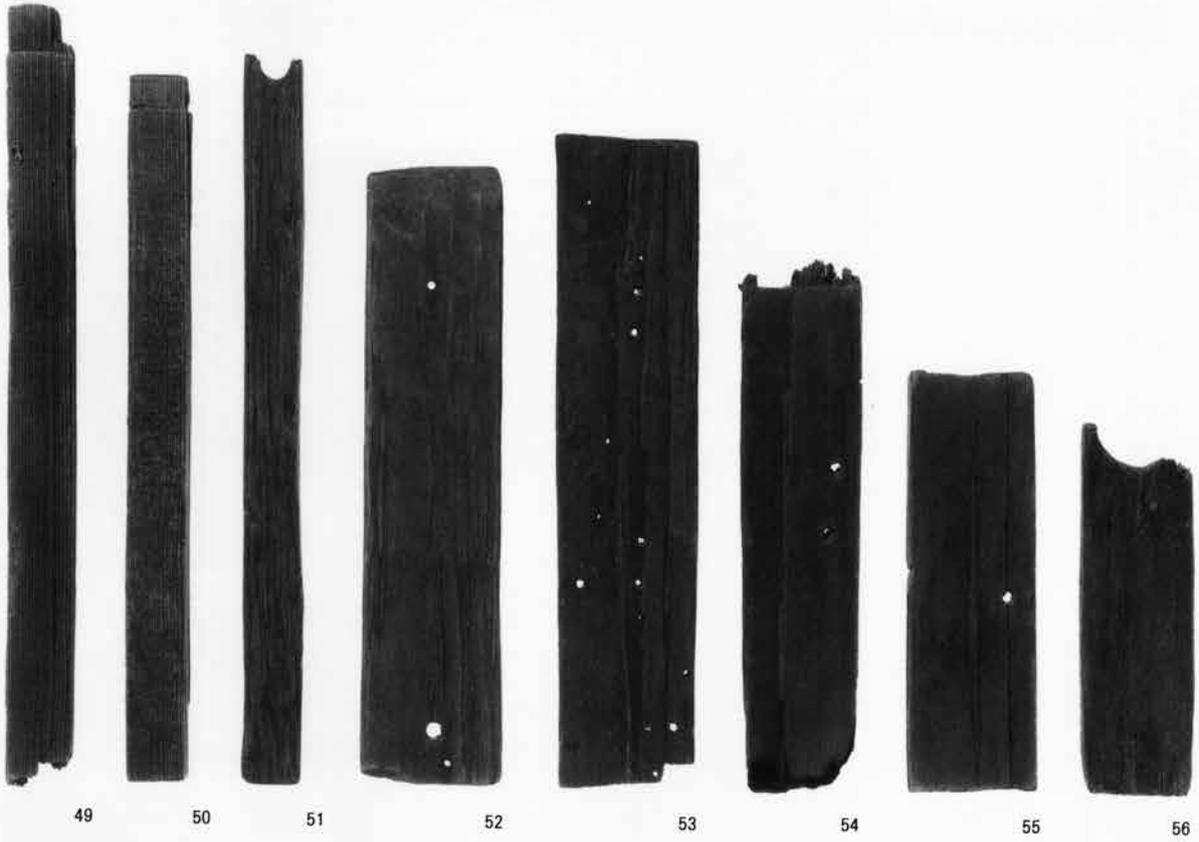
17



15



19



図版第13 東山遺跡第2次



(1)東山遺跡遠景(南から)



(2)東山遺跡遠景(西から)

図版第14 東山遺跡第2次



(1)調査区全景(東から)



(2)A地区全景(北から)

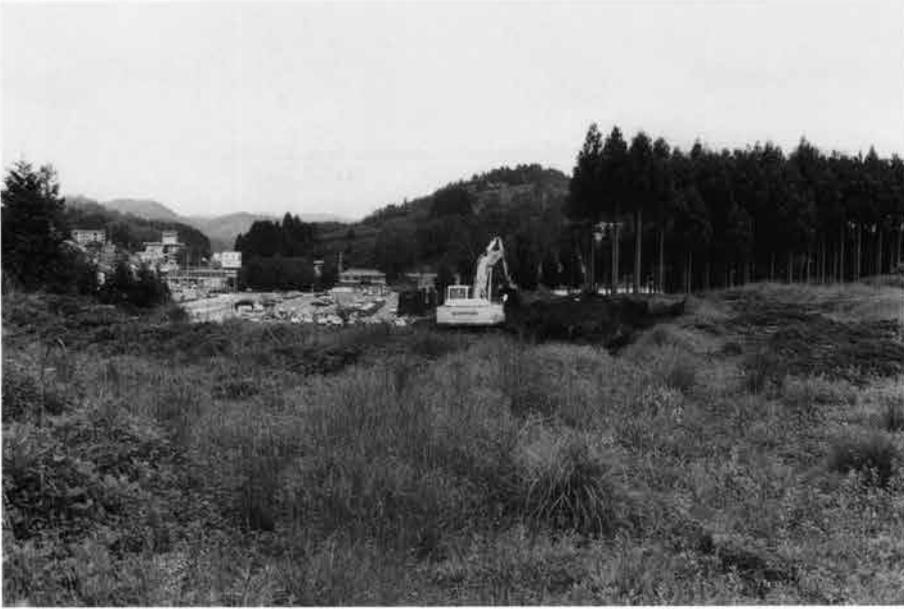
図版第15 東山遺跡第2次



(1) B地区全景(北から)



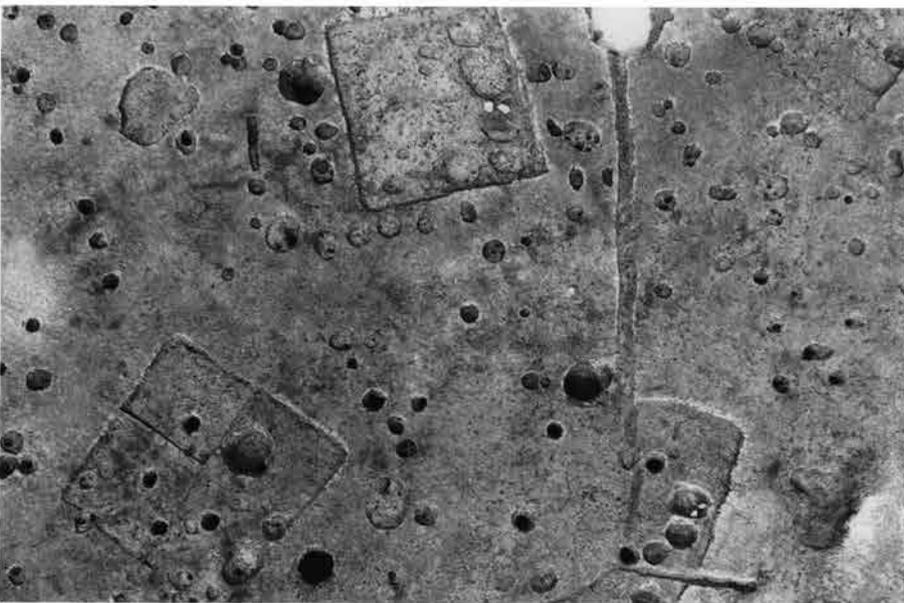
(2) 調査前風景(西から)



(1)重機掘削(南から)



(2)B地区西壁(東から)



(3)B地区主要遺構(上が北)

(1) S H02(西から)



(2) S H19(西から)



(3) S H19掘削作業風景(西から)

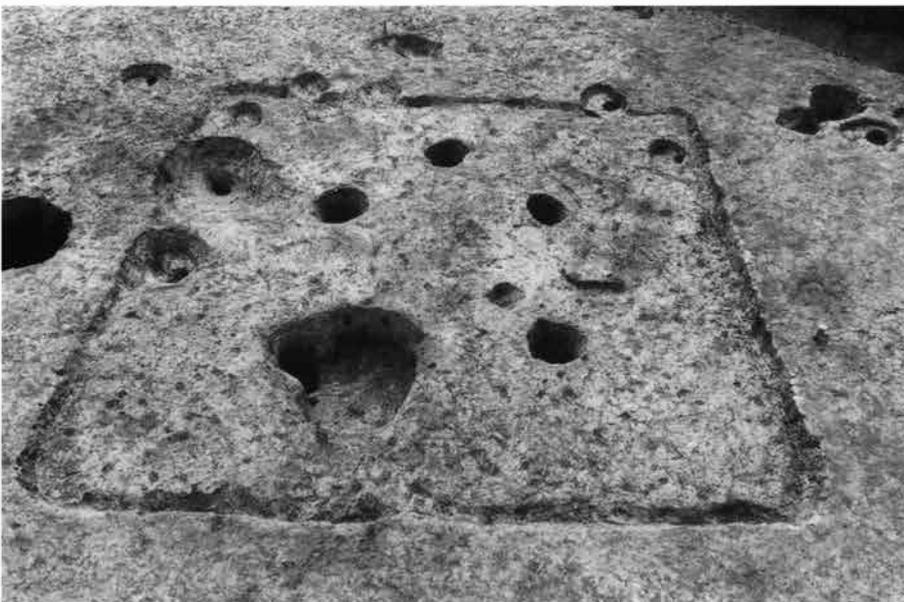




(1) S H19完掘状況(西から)



(2) S H19竈断面(南から)

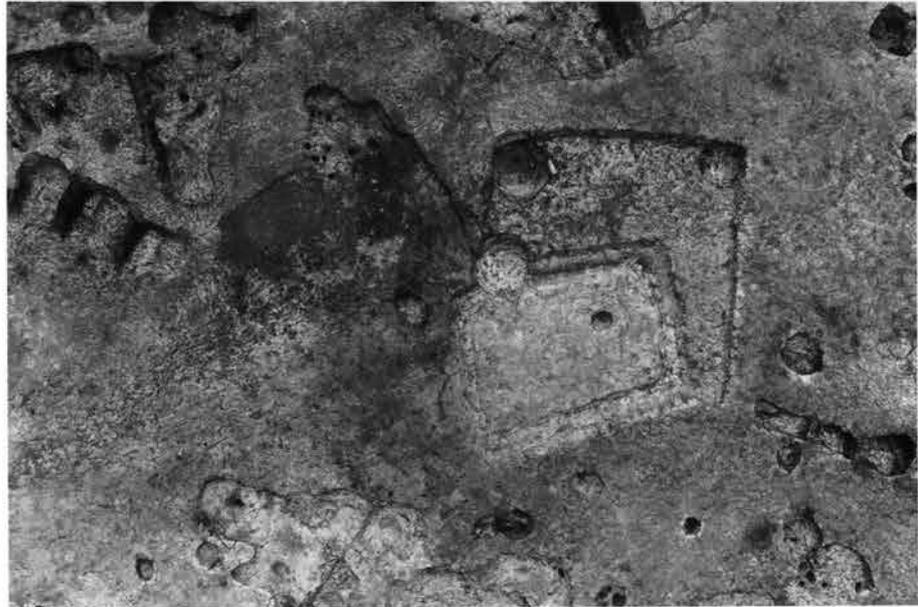


(3) S H20完掘状況(北東から)

(1) S H20内遺物出土状況
(南東から)



(2) B地区主要遺構(上が南)



(3) S H21・22(西から)





(1) S H21完掘状況(北から)



(2) S H21内遺物出土状況(北から)



(3) S H21内遺物出土状況(東から)

(1) S H22全景(東から)



(2) S K43(東から)



(3) B地区調査風景(北東から)





(1) A地区調査風景(南から)



(2) S X18断面(北から)



(3) S K16(南から)

(1) S K17断面(南西から)



(2) S K17完掘状況(北西から)



(3) S K23遺物出土状況(東から)





(1) S K 35遺物出土状況(西から)



(2) S K 35遺物出土状況(東から)



(3) B地区下層深掘作業(北から)



11



42



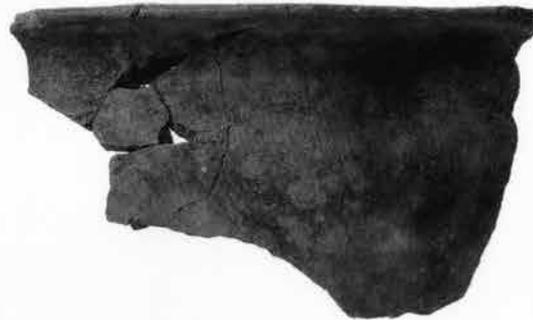
7



80



6



20



8



25



28



29



30



31



47



35



32

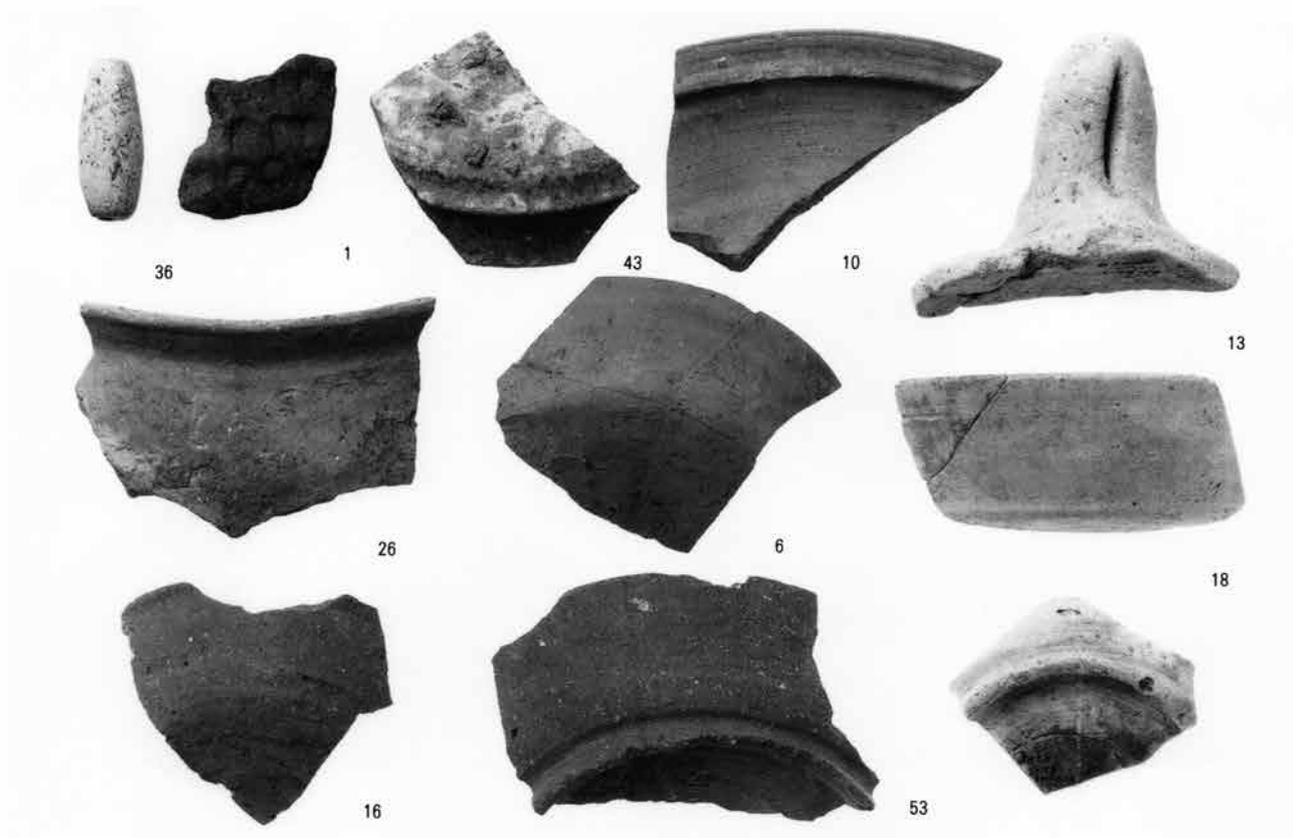


33

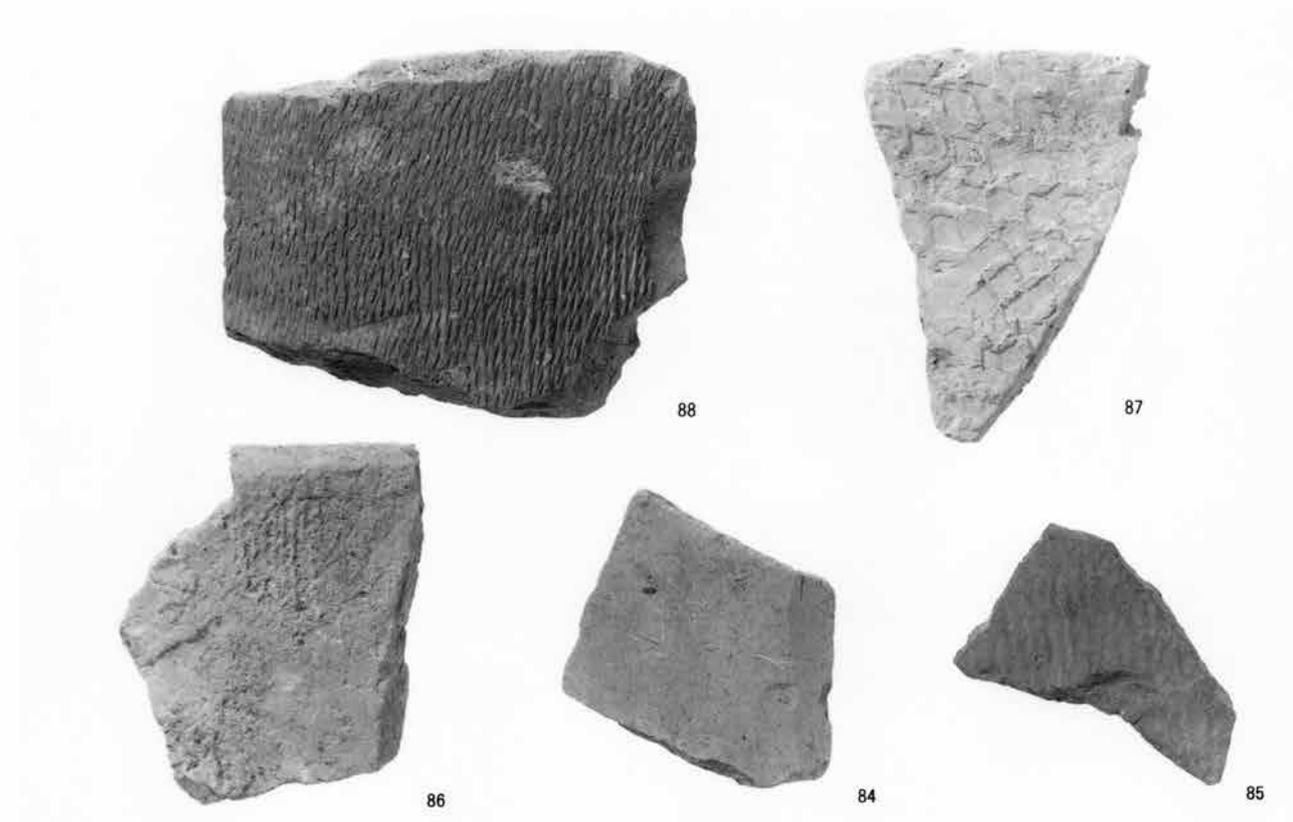


34

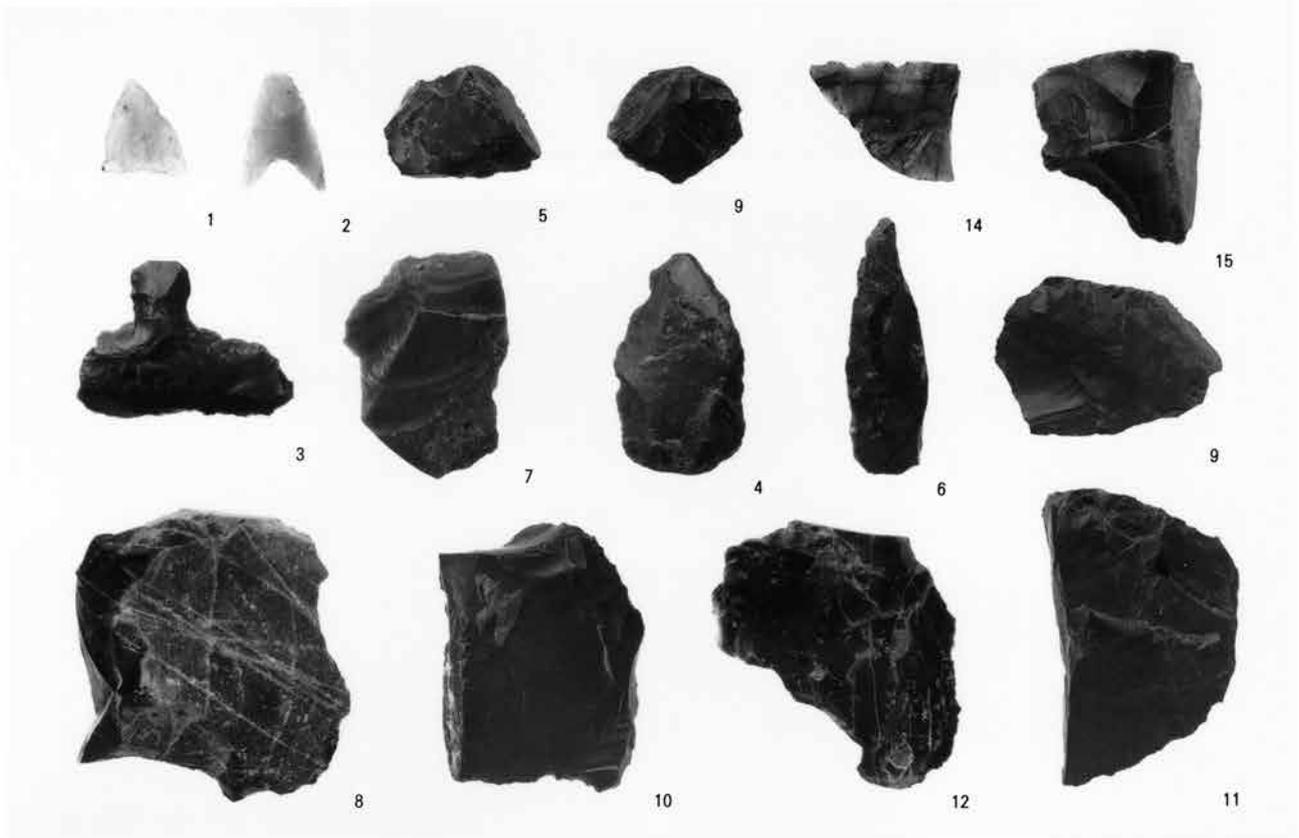




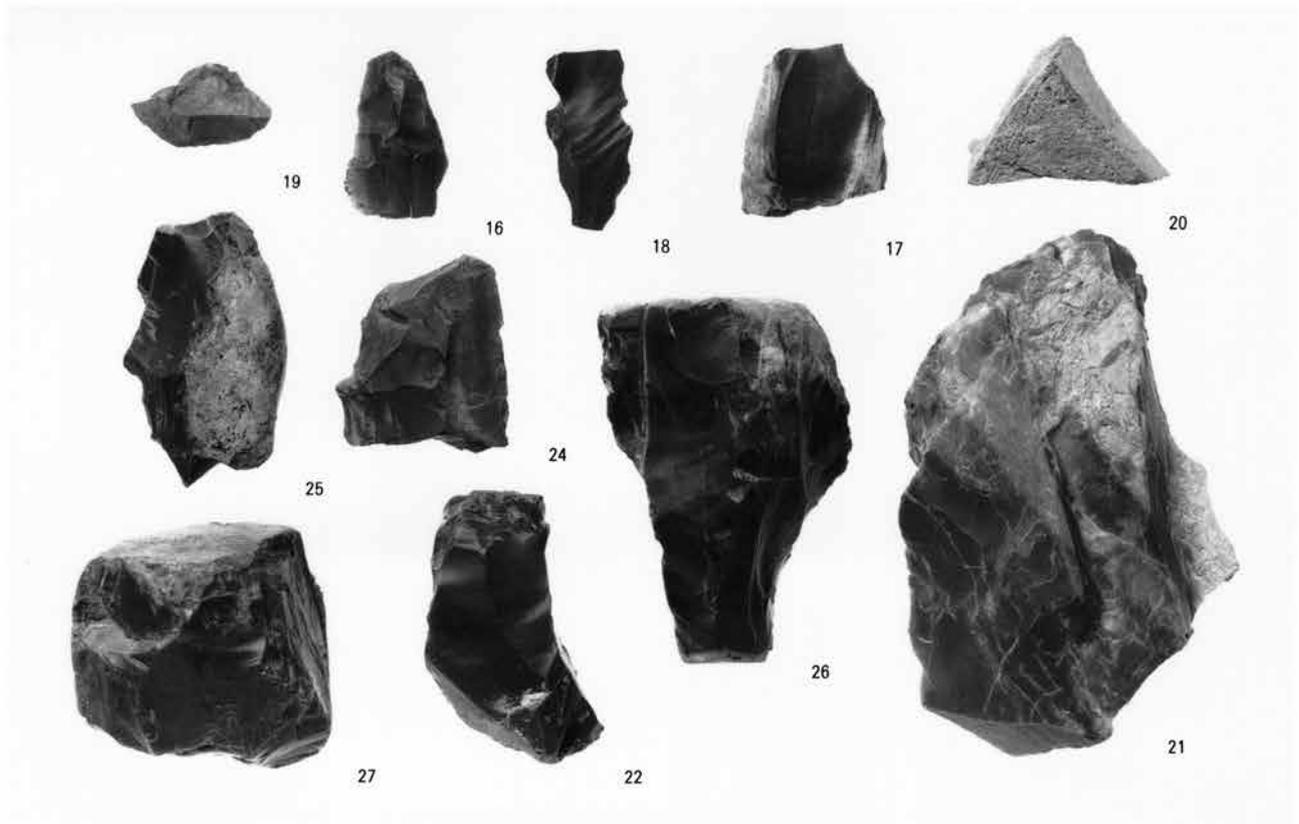
(1)東山遺跡出土土器



(2)東山遺跡出土土瓦



東山遺跡出土石器(1)



東山遺跡出土石器(2)



(1)太田遺跡調査地遠景(西から)



(2)太田遺跡調査地遠景(北から)



(1)太田遺跡調査地遠景(東から)



(2)太田遺跡調査地遠景(南から)



(3)太田遺跡調査地全景(上が北)

(1)太田遺跡A地区全景(上が北)



(2)太田遺跡B-1地区全景
(左が北)



(3)太田遺跡B-2地区全景
(上が北)

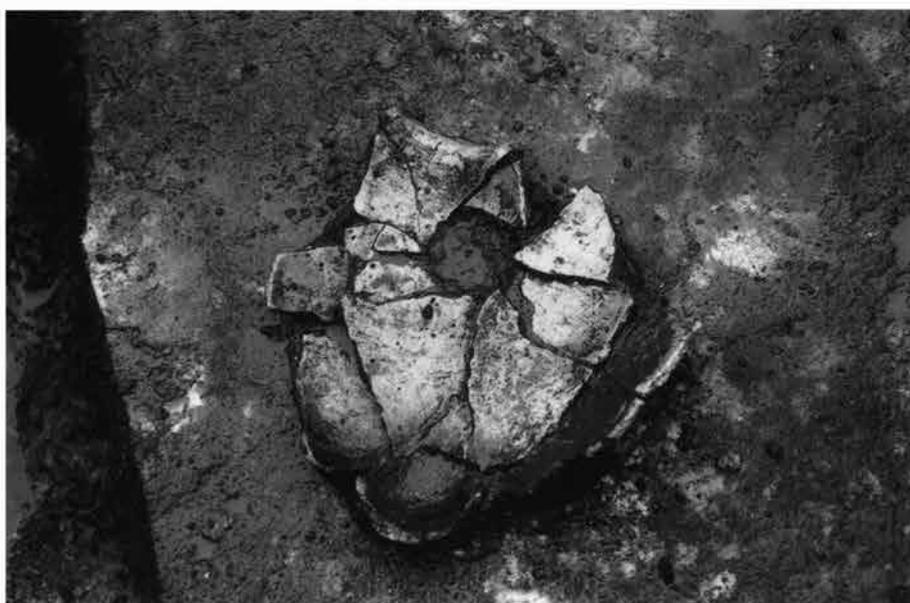




(1)太田遺跡A地区拡張区S H12
検出状況(東から)



(2)太田遺跡S H12遺物出土状況(1)
(上が南)



(3)太田遺跡S H12遺物出土状況(2)
(上が南)

(1)太田遺跡A地区SH127・128・
129検出状況(上が北)



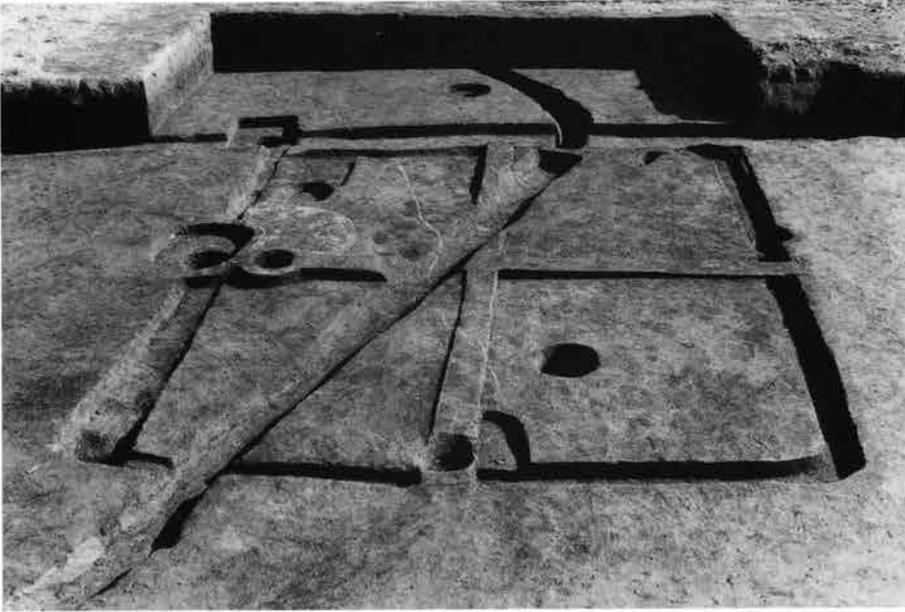
(2)太田遺跡A地区SH130検出
状況(北から)



(3)太田遺跡A地区SH138検出
状況(東から)



図版第34 太田遺跡第13次



(1)太田遺跡A地区S H139検出
状況(西から)



(2)太田遺跡A地区S E78検出状況
(東から)

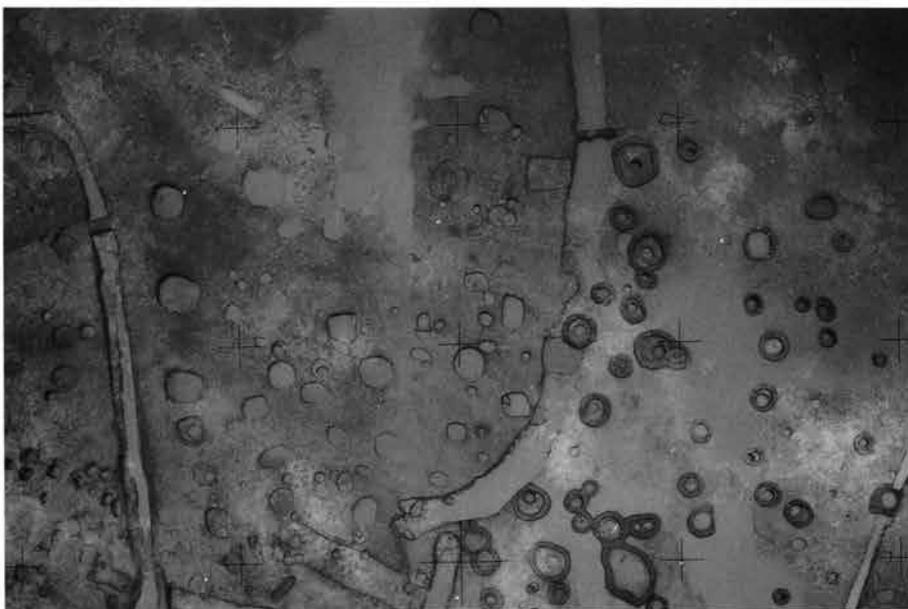


(3)太田遺跡B-1地区S H136
検出状況(北から)

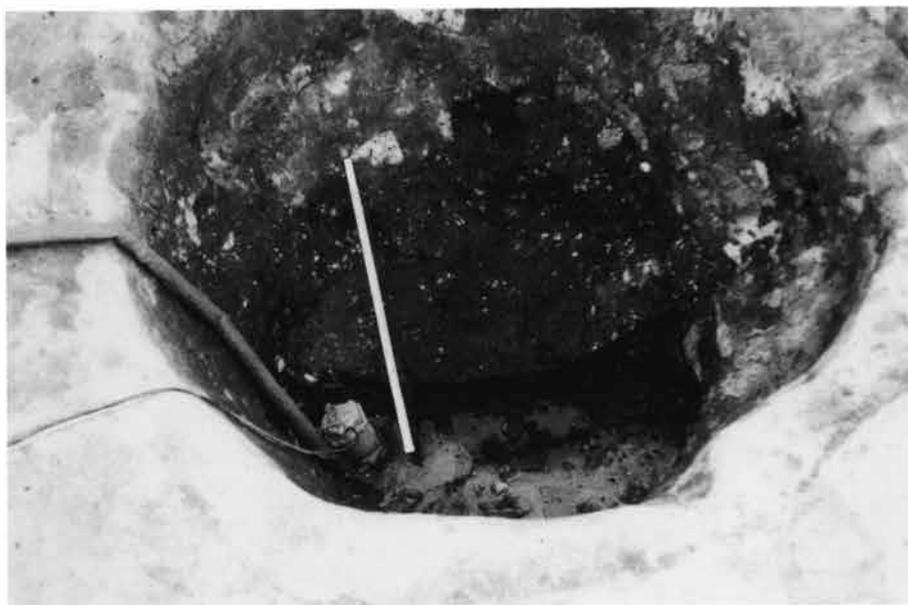
(1)太田遺跡B-1地区SH137
検出状況(北から)



(2)太田遺跡A地区SB146~148
検出状況(上が北)



(3)太田遺跡A地区SE81井戸枠
検出状況(北から)





(1)太田遺跡A地区S E 81縦板検出
状況(南から)



(2)太田遺跡A地区S E 81下段横棧
検出状況(西から)

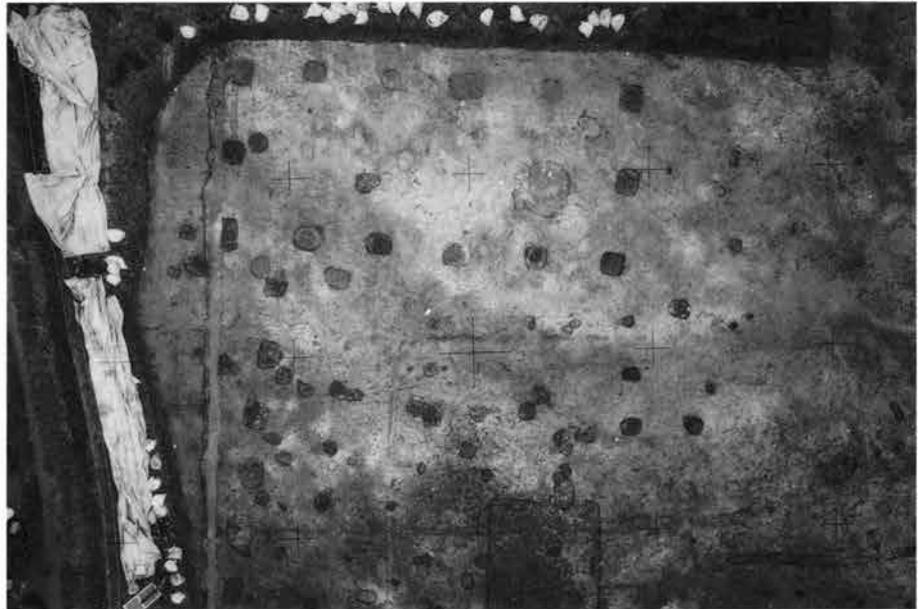


(3)太田遺跡A地区S E 81甕検出
状況(南西から)

(1)太田遺跡B-1地区S D89遺物
出土状況(南から)



(2)太田遺跡B-1地区S B140・
144(上が北)



(3)太田遺跡B-1地区S H136・
137、S B141・149検出状況
(上が北)





(1)太田遺跡A地区S B148・161、
S A162、S D57、S K61検出
状況(上が北)



(2)太田遺跡A地区S B161、P 3
検出状況(東から)



(3)太田遺跡A地区S B161、P 387
検出状況(北から)



(1)太田遺跡A地区S D57、S K61・
63検出状況(北から)



(2)太田遺跡A地区S E62検出状況
(南から)



(3)太田遺跡A地区S E62桐木検出
状況、S E145検出状況
(北から)



(1)太田遺跡A地区S E65検出状況
(南から)



(2)太田遺跡A地区S E65埋土完掘
状況(上が南)



(3)太田遺跡A地区S K63検出状況
(北から)

(1)太田遺跡B-1地区SB149、
P356検出状況(東から)

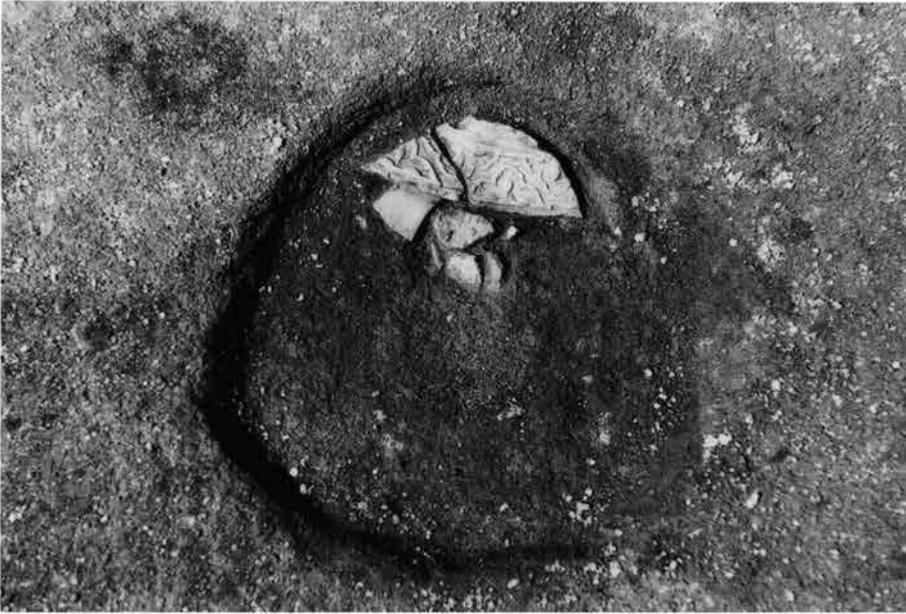


(2)太田遺跡B-1地区SB149、
P357上層検出状況(東から)



(3)太田遺跡B-1地区SB149、
P357下層検出状況(東から)





(1)太田遺跡B-1地区S B149、
P378検出状況(東から)



(2)太田遺跡B-1地区S B149、
P418検出状況(東から)



(3)太田遺跡B-1地区S B149、
P419検出状況(右上が北)

(1)太田遺跡B-2地区SE92検出
状況(北東から)



(2)太田遺跡B-2地区SE106
検出状況(東から)



(3)太田遺跡B-2地区SE108
検出状況(東から)





(1)太田遺跡B-2地区S E142
検出状況(東から)



(2)太田遺跡B-2地区S X109
検出状況(南から)



(3)太田遺跡B-2地区断層S X135
検出状況(南東から)



1



14



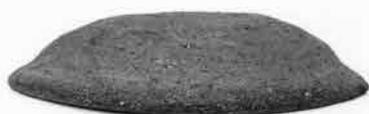
15



16



7



139



242



17



77



112



243



259



100



24



41



28



44



247



40



221



223



47



224



59



107



43



105



86



150



51



151



149



136



135



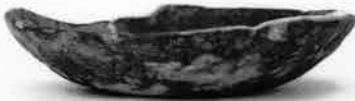
204



69



187



188



249



143



250



147



199



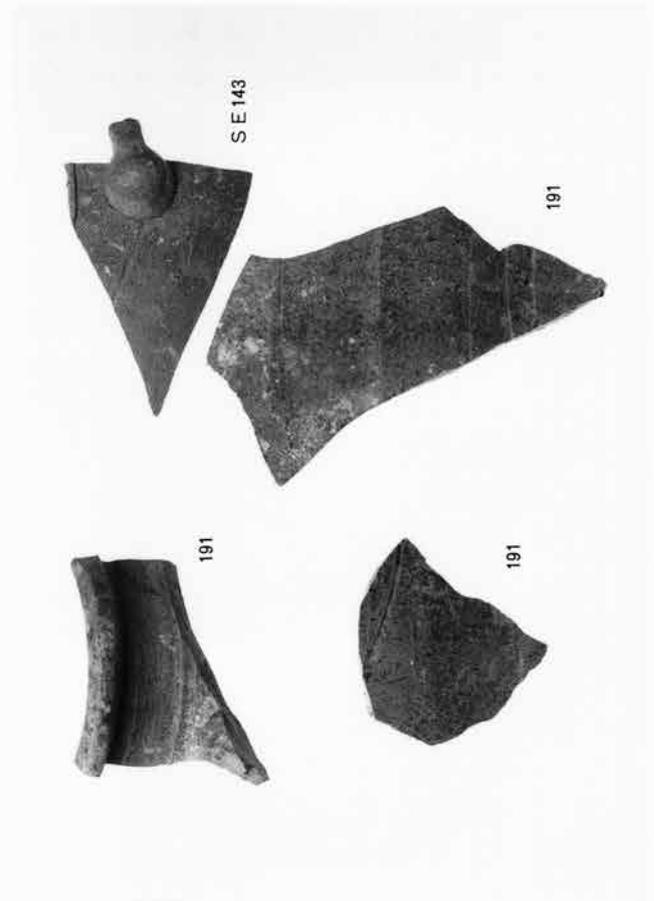
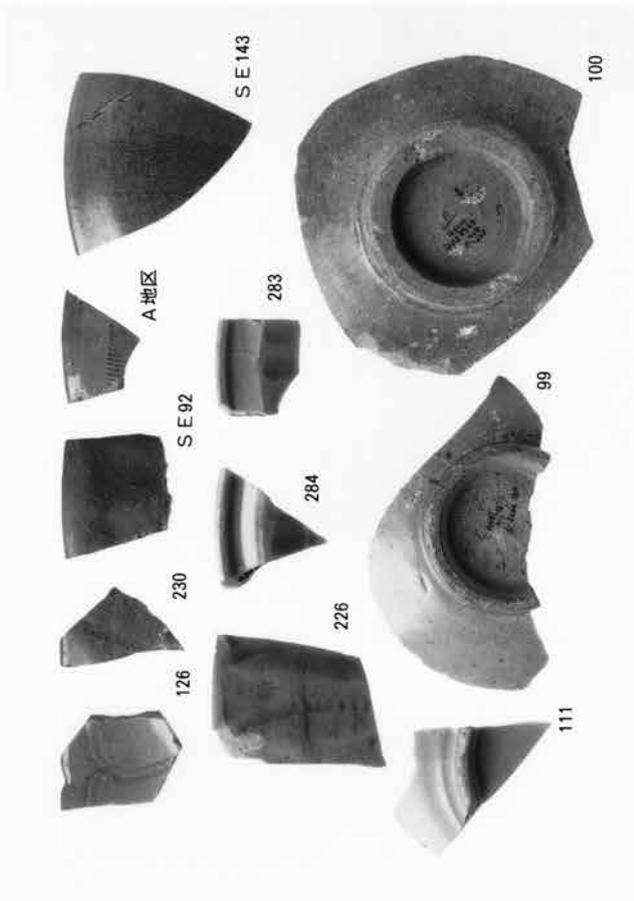
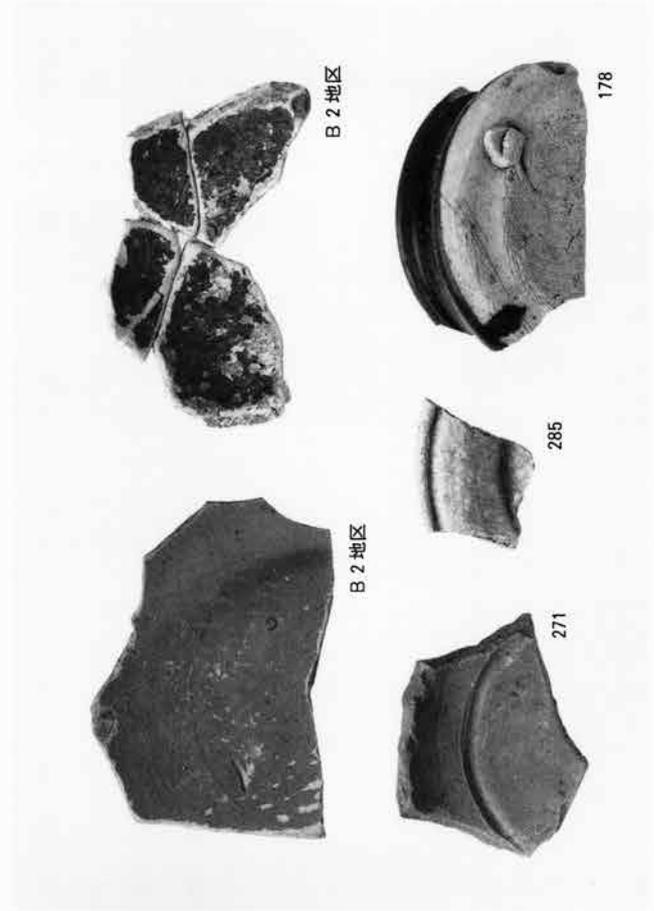
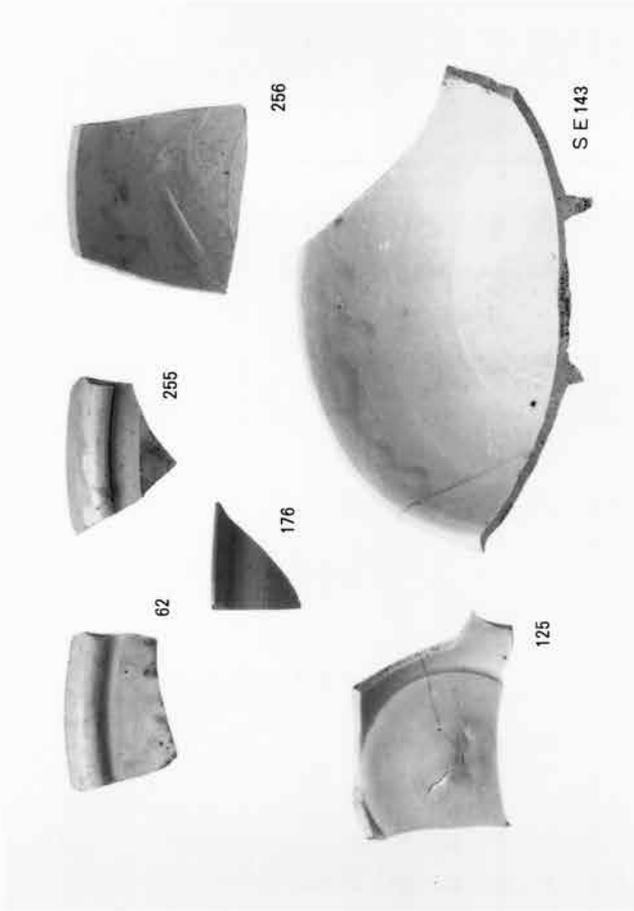
287



231



288



出土遺物(4) 番号は実測図番号に対応

(1)調査前風景(南西から)



(2)調査地全景(南西から)



(3)1トレンチ全景(西から)





(1) 2 トレンチ全景(東から)



(2) 2 トレンチ北壁断面(南から)



(3) 2 トレンチ下層中世墓検出状況
(北から)

(1) 3 トレンチ全景(北東から)



(2) 3 トレンチ中世墓 1～3
(北から)



(3) 3 トレンチ中世墓 1 遺物出土
状況(南西から)





4



5



6



7



8



9



3



11



2



17



14



13



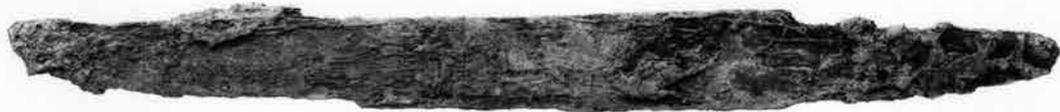
15



18



19



10

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第99冊							
編著者名	石尾政信・中川和哉・戸原和人・増田孝彦							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦		2001年		3月		26日	
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
おきたいせきだいにじ	なかぐんおおみや ちょうもりもといないぐち							
沖田遺跡第2次	中郡大宮町森本井内口	482	71	35° 17' 4"	127° 26' 24"	20000509 ~ 20000728	1,200	圃場整備
ひがしやまいせきだいにじ	きたくわたぐんけい ほくちょうしゅうざん							
東山遺跡第2次	北桑田郡京北町周山	381		35° 9' 1"	135° 38' 15"	20000601 ~ 20001106	2,000	道路建設
おおたいせきだいにじゅうざんじ	かめおかしひえだの ちょうおた							
太田遺跡第13次	亀岡市篠田野町太田	206	108	35° 1' 3"	135° 32' 27"	20000525 ~ 20010126	4,500	圃場整備
きづがわかしょういせきだいにじゅうざんじ	やわたしやわたみぞ おち・きつねがわ							
木津川河床遺跡第13次	八幡市八幡溝落・狐川	210	4	34° 53' 25"	135° 42' 14"	20001013 ~ 20001208	350	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
沖田遺跡第2次	集落	縄文 弥生 古墳 奈良/平安 鎌倉		溝 溝 溝/土坑/掘立柱建物 溝/土坑/掘立柱建物/ピット		縄文土器/石皿 弥生土器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 土師器/陶磁器/木製品		
東山遺跡第2次	集落	縄文 古墳 奈良 中世		竪穴式住居 竪穴式住居 土坑		縄文土器 須恵器/土師器 須恵器/土師器 土師器/瓦器/石鍋/ 鉄刀		
太田遺跡第13次	集落	縄文 弥生 古墳 奈良/平安 鎌倉/室町		竪穴式住居/柱穴 竪穴式住居/柱穴 掘立柱建物 掘立柱建物/溝/塀		土器/有舌尖頭器 土器/石器 土師器/須恵器 土師器/須恵器/瓦 瓦器/石鍋/土師器		
木津川河床遺跡第13次	墓	中世		木棺墓		土師器皿/青磁/白磁/ 鉄製品		

京都府遺跡調査概報 第99冊

平成13年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)